

岡山市埋蔵文化財調査の概要

1999（平成11）年度

2001年3月

岡山市教育委員会

頁	行	誤	正
7	3	991122～990824	990822～990824
7	第3図	S K 3	S K 7
11	土器観察表10	半形半形	半形
13	36	建物域はいしは	建物域ないしは
14	20	特種部は	特殊部は
19	3	19990614～20000331	990614～000331
19	21	5732m ₂	5732m ²
22	3	19990719～19990723	990719～990723
26	第4図	1 造成工	1 造成土
30	6	鉄塊系遺物か6、不明鉄器4	鉄塊系遺物かM6、不明鉄器M4
33	6	図__に出土遺構を	第5図に出土遺構を
33	14	9も平根で	M9も平根で
33	15	10～12のうち10が	M10～12のうちM10が
33	15	刀子13～15は	刀子M13～15は
33	16	15は…。16は…。斧17は	M15は…。M16は…。斧M17は
33	17	18は…。22・23は	M18は…。M22・23は
41	19	具体的には魚村的な性格の	具体的には漁村的な性格の
47	5	最後の手段として	最終的手段として
54	23	『造山2号墳』	『造山第2号古墳』
54	29	『高松城（市道）遺跡』	『備中高松城三の丸跡発掘調査概報』
54	33	『大供中道遺跡』	『大供中道遺跡発掘調査概報』
54	36	『旭東園舎遺跡』	『岡山市立旭東幼稚園旧園舎復元報告書』
54	39	『岡山市…1999年（平成11）年度』	『岡山市…1998（平成10）年度』
55	5	林信夫蒐集の考古資料1	林信男蒐集の考古資料1
60	土器観察表2	ミニチュア	ミニチュア（台付鉢）
64	1	林信夫蒐集の考古資料1	林信男蒐集の考古資料1
64	5	林信夫氏は	林信男氏は
65	6	林信夫氏は、	林信男氏は、
71	第6図	水田層下遺構	高松城跡（アミが遺物採集地）
85	41	招来の発掘調査に	捋来の発掘調査に
85	42	林信夫氏の	林信男氏の
85	34	谷口光子・八木留利子	谷口光子・八木留利子・岡本東美
86	2	1）林信夫編著1999	1）林信男編著1999
92	12	大形前方後円墳	大型前方後円墳
93	第4図	15m	10m

はじめに

いよいよ21世紀が始まりました。新世紀の到来は、高度情報化社会のさらなる発展が予想されます。わが岡山市へも、情報化の波にのまれない対応が期待されています。文化財行政についても同様で、市民の皆様の関心や要望は年々高まってきており、それに対して年一回の発掘調査速報展や現地説明会をおこなってまいりましたが、日常的な活動は常設展示の場もなかったため、積極的にはおこなえませんでした。また、年々増加する発掘調査による出土品の保管や整理施設も満足いくものではありませんでした。こういった現状を少しでも打開するために、平成12年度に埋蔵文化財センターが完成しました。報告書作成や啓蒙活動を遂行するための人員配置は、まだまだ満足いくものではありませんが、文化財行政発展の第一歩になるものと思っております。

本書は、平成11年度におこなわれた埋蔵文化財調査の内容と、資料紹介・研究ノートを報告しています。豊富な文化財に恵まれた岡山市の一端をうかがえます。これによって文化財に対して少しでも理解と興味をもっていただければ幸いです。

平成13年3月

岡山市教育委員会

教育長 玉光 源爾

例 言

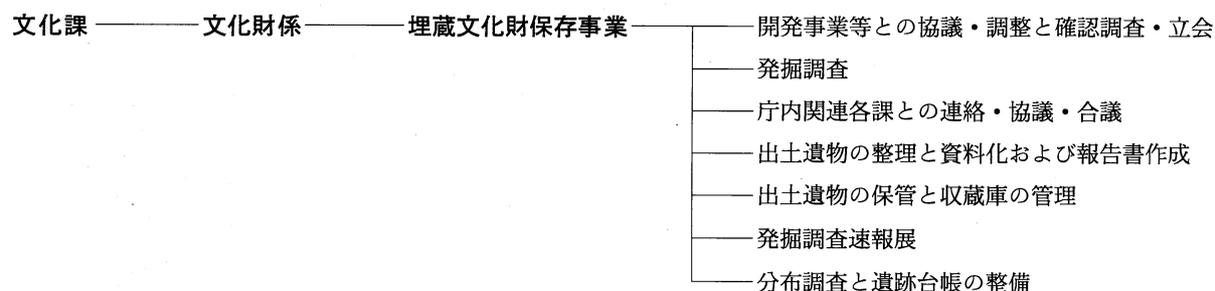
1. 本書は1999（平成11）年度の埋蔵文化財に関する事業と調査成果、および保護行政についての概要報告である。
2. 本書の編集は草原孝典が担当した。発掘調査の概要の執筆・図面作成は各担当者が分担して行った。また埋蔵文化財関連の協議と調整については、神谷正義が整理と原稿作成を行ったものである。
3. 本書に関する遺物、実測図・写真などは、岡山市教育委員会で保管している。
4. 発掘調査の概要はあくまでも速報性に重点をおいている。したがって調査成果が整理途中のものを含んでおり、正式な報告書刊行の時点で訂正される場合があることを、ご了承願いたい。
5. 実測、遺物の洗浄・整理、図版作成などで、多くの方々の協力を得ています。氏名の列記は省かせていただきますが、関係された皆様に感謝いたします。

目 次

I. 発掘調査の概要	3
II. 埋蔵文化財関連の協議と調整	47
III. 普及・啓発事業と刊行物	54
IV. 資料紹介と研究ノート	55

文化課文化財係の紹介

1. 1999（平成11）年度文化財係の組織図と仕事



2. 担当職員

文化課長	米村 博
文化財専門監	出宮徳尚
課長補佐	根木 修
主 査	神谷正義
主 査	宇垣匡雅（岡山県教育委員会より出向）
主 任	乗岡 実
文化財保護主事	草原孝典
文化財保護主事	高橋伸二
文化財保護主事	河田健司
文化財保護主事	安川 満

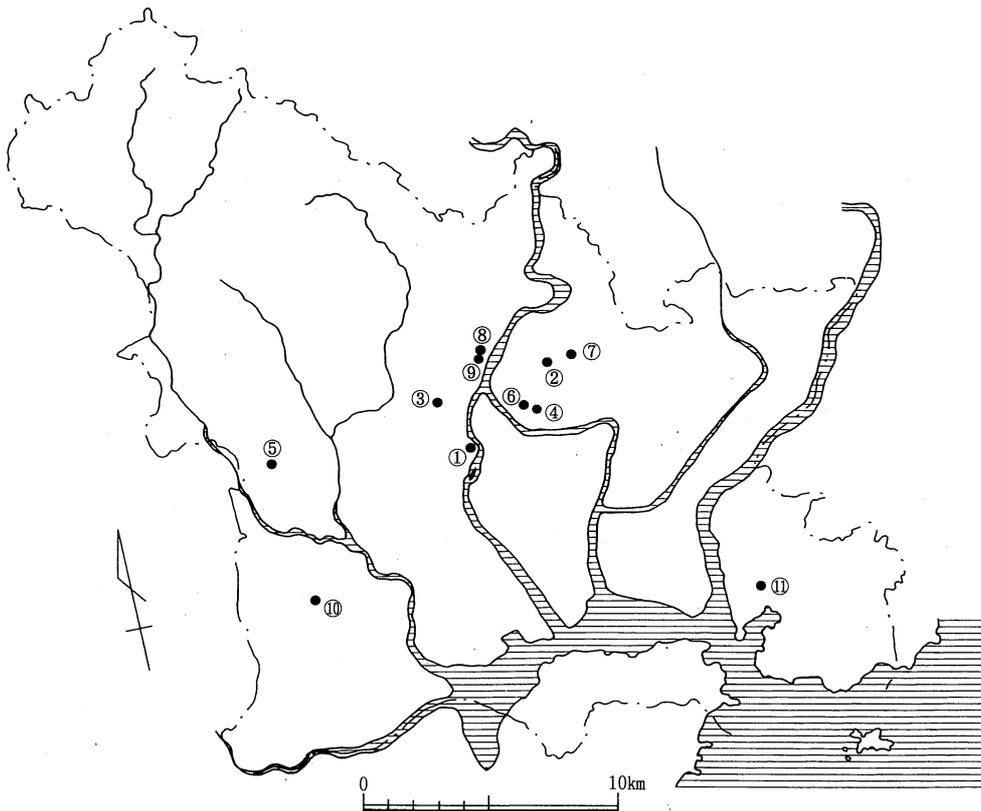
3. 収蔵施設

赤坂収蔵庫
芳田収蔵庫

I. 発掘調査の概要

発掘調査（第98条の2）

- ①岡山城本丸下の段
- ②備前国府関連遺跡
- ③津島（電線地中化）遺跡
- ④藤原遺跡
- ⑤川入・中撫川（市道）遺跡
- ⑥原尾島（マンション）遺跡
- ⑦北口遺跡
- ⑧北方長田（水質試験所）遺跡
- ⑨三野宮之段（三野浄水場変電施設）遺跡
- ⑩妹尾住田遺跡
- ⑪西村貝塚（市道）遺跡



岡山城本丸下の段(第3次)

所在地 岡山市丸の内
調査原因 史跡整備
時代 近世

調査期間 991122~200331
調査面積 830㎡
担当者 乗岡 実

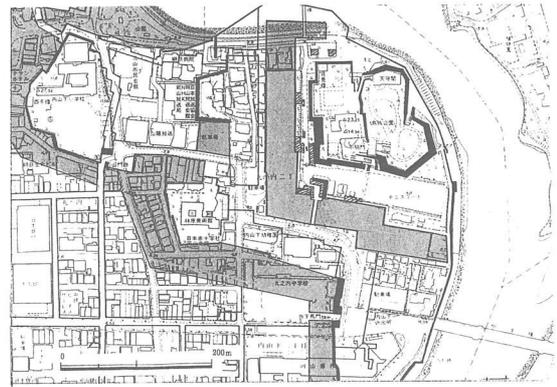
遺跡の概要 近世城郭としての岡山城の基本構造を造ったのは宇喜多秀家で、慶長2年(1597)に完成したと伝わるが、以後の城主の小早川秀秋や池田氏も整備改造を行った。本丸は旭川の西岸にあり、天守のある本段、西に一段下がった中の段、それらを取り巻く下の段からなり、国指定史跡 岡山城跡の中核部をなす。史跡整備を目指しての発掘調査は、中の段の完了をうけ下の段に着手しており、当年度はその第3次調査にあたる。

調査の概要 下の段西半部の8地点に分散して発掘区を設定し、それぞれに成果があった。

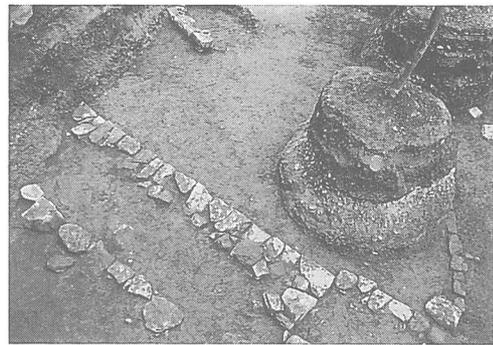
西北部のA地点は、馬場口門の城内側にあたり、番所の建物の壁が乗る基礎石組を確認した。番所は分厚い壁をもった重厚な建物であったようで、月見櫓脇の石造銃眼などと併せて、馬場口門周辺の軍備が高度なものであったことが判る。また、その西寄りでは石組井戸とこれを円形に取り巻く石組排水溝も検出された。

西側内堀脇北部のB地点は油櫓の櫓台一帯にあたる。櫓台の城内側は現状では土手となっているが、明治になって埋め込まれた石垣を検出し、全体が石塁となっていたことが判った。櫓の小口方向は石塁から低石垣で画されて一段高くなっている。櫓台の規模、南北14m、東西4mが確定した。また、油櫓の櫓台内部では埋没石垣を、櫓台の東下方ではさらに先行する湿地堆積を確認し、築城期から江戸初期に至る内堀のプランや構造の変更過程を知る手がかりが得られた。

西側内堀脇中部のC地点は修覆櫓の櫓台一帯にあたる。発掘の結果、まず櫓台の規模と構造が判明した。また、櫓台内部で城内を向く埋没石垣を発見し、この櫓は石塁構築の当初には未だなく、後の改造で石垣の一部を埋め込んで頂部を拡幅する格好で成立したことが判る。このほか、櫓台の東下方では、郭を南北に支切る金



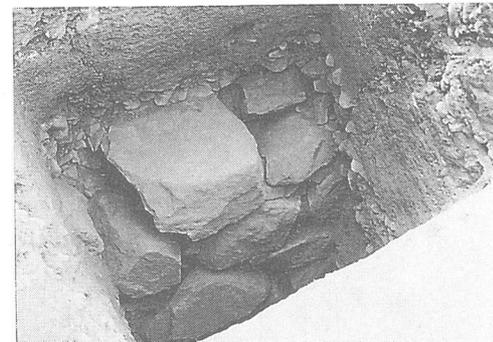
第1図 位置図



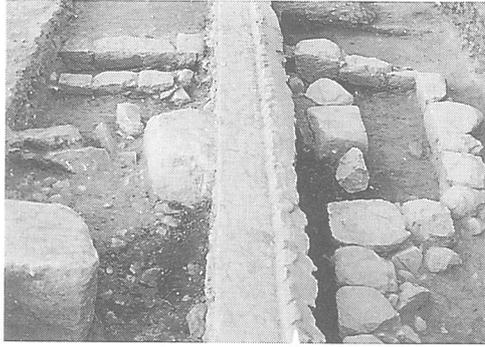
第2図 A地点番所の石組



第3図 A地点井戸と石組排水溝



第4図 B地点油櫓台内の埋没石垣
(旧内堀石垣)



第5図 C地点金蔵門脇の石垣



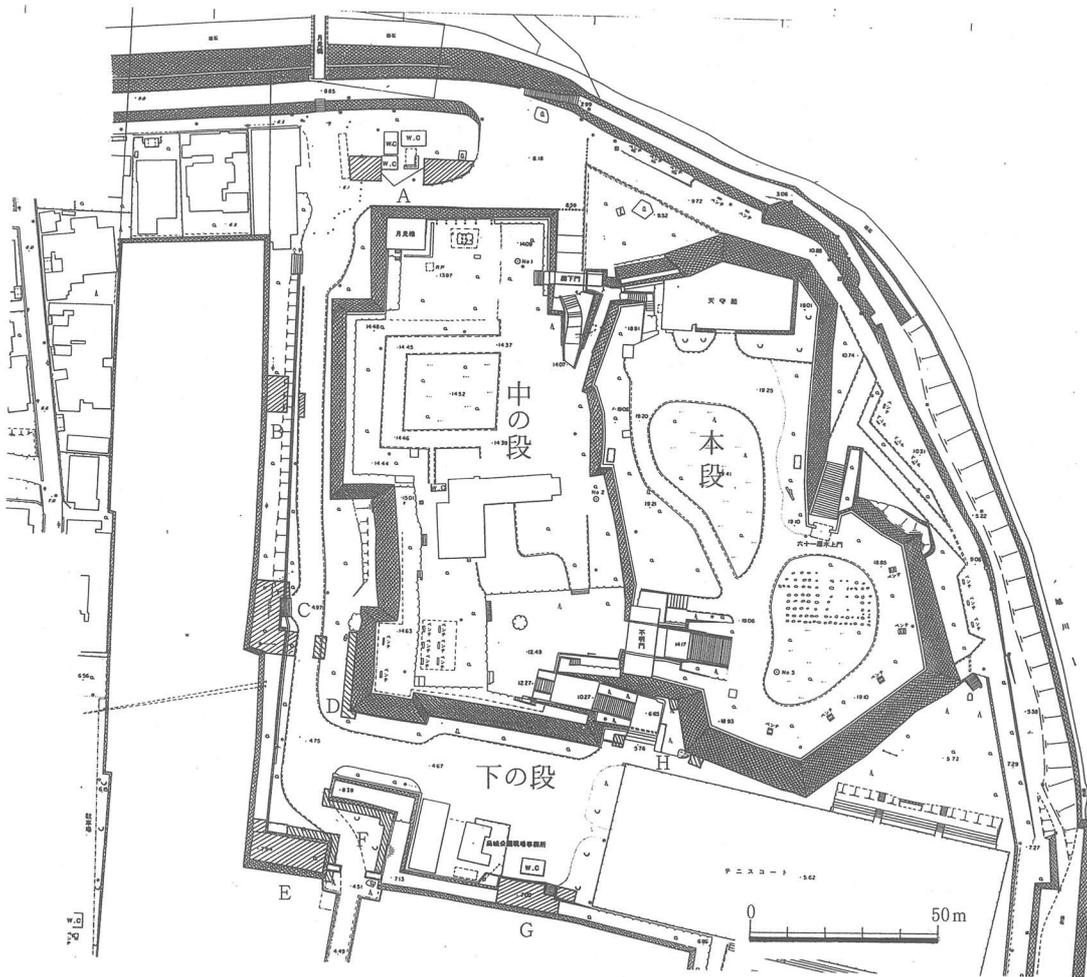
第7図 E地点太鼓櫓西側礎石列



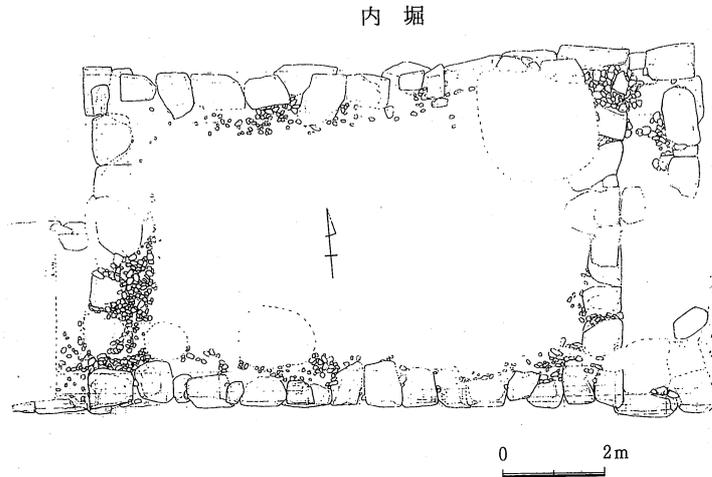
第6図 D地点大納戸櫓台石垣の基部



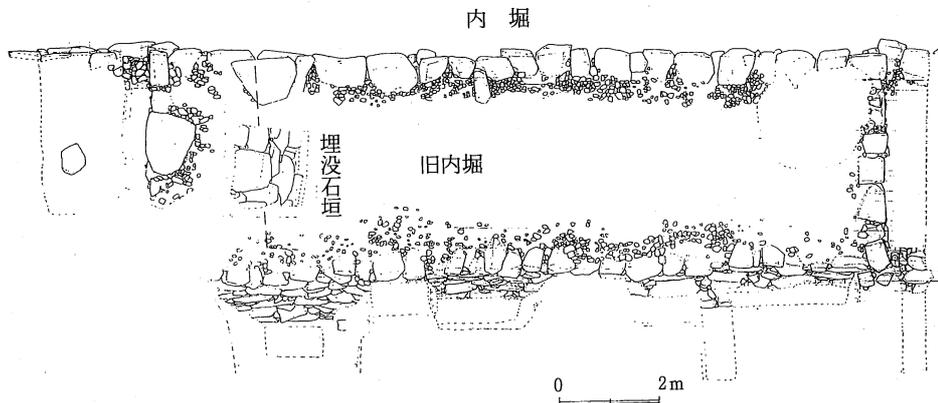
第8図 H地点本段石垣の基部岩盤



第9図 発掘区の配置図



第10図 G地点春屋檜台の平面図



第11図 B地点油檜台の平面図

蔵門に関連して石塁の基部や排水溝それに通路の漆喰張りを検出した。金蔵門は元禄13年の絵図にも示されているが、予想以上に軍事に配慮された立派な構造であった。また、その下層では江戸初期に遡る井戸などを検出した。

大納戸檜の檜台下にあたるD地点では、檜台石垣の基底部を追求し、石垣の高さ約11mを確定した。かつての堀を埋め立てた軟弱地盤にもかかわらず、胴木は用いていない。石垣基底に接合する石組の水溜枿も検出した。

内堀の内角にあたるE地点は、太鼓檜と内下馬門の上屋が載るため北に続く石塁より1段高い台上部である。礎石数個を発見したが、太鼓檜の中心的な柱に関わる礎石は残っていなかった。

F地点は、本丸の正門に関わる枿形内にあたる。予想以上に遺構の残りは良く、地下80cmで内下馬門の巨大な礎石6個を確認した。また、前面の高麗門の礎石1個も確認できた。このほか、石塁に沿う石組排水溝や鏡石の基底構造なども判明した。

南側内堀脇のG地点は、春屋檜の檜台一带にあたる。見かけの檜台東辺より半間に西で、檜の東壁が載ったとみられる石組を検出し、檜の規模として東西約10mを確定した。また、檜台の北東下方では、石塁の内側石垣の基底部を観察したほか、水溜めとみられる石組枿を検出した。

H地点は中の段に上がる通路上で、鉄門の下方にあたる。地表下まもなく、地山を検出した。大部分は未風化の岩盤である。この地山は、南に張り出す格好に整形されており、門前は意図的に造り出された安定した地盤であったことが判る。層位的にみて内下馬門は下の段の改造過程で成立したことが判っており、当初はこの一带に本丸正門があった可能性が窺える。

備前国府関連遺跡

所在地 岡山市国府市場43
調査原因 工場建設（浄化槽）
時代 古代

調査期間 991122～990824
調査面積 28㎡
担当者 乗岡 実

遺跡の概要 備前国府跡は国府市場一帯に想定され、これまでの発掘調査や立ち会い確認で、平安時代から中世を中心とした遺構・遺物が確認されている。遺跡は相当の広がりをもつことは間違いないが、判明している事からは極めて断片的で、国衙の位置比定などを含めた全体像の究明はこれからの課題である。

この地域にある、民間の飲料工場の一画で、流通用建物の計画があり、工事の掘削深度が遺構面に到達する浄化槽部分について、小規模な発掘調査を実施した。ここは、国府推定地のうち西寄り部分で、中世山陽道の後身といわれる道路の北に面する位置である。

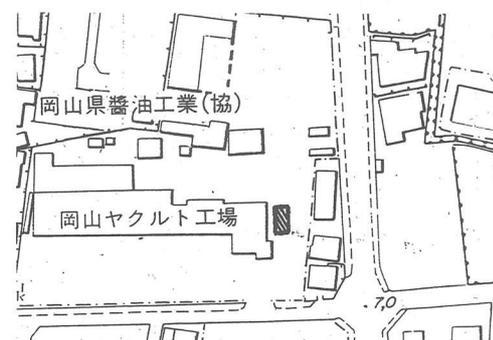
遺構の概要 近代の造成土下には中世以降の水田層があり、その下のT.P.5.4m付近と4.9m付近に2面の遺構面が確認された。上層面では発掘区の北東で、東西2mあまり、南北2.6mほど、深さ1mの不定形の土壌が1基みつかった。このSK7の埋土は、炭・灰を大量に含む暗灰褐色系の微砂・シルトで、大量の土器類が出土した。それは一気に投棄されたとみられる状況で、完形品に近いものも多いが土壌底面などに配置されたものではない。上層面では発掘区南側でも窪みを4基ほど確認したが、これらは小さく浅く、下層の溝の上方にあたり、下層期から引き続き窪地であったことに理由がある掘り込みもしくは自然形成物であろう。

下層の溝は、幅0.6m、深さ0.5mで、東西に伸びるが、流水方向は特定できない。このSD8の埋土にはごく僅かに炭粒を含むが、土器などは伴っていない。

以上のほかは、上層面・下層面とも柱穴などの存在を念頭に精査したが、遺構は確認できなかった。また下層面から1.5m下のT.P.3.4m付近まで掘り下げて遺構・遺物がないことを確認した。



第1図 位置図



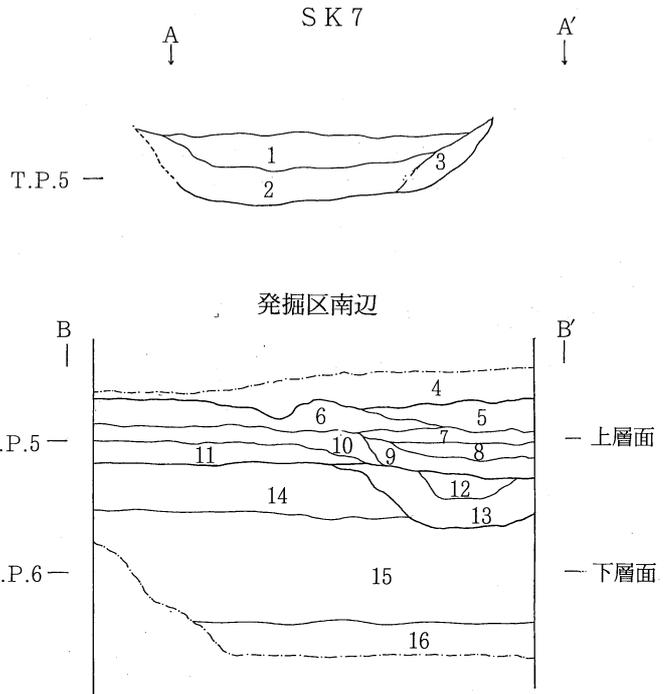
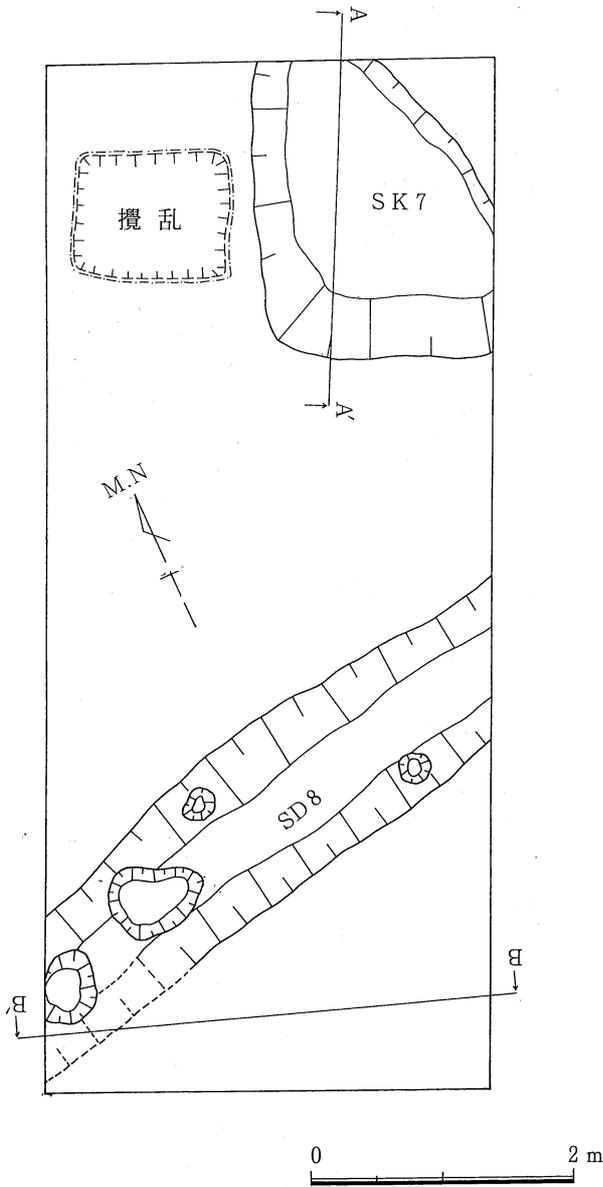
第2図 発掘区配置図 (1/2500)



第3図 SK3



第4図 SD8検出状況



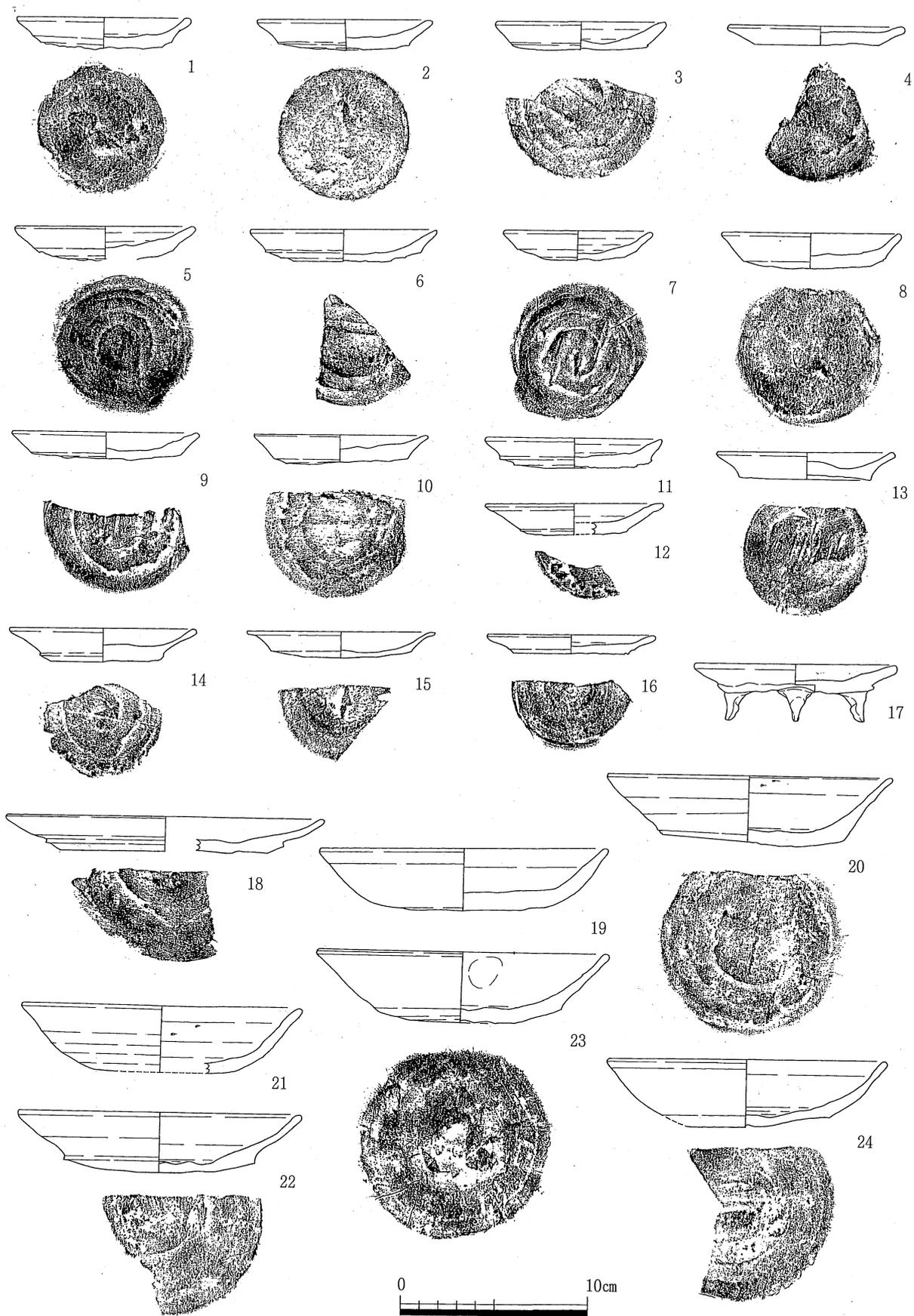
SK7埋土土層

- 1 暗灰褐色シルト 炭多い
- 2 暗灰(褐)色シルト
- 3 2と同じであるが土器片多い

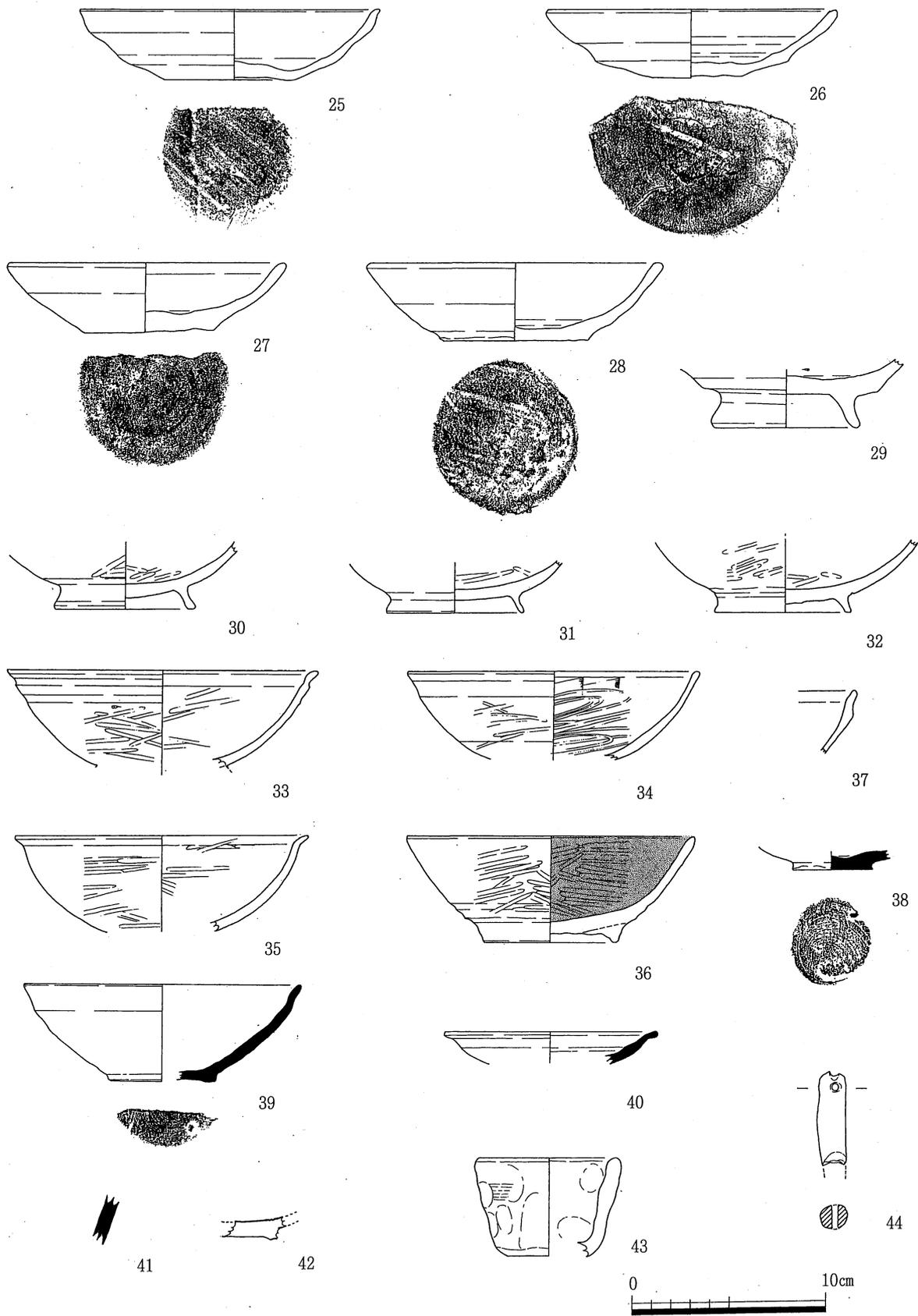
発掘区南辺土層

- 4 暗黄褐色細砂 僅かに焼土粒含む
- 5 (暗)黄褐色細砂 微砂
- 6 明黄褐色細砂 微砂
- 7 黄褐色細砂 微砂
- 8 黄茶褐色細砂 微砂
- 9 明黄褐色細砂 微砂
- 10 黄茶褐色細砂 微砂
- 11 明黄褐色細砂 微砂
- 12 明褐色細砂 SD8上層
- 13 暗褐黄灰色細砂 SD8下層
- 14 黄褐灰色細砂
- 15 黄灰褐色 微砂
- 16 暗黄灰色細砂

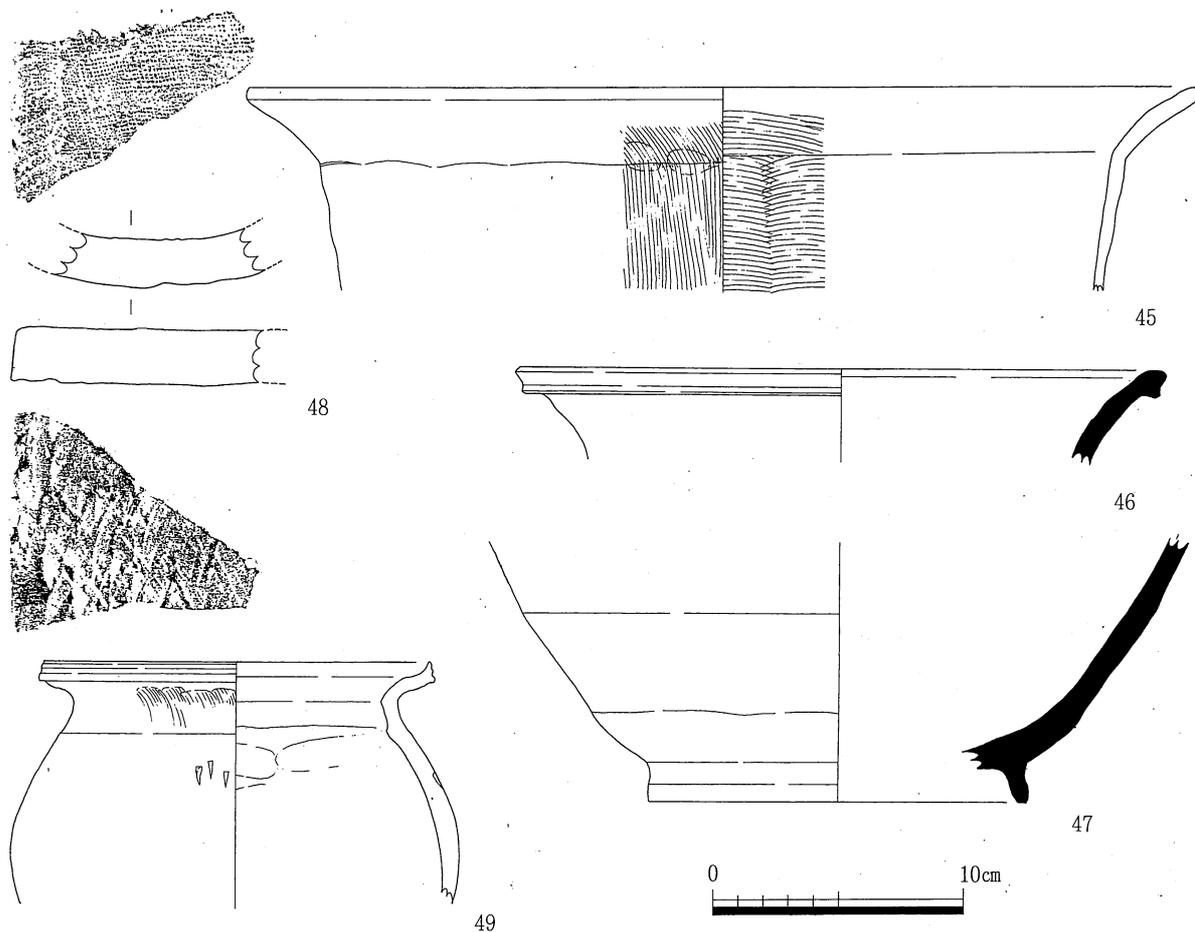
第5図 発掘区平面と土層断面



第6図 SK7の遺物I



第7図 SK7の遺物Ⅱ



第8図 SK7の遺物Ⅲ

SK7遺物観察表

番号	種類	器種	法量(cm) (数値)は復元				胎土	焼成	色調	備考
			口径	低径	器高	深さ				
1	土師器	小皿	9.2	6.3	1.7	1.0	0.3mm白砂粒僅か、生地微粒	良好	10YR8/3浅黄橙	ほぼ完形
2	土師器	小皿	9.3	6.9	1.5	0.9	0.3mm白砂粒僅か、生地微粒	良好	10YR8/3浅黄橙	ほぼ完形
3	土師器	小皿	9.7	8.1	1.4	0.8	0.3mm白砂粒僅か、生地微粒	良好	10YR8/3浅黄橙	半形
4	土師器	小皿	(9.5)	6.6	1.0	0.3	0.3mm白砂粒僅か、生地微粒	良好	10YR8/3浅黄橙	半形
5	土師器	小皿	9.4	6.8	1.7	1.1	0.3mm白砂粒僅か、生地微粒	良好	10YR8/3浅黄橙	半形
6	土師器	小皿	(9.9)	8.1	1.8	1.2	1.0mm白砂粒僅か、生地微粒	良好	10YR8/3浅黄橙	四分一片
7	土師器	小皿	(8.1)	6.8	1.6	1.0	0.3mm白砂粒僅か、生地微粒	良好、底部黒斑	10YR8/3浅黄橙	半形
8	土師器	小皿	9.5	7.6	1.7	1.1	0.3mm白砂粒僅か、生地微粒	良好	10YR8/3浅黄橙	半形
9	土師器	小皿	9.8	8.0	1.5	0.8	0.3mm白砂粒僅か、生地微粒	良好	10YR8/3浅黄橙	半形
10	土師器	小皿	9.7	7.8	1.6	0.9	0.3mm白砂粒僅か、生地微粒	良好	10YR8/3浅黄橙	半形半形
11	土師器	小皿	9.4	8.0	1.7	0.8	1mm白砂粒僅か、生地微粒	良好	10YR8/3浅黄橙	完形
12	土師器	小皿	(9.5)	(5.7)	1.6	0.9	0.3mm黒砂粒僅か、生地細	良好	10YR6/4にぶい黄橙	破片

13	土師器	小皿	9.4	6.7	1.6	0.9	0.3mm黒砂粒僅か、生地細	良好	10YR6/4にぶい黄橙	ほぼ完形
14	土師器	小皿	10.2	6.6	1.7	0.7	0.5mm黒砂粒僅か、生地細	良好	10YR6/4にぶい黄橙	半形
15	土師器	小皿	9.9	7.2	1.4	1.0	0.3mm黒砂粒僅か、生地細	良好	10YR6/4にぶい黄橙	半形
16	土師器	小皿	9.0	6.1	0.9	0.4	1mm白砂粒僅か、生地細	良好	10YR6/4にぶい黄橙	半形
17	土師器	脚付き小皿	(10.8)	(7.8)	3.0	0.9	0.3mm白砂粒僅か、生地微粒	良好	10YR8/3浅黄橙	半形
18	土師器	皿(盤)	(17.0)	(11.9)	1.8	1.2	0.5mm砂粒僅か、生地細	良好	7.5YR6/6橙	四分一片
19	土師器	坏	(15.5)	(9.0)	3.2	2.3	0.3mm白砂粒僅か、生地微粒	良好	10YR8/3浅黄橙	半形
20	土師器	坏	15.3	9.8	3.8	3.0	0.3mm白砂粒僅か、生地微粒	良好	10YR8/3浅黄橙	半形
21	土師器	坏	(14.9)	(7.5)	3.5	2.9	0.3mm白砂粒僅か、生地微粒	良好	10YR8/3浅黄橙	四分一片
22	土師器	坏	15.3	10.9	3.3	2.6	1mm色粒僅か、生地細粒	良好	10YR6/4にぶい黄橙	半形
23	土師器	坏	15.6	9.9	3.7	3.1	1mm色粒僅か、生地細粒	良好	7.5YR6/6橙	ほぼ完形
24	土師器	坏	(14.6)	(7.5)	3.7	2.7	0.5mm色粒僅か、生地細粒	良好	7.5YR6/6橙	半形
25	土師器	坏	15.3	6.6	3.6	3.0	0.5mm白粒僅か、生地細粒	良好	7.5YR6/6橙	半形
26	土師器	坏	(15.0)	10.5	3.5	2.7	0.3mm粒僅か、生地細粒	良好	7.5YR6/6橙	半形
27	土師器	坏	(14.3)	7.3	3.6	2.6	1mm色粒僅か、生地細粒	良好	7.5YR6/6橙	半形
28	土師器	坏	(15.3)	7.8	4.0	3.3	3mm色粒僅か、生地細粒	良好	7.5YR6/6橙	半形
29	土師器	高台付き坏		7.7			0.5mm白粒僅か、生地細粒	良好	7.5YR6/6橙	半形
30	吉備系土師器	碗		7.1			1mm白粒僅か、生地微粒	良好	2.5Y8/1灰白	高台片。内外ミガキ
31	吉備系土師器	碗		6.9			0.3mm白粒僅か、生地微粒	良好	2.5Y8/1灰白	高台片。内外ミガキ
32	吉備系土師器	碗		7.0			0.3mm白粒僅か、生地微粒	良好	2.5Y8/1灰白	高台片。内外ミガキ
33	吉備系土師器	碗	(15.6)			(4.6)	0.3mm白粒僅か、生地微粒	良好	2.5Y8/1灰白	体部片。内外ミガキ
34	吉備系土師器	碗	(15.0)			(4.6)	2mm白粒僅か、生地微粒	良好	2.5Y8/1灰白	体部片。内外ミガキ
35	吉備系土師器	碗	(14.9)			(4.8)	0.5mm白粒僅か、生地微粒	良好	2.5Y8/3淡黄	体部片。内外ミガキ
36	黒色土器	碗	(14.8)	6.5	5.4	4.4	2mm白粒僅か、生地微粒	良好	外:2.5Y8/2灰白 内:N2.5/黒	半形。内外ミガキ
37	瓦器	碗					0.5mm白粒僅か、生地細粒	良好	N4/~3/暗灰	口縁細片、混入か
38	須恵質陶器	碗		4.3			0.5mm白粒僅か、生地細粒	良好	N5/灰	底部片
39	須恵質陶器	碗	(14.2)	(5.4)	5.0	(5.5)	1mm白粒僅か、生地細粒	良好	N6/灰	半形
40	須恵質陶器	小皿	(10.8)				1mm白粒僅か、生地微粒	良好	7.5Y7/1灰白	細片
41	灰釉陶器	壺類					砂粒ほとんどなし、生地微粒	良好	10Y7.5/1灰白	細片
42	緑釉陶器	碗					0.5mm白粒僅か、生地細粒	良好	胎土は10YR7/4にぶい黄橙、釉は暗緑	細片
43	土師器	コップ形	(7.5)	4.2	4.8		砂粒ほとんどなし、生地微粒	良好	10YR8/3浅黄橙	半形、手づくね
44	土師器	土錘					0.5mm白粒僅か、生地細粒	良好	7.5YR6/4にぶい橙	片端部欠
45	土師器	鍋	(38.0)				0.5mm白色砂粒を含む、生地砂質	良好	10YR6/3にぶい黄褐	大形片
46	須恵質陶器	壺	(25.8)				0.5mm砂粒を含む、生地微粒	良好	2.5Y7/1灰白	口縁細片
47	須恵質陶器	高台付き壺	(15.0)				1mm砂粒を多く含む、生地砂質	良好	2.5Y6/1灰白	口縁細片
48	須恵質瓦	平瓦					1mm砂粒を多く含む、生地細粒	良好	2.5Y6/1灰白	凸面菱格子タタキ
49	弥生土器	甕	(15.3)				0.5mm砂粒を多く含む、生地砂質	良好	7.5YR7/6橙	混入、後期後半

SK7の遺物

上層遺構面を覆う包含層にも土師器や須恵器の細片を伴うが、遺構では唯一SK7から遺物が出土した。この資料は、極めて内容豊富で、備前国府域の土器組成を考える上でも重要である。

1～16は、土師器の小皿で、底面にヘラキリ痕を明瞭に残す。胎土からは二群に分れ、いま胎土A類とするものは、浅黄橙色を呈し、生地が微粒で、白色粒(石英など)を僅かに含むが、基本的に有色砂粒を含まず、おのずと器面の平滑度も高いもので、1～11が該当する。胎土B類は、にぶい黄橙と色が濃く、生地は細粒であるがA類よりは砂っぽく、含む砂粒は少ないが、白色粒のほか金ウンモや茶色のクサリ礫(鉄分粒)などの有色粒が目立つもので、器面はざらつき、12～16が該当する。両類は法量のうえでは大差なく、小皿全体として口径はおよそ9cm台である。17は脚付き小皿で胎土はA類。18は復元口径17cmの皿で、ヘラキリ底部脇の段が特徴的で、胎土はB類。

19～28は土師器の坏で、底面はヘラキリ、板痕が観察できるものと(19・22・24～26・28)と観察できないものがある。口径は14.3～15.8、器高3.2～4.0。胎土は19～21がA類と同じ、22～28がB類に対応するが、うちでは22～26は有色砂粒がさほどは目立たない。29は脚付き坏とみられ胎土はB類。

30～35は、吉備系土師器碗で、体部の内外面ともヘラミガキを施している。復元口径は14.8～15.6cm、復元器高は5.6～6.1cm程度、胎土は総てC類とするものである。この胎土はA類に似るが、さらに生地が微粒で白色が強く、石英粒を僅かに含むが、有色砂粒は含まない。器面の平滑度は最も高く(ミガキ外の部位でも)、焼成の良さともあいまって金属的な趣がある。

36は黒色土器(内グロ)の碗、内外面ともヘラミガキを施す。胎土は先のA類に近い。37は瓦器碗の極細片であるが、口端内部に沈線はなく新しそうで、混入品とみられる。38・39は須恵質陶器の碗で、底面にイトキリ痕を残す。40も須恵質陶器で小皿とみられるが、38・39より胎土が細かく器面が明るい。41は胎土がさらに細かく白色度が高く、外面に灰釉が掛かっている。灰釉陶器の壺の一部とみられる極細片である。42は近江系とみられる緑釉碗の細片である。43は手づくねのコップ形の土師器で、胎土は皿・坏のA類に近い。44は土師質の土錘で、胎土はB類に近い。

45は土師器の鍋で体部の内外は粗いハケメを施し、胎土は色がB類に近いが、大形器種の鍋だけあってずいぶん砂粒を含む。46・47は、須恵質陶器の壺類であるが、47の胎土は砂粒が多い。48は須恵質の瓦で、凸面は内辺7～12mmの菱形格子タタキ、凹面は8本/cmのやや粗めの布目を残す。49は弥生後期後半の甕で、混入物である。

明らかな混入品もあるが、以上は基本的に同時に捨てられた状況で出土したものである。最古相と言われる両面ヘラミガキをもつ吉備系土師器碗の存在、それと黒色土器を含めた各種土師器や陶器類との共存状況など、注目すべき資料といえよう。各遺物の生産年代がどの程度幅をもつのかは、今後の議論が必要であるし、各遺物に与えられる実年代観もお流動的であるが、いまのところ本資料は11世紀代に投棄されたと考えておきたい。

まとめ

当初期待したような、備前国府関連の柱穴列などは検出できなかったが、ここが平安前半までは建物域はいしは遺物が多数廃棄されるような生活域ではなかった可能性の提示は、国府域の全貌を復元するうえでは一つの成果といえよう。いっぽう、平安時代後半の土壌からは大量の遺物が出土した。古い段階の吉備系土師器碗は、これまで撰関家関連の鹿田遺跡など旭川西岸地域を中心に資料が知られていたが、今回は国府域という国衙に関連する位置での資料を得た。加えて、それが他の土器群と一緒に確認できたことは重大である。

津島（電線地中化）遺跡

所在地 岡山市学南町二丁目
 調査原因 電線地中化
 時代 弥生時代

調査期間 990710～991029
 調査面積 301㎡
 担当者 乗岡 実

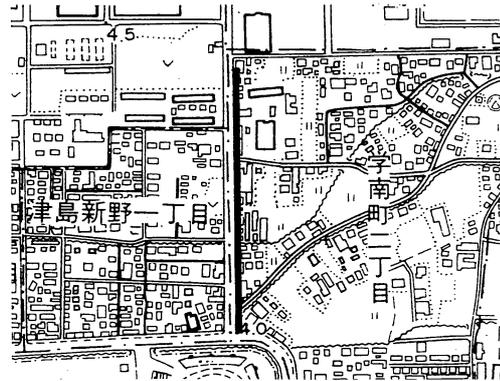
遺跡の概要 津島遺跡は縄文時代晩期ないしは弥生時代前期以降の大遺跡として著名であるが、近年は国史跡指定地を含む県営津島総合運動公園の外でも、大小の発掘調査が実施され、弥生前期の小区画水田の広がりや弥生後期の集落遺跡の存在などが明らかになりつつある。

運動公園の北隣から岡山大学津島キャンパスを南北に結ぶ市道では、電線地中化計画が進み、前年度に西側歩道での調査を行ったが、当年度は引き続き東側歩道での工事が計画され、掘削面積が比較的まとまる特殊部(ボックス部)を中心に調査を実施した。

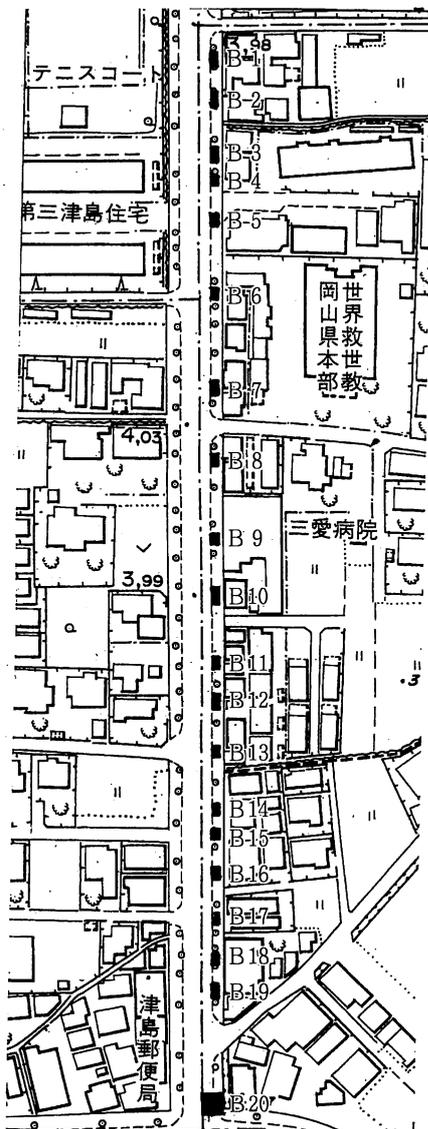
調査の概要 特殊部は北から南へと順に番号が付されており、合計20か所ある。このうち南端で交差点内にあるB20は面積が最も大きい。既存のガス・水道管の埋設などによる攪乱が激しく及び、本来の土層堆積を確認することができなかった。

基本層序は、先ずT.P.2.5m～1.8mの高さを上面とする黒褐色土が堆積していることが注目される。この黒褐色土は、当調査地では遺物を確認できなかったが、周辺の発掘調査地での認識からすると、縄文時代晩期から弥生前期にかけて形成されたもので、詳細にみると、その堆積は水平もしくは南に向かって一様に下がるといったものではなく、南北約310mにわたる今回の調査知見を集成すると、第3図に示されるような起伏の状況(旧地形)が明らかとなった。土層そのものの色や粒子の細かさ、それに厚さも場所によって微妙に変動するが、B3だけは欠いており、谷部に当たると思われる。

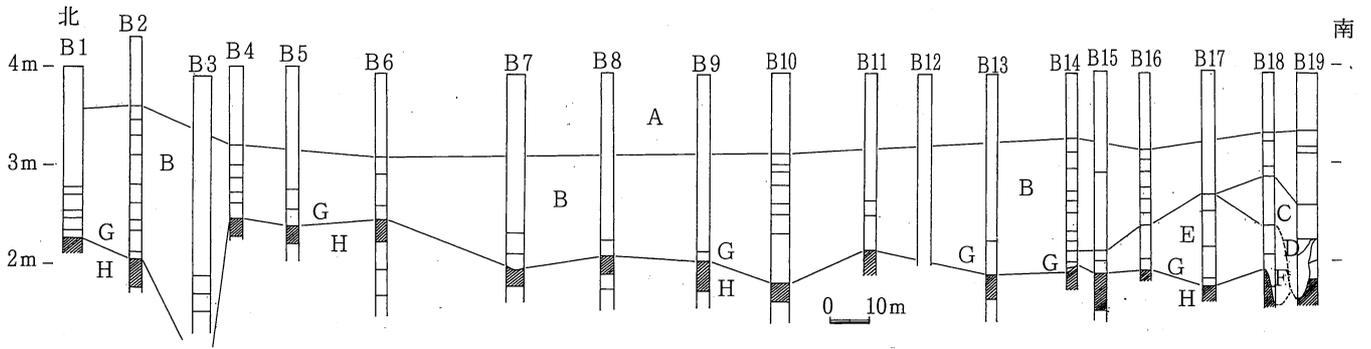
他の発掘調査地では、この黒褐色土の上面にはしばしば弥生時代前期の小区画水田が形成されているが、この調査地も同様で、耕土と評価できる暗灰褐色～灰色の微砂シルトとこれを覆う灰黄色系統の微砂～細砂による洪水砂が堆積していた。B13・14・16・17では、アゼとみら



第1図 位置図

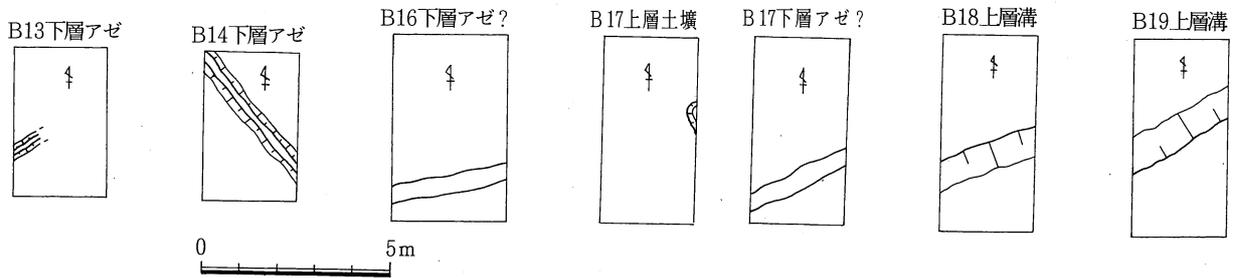


第2図 調査区配置図 (1/2500)

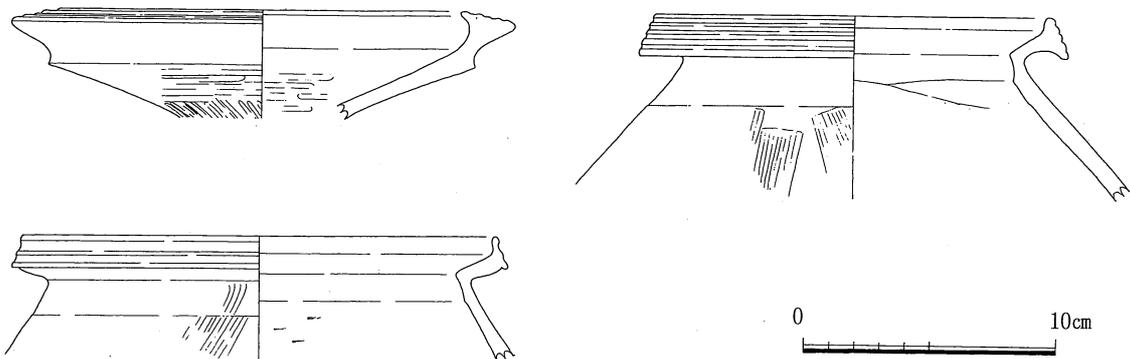


A 近代造成土 B 古墳～近代水田層 C 微高地上遺物包含層 D 弥生後期溝埋土
E 微高地基盤土(洪水砂) F 弥生前期溝埋土 G 弥生前期洪水砂・水田耕土 H 黒褐色土

第3図 土層断面集成図



第4図 各調査区の遺構



第5図 B19大溝の土器

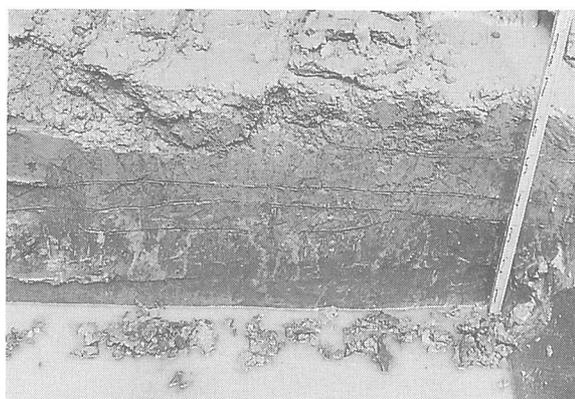
れる帯状の高まりを検出できた。また、南部のB18では、この水田面に伴うとみられる水路を確認した。遺物は出土しなかったが、これら弥生前期とみられる水田や溝を下層遺構とした。

おおむねB16以北では、弥生前期の水田を埋める洪水砂の上には、灰色系統の微砂・シルト、それに灰黄色系の微砂による水田耕土層が順に堆積し、古墳時代・中世そして近代に至るまで引き続いて水田域であったと判断できるいっぽう、B17以南では弥生前期の洪水砂、もしくは後続する洪水砂が厚く堆積して、微高地が形成されている。その黄褐色細砂の上面には弥生後期などの遺構が検出できた。これを上層遺構としたが、具体的にはB17で検出された時期・機能不明の土壌、B19の北半で検出された弥生時代後期前葉の大溝、管路部の土層断面で観察された小土壌などがある。一帯での微高地と弥生後期ほかの遺構の存在は、前年度の市道西側の電線地中化工事での調査や1995年度の下水道立坑での調査成果と一致するが、その微高地の中心線は今回の調査のB19の南からB20付近にかけてあって北東から南西に延び、B19で検出された溝もこれに規定された走行をもつと判断できる。

まとめ 市道西側で行った前年度の調査を追認した事がらが多いが、黒褐色土層の高さから旧地形復元の手がかりを得たこと、その上面での弥生前期の水田の広がりを確認したこと、調査地南端付近にあたる津島郵便局前の微高地で弥生後期ほかの遺構・遺物を検出するなどの成果があった。



第6図 B13の下層アゼ検出状況



第7図 B14の下層水田土層



第8図 B18の下層溝土層



第9図 調査風景

藤原遺跡

所在地 岡山市藤原60
調査原因 工場建設（浄化槽）
時代 弥生時代後期末

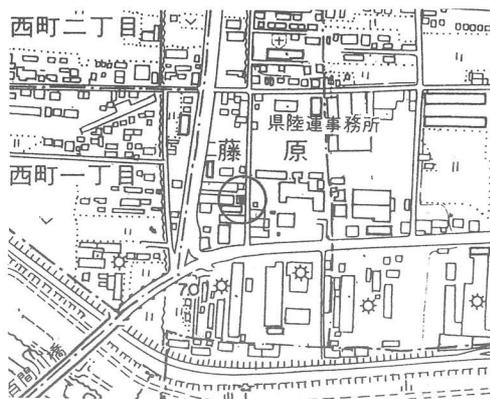
調査期間 990829～990831
調査面積 130㎡
担当者 乗岡 実

遺跡の概要 当該地は百間川の堤防の北側200mに位置する。堤防内では河川改工事に伴って、岡山県教育委員会が長年にわたって発掘調査を行っており、百間川原尾島遺跡や百間川沢田遺跡の名でよく知られ、弥生時代をはじめとした集落や水田の構造がかなり判っている。しかし遺跡群は堤防内で完結するわけではない。堤防外での遺跡ないしは微高地・水田・旧河道の展開状況は、まだ未知の部分が多いが、それでも近年の開発に伴う発掘調査や立ち会い確認でしだいに資料が蓄積されつつある。

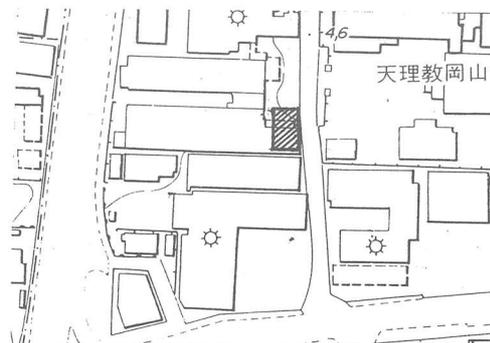
このたび、民間の菓子工場の一画で建物増築の計画があり、工事の掘削深度が遺構面に到達する浄化槽部分について、小規模な発掘調査を実施した。

遺構の概要 工場地の造成土の下には古墳時代から近代に至るとみられる水田層が重層的に堆積するが、その下には淡灰黄色の洪水砂が40cm足らずの厚さで残っており、アゼの起伏を保った水田をそのまま覆っていた。この埋没水田の耕土上面の高さはT.P.2.6m内外にある。9筆分の水田区画を確認したが、完掘できたのは中央の1筆のみで、その面積は約30㎡である。耕土層や洪水砂層では土器などの遺物がいっさい確認できなかったが、百間川堤防内外の発掘調査地での基本層序との対比から、弥生時代後期末の水田と判断できる。この時期の一連の埋没水田は百間川堤防内はもとより当該地の東に隣接する陸運事務所構内や百間川を挟んで西の原尾島区画整理事業対象地など、広範に検出されている。

当発掘区の水田層の下はT.P.0.5m付近まで土層観察を行なったが、遺構・遺物は確認できなかった。これらの土層は基本的にシルト・微砂質で、旧河道の本体部の堆積ではなく、この地は水田造成以前は微高地縁辺の湿地として比較的安定した状況であったと思われる。



第1図 位置図



第2図 発掘区配置図

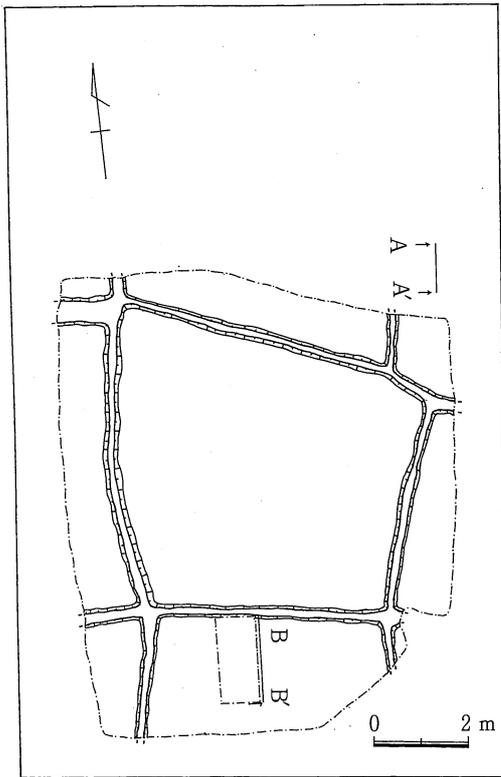


第3図 南側試掘坑土層断面

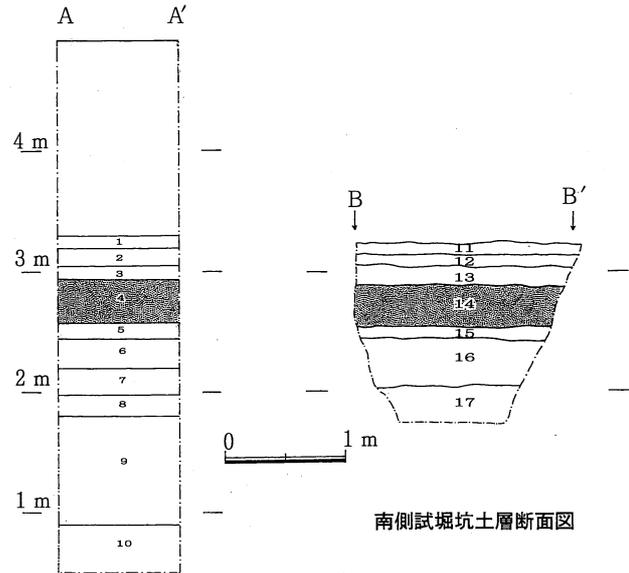


第4図 弥生後期末の水田アゼ検出状況

まとめ 実動3日ほどの小規模な発掘調査であったが、百間川遺跡群周辺の広い範囲で検出される弥生時代後期末の水田跡が、当該地にもおよんでいることが確認でき、水田区画の状況も明らかとなった。それは、これまで発掘調査された他の地点と状況に大差はなく、またその他の遺構や遺物も確認できなかったが、こうした調査の積みかさねこそが、遺跡群の理解や景観復元には不可欠で、その意味では重要なデータを得ることができたといえよう。



第5図 弥生後期末の水田



西側土層柱状図

南側試掘坑土層断面図

- | | |
|--------------------------|---------------------------|
| 1 淡灰色微砂 | 11 淡灰青色微砂 |
| 2 灰色微砂 | 12 灰(黄)色微砂 |
| 3 暗灰色微砂・シルト | 13 暗灰色微砂・シルト |
| 4 淡灰黄色細砂
(弥生末洪水砂) | 14 淡灰黄色細砂・微砂
(弥生末洪水砂) |
| 5 淡灰色微砂・シルト
(弥生末水田耕土) | 15 淡灰色微砂・シルト
(弥生末水田耕土) |
| 6 淡灰青色シルト・微砂 | 16 灰茶色微砂・シルト |
| 7 淡灰青色微砂・シルト | 17 暗灰黄色微砂・シルト |
| 8 灰(青)黄色微砂・シルト | |
| 9 灰(青)黄色・シルト | |
| 10 暗灰青色シルト・粘土 | |

第6図 土層図

川入・中撫川（市道）遺跡

所在地 岡山市中撫川
調査原因 道路建設
時代 弥生時代前期～中世

調査期間 19990614～20000331
調査面積 約1120㎡（5735㎡の内）
担当者 高橋伸二・安川 満

遺跡の概要 川入・中撫川遺跡は足守川左岸、足守川流域の遺跡群の南端付近にあたる。かつては足守川が「吉備穴海」にそそぐ河口付近にあたると考えられる。遺跡の性格、範囲などは不明な点も多いが、岡山市川入、中撫川、庭瀬にわたる広大な範囲に遺構、遺物の存在が確認されている。調査地点は山陽新幹線建設に伴い調査された川入遺跡法万寺調査区⁽¹⁾の南隣であり、山陽新幹線およびその側道の建設に伴う調査では弥生時代中期以降各時代にわたる遺構が濃密に検出されている。また、隣接する大道西調査区では築地状遺構や平城宮式瓦も検出されており、その立地なども含め港湾的な施設が存在したともいわれている。

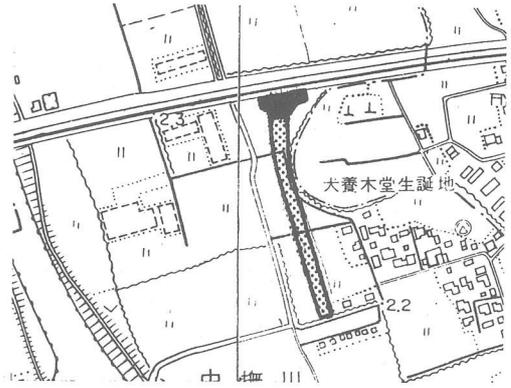
調査の概要 調査は市道中撫川平野線建設に伴うものであり、1997年5月に行った試掘調査に基づいて山陽新幹線から南へ約300m、5735m²の範囲を調査対象とした。初年度である今回は北端の法万寺I調査区の調査を完了した。

調査地点は現状で海拔1.8m程度の水田となっている。微高地基盤層は北東端でもっとも高く標高1.45m程度、西側に向かって次第に低くなっている。調査区の西側は流路、あるいは低湿地状になっている。微高地基盤層より上は表土直下まで30～40cmの厚さで黒褐色土層が存在し、遺構はこの上面からほりこまれているようである。

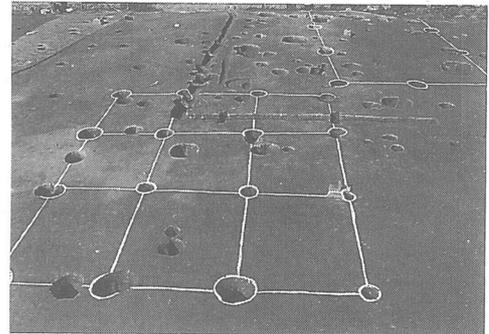
出土遺物のうち、もっとも古いものは弥生時代前期末の土器であるが、この段階の遺構ははっきりしたものは検出できなかった。中期後半の遺構は、性格不明のピット、溝、井戸を検出している。

弥生時代末～古墳時代前期には検出遺構も増加する。調査区のほぼ中央には多数の南北方向の溝状遺構が切り合っており、埋土中には多量の土器が投棄されていた。また、西側の流路もこの段階のものと考えられる。微高地側では方形の住居跡2棟のほか井戸などを検出した。

古代～中世には、調査区の東半部に建物群が営まれる。建物は出土遺物が少なく時期を限定できないうえ、重複も激しく建物として組み合わせのわからない柱穴がほとんど



第1図 調査地点



第2図 建物跡（中世）



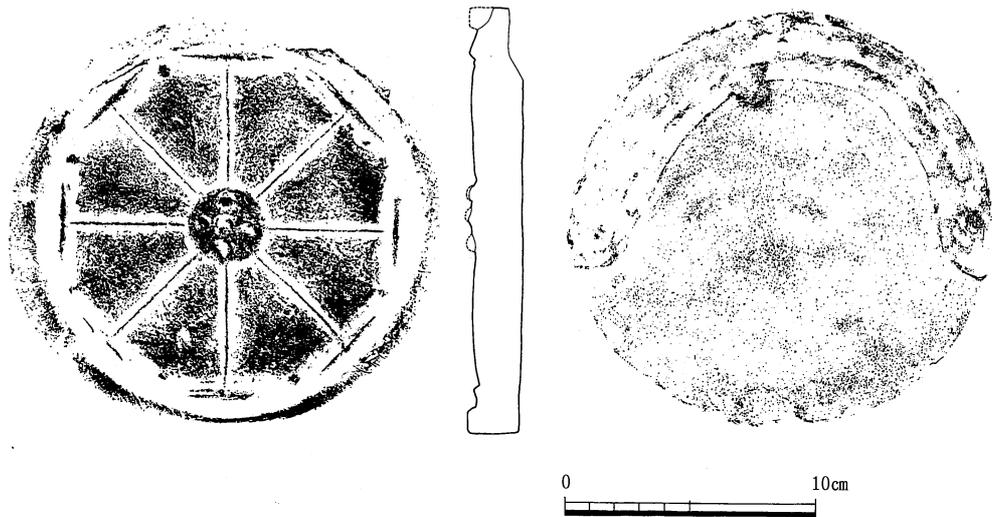
第3図 溝群（古墳時代）



第4図 竪穴式住居跡（古墳時代）



第5図 川入・中撫川 (市道) 遺跡法万寺 I 調査区



第6図 軒丸瓦

である。また、調査区のほぼ中央の溝状遺構からは、奥山久米寺式の角端点珠の素弁八弁蓮華紋軒丸瓦、小型海獣葡萄鏡が出土している。

まとめ 奥山久米寺式の軒丸瓦は、瓦当のみ単独で出土しており、調査区内や周辺にこの瓦を葺く建物が存在したとは考えにくい。また、この瓦を持つ寺院跡なども岡山県内では今までのところ確認されていない。同型式の瓦は県内では津寺遺跡⁽²⁾、加茂政所遺跡⁽³⁾から出土しており、やはりごく少量の出土のようである。なお、津寺遺跡、加茂政所遺跡の出土瓦は都窪郡山手村の末の奥窯跡の製品と見る意見もある。末の奥窯跡は製品を奈良県豊浦寺、小墾田宮推定地などに供給していたことがわかっており、当遺跡の軒丸瓦なども同様に、畿内の寺などに運ばれる途上、何らかの理由で残された可能性が高い。

注

- (1) 正岡陸夫ほか 1974 「川入遺跡の調査」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書』第2集 岡山県教育委員会
- (2) 杉山一雄・亀山行雄ほか 1997 「津寺遺跡4」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』116 日本道路公団中国支社岡山工事事務所・岡山県教育委員会
高畑知功ほか 1998 「津寺遺跡5」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』127 日本道路公団中国支社津山工事事務所・岡山県教育委員会
- (3) 柴田英樹ほか 1999 「加茂政所遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告138』日本道路公団中国支社津山工事事務所・岡山県教育委員会。なお、柴田氏は周辺に寺院をふくめ、建立した人物の居住地、公的な施設の存在を想定している。

原尾島（マンション）遺跡

所在地 岡山市藤原西町1丁目182-1外 調査期間 19990719～19990723
調査原因 マンション建設 調査面積 約80㎡
時代 弥生時代～古墳時代 担当者 乗岡 実・河田健司・安川 満

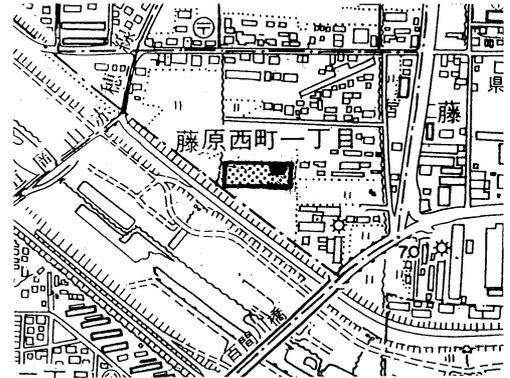
遺跡の概要 調査地点は百間川原尾島遺跡の隣接地に当たり、試掘調査により計画地のほぼ全面に古墳時代初頭の水田遺構が存在することが予想された。この水田遺構はいわゆる微高地水田であり、水田層下にはさらに弥生時代にさかのぼる遺構の存在が予想された。

調査の概要 マンション本体部分は設計変更により遺構面まで到達しないため、調査は浄化槽部分を対象に行った。調査では、古墳時代初頭の洪水砂層上面、洪水砂に埋没した水田、水田層直下の3面の遺構面を検出した。

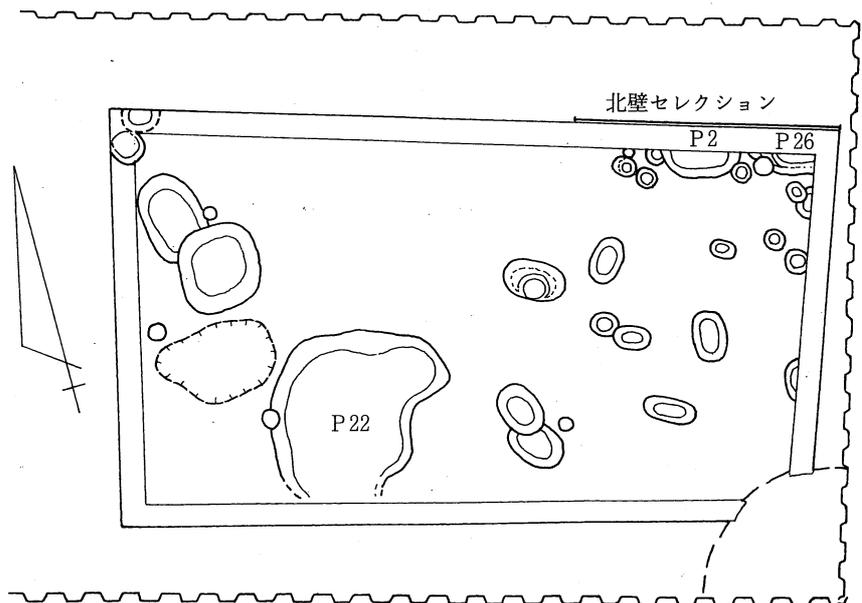
洪水砂上面は海拔3.5m程度の高さで、その上には厚さ30cm程度の厚さで包含層状の暗褐灰色土が堆積している。この面では多数のピット、土坑を検出した（第2図）。

P22や包含層からは少量ながら土師器、須恵器が出土している。これらは小破片が多く断定しがたいが、TK47からMT15型式併行とみられ、遺構群もこの段階を中心とするものであろう。なお、P22は性格不明ながら、埋土中に焼土塊や木炭を多量に含んでいた。

洪水砂に埋没した水田は、百間川遺跡群で広域に検出される古墳時代初頭の水田遺構である。水田面は海拔3.2m程度で、調査範囲の西端で大畦畔とそれに伴う溝を検出した。水田面は元地形あるいは下層遺構の影響か東側で若干低くなっているが、調査範囲内で大畦畔以外の畦畔は存在しない。

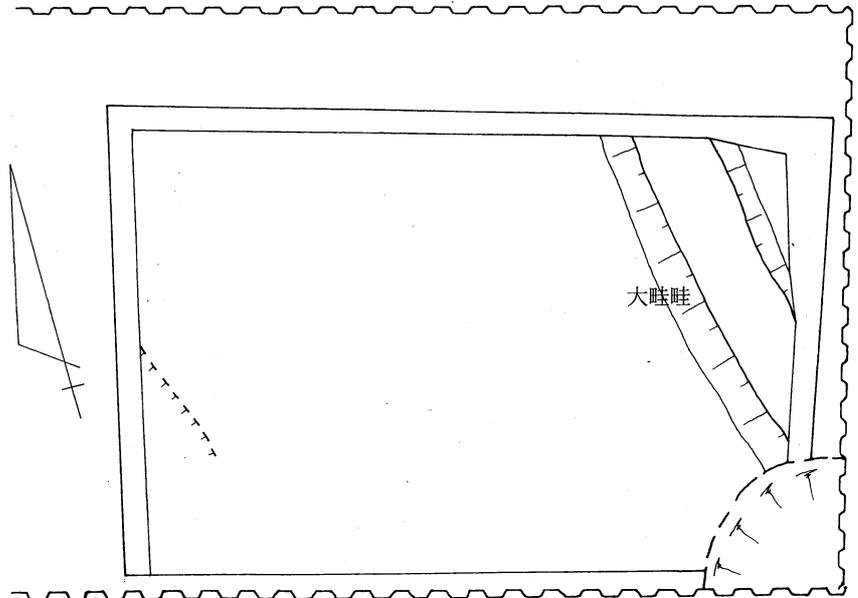


第1図 調査地点



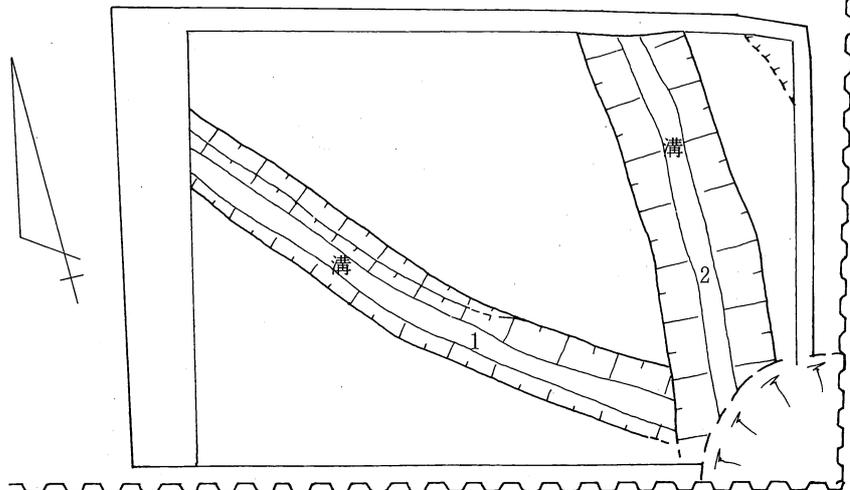
第2図 洪水砂上面検出遺構 (1/100)

水田遺構より下層からは、ほぼ大畦畔に重複して溝2を検出した。溝2は古墳時代初頭水田の耕土直下、先行する水田と見られる暗灰褐色シルト層（第4図17層）上面から掘りこまれている。出土土器から弥生中期後半～後期初頭と考えられる。なお、下層の水田は畦畔などは検出できなかった。また、下層水田耕土直下、微高地基盤層上面からは溝1を検出した。出土遺物が少なく、小破片ばかりであるため判断しがたいが、弥生前期末～中期に位置づけられるだろうか。

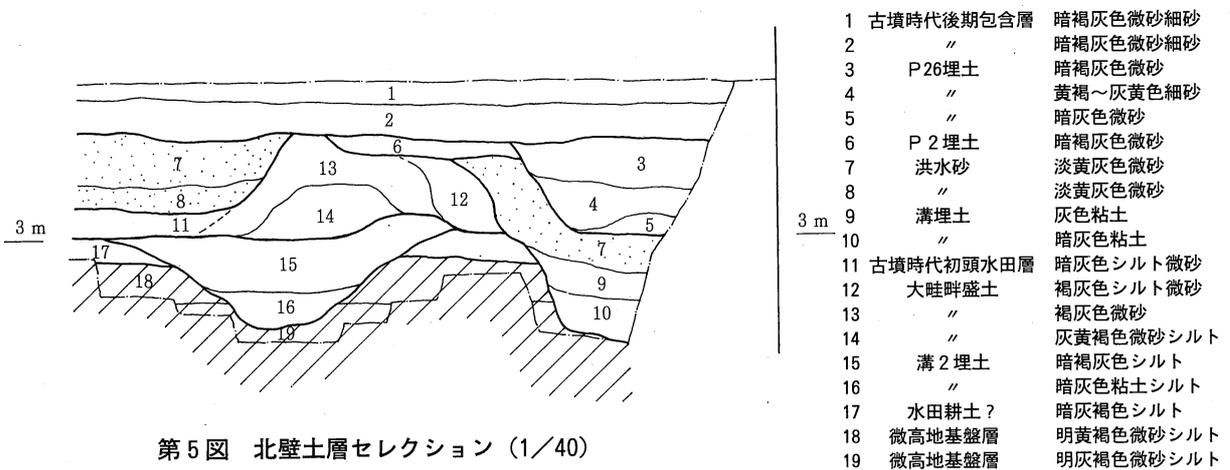


第3図 水田遺構 (1/100)

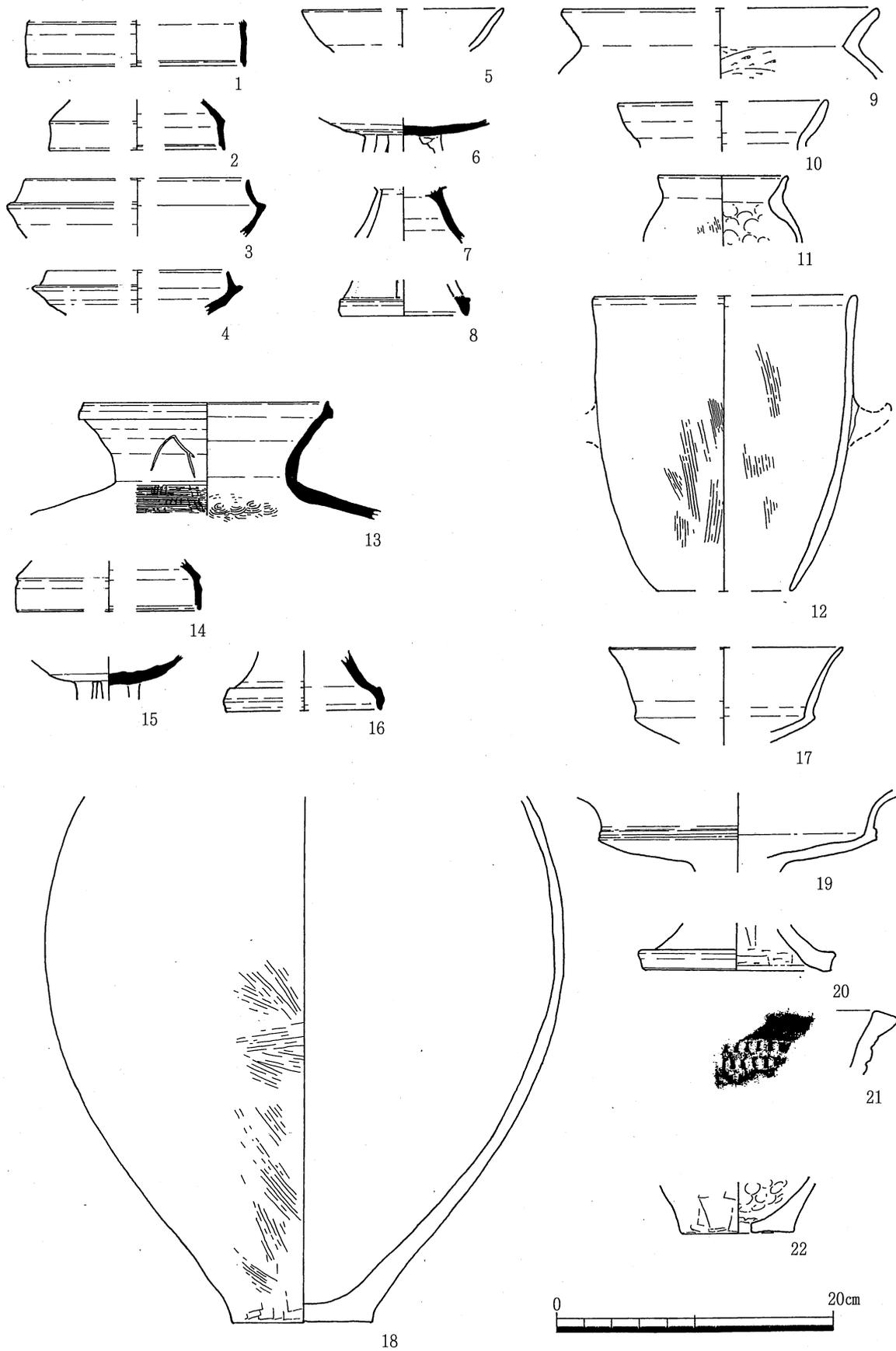
出土遺物 出土遺物のうち主なものを第5図にあげた。1～11は古墳時代包含層出土の須恵器・土師器。12はP15・16、13～16はP22、18は大畦畔盛土内、19～21は溝2、22は溝1の出土遺物である。



第4図 水田層下遺構 (1/100)



第5図 北壁土層セレクション (1/40)



第6图 出土遺物 (1/4)

北口遺跡

所在地 岡山市国府市場
調査原因 老人ホーム建設
時代 弥生時代～中世

調査期間 000216～000315
調査面積 69㎡
担当者 宇垣匡雅・河田健司

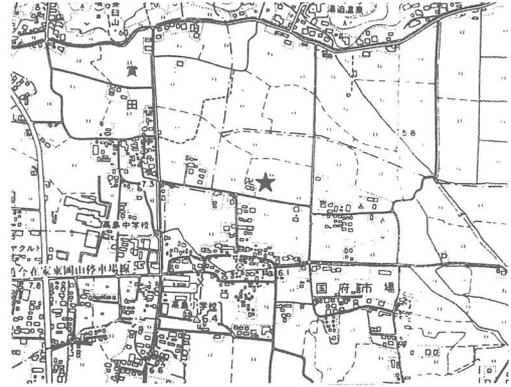
遺跡の位置と経過 遺跡は国府市場集落の北側に所在する。平安時代前期の官衙や同後期の寺院の一部が検出されたハガ(高島小)遺跡の北400m、また、同じく平安時代前期の建物や遺物が検出された南古市場遺跡の北東500mにあたる地点である。こうした周辺遺跡の状況や微地形からみて備前国府域の北側縁辺付近にあると予想された。

これまで水田であったが新たに老人ホームの建設が予定され、事前の試掘の結果包含層の存在が確認されたため、工事の着手に平行して浄化槽など掘削が深くなる部分について発掘調査を実施することとなった。調査区の名称は調査順としたため西からC、A、B区となる。調査に際しては小林園子から実測の応援を得たほか、河田健司からは一部遺構の掘り下げ等に助力を得た。なお、調査体制上、包含層の掘り下げは重機で行っており遺構の検出や遺物の取り上げなどに不十分な点があることは否めない。

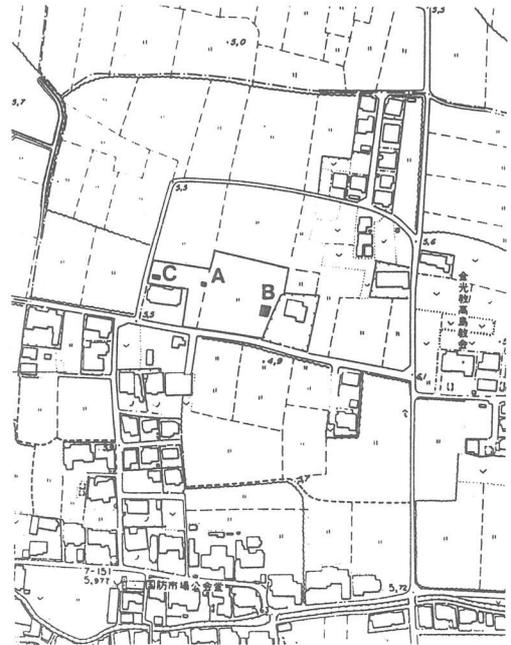
なお、図中の海拔高は地図に表示された路面高から求めたものである。

調査の概要 調査区断面に示すように、基盤層は西から東にむかって緩やかに下降し、また、北にむかって高くなっている。調査区北側の水田では広範に古代・中世の遺物の散布が認められることからみて、調査区北側の大字国府市場北端付近が東西にのびる微高地(砂堆)の最高所となり、そこから南にむかって起伏をもちながら徐々に下降しているとみられる。

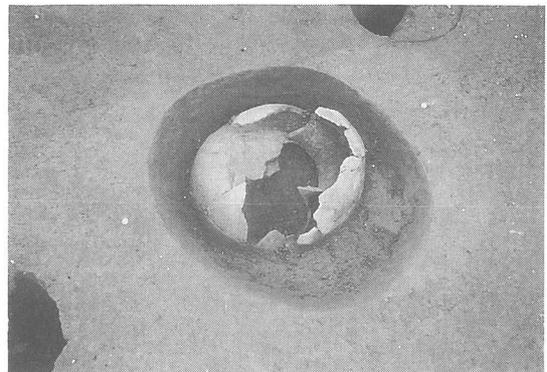
基盤層はいずれも上部が黄色あるいは黄褐色の砂質土、下部は砂層にかわり、C区では基盤層上面下85cmで円礫層となる。A区では古墳時代基盤層上面から55cmで木炭の大形片および弥生中期土器片を含む砂層を検出しており、その付近が該期に埋没した河道にあたりとみられたが、B・C区では包含層中にほとんど転磨のない弥生前期土器片が含まれる一方、基盤層下部の砂層に遺物は含まれておらず、砂層は一時期のものではない可能性が強い。また、A区も古墳時代前期の遺構を検出しており、少なくともそれ以降は安定した



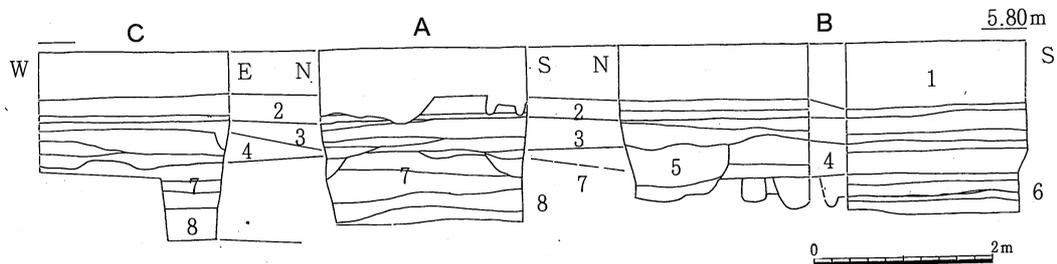
第1図 調査位置 (1/20000)



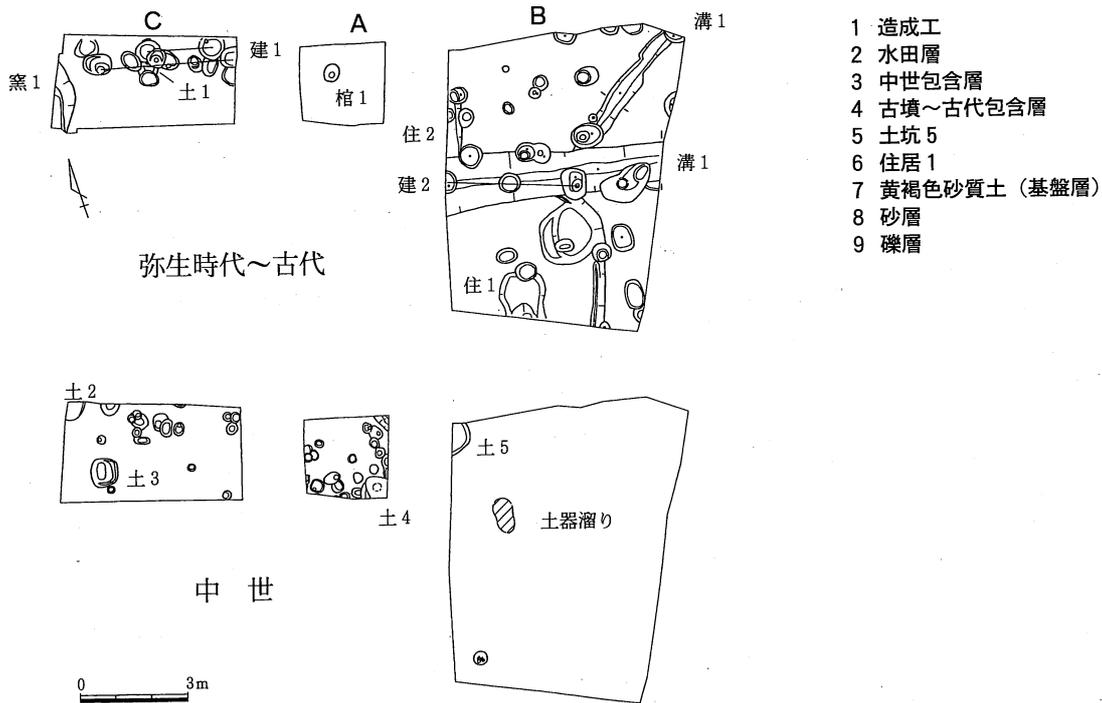
第2図 調査区 (1/5000)



第3図 土器棺検出状態



第4図 土層断面 (1/80)



第5図 検出遺構 (1/200)

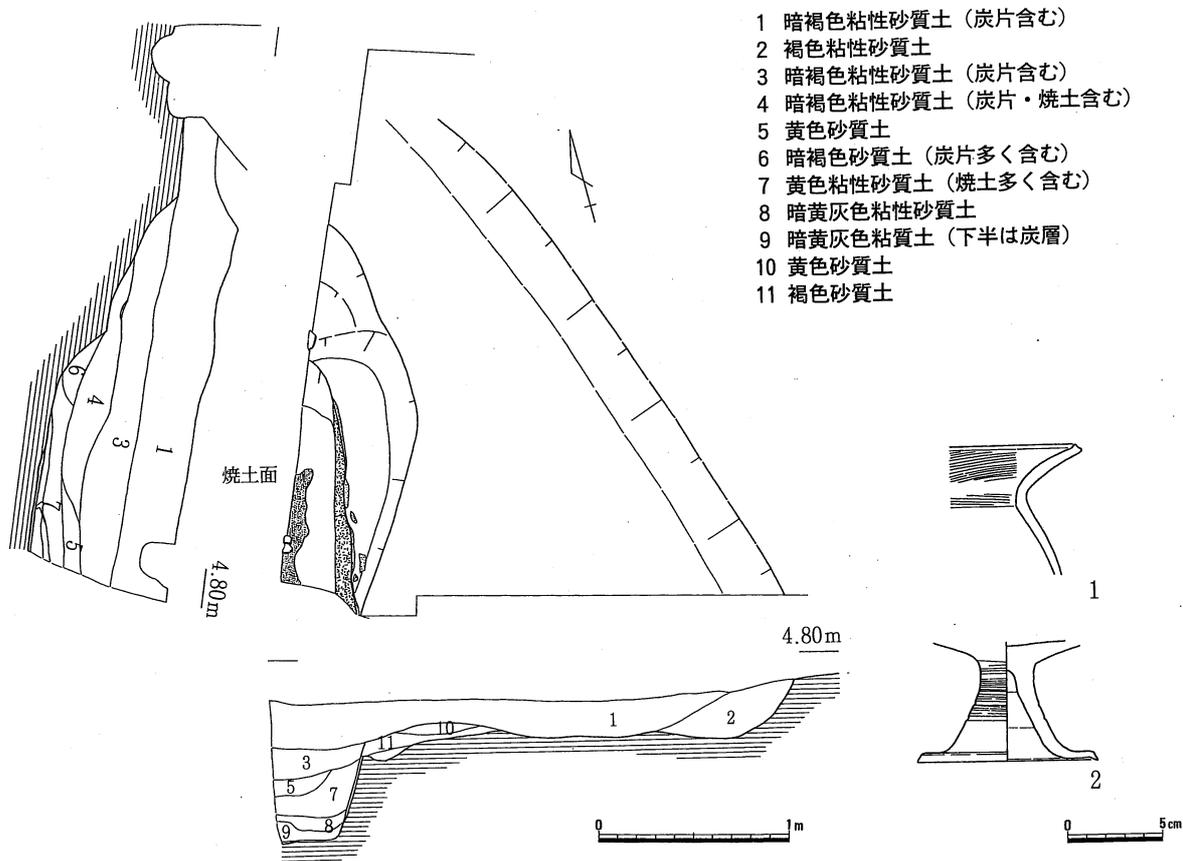
居住域となっていたとみられ、調査区周辺に遺跡が広がることは確実である。

包含層上層は褐灰色砂質土でおもに中世の遺物を含み、下層は暗褐色砂質土～褐色砂質土で古墳時代～古代の遺物を含むが、A区では後者が削平されたのか包含層上層が直接基盤層にのっている。

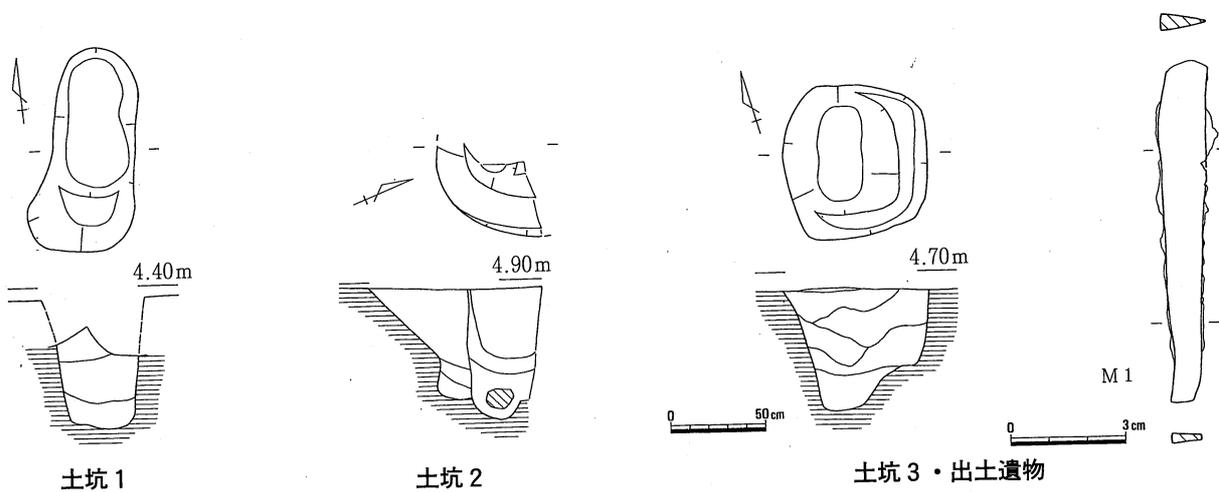
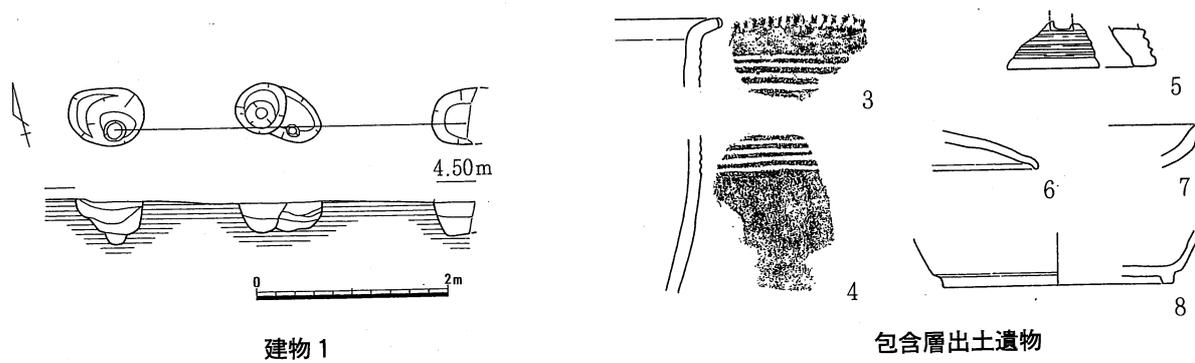
調査区の概要 C区 建物、柱穴、土坑、窯を検出した。

土坑1は古墳時代後期(7世紀前半)の遺構とみられ、羽口の小片が出土した。

窯1は調査区の西端で検出したもので、検出全長2.0m、深さ51cmを測る。東側の壁面は堅く焼けしまっており表面は黄灰色、断面は褐橙色を呈する。底面には炭層がひろがり、その下は中央(西)側が焼土面となる。上側の堆積土にも炭片・焼土が含まれており、落下した側壁とみられる大形の焼土片は認められたが、天井部を思わせる破片は認められなかった。また、この層からは須恵器高杯2が出土した。検出段階では窯のみからなるとみられたが、南壁断面で東外側に立ち上がり認められた。この部分の埋土は調査区北西隅まで続くものの北壁には現れないことからみて、窯の外側に北西～南東方向にのびる広い掘り込みを伴い段掘りになっていたと考える。窯内部の堆積土からは2以外に須恵器小片のほか土師器甕1および胴部破片が出土した。窯の構造から須恵器の窯とは考えられず、焼成時破損を示す破片が見られなかったため断定はできないが7世紀前半の土師器を焼成した窯と判断する。



第6図 窯1 (1/40) ・出土遺物



第7図 C区検出 遺構・遺物

建物1は柱穴埋土に丹塗り土師器片が含まれており古代の建物の一部と考える。柱間は185cmである。また、調査区が狭いため確実ではないが、これと軸線を同じくし先行する建物が所在する可能性がある。

中世の遺構としては土坑2・3および柱穴がある。土坑3出土の刀子M1は先端が欠損しているのか本来なのか不明である。

包含層出土の3～8のうち、3・4は同一個体の弥生前期の甕、5は円面硯の脚部、6・7は丹塗り土師器、8は須恵器杯である。

A区 小規模な調査区であるが、中央で土器棺1を検出した。棺身として壺10を斜めに設置し、その口縁部付近に鉢9を設置している。鉢9は口縁部の1/5を欠損しており、割り取られたものとみられる。上層の中世包含層との関係からみて一時期この遺構は地表にかなり近い部分に位置したとみられ、蓋の上方側がやや破碎したような状態になっているのはこの時に損壊したためとみられ、蓋破片の一部は棺内に落ち込んでいた。また、棺身の上方側も欠損するが、これは肩部に限られており破面の風化が進んでいるとみられることから、土器の肩を割り取って長さ13cmの口を設けていると判断する。その破片も棺内から出土した。この土器棺は古墳時代前期Iとみてよい。

壺10は底部穿孔はない。砂粒の少ない胎土で明褐色を呈し、胴部下半および肩部にはタタキが残る。鉢9は砂粒の多い胎土である。外面中ほどにはススが付着しており煮沸に用いられていたことをうかがわせる。

これ以外の遺構はいずれも中世・13世紀で、建物等を復元するには至らないが柱穴の密度はきわめて高い。

土坑4出土の鉄器M2は火打ち金とみられる。包含層・柱穴出土遺物のうち12は備前焼椀、13は土師質高台付き椀である。この調査区では土器棺1の検出面の下方55cmで炭片・弥生中期土器片を含む砂層を検出したことは先に記したが、土坑4壁面から採集した弥生時代中期末の甕口縁11はそれと一連の遺物とみてよい。

B区 包含層は最も厚く遺物の出土量が多く、遺構も住居、建物、溝などを検出した。ここでは時代順に記載する

弥生時代前期

C区と同様、弥生時代前期の土器片34～36が出土している。

古墳時代前期

住居1 調査区の南西側に位置する、長さ4.35m以上、深さ20cmを測る隅丸方形の住居である。検出範囲の南中央付近では幅130cm、長さ116cmの長方形に一段低くなり、その南端はさらに30cm深くなっており堆積土には炭薄層の広がり認められた。また、住居の北東隅には径156cm、深さ13cmの浅い土坑が設けられている。この土坑と重複して径54cm、深さ34cmの柱穴1基を検出したが、その西側では確実な柱穴は認められなかった。西の柱穴は調査区外に出る、あるいは砂層であるため検出しえなかったという二つの可能性があるが、一応前者と考えておく。

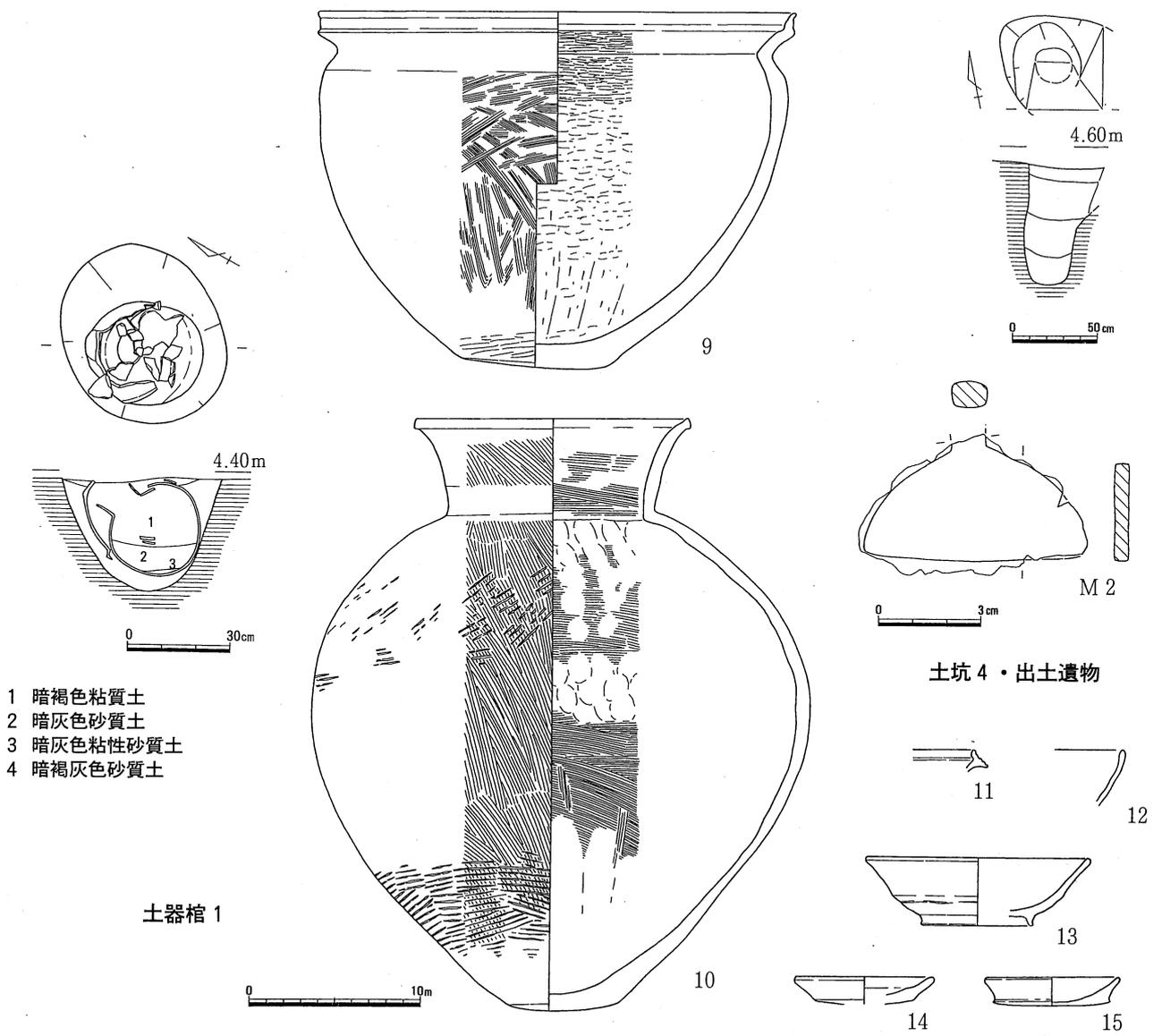
覆土中から壺口縁16、直口壺17、甕18などが出土した。18の内面下端は指頭圧痕が顕著である。これらは古墳時代前期Iに位置づけられる。

古墳時代後期前半

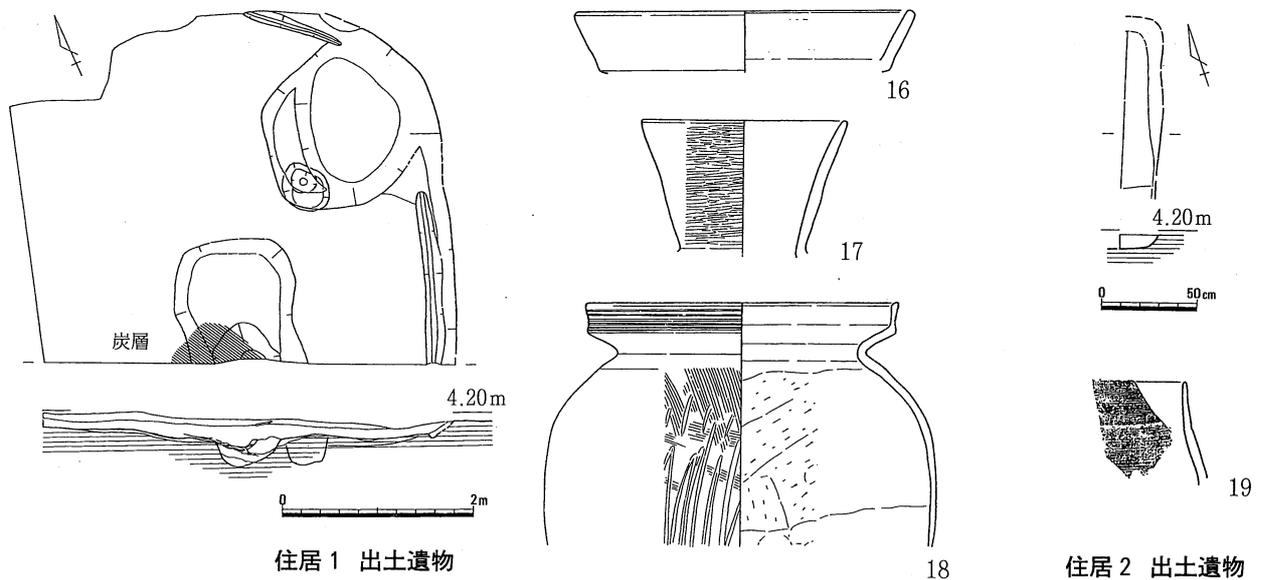
上記に続いて認められるのは37～47の、5世紀末に位置づけられる資料である。いずれも包含層ないし後の遺構からの出土である。このうち37のみ5世紀後半の甕であるが、この時期の資料はこれ以外に認められない。47は薄手の製塩土器破片である。

古墳時代後期後半

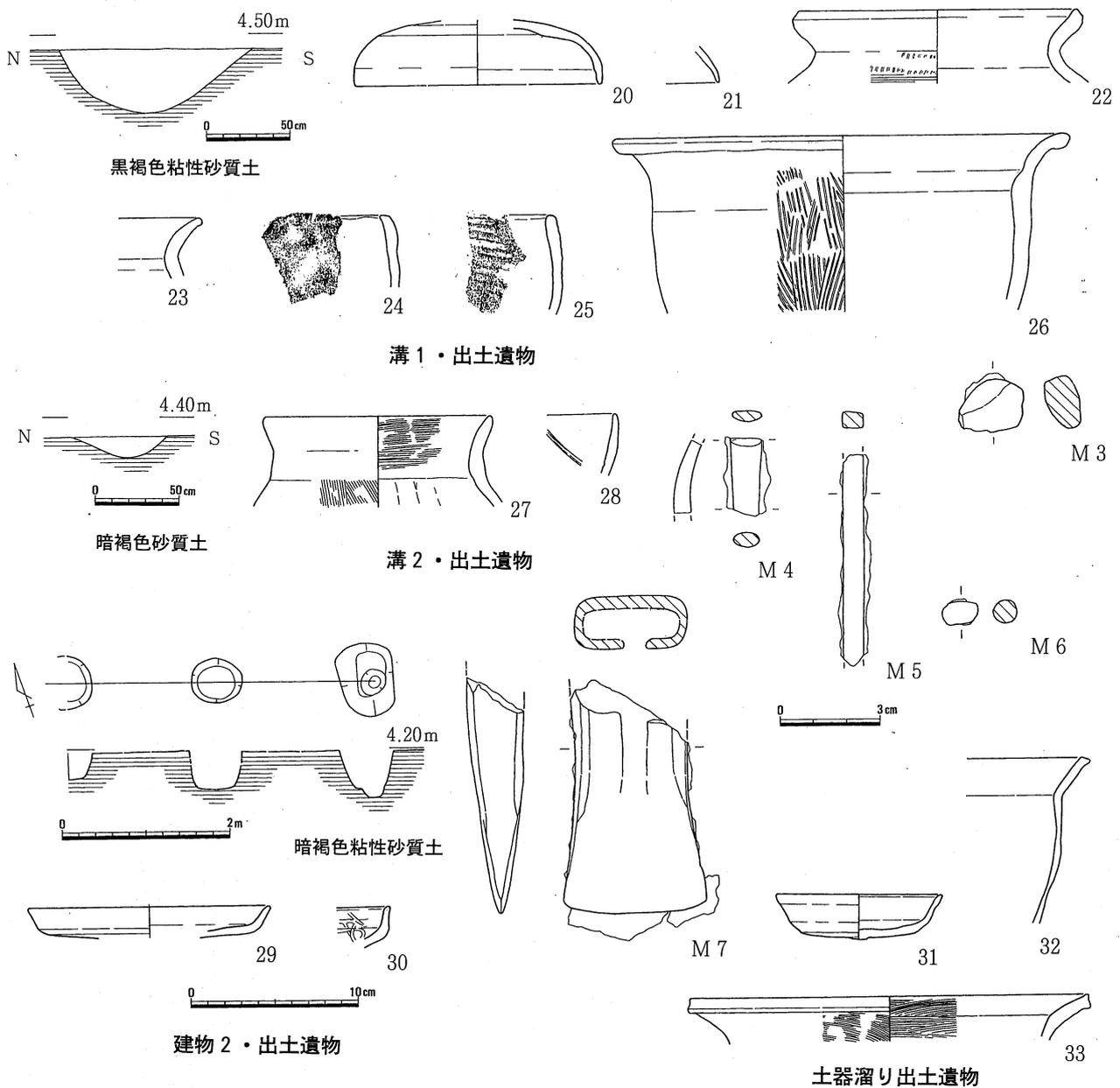
住居2 調査区西端で検出したが、柱穴や溝に切られており本来の規模は明確でない。溝ないし浅い土坑の一部である可能性も否定できないが、平面形が明確で底面が水平に西にのびることから住居の可能性を考えた。出土遺物は覆土上層出土の須恵器無頸壺19のみである。6世紀後半ごろの遺構と考えておく。



第 8 図 A 区検出遺構・遺物



第 9 図 B 区検出遺構・遺物 (1)



第10図 B区検出遺構・遺物(2)

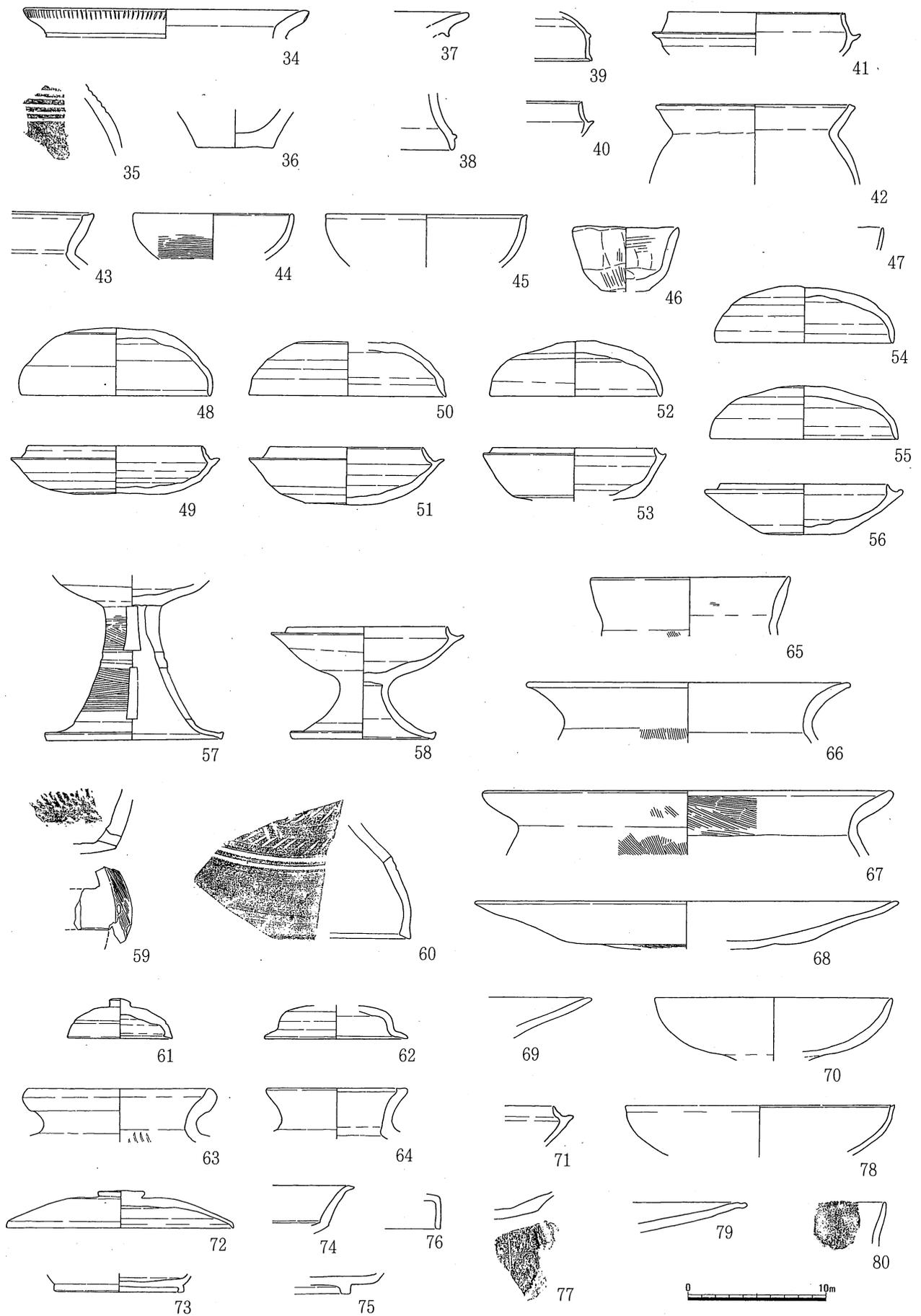
溝1 調査区に直交して東西にのびる溝で、幅110cm、深さ38cmを測る。須恵器杯21、壺22から7世紀前半の遺構とみられる。須恵器甕22はこの時期しばしば見られる瓦質風の焼成である。24・25は製塩土器で、外面調整は24はユビオサエ、25は平行タキである。これら以外に鉄鉱石、鉄塊系遺物かと思われるM3が出土している。

溝2 北東-南西方向の小規模な溝で幅54cm、深さ12cmを測る。出土遺物は少なくそれらは5世紀末～6世紀とみられるが、上記溝1に接続する可能性が強いことや鉄鉱石および長頸鏃? M5、鉄塊系遺物か6、不明鉄器4などが出土していることから溝1と同じ7世紀前半の可能性を考えておきたい。

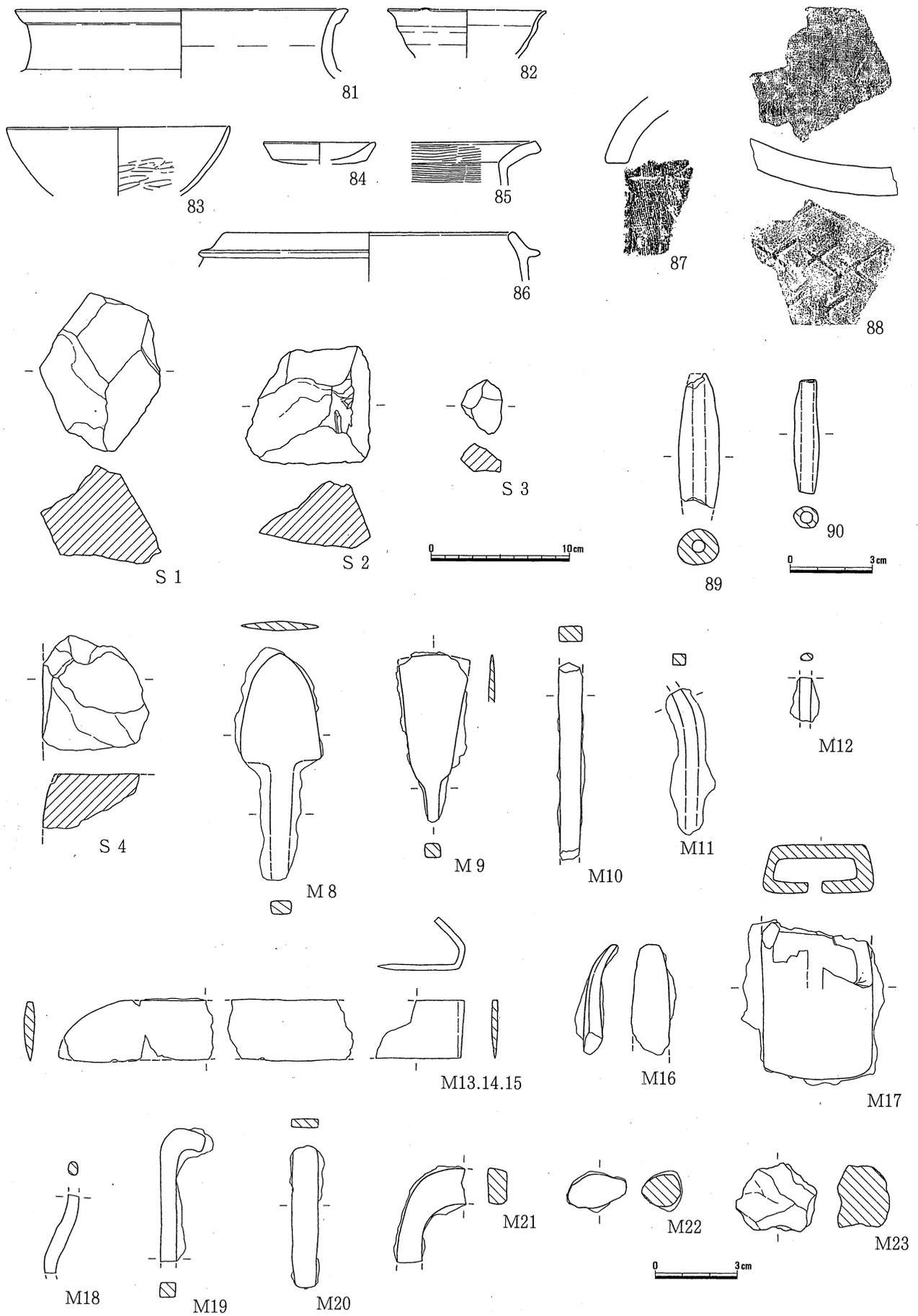
これ以外に検出した柱穴の多くが出土遺物からこの時期と判断されるが、建物を復元するに至らない。

包含層・柱穴出土遺物 須恵器48～64、土師器65～71および鉄器等がある。なお、このなかには古代に下がる可能性があるものも含んでいる。

須恵器杯のうち49・51はヘラケズリ、48・50はヘラ切りののちナデ、52・54～56は天井部縁にヘラケズリを加えてのちのヘラ切りである。53は高杯脚部が剥離したものである。口縁端は使用によってかなり摩滅している。59はこしき底部、60は大形の脚部で三角ないし台形の透かしをもつ。63・64は



第11图 B区包含層出土遺物(1)



第12图 B区包含层出土遗物(2)

横瓶の口縁とみられる。土師器のうち68・69は浅い皿状になる器種で、ともに外面に粘土紐接合痕を残す。古代の土器とは胎土が異なるためここに含めた。70は高杯、71は須恵器を模倣した土師器で明褐色、外面は黒斑風の黒色を呈する。これらは須恵器の特徴から6世紀末から7世紀前半に位置づけられる。

これらに伴って鉄鉱石S1～3、砥石S4、鉄器M8～23、また、鉄滓および羽口小片が出土している。鉄鉱石はここには3点を示したが出土量は多く、図 に出土遺構を・印で示したが、溝1・2および約半数の柱穴から出土している。S1が最も大きく長さ11.5cm、748gを測り、小さいものは2.5cm、6gである。計26点が出土しており総重量は3503gである。黒色の角礫で、磁石が強く着くものもあるが、落下しない程度に着くものが大半である。黒色ではあるがやや緑色を帯びていたり、緑色が強い面をもつものも見られ、旭川流域平野出土の鉄鉱石では原尾島遺跡（藤原光町3丁目地区）のそれに似るように見受けられるが、石英脈がかなり入る点は異なる。砥石S4は白色軟質で流紋岩質凝灰岩製かと思われる。

鉄器がかなりの量出土したが、いずれも土と錆が固結しているため細部の観察はきわめて困難である。M8はそれが最も著しく、平根の鏃で三角形の鏃身をもつという以上はわからない。9も平根で方頭式の鏃である。10～12のうち10がやや太いが長頸鏃の頸部と推定する。刀子13～15は同一個体とみられる破片であるが、15は大きく曲げられている。16はヤリガンナであろう。斧17は欠損でないとすれば刃部が短い。18は鉸具の可能性が強い。22・23は鉄塊系遺物かと思われるものである。製鉄関係の遺物のうち鉄鉱石以外の数量は炉壁4点146g、鉄滓9点255g、鉄分が多く鉄塊系遺物等とみられるもの9点96g、ガラス質滓5点41g、羽口破片1点6gとなり、これら以外に熱を受けて暗灰色～赤色に変色しガラス質滓が付着した小角礫1点がある。これらの遺物からみて、7世紀前半にこの遺跡で製鉄に関連する作業がなされていたと考えられる。

古代

建物2 調査区の中央で検出した東西方向の柱穴列である。他と異なり埋土に奈良時代の遺物を含んでおり、一連の柱穴であることは確実であるが、柵列であるのか規模の大きな建物の一部であるのか明確でない。柱間は185cmである。鉄斧M7は東端の柱穴上面からの出土であるが、重複する溝1の遺物が入った可能性もある。

包含層からは須恵器、土師器が出土している。小片のため細かい時期を判断しがたいものが多いが奈良時代を中心に平安時代に及ぶとみてよい。須恵器71～77・81のうち74は稜椀である。また、82は緑釉陶器の椀で、口縁の一部がわずかに突出するが意図的なものかどうかよくわからない。土師器78・79はいずれも丹塗りが残る。製塩土器80は古墳時代のものであろうか。

古代後半～中世

31～33は包含層上部で検出した土器溜まりの遺物で、古代後半～中世の遺物からなる。83は内黒の土師器椀で内面にはミガキが施される。86は瓦質の羽釜、瓦88は菱形格子のタタキが施される。

まとめ 今回の調査によって国府市場北部での遺跡の様相をある程度把握することができた。ここではいくつかの留意点の指摘をおこなってまとめとしたい。

遺跡の形成は弥生時代前期にさかのぼるが、遺跡の盛期は古墳時代前期、5世紀末、7世紀前半、8世紀以降となる。これは先年調査された原尾島遺跡（藤原光町3丁目地区）¹⁾と全く一致しており、幡多廃寺下層遺構もこれに近い様相を示している。百間川原尾島遺跡のような拠点集落とは異なる、この地域の周辺部での集落形成の一つのパターンである可能性が考えられる。

7世紀前半には土師器生産、鉄生産が行われていたことが判明した。農業生産の間ではあろうが、一定の集落で手工業生産が集中して行われていた可能性が考えられる。さて、鉄生産についてであるが、製鉄関係遺物の出土量は鉄鉱石、鉄器、鉄滓、炉壁、羽口の順となっており、鉄鉱石の量が多いことや羽口を含む点で原尾島遺跡（藤原光町3丁目地区）におけるありかたに似る。これらからこの地で製鉄から鉄器までの一貫生産がなされたとみることも可能かもしれないが、関係遺物の出土量比

からは製鉄そのものをこの場で行っていたとは考えにくく、鉄鉱石の採取・選別・粉碎と鉄鑛等の鉄器生産がここで行われ、製鉄作業は丘陵部でなされたと考えるべきだろう。ここでは果たせなかったが、鉄器のX線撮影と鉄鉱石の分析がそれについてさらに手がかりを与える可能性がある。

奈良・平安期の遺構・遺物のうち建物の柱穴はそれほど大規模なものではないが、円面硯や緑釉陶器の出土からこの遺跡が国府域に含まれるとみてよい。注目されるのは建物の軸線で、建物1・2とも正方位よりもやや南に振れた軸線を取り、同じく国府に關係するハガ遺跡の遺構軸線（磁北）とは異なっている。調査区位置図に示すように、調査位置南側および東方の道路付近を境として、それよりも北西側は正方位よりもやや東に振れた条里地割りが広がっており、建物はその軸線に合う可能性が強い。この地割りに関する評価はむずかしいが、これに合致する地割りは中井など南側でも部分的に認めることができ、この付近に二つの条里地割りが重複している可能性を考えることも可能であろう。

1) 宇垣匡雅ほか1999 『原尾島遺跡（藤原光町3丁目地区）』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告139



A区検出遺構図



B区検出遺構図



C区案1断面

北方長田（水質試験所）遺跡

所在地 岡山市三野1丁目1-3
調査原因 水質試験所建設
時代 弥生時代～中世

調査期間 990419～991111
調査面積 1215㎡
担当者 宇垣匡雅・河田健司

遺跡の位置と経過 遺跡は三野公園が所在する丘陵の南側、旭川西岸の堤防の直下とも言える位置に所在する。この付近は旭川が丘陵部を抜け出した位置にあっており、かつての旭川はこの付近で幾筋かの分流となって流下したと考えられている。周辺の集落遺跡の様相はさほど明らかになっていないが、南西500mには神宮寺山古墳、また北西1kmの丘陵上には一本松古墳が所在する。

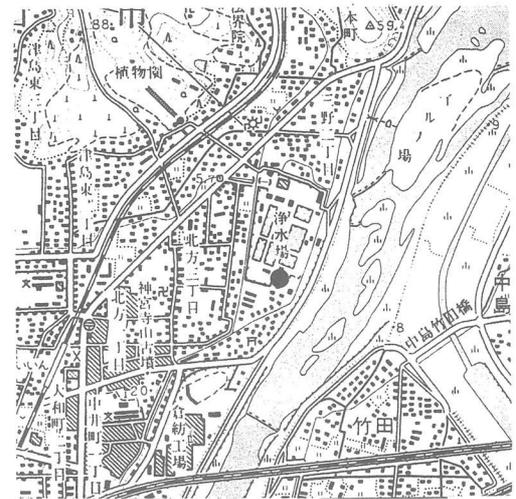
三野浄水場構内に水質試験所の建設が計画されたが、文化課ではこれまでの立会調査データに加えて数カ所の試掘調査を実施し、それにもとづいて協議をおこなった結果、河道跡とみられる構内南東部が選定されることとなった。工事は前年度末に着手され、掘削が進められたが、その過程で土器が出土し、また、河道部分に杭列が所在していることが判明し、当該地が遺跡地であることが明らかになったため、工事を中断し発掘調査を実施することとなった。

調査の概要 基盤層は東側が高く、西にゆるやかに下降しており、調査区は微高地の西縁付近にあるとみられる。現在は川岸にほど近いが、堤防～河川敷部分を含む、規模の大きな南北方向の微高地が所在するとみてよいだろう。

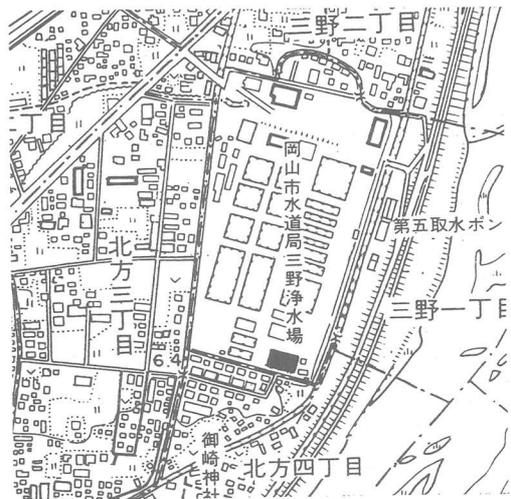
縄文時代 基盤層上部に形成された黒色土の下面で焼土面および後期の土器片を確認したが、出土遺物は少量である。

弥生時代 竪穴住居、土坑、溝を検出した。この時期の遺構は調査区東半に限られる。これは西半が平安期以降の河道となるため、最も西側の遺構は河道肩部付近にあたり上部をかなり削られている。7溝および39住居が中期後葉である（第7図）。6・22など他の多くは後期前葉の遺構であり、この時期が遺跡の中心時期となる。22住居の周辺には円形の土坑が見られるが、これらはいずれも貯蔵穴とみられ、袋状の断面を示すものもある。

出土遺物のうち注目されるのは竪穴住居6・22の遺物である。いずれも床面にはサヌカイトチップが面的



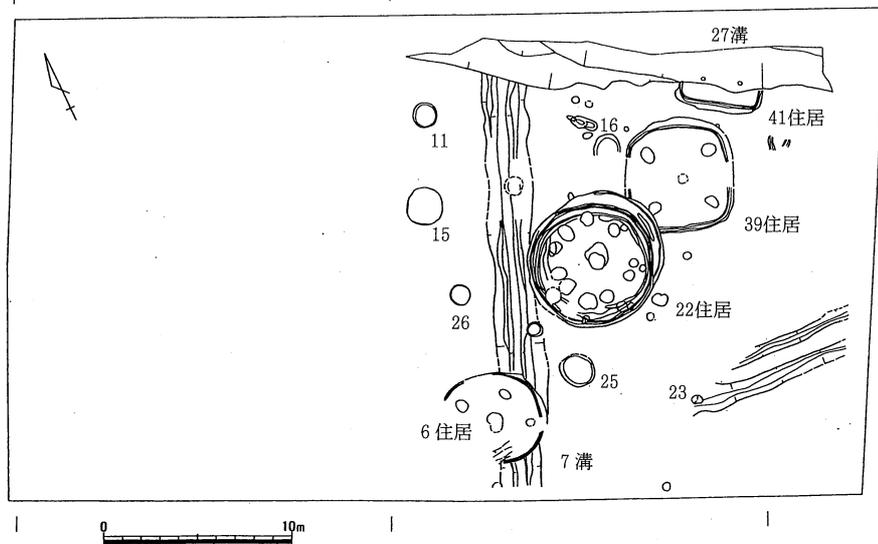
第1図 調査位置 (1/25,000)



第2図 調査区位置 (1/10,000)



第3図 埋め立て遺構・そだ敷き



第4図 弥生・古墳時代の遺跡 (1/400)

に広がっており、剥片の他、製品と見られる石鏃が出土した。覆土中を含めて6からは4点、22からは8点が出土しており、いずれも長さ3～4cmの有茎式である。これ以外にガラス小玉がそれぞれ6点、8点出土した。

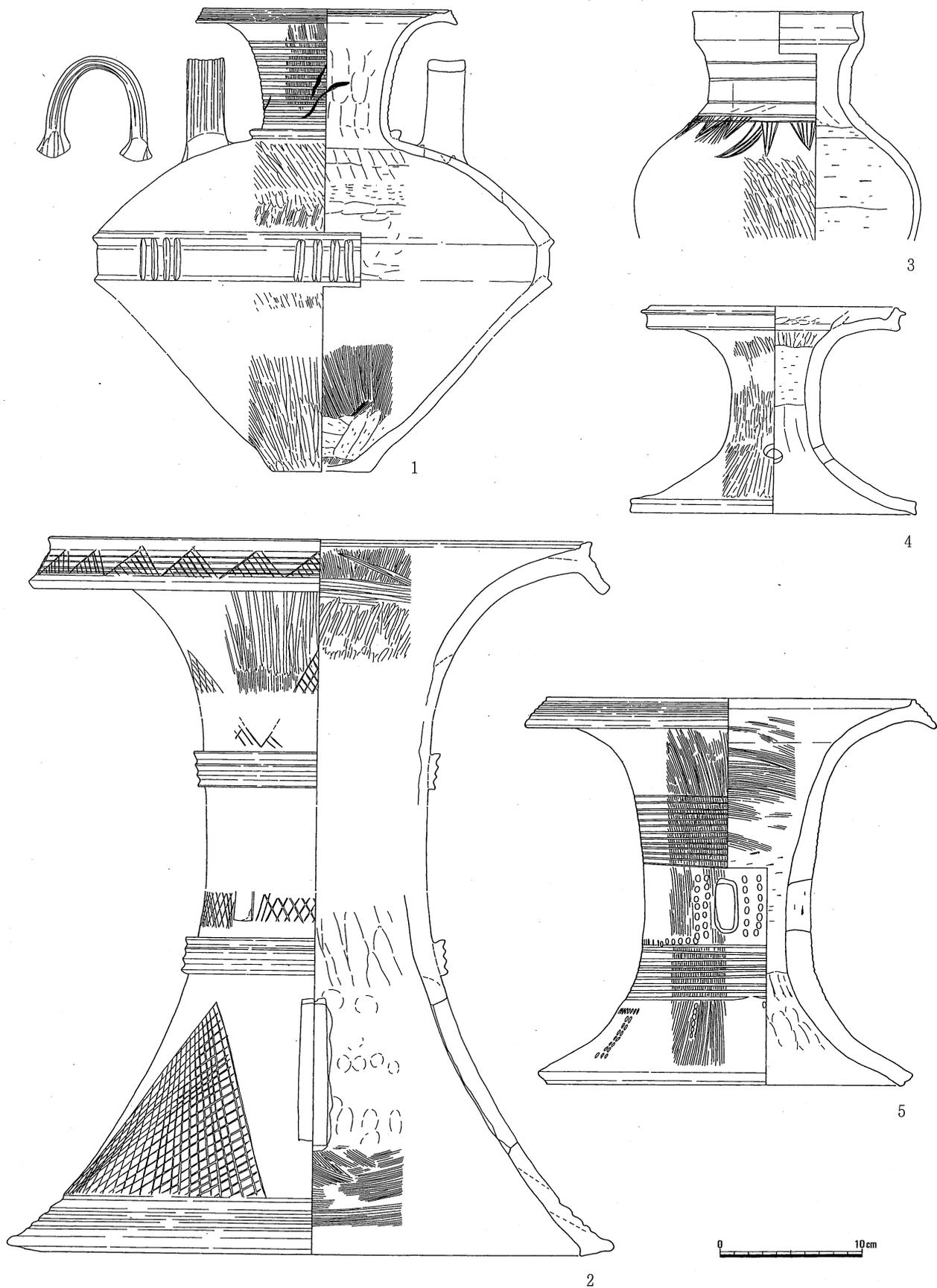
また、後述の古墳時代前期の大溝27からは弥生後期の土器が大量に出土した。後期後葉の土器をごく少量含む以外は後期Ⅰ～Ⅱ前半とみられる資料である。一部の土器は22住居覆土や包含層出土のものと接合でき、27溝南側付近に所在した土器溜まりが落下・堆積したものとみてよい。その一部を第3・4図に示したが、多量の器台を含み、甕の比率が低いという特色をもっており、農耕儀礼に用いられた土器群を少なくとも一部は含んでいる可能性が強い。興味深いのは器台6・7のように胎土が同じで形態・調整が類似したものをしばしば認めることができることで、壺1、器台2もそれぞれ同様の別個体が含まれるようである。このことから、少なくとも一部は2個一対で用いられた可能性を考察することができる。また、器台2は推定高さ50cmと他の器台よりもひとまわり大きく、大形の鋸歯文で飾られており、後期Ⅱの段階で器台のなかに突帯・筒状部をもった大形の製品が出現することが明らかになった。このほか、壺12、高杯14は突帯に、13では沈線部分に赤色顔料が塗られている。

古墳時代 竪穴住居41および大溝27を検出した。27は調査区の北縁に所在するため規模が明確でないが、調査範囲は溝の中央に達しておらず少なくとも幅は5m前後はあると推定される。深さは1.75m以上を測り、基盤の礫層を掘り抜いている。古墳時代前期Ⅱの住居41を切り、埋土中の土師器(第8図)は前期Ⅱの新しい段階とみられる。溝の性格を判断しがたいが吉備有数の大形古墳である神宮寺山古墳と同時ないし近接した時期とみられる点で重要である。中期・後期の遺構は認められず、遺物も5・6世紀の須恵器片が少量出土しているのみで、該期には集落域からはずれるとみられる。

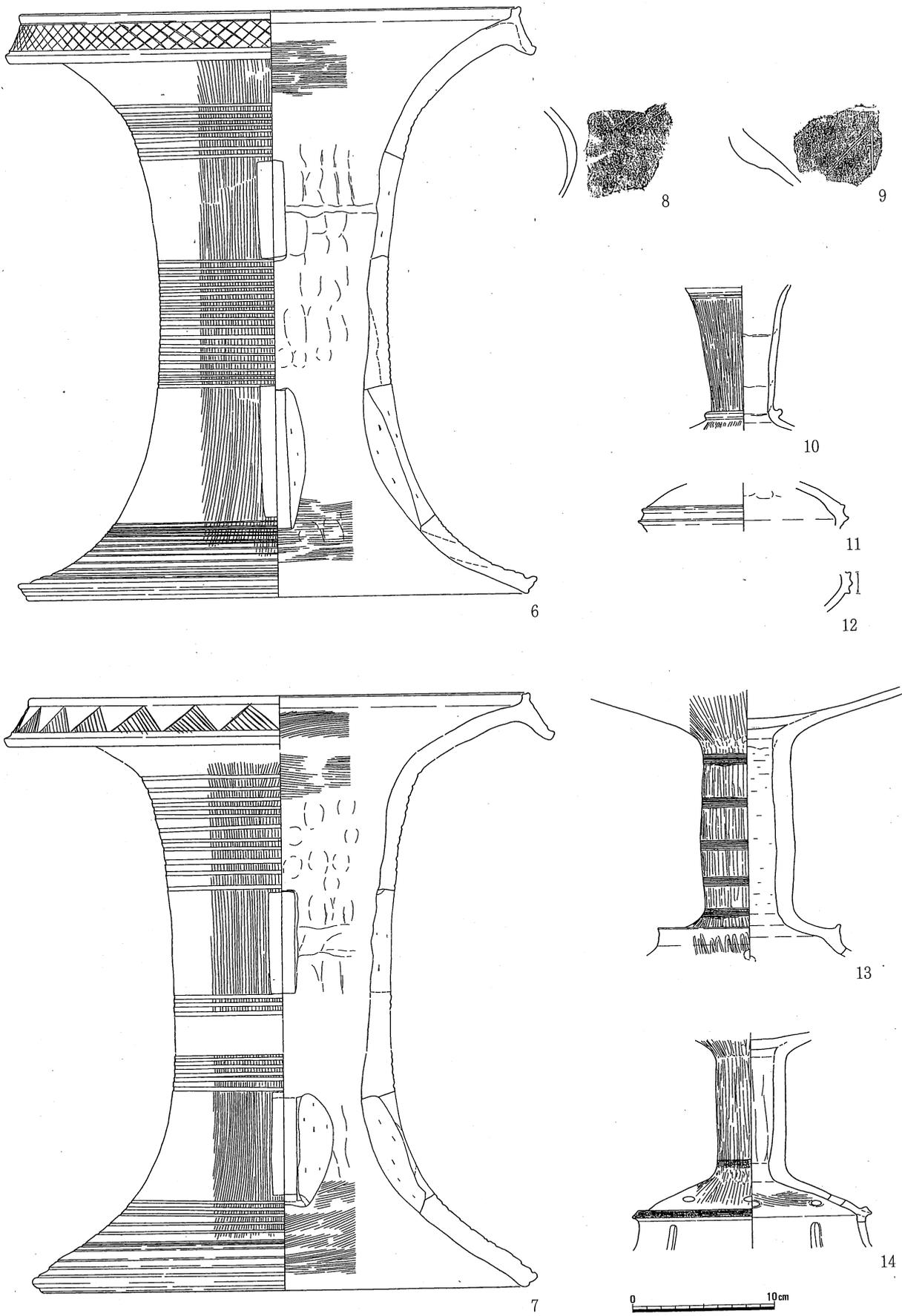
古代～中世 柱穴が散在するが攪乱を受けていることもあり、建物を復元するには至らない。他に土坑、溝がある。北半が遺構密度が高くなり包含層も厚くなる。後述の河道の遺物からみても、この時期の遺跡の主体は調査区の北外側になると推定される。

古代の遺物で注目されるものとして、河道出土の緑釉陶器壺の破片(第9図1)3点、土坑出土の石製帯飾りの未成品、軒平瓦(第9図2)などがある。

中世の遺構のうち特筆されるのは河道南半部で検出した埋め立て遺構である。工事掘削のため上部が完全に削られており、築成に砂や砂礫層も用いられているため遺構範囲の把握がむずかしいが、最初に板材を菱形格子にフェンス状に組み、その上に枝を敷きつめて土砂を積むことを繰り返し、さらにその周囲を砂礫・砂で埋めて構築していることが明らかになった。この構造は百間川米田遺跡で確



第5图 27沟出土遗物(1)

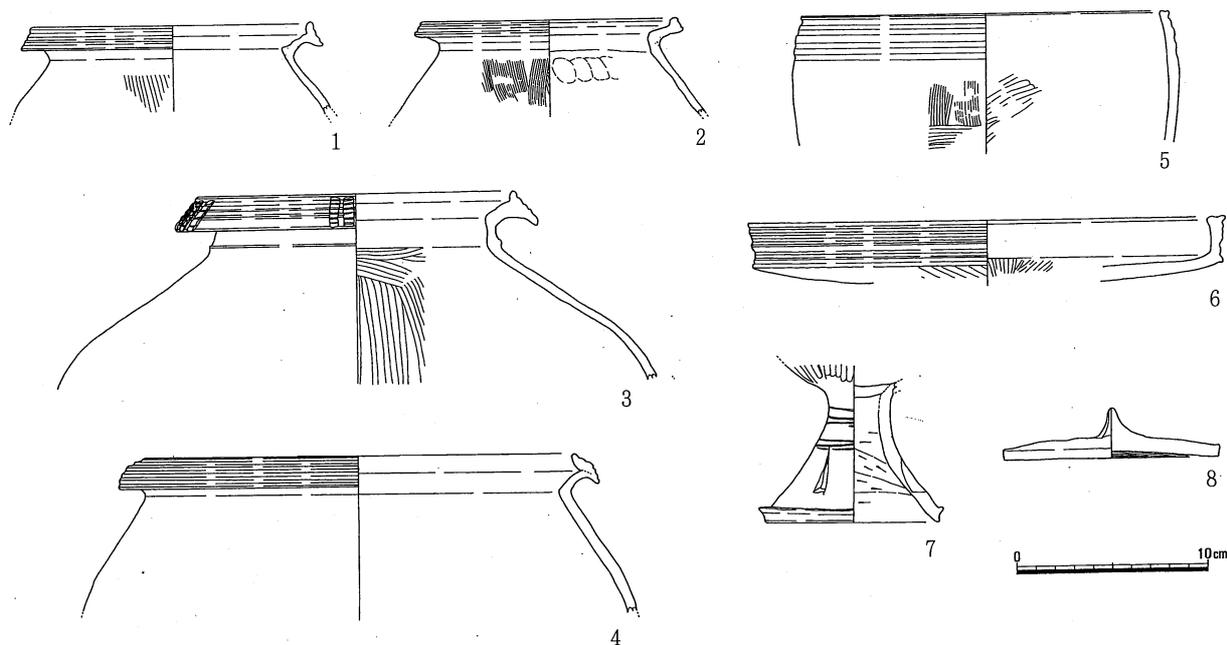


第6图 27沟出土遗物(2)

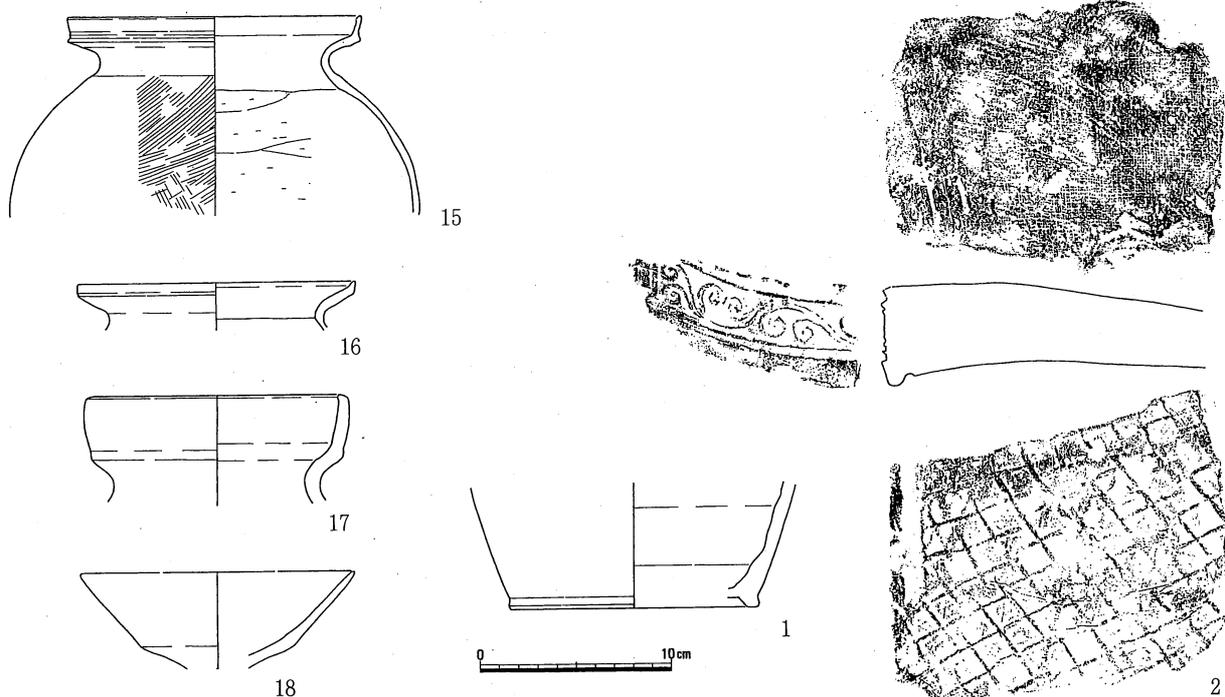
認された古代末の埋め立て遺構の構造と基本的に同一と言える。調査区には河道の東岸が位置するものの西岸の位置が不明であり、河道の形状をつかみかねるが、調査区北西隅の河道底が急激に深くなることからみて、北東-南西に流れる河道の本流から調査区内を南に向かう流れが分岐しており、その分流を堰き止めるために埋め立て遺構が設けられた可能性を考えておきたい。盛土中の遺物はそれほど多くなく、また、盛土かどうか判断しがたい部分も多いため年代を確定しにくい、14世紀代の築造の可能性が強い。

河道の遺物は10世紀、あるいはそれ以前のものも認められるが12・13世紀の遺物が主体を占める。河道は12世紀に最も東岸を浸食しており、おそらくこの段階で弥生・古墳時代など先行する時期の堆積層は流出したと推定される。それ以降徐々に埋没していったようで、近世にはやや大きい水路程度となったようである。

(第7図の作図は河田、他は宇垣が担当した)



第7図 7溝出土遺物



第8図 27溝出土遺物 (3)

第9図 河道出土遺物

三野宮之段（三野浄水場変電施設）遺跡

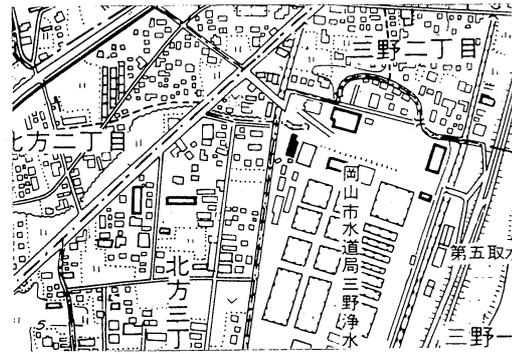
所在地 岡山市三野1丁目2-1
 調査原因 浄水場変電施設改築
 時代 中世

調査期間 990928~991001
 調査面積 293.3㎡（調査対象107.8㎡）
 担当者 宇垣匡雅・河田健司

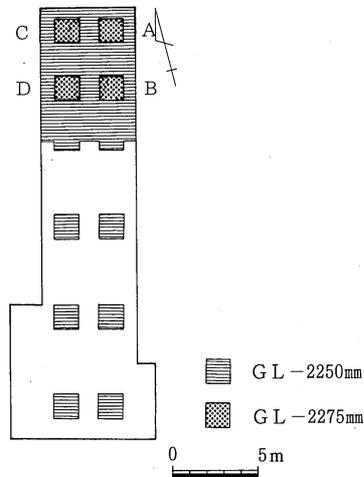
遺跡の概要 調査地点は三野浄水場の北西側に位置し、南には北方長田遺跡、西方には津島江道遺跡が所在する。1998年に実施した当該地点南側部分での試掘において地表下1.2mで包含層の存在を確認したため、変電施設改築に伴って調査に着手した。

調査区は変電施設内部にあたり、この部分は施設の基礎として周囲よりも約1.5m高くなっている。上面から2.6mで土器細片を含む灰褐色砂質土が認められ、この層は南北に細長い調査範囲の全体にひろがる。工事掘削がやや深くなる調査区北側の基礎杭部分では、この層の下に暗褐色砂質土が認められた。遺物の包含量が多くなり、やや大形の破片も含む。

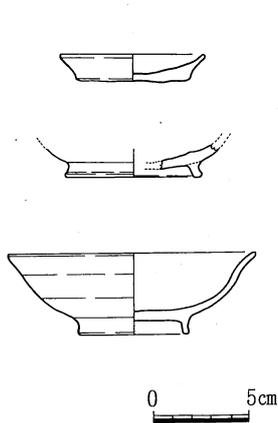
調査を工事掘削の及ぶ範囲でとどめたため、この層の範囲や性格を十分に把握することはできなかった。現況では13世紀前半代の包含層とみるべきだろう。調査区下部の様相も不明ではあるものの、この付近に中世の遺跡が広がるとみられる。



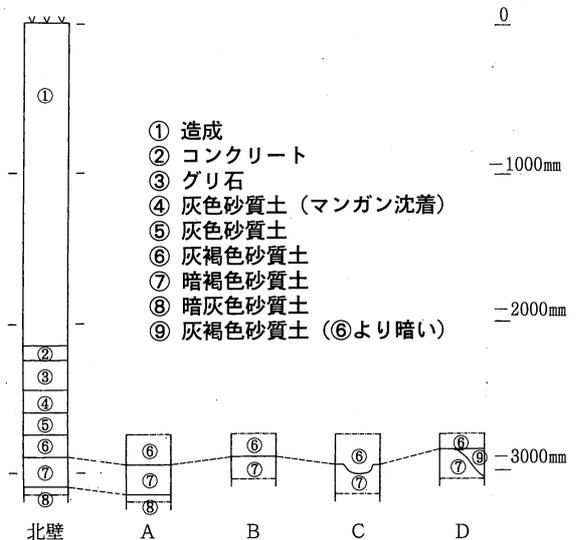
第1図 位置図



第2図 調査区の概要



第4図 ⑦層出土遺物



第3図 土層図

妹尾住田遺跡

所在地 岡山市妹尾字上寺1180番地
調査原因 市営住宅建設
時代 縄紋時代～中世

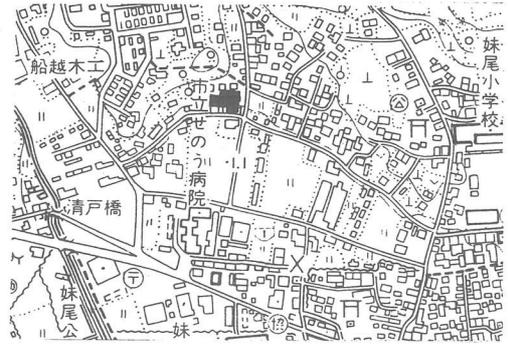
調査期間 990719～991015・000216～000225
調査面積 1200㎡
担当者 草原孝典

遺跡の概要 妹尾住田遺跡は、早島丘陵の東端の小丘陵の裾部に位置するが、近世の干拓以前は周囲は海であり、海浜部の集落遺跡といえる。付近の著名な遺跡としては、弥生時代前期中葉のタイプサイトである高尾貝塚がある。高尾貝塚以外にも、現況の山裾部には小規模な貝塚が点在しているが、時期は中世に属するものが大半のようである。現在残っている文献を見る限り、妹尾に関する記事の初源は『吾妻鏡』であり、中世以降に遺跡の展開が活発化する地域と思われた。

妹尾住田遺跡は、地表面上にはハイガイと中世土器の散布が認められ、試掘調査の結果、中世ないし古代の包含層が確認された。ただし基盤層は砂層であり、砂浜上に形成された集落、具体的には魚村的な性格の集落と推測された。

調査の概要 遺構面は3面である。まず中世面は12世紀から14世紀で、多数の柱穴や土壇が検出された。柱穴の密度は高い。特に規模の大きな柱穴もなく、一般的な集落の様相を呈する。ただ、倉敷市塩生遺跡で検出された塩釜の炉とよく似た形状の炉や、径2mほどの円形の土壇が検出されており、塩生産をおこなっていた集落である可能性が高い。また、三手向原遺跡で出土した土師器焼成に使用する窯道具（土製品）も出土しており、土師器生産もおこなっていた可能性も高い。隣接する早島丘陵からは、いわゆる早島式土器のタイプサイトとなる窯跡が発掘されており、その関連性も推測される。また、径1～2mほどの小貝塚や、柱穴の抜き取り穴に貝殻を廃棄したピットなども検出された。

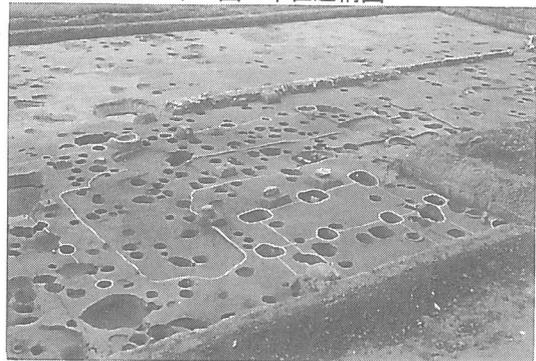
古代面は10世紀で、規則的な配置の建物群と、それらを囲む溝が検出された。調査区の中央には、南北方向に棟方向を合わせた建物があり、当初は西側に底をもつ掘立柱建物で、その上を造成した後に建て替えをおこなっている。さらに造成をおこない、最終的には礎石建物となっている。それらの建物に伴うように、地鎮あるいは宅鎮と推測される土器埋納壇が認められる。最初の建物の南側には、「コ」字形の溝がめぐっ



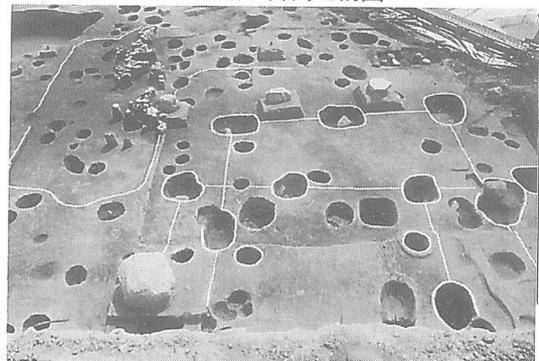
第1図 調査地点



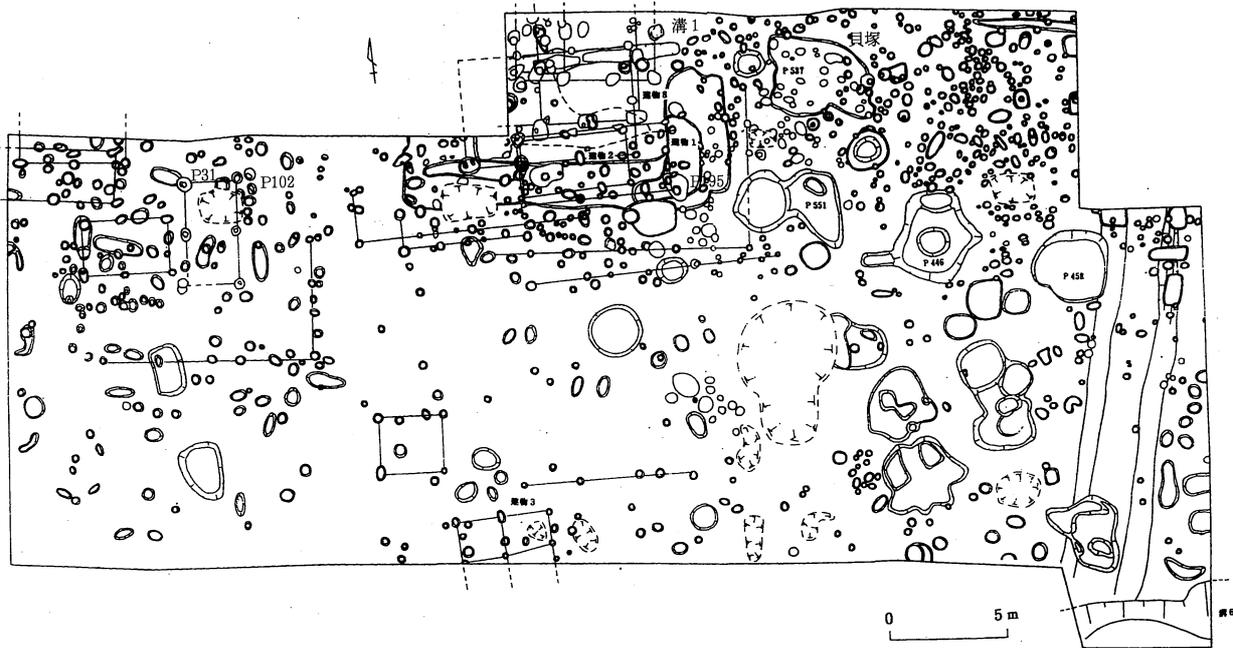
第2図 中世遺構図



第3図 古代遺構図



第4図 掘立柱建物



第5図 遺構全体図

ており、多量の土器が出土した。土師器の食膳具が大半であるが、緑釉陶器も少なからず含まれていた。出土した緑釉陶器の器種は、皿・坏・壺・香炉と多様で、ほかに越州窯系の青磁も出土した。さらに、仏具と推測される小型の銅椀や銅鏡片も出土しており、遺構の配置や礎石建物をもつ点からも、一般的な集落とは思われない。官衙的性格の強い遺跡と考えられる。さらに瓦が全く出土しないことから、館的性格が推測される。

エレベーターピット部分の調査区では、調査区中央の建物の西側に、造成層を伴った礎石の一部が確認されている。この建物は、層的に中央の建物の最初の掘立柱建物と同じである。さらに調査区の範囲と、背後の丘陵裾部との関係から、棟方向が東西方向になると推測される。おそらく、この建物が中心建物で、当初から礎石建物で、しかも南側に開けた海に対して正面方向に建てられていたと推測される。

古代以前の遺構は明確にとらえることができなかったが、基盤となる砂層中から縄紋時代前期や中期の土器と、それらに伴う石器が出土している。磯ノ森貝塚などの西側島嶼部にある縄紋時代の貝塚群の一端が当地までのびてきたことを示している。

まとめ 調査の結果、妹尾住田遺跡は、縄紋時代前期から中世までの複合遺跡であることが確認できた。とくに10世紀を中心とした時期の遺構や遺物は、質的・量的に注目されるもので、該期の拠点的な遺跡であることは間違いない。平安時代になると、施策的・経済的にも陸路から海路への転換がおこなわれており、この期の当遺跡のありようは、それに対応するものと考えられる。つまり、備中国の南の拠点としての性格が推測されるのである。

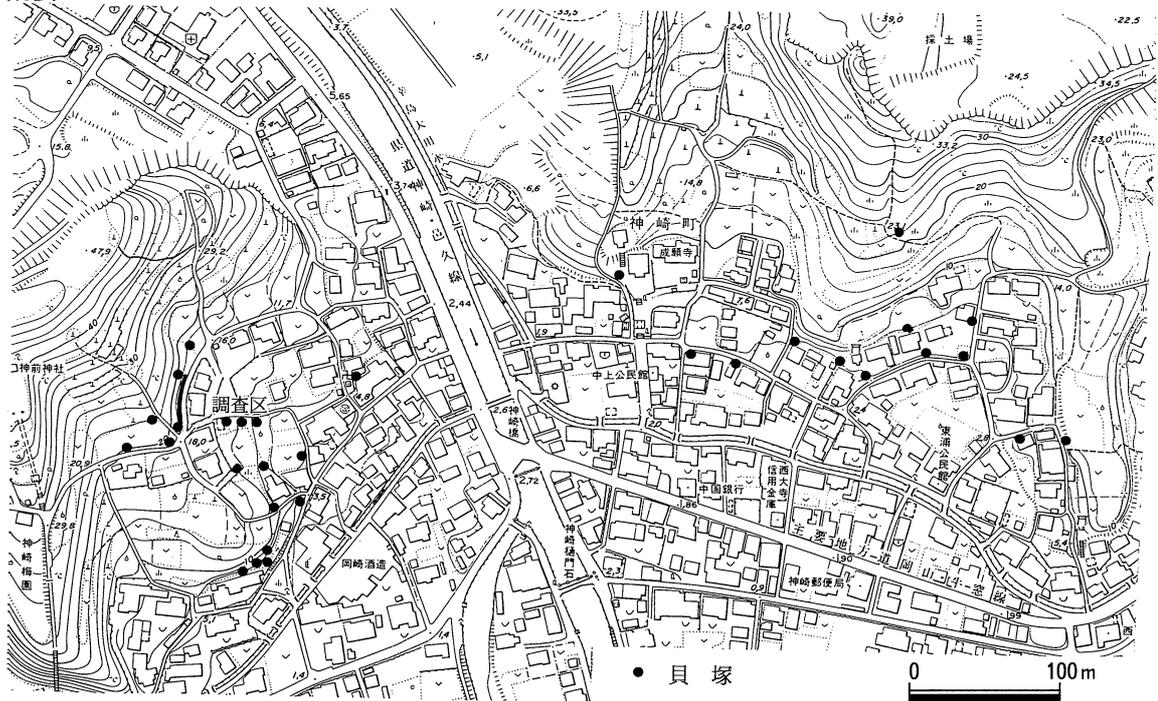
11世紀になると、遺構・遺物がほとんどみられなくなる。この傾向は、吉備穴海沿岸部に位置する官衙的といわれる遺跡の動向とも共通するものである。

次に遺構・遺跡が多く形成されるのは12世紀以降で、とくに14世紀は密集した状況である。しかし、15世紀になると遺跡は廃絶し、近代まで集落地として利用された形跡は認められない。おそらく該期において、妹尾の中心地が現在の陣屋周辺へ移動したということなのであろう。

西村貝塚(市道)遺跡

所在地	岡山市神崎町2480-1ほか22筆	調査期間	990120～991110
調査原因	市道拡幅	調査面積	1080㎡
時代	中世～近世	担当者	草原孝典

遺跡の概要



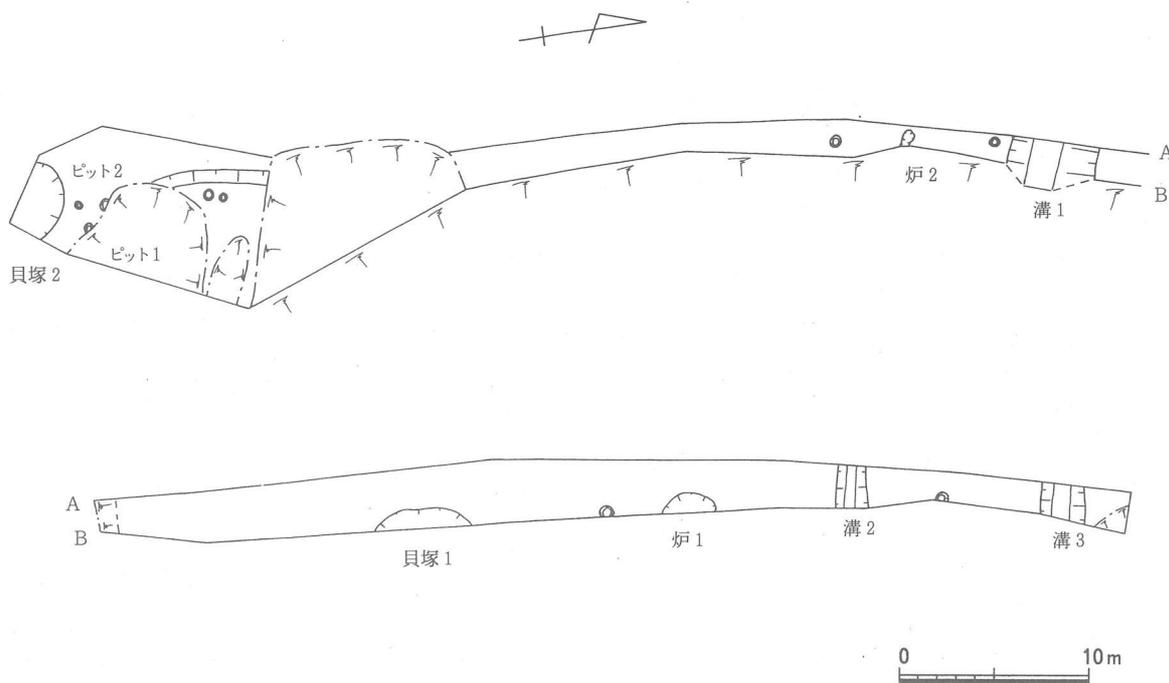
第1図 調査地点及び周辺貝塚分布

現在の眼下には水田が広がっているが、貝塚の形成された中世段階は、丘陵裾まで海が入り込んでいた。この海は吉備穴海といわれる内海で、児島を経て倉敷市玉島の辺りまで続いている。内海の沿岸にある中世の貝塚は、現在の分布をみる限り、ある程度まとまっておき、いくつかのブロックを形成している。西村貝塚もその1つで、西村から東浦にかけての東西約600mの範囲に分布する。貝塚の様相は、径2～3mの範囲の小規模なものが主体であるが、集中的に形成され、見掛上大規模な貝塚を形成している部分もある。西村から東浦にかけての貝塚の分布をみると（第1図）、さらに東と西に分かれる傾向にある。東側は、東浦公民館背後の緩やかな斜面部を中心に、丘陵部との傾斜変換点付近である、標高8m付近に分布が集中する。西側は神前神社の南東側の斜面部に分布が集中し、標高も8～20mと東側より高い位置にまで分布している。これらの貝塚を形成した人々は、中世の絵巻物に描かれた漁村の景観や、発掘調査された海浜部の集落遺跡の様相などから、丘陵部と海の間の浜辺に集落を営んでいたと考えられ、ここでは現集落の下に埋没している可能性が最も高い。そうすると、西側の貝塚群の方が、より集落の外縁部にまで貝塚が形成されていると考えられ、西側の方が集落規模が大きかったか、もしくは、より古くから集落を営んでいたということが推測される。貝塚の貝種は基本的にハイガイであるが、東側の西端、成願寺の西側にある貝塚のみは、シジミが主体である。これは、この地点が最も谷奥に位置していることに起因していると思われる。ただし現千町川は近世の掘削であり、当時は小規模な谷川が存在していたという状況であった可能性が高い。各貝塚には表面観察による限り、遺物の混入は稀で、含まれていても土器の小片が極わずかである。貝塚周辺で、集落の形成されてもよいと思われる馬の背状の尾根や、緩傾斜部分にも遺物はほとんど散布し

ていない。中世の集落遺跡を発掘調査すると、該期の土器が多量に出土することからも、貝塚周辺に日常的な集落が存在した形跡は認められないといえる。

調査地点の南側に存在する神前神社には、境内に複数の祭神が認められる。そのうちの1つに「塩土老翁」がある。この祭神は、奥州の一ノ宮である塩釜神社の主神として祭られていることでも有名で、海水を煮て塩をとることを民衆に教えた神様とされる。この祭神がいつ頃から神前神社に祭られることになったのかは、詳細な文献も伝わっていないことから不明であるが、西村貝塚を形成した人々の生業活動が、貝の採集などの漁撈だけでなく、製塩もその1つに加えられることを示唆しているように思われる。

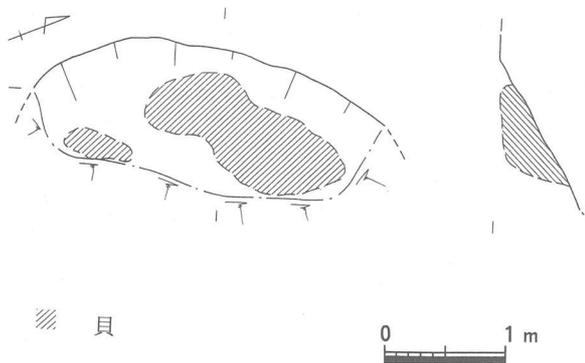
調査の概要



第2図 検出遺構



第3図 貝塚1



第4図 貝塚1

発掘調査の対象となったのは、西側の最も高い位置にある貝塚群で、昨年度調査した部分の東側の続きである。調査区付近には貝層が露出しており、多くの貝塚が調査区内に存在すると推測されたが、結局2ヶ所だけであった。

貝塚1 (第3・4図)

調査区中央付近で検出された貝塚で、径3.2mほどの楕円形の土壌に貝殻を投棄している。東半部は道路により削平を受けており残存していない。貝殻は土壌中全体に充填されているというのではなく、ブロック状の塊であることから1~2回にまとめられた貝殻を投棄したと考えられる。遺物はほとんどなく、土師器の小片が2点検出されただけであった。

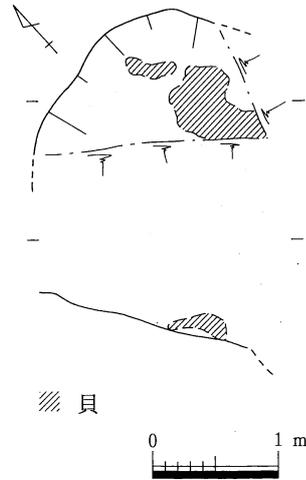
貝塚2 (第5図)

調査区の南端で検出された貝塚で、大半は既存の山道や道路によって削平されていた。北側にも径2~3mほどの貝塚が存在していたが、樹木移植の際に削平されており、調査区外の西側30mの地点にも貝塚が確認できる。山道をはさんだ南側は、昨年度の調査で貝塚が確認されており、この周辺には小貝塚がいくつか集まっていたようである。

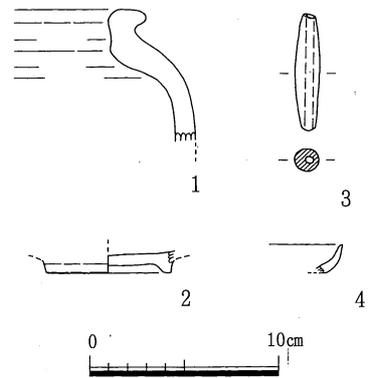
貝塚2も貝塚1と同様に土師器の小片が検出されたのみで、図化できたものは碗の底部(第6図-2)1点だけであった。この貝塚の上面を埋める堆積土中から備前焼壺の破片が1点(第6図-1)出土した。土師器の碗は13世紀後半、備前焼壺は16世紀の時期である。

炉1 (第7図)

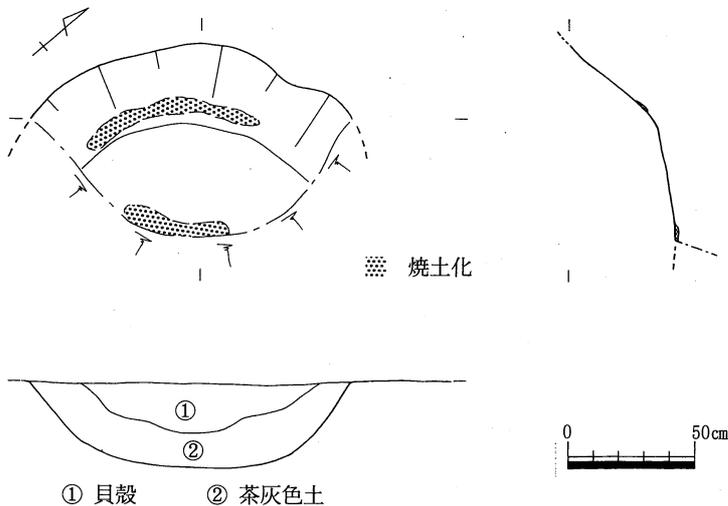
調査区の北半で検出された。東半は削平を受けているため残存していない。径1.3m、深さ0.3mの規模で、底部付近が径0.6mのドーナツ状に焼土化している。焚口部の構造などを含めた炉としての形状は不明だが、底部で火を用いていることは明らかであるため、一応炉の一部と考えた。埋土は2層で、①層は貝殻のみであることから、最終的には貝殻の廃棄場として用いられたと考え



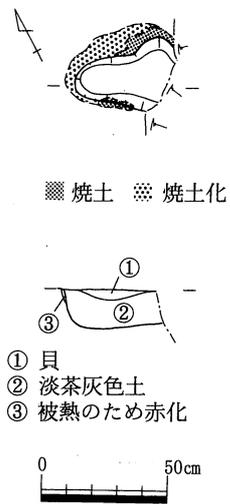
第5図 貝塚2



第6図 出土遺物



第7図 炉1



第8図 炉2

られる。遺物はほとんどなく、中世と推測される土師器の小片が2点出土したのみである。

炉2 (第8・9図)

調査区の中央付近で検出された。長さ0.35m、最大幅0.3mで、東側斜面の下の方が焚口で、西側、山側が煙道と考えられる。周囲はかなり焼けているものの、底はほとんど焼けていない。埋土は2層で、最終埋土は貝殻である。貝殻の廃棄場として用いるには、量的にもわずかであることから、周囲に貝殻を廃棄する際に混入したものと推測される。遺物は全く出土しなかった。

ピット (第10図)

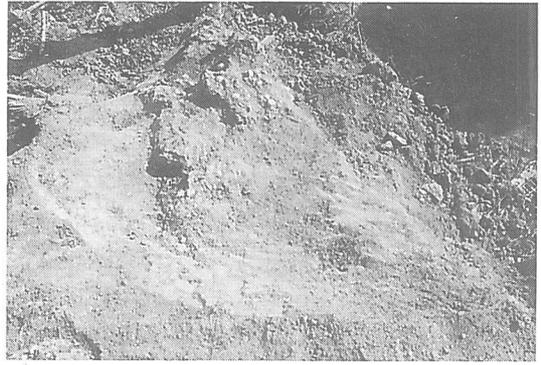
調査区内では、径0.1m前後の柱穴も検出されている。分布は散在的であるが、貝塚や炉の周囲にかたまる傾向が看取される。貝塚2の東側にあるピット1は、柱を抜き取った後、貝殻を入れている。ピット2からも若干貝殻が出土した。ピットからは遺物が出土しなかったが、炉、柱穴はそれぞれ貝殻が混入しているものがあることから、貝塚と時期的に近接していることが推測される。

溝1・2・3 (第11図)

調査区の中央付近で溝1、北半で溝2、3が検出された。溝1は幅5.0m、深さ1.5mで断面台形、溝2は幅1.5m、深さ0.5m、溝3は幅2.5m、深さ0.7mである。溝1は現地表面からもその痕跡は明らかで、溝2、3もわずかながらも痕跡を認めることができる。調査区の西側は現在竹林となっているが、以前は屋敷地であったと言われており、現況でも区画の痕跡が残る。溝1・2・3からは近世から現代にかけての陶磁器が出土しており、それぞれ該期の屋敷地に関する遺構と考えられる。

まとめ 今回の調査区は、極めて限られた範囲であったが、貝塚・炉・柱穴をある程度まとまてとらえることができた。それぞれの遺構の時期を限定するには遺物の量が少なすぎるものの、いずれの遺構にも貝殻が含まれているものがあることから、貝塚形成の時期とほぼ同じであることが推測される。貝塚の時期は、貝塚に含まれている土器から13世紀から14世紀で、貝塚2の上面から出土した備前焼の時期から16世紀までは下らないと推測される。この年代観は、県南部における中世貝塚の発掘調査成果とも矛盾しない。

また貝殻の廃棄場である貝塚の間に炉が存在していることや、土器などの遺物の出土量が少ないことなどは、従来から言われているように、中世貝塚の周囲を貝の加工品をつくった加工場の跡とする考えを支持させる。ただし貝層のなかには、貝殻のほかに魚骨等が含まれていることが確認され(IV、小林論文参照)、中世の貝塚が貝殻のみの廃棄場でなかったことが明らかとなった。貝殻の廃棄が小さな単位で極めて完結的におこなわれていることなどと合わせて考えると、海浜集落の生業活動のなかで貝の採集と加工の占める割合や専門の程度がそれ程大きくなかったということがうかがわれ、海浜集落における生業活動の構成やその比重を考える上で興味深い資料といえる。



第9図 貝塚2



第10図 炉2及びピット



第11図 ピット1

Ⅱ. 埋蔵文化財関連の協議と調整

埋蔵文化財の協議は、日常業務として、開発行為事前指導時及び建築確認申請時による埋蔵文化財の存在状況に関する助言・指導を行う。その内容・協議次第では立会・確認調査・試掘調査・設計変更等を要請し、最後的手段として発掘調査を計画・実施する。

ほとんどは、口頭によるお願いとメモを残す程度であるが、現地踏査・試掘確認を実施する場合は、「埋蔵文化財等の存在状況確認調査について」を申請してもらい、その結果を通知する。そして、その後の協議の始点としている。

1999年度の申請は44件。文書回答のみは9件、現地踏査13件、試掘対応16件、未対応6件であった。また、建築確認申請時に199件の相談があり、そのうち立会対応は70件であった。試掘調査は民間事業13件、公共事業3件、そのうち包蔵地確認は7件であった。

それら協議を経て、岡山市教育委員会で取り扱った埋蔵文化財発掘の届出・通知等（直営分を含む）の一覧表は以下のとおりである。一覧は文化課受付において年度の区分けをしている。

埋蔵文化財発掘の報告（第98条の2）	10件
埋蔵文化財発掘の届出（第57条の1）	5件
埋蔵文化財発掘の届出（第57条の2）	42件
埋蔵文化財発掘の届出（第57条の3）	37件
遺跡発見の届出・通知（第57条の5・6）	1件
史跡の現状変更許可の通知（第80条）	13件
埋蔵文化財試掘調査・確認調査報告	16件
埋蔵文化財認定・発見通知	14件（4・10件）

このほか、市域内での発掘調査として以下の遺跡がある。詳細は「岡山県埋蔵文化財報告30」（岡山県教育委員会2000年）に紹介されている。

- ・百間川原尾島遺跡（旭川放水路改修に伴う発掘調査）
- ・原尾島遺跡（建設省藤原宿舍3号棟（仮称）新設に伴う確認調査・発掘調査）
- ・原尾島遺跡・沢田遺跡（国道2号藤原交差点他改良に伴う発掘調査）
- ・津島遺跡（岡山県陸上競技場改修に伴う発掘調査）

埋蔵文化財発掘の通知（第98条の2第1項）

(10件)

遺跡の名称	遺跡の種類	所在地	工事の目的	面積	工事期間	指導事項	氏名・機関	住所	遺跡の時代	受付年月日
北方長田遺跡	集落跡	岡山市三野一丁目1124番1	その他建物（水質試験場建設）	1,200㎡	19990419 ～ 19991130		岡山市教育委員会 教育長 戸村彰孝	岡山市大供1丁目1番1号	弥生・中世	19990416
川入・中撫川遺跡	散布地・集落跡	岡山市中撫川437-1	道路（吉備環状線新設）	5,735㎡	19990614 ～ 20010331		岡山市教育委員会 教育長 戸村彰孝	岡山市大供1丁目1番1号	弥生・古墳・奈良・平安・中世	19990622
津島遺跡	散布地・生産遺跡	岡山市学南町二丁目	その他開発（電線共同溝整備）	301.5㎡	19990614 ～ 20000331		岡山市教育委員会 教育長 戸村彰孝	岡山市大供1丁目1番1号	弥生・古墳・奈良・平安・中世	19990705
原尾島遺跡・沢田遺跡	散布地・生産遺跡	岡山市藤原西町一丁目182-1外5筆	その他建物（集合住宅建設）	99.725㎡	19990721 ～ 19990731		岡山市教育委員会 教育長 戸村彰孝	岡山市大供1丁目1番1号	弥生・古墳	19990721
国府関連遺跡	官衙跡	岡山市国府市場43番地	工場（浄化槽設置）	28㎡	19990824 ～ 19990827		岡山市教育委員会 教育長 戸村彰孝	岡山市大供1丁目1番1号	奈良・平安・中世	19990827
妹尾住田遺跡	集落跡・貝塚	岡山市妹尾字上寺1180番地	その他建物（市営集合住宅）	2,640.68㎡	19990719 ～ 19991031		岡山市教育委員会 教育長 戸村彰孝	岡山市大供1丁目1番1号	平安・中世	19990906
沢田遺跡	生産遺跡	岡山市藤原60	工場（浄化槽）	130㎡	19990830 ～ 19990903		岡山市教育委員会 教育長 戸村彰孝	岡山市大供1丁目1番1号	弥生	19990906
三野宮之段遺跡	散布地	岡山市三野一丁目2-1	水道（浄水場特別高圧受電設備）	107.8㎡	19990928 ～ 19991001		岡山市教育委員会 教育長 戸村彰孝	岡山市大供1丁目1番1号	中世・近世	19990929
妹尾住田遺跡	集落跡・貝塚	岡山市妹尾字上寺1180番地	その他建物（市営集合住宅）	20.7㎡	20000216 ～ 20000331		岡山市教育委員会 教育長 戸村彰孝	岡山市大供1丁目1番1号	平安・中世	20000225
国府関連遺跡	集落跡・官衙跡	岡山市国府市場958-3、985-3	その他建物（特別養護老人ホーム）	3,328.77㎡	20000216 ～ 20000331		岡山市教育委員会 教育長 戸村彰孝	岡山市大供1丁目1番1号	古墳・奈良・平安・中世	20000209

第57条第1項

(5件)

遺跡の名称	遺跡の種類	所在地	工事の目的	面積	工事期間	指導事項	氏名・機関	住所	遺跡の時代	受付年月日
鹿田遺跡	集落跡	岡山市鹿田町二丁目5番1号	その他の建物（病院共同溝整備）	300㎡	19990419 ～ 19990930	慎重に発掘調査	岡山大学長 小坂二度見	岡山市津島中一丁目1番1号	古墳・奈良・平安・中世	19990409
津島遺跡	集落跡・生産遺跡	岡山市津島東四丁目2525番地	学校（研修・体育施設）	2,569.94㎡	19990802 ～ 20000331	慎重に発掘調査	学校法人加計学園 理事長 加計勉	岡山市理大町1-1	古墳・奈良・平安・中世	19990604
鹿田遺跡	集落跡	岡山市鹿田町二丁目5番1号	その他の建物（病院）	2,580㎡	19990816 ～ 20000131	慎重に発掘調査	岡山大学長 河野伊一郎	岡山市津島中一丁目1番1号	古墳・奈良・平安・中世	19990713
津島岡大遺跡	集落跡	岡山市津島中三丁目1番1号	学校（総合研究棟）	1,314㎡	20000201 ～ 20000804	慎重に発掘調査	岡山大学長 小坂二度見	岡山市津島中一丁目1番1号	古墳・奈良・平安・中世	19991227
津島遺跡	集落跡	岡山市学南町一丁目84-2、-11	学校研修施設	334.01㎡	19991210 ～ 20000131	慎重に発掘調査	学校法人加計学園 理事長 加計勉	岡山市理大町1-1	古墳・奈良・平安・中世	20000104

第57条の5第1項

(1件)

遺跡の名称	遺跡の種類	所在地	工事の目的	面積	工事期間	指導事項	氏名・機関	住所	遺跡の時代	受付年月日
東谷古墳 (仮称)	古墳	岡山市福谷字 東谷675-130	送電線鉄塔 新設工事			保存に 配慮	中国電力株式会社 岡山支店 牧征滋	岡山市内山 下1-11-1	古墳	20000105

第57条の3第1項

(37件)

遺跡の名称	遺跡の種類	所在地	工事の目的	面積	工事期間	指導事項	氏名・機関	住所	遺跡の時代	受付年月日
津島遺跡	集落跡	岡山市津島新野一丁目 1-33地先から津島中 一丁目2-1地先まで	水道 (配水管布設)		19990415 ～ 19990708	工事立会	岡山市水道事業管 理者 水道局長 遠藤嘉昭	岡山市鹿田 町二丁目1 番1号	弥生	19990401
鹿田遺跡	集落跡	岡山市鹿田町 二丁目5番1号	その他建物 (病院基幹整備)	300㎡	19990419 ～ 19990930	発掘調査	岡山大学長 小坂二度見	岡山市津島 中一丁目1 番1号	縄文・弥生・ 古墳・奈良・ 平安・中世	19990409
三野宮之段 遺跡	散布地	岡山市三野 一丁目2-1	水道(浄水場 特別高圧受電 設備)	293.3㎡	199907 中旬～ 20020331	発掘調査	岡山市水道事業管 理者 水道局長 遠藤嘉昭	岡山市鹿田 町二丁目1 番1号	平安・中世	19990416
津島遺跡	集落跡	岡山市学南町2 丁目5-7地先か ら7-12地先まで	水道 (配水管布設)	171.5㎡	19990510 ～ 19990630	工事立会	岡山市水道事業管 理者 水道局長 遠藤嘉昭	岡山市鹿田 町二丁目1 番1号	弥生	19990416
津島遺跡	散布地・ 集落跡	岡山市津寺346地先から 336-2地先まで 津寺460-2地先から104 地先まで	水道 (配水管布設)	1,187㎡	19990510 ～ 19990930	工事立会	岡山市水道事業管 理者 水道局長 遠藤嘉昭	岡山市鹿田 町二丁目1 番1号	弥生・古墳 ・中世	19990416
妹尾住田遺跡	散布地・貝塚	岡山市妹尾字 上寺1180番地	住宅(市営集 合住宅)	2,640.68 ㎡	19990515 ～ 20001115	発掘調査	岡山市長 萩原誠司	岡山市大供 一丁目1番 1号	中世	19990420
津島遺跡	散布地	岡山市学南町 二丁目	その他の開発 (電線共同溝 整備)	743.3㎡	19990520 ～ 20000331	発掘調査	岡山市長 萩原誠司	岡山市大供 一丁目1番 1号	弥生	19990422
岡山城 二ノ丸跡	城館跡	岡山市内山下一丁 目7-24地先～内山 下一丁目7-6地先	水道 (配水管布設)	31.493 ㎡	19990620 ～ 19990831	工事立会	岡山市水道事業管 理者 水道局長 遠藤嘉昭	岡山市鹿田 町二丁目1 番1号	近世	19990528
南方遺跡	集落跡	岡山市南方二丁目 8-13地先～南方二 丁目8-28地先	水道 (配水管布設)	68㎡	19990715 ～ 19990920	工事立会	岡山市水道事業管 理者 水道局長 遠藤嘉昭	岡山市鹿田 町二丁目1 番1号	弥生	19990609
津島遺跡	散布地	岡山市津島東四丁目 2445-8地先～津島福 居二丁目2275-2地先	その他 の開発 (下水道)	260㎡	199908 下旬～ 200012 下旬	工事立会	岡山市長 萩原誠司	岡山市大供 一丁目1番 1号	弥生・古墳・ 奈良・平安・ 中世	19990611
岡山城 二の丸跡	城館跡	岡山市丸の内 二丁目6番45号	その他の開発 (学校校舎解 体)	998㎡	19990801 ～ 199910331	工事立会	岡山市長 萩原誠司	岡山市大供 一丁目1番 1号	近世	19990615
川入・中撫川 遺跡	散布地・ 集落跡	岡山市中撫川 437-1ほか	道路(吉備環 状線新設)	5,735㎡	20000701 ～ 20020331	発掘調査	岡山市長 萩原誠司	岡山市大供 一丁目1番 1号	古墳・奈良・ 平安・中世	19990616
津島遺跡	集落跡・ 生産遺跡	岡山市いずみ町 地内 岡山県総 合グラウンド	その他の開発 (下水道)	34.6393 ㎡	199908 上旬～ 199912 上旬	工事立会	岡山市長 萩原誠司	岡山市大供 一丁目1番 1号	弥生・古墳・ 奈良・平安・ 中世	19990622
上伊福遺跡	散布地	岡山市伊福町二丁目 13-14地先～伊福町 三丁目19-4地先まで	水道 (配水管布 設)	100㎡	199907末 ～ 20000331	工事立会	岡山市水道事業管 理者 水道局長 遠藤嘉昭	岡山市鹿田 町二丁目1 番1号	弥生・古墳	19990702
足守陣屋関連 遺構	城館跡	岡山市足守752 地先から688地 先まで	水道 (配水管布設)	100㎡	199907末 ～ 199909 中旬	工事立会	岡山市水道事業管 理者 水道局長 遠藤嘉昭	岡山市鹿田 町二丁目1 番1号	近世	19990702
広瀬遺跡	散布地	岡山市広瀬町 6-7～広瀬町 8-11	水道 (配水管布設)	101.4㎡	199907 中旬～ 19990930	工事立会	岡山市水道事業管 理者 水道局長 遠藤嘉昭	岡山市鹿田 町二丁目1 番1号	古墳・奈良・ 平安・中世	19990708
津島遺跡	散布地	岡山市津島南一丁 目、津島新野 二丁目地内	その他の開発 (下水道管布 設)	315㎡	199908 初旬～ 199912末	工事立会	岡山市長 萩原誠司	岡山市大供 一丁目1番 1号	弥生・古墳・ 奈良・平安・ 中世	19990708
鹿田遺跡	集落跡	岡山市鹿田町二 丁目5番1号	その他建物 (病院)	2,580㎡	20000201	発掘調査	岡山大学長 河野伊一郎	岡山市津島 中一丁目 1番1号	縄文・弥生・ 古墳・奈良・ 平安・中世	19990714

遺跡の名称	遺跡の種類	所在地	工事の目的	面積	工事期間	指導事項	氏名・機関	住所	遺跡の時代	受付年月日
西祖遺跡	散布地	岡山市西祖2-3地先・浅川1317-1地先ほか	その他の開発(下水道管布設)	2,970㎡	19990821 ～ 20020331	工事立会	岡山市長 萩原誠司	岡山市大供一丁目1番1号	中世	19990715
鹿田遺跡	集落跡	岡山市鹿田町二丁目5番1号	その他建物(学校)	235㎡	19990802 ～ 19990831	工事立会	岡山大学長 河野伊一郎	岡山市津島中一丁目1番1号	縄文・弥生・古墳・奈良・平安・中世	19990727
備前国府推定地	散布地・官衙跡	岡山市中井260地先～中井253-1地先	水道(配水管布設)	55㎡	199910中旬～ 199912末	工事立会	岡山市水道事業管理者 水道局長 遠藤嘉昭	岡山市鹿田町二丁目1番1号	弥生・古墳・奈良・平安・中世	19990825
鹿田遺跡	集落跡	岡山市鹿田町二丁目5番1号	その他建物(駐車場)	300㎡	19991101 ～ 19991221	慎重工事	岡山大学長 河野伊一郎	岡山市津島中一丁目1番1号	縄文・弥生・古墳・奈良・平安・中世	19990826
西祖遺跡	散布地	岡山市浅川～西祖	水道(配水管布設)	299.2㎡	199910上旬～ 199912下旬	工事立会	岡山市水道事業管理者 水道局長 遠藤嘉昭	岡山市鹿田町二丁目1番1号	中世	19990922
津寺遺跡	散布地・集落跡	岡山市津寺488-4地先～加茂316-1地先まで	水道(配水管布設)	420㎡	19991101 ～ 20000531	工事立会	岡山市水道事業管理者 水道局長 遠藤嘉昭	岡山市鹿田町二丁目1番1号	弥生・古墳	19990929
備前国府関連遺	官衙跡	岡山市国府市場36-3地先～24地先まで	水道(配水管布設)	60㎡	199910下旬～ 未定	工事立会	岡山市水道事業管理者 水道局長 遠藤嘉昭	岡山市鹿田町二丁目1番1号	古墳・奈良・平安・中世	19991001
唐人塚古墳	古墳	岡山市賞田地内	水道(配水管布設)	45.17㎡	199910中旬～ 199912末	工事立会	岡山市水道事業管理者 水道局長 遠藤嘉昭	岡山市鹿田町二丁目1番1号	古墳	19991012
足守池ノ内遺	散布地	岡山市足守1690番地先～足守2027番地先	その他の開発(下水道管布設)	390.4㎡	199910下旬～ 200003下旬	工事立会	岡山市長 萩原誠司	岡山市大供一丁目1番1号	弥生・古墳	19991014
津島遺跡	集落跡	岡山市伊島町二丁目780～884	その他の開発(下水道管布設)	92㎡	19991200 ～ 20000300	工事立会	岡山市長 萩原誠司	岡山市大供一丁目1番1号	弥生	19991118
津島遺跡	集落跡	岡山市津島福居一丁目1963外	その他の開発(下水道管布設)	127㎡	20002下旬～ 20007下旬	工事立会	岡山市長 萩原誠司	岡山市大供一丁目1番1号	弥生	19991122
津島遺跡	集落跡	岡山市津島南一丁目1350外	その他の開発(下水道管布設)	299㎡	20002中頃～ 200012下旬	工事立会	岡山市長 萩原誠司	岡山市大供一丁目1番1号	弥生・古墳	19991122
川入遺跡	集落跡	岡山市納所217、中撫川394	水道(配水管布設)	788.4㎡	200001下旬～ 200006末	工事立会	岡山市水道事業管理者 水道局長 遠藤嘉昭	岡山市鹿田町二丁目1番1号	弥生・古墳	19991224
津島岡大遺跡	集落跡	岡山市津島中三丁目1番1号	学校(総合研究棟新営)	1,314㎡	20000807 ～ 20010831	発掘調査	岡山大学長 小坂二度見	岡山市津島中1丁目1番1号	縄文・弥生・古墳・奈良・平安・中世	19991227
津島遺跡	集落跡	岡山市学南町二丁目1-5	その他の開発(下水道管布設)	439㎡	200003上旬～ 200012下旬	工事立会	岡山市長 萩原誠司	岡山市大供一丁目1番1号	弥生・古墳	20000106
妹尾住田遺跡	集落跡・貝塚	岡山市妹尾字上寺1180番地	住宅(エレベータービット)	20.7㎡	20000216 ～ 20000331	発掘調査	岡山市教育委員会 教育長 戸村彰孝	岡山市大供一丁目1番1号	平安・中世	20000229
津島遺跡	散布地・生産遺跡	岡山市学南町一丁目2-25地先～7-5番地先	その他の開発(下水道管布設)	157㎡	200005上旬～ 200012下旬	工事立会	岡山市長 萩原誠司	岡山市大供一丁目1番1号	弥生・古墳	20000313
鹿田遺跡	集落跡	岡山市鹿田町二丁目5番1号	その他建物(病院)	85㎡	20000221 ～ 20000324		岡山大学長 河野伊一郎	岡山市津島中1丁目1番1号	縄文・弥生・古墳・奈良・平安・中世	20000119
北方長田遺	集落跡	岡山市三野一丁目1124番1	その他建物(水質試験所)・水道	180㎡	20000308 ～ 20000531	工事立会	岡山市水道事業管理者 水道局長 遠藤嘉昭	岡山市鹿田町二丁目1番1号	弥生・中世	20000302

第57条の2第1項

(42件)

遺跡の名称	遺跡の種類	所在地	工事の目的	面積	工事期間	指導事項	氏名・機関	住所	遺跡の時代	受付年月日
岡山城二ノ丸遺構	城館跡	岡山市内山下二丁目11-112, 11-113	その他建物(共同住宅)	238.54㎡		確認調査	(株)ベンチャー代表取締役 小倉俊彦	岡山市赤田94-1	近世	19990412
津島遺跡	集落跡・生産遺跡	岡山市津島新野1丁目1175番の一部	その他建物(共同住宅)	343.67㎡	19990515 ～ 20000228	工事立会	有限会社キリマウント代表取締役 桐山義彦	岡山市津島新野1丁目10番2号	弥生・古墳	19990419
南方遺跡	集落跡・生産遺跡	岡山市国体町5地先	電気(地中線工事)	280㎡	19990601 ～ 20000331	工事立会	中国電力株式会社 岡山営業所 所長 綱島宣武	岡山市青江二丁目6番51号	弥生	19990506
雄町遺跡	集落跡	岡山市雄町604-4	その他建物(特定郵便局新築)	162.5㎡	19990620 ～ 19991210	工事立会	小方利正	岡山市雄町604-4	弥生・古墳	19990601
津島遺跡	散布地・生産遺跡	岡山市学南町2丁目199-3	住宅	60.18㎡	19990620 ～ 19991031	工事立会	横田幸生	岡山市学南町2-5-49	弥生・古墳	19990602
津島遺跡	集落跡・生産遺跡	岡山市津島東四丁目2525番地	学校(研修・体育施設建設)	2,569.94㎡	未定	発掘調査	学校法人加計学園 理事長 加計勉	岡山市理大町1-1	縄文・弥生・近世	19990604
津島江道遺跡	集落跡・生産遺跡	岡山市学南町三丁目13番21号	住宅	220.56㎡	19990720 ～ 19990930	工事立会	松本福夫	岡山市津島中三丁目5-5	縄文・弥生・古墳・奈良・平安・中世	19990624
幡多廃寺塔跡	社寺跡	岡山市赤田字塔ノ東115番5	住宅	260.88㎡	19990720 ～ 19990805	工事立会	長尾卓志	岡山市赤田130-1	弥生・古墳・奈良・平安・中世	19990706
原尾島・沢田遺跡	散布地・生産遺跡	岡山市藤原西町一丁目182-1外5筆	その他建物(集合住宅)	3,077.13㎡	19990726 ～ 20000320	発掘調査	株式会社中山工務店代表取締役 藤原淑包	岡山市浜二丁目1番3号	弥生・古墳	19990716
絵図遺跡	散布地・集落跡	岡山市南方五丁目1386	学校(実習棟)	223.60㎡	19990801 ～ 19990831	工事立会	学校法人吉備学園 理事長 井尻裕	岡山市津島京町二丁目10番1号	弥生	19990719
兼基遺跡	散布地・生産遺跡	岡山市兼基字黒中45番の一部、兼基字黒中北36番の2の一部	工場・その他建物(販売店)	1,170㎡	19990901 ～ 19991215	工事立会	岡山ダイハツ販売(株)代表取締役社長 原祥治	岡山市野田二丁目1番1号	弥生	19990721
吉井廃寺跡	社寺跡	岡山市吉井229-7外26筆、一日市字開地333	その他建物(病院)	782.83㎡	19990802 ～ 19991031	工事立会	医療法人仁誠会 吉井川病院理事長 日野八洲行	岡山市吉井208	弥生・奈良・平安	19990722
岡山城二ノ丸遺構	城館跡	岡山市表町一丁目7-109他	その他建物(集合住宅)	575.75㎡	19990815 ～ 20000315	工事立会	岡山昭和住宅(株)代表取締役 湖中明憲	岡山市泉田21-1	近世	19990723
絵図遺跡	散布地・生産遺跡	岡山市清心町356番7	住宅	722.37㎡	19990930 ～ 20000730	慎重工事	松田幸恵	岡山市東川原250番地の133	弥生・古墳	19990730
津島遺跡	集落跡・生産遺跡	岡山市学南町二丁目167-1の一部	その他建物(共同住宅南棟)	290.59㎡	19990828 ～ 200002未日	工事立会	北村博・北村貞子	岡山市学南町二丁目2-31	弥生・古墳	19990730
津島遺跡	集落跡・生産遺跡	岡山市学南町二丁目167-1の一部	その他建物(共同住宅北棟)	290.59㎡	19990828 ～ 200002未日	工事立会	北村博・北村貞子	岡山市学南町二丁目2-31	弥生・古墳	19990730
上伊福遺跡	散布地・生産遺跡	岡山市伊福町二丁目160-193	その他建物(共同住宅)	132.23㎡	19990831 ～ 20000320	工事立会	大上末野	岡山市首部296	弥生・古墳	19990802
幡多廃寺跡	社寺跡	岡山市赤田字塔ノ東115番4	住宅	140㎡	19991020 ～ 20000331	工事立会	永守安芳	岡山市西大寺中野671-1	奈良・平安	19990803
広瀬遺跡	散布地	岡山市広瀬町756	その他建物(共同住宅)	679.66㎡	199908吉日 ～ 199912吉日	工事立会	北村元良	千葉県稲毛区荻台町664-101	弥生	19990805
清水遺跡	散布地	岡山市清水字六反田498-2, 字八反田499-1の一部、499-2の一部	その他建物(共同住宅)	784.77㎡	19990913 ～ 20000229	工事立会	松本昭平	岡山市赤田271	弥生・古墳	19990806
清水遺跡	散布地	岡山市清水499-2	その他建物(共同住宅)	392.76㎡	19990913 ～ 20000229	工事立会	松本愛子	岡山市赤田227	弥生・古墳	19990806

遺跡の名称	遺跡の種類	所在地	工事の目的	面積	工事期間	指導事項	氏名・機関	住所	遺跡の時代	受付年月日
国府関連遺跡	官衙跡	岡山市国府市場43番地	工場（旧浄化槽）の撤去と新設	28㎡	19990902～未定	発掘調査	株式会社岡山ヤクルト工場代表取締役 中西安生	岡山市国府市場43番地	奈良・平安・中世	19990810
北方藪ノ内遺	生産遺跡	岡山市中井町二丁目440-19、1580-6、1580-7	その他建物（マンション）、その他の開発	2,237.43㎡	19991101～20001130	工事立会	株式会社イワサキ建設代表取締役 岩崎文雄	岡山市横井上1696番地の2	弥生	19990910
津島遺跡	生産遺跡	岡山市学南町一丁目70-2	その他建物（共同住宅）	349.87㎡	199910中旬～20000229	工事立会	中下秀正	岡山市藤田564-227	弥生・古墳	19990928
津島遺跡	生産遺跡	岡山市学南町一丁目70-29	その他建物（共同住宅）	313㎡	199910上旬～20000229	工事立会	有限会社ティエフ代表取締役 藤澤威	岡山市平田143-105	弥生・古墳	19990928
米田遺跡	生産遺跡	岡山市神下字畔無429-2、429-3、435-1	その他建物（事務所棟等）	2323.67㎡	19991020～20000310	工事立会	㈱永燃代表取締役 永野資幸	岡山市下石井2-8-11	奈良・平安	19990929
赤田東遺跡	散布地	岡山市赤田字能淵245-1	その他建物（共同住宅）	590.84㎡	199910下旬～20000325	工事立会	小橋富治	岡山市赤田245-2	弥生・古墳・奈良・平安・中世	19991001
津島遺跡	生産遺跡	岡山市学南町1-84-2、1-84-11	その他建物（寄宿舎）	179.63㎡	199910～20000229	発掘調査	学校法人加計学園理事長 加計勉	岡山市理大町1-1	弥生	19991006
上伊福九ノ坪遺	集落跡	岡山市伊福町二丁目305-1外12筆	学校（動物実験棟）	56.71㎡	19991218～20000331	工事立会	学校法人ノートルダム清心学園理事長 渡辺和子	岡山市伊福町二丁目16-9	縄文・弥生・古墳・奈良・平安・中世	19991018
津島遺跡	集落跡・生産遺跡	岡山市津島福居一丁目1970-1	その他建物（共同住宅）	531.29㎡	19991125～20000310	工事立会	難波重美・難波静江	岡山市津島福居一丁目8-3	縄文・弥生・古墳・奈良・平安・中世	19991026
三野宮之段遺	散布地	岡山市三野二丁目225番2地先～一丁目74番地先	電気（送電用管路及びマンホールの埋設）	101.5㎡	20000110～20000531	工事立会	中国電力株式会社岡山支店 取締役支店長 牧征滋	岡山市内山下一丁目11番1号	中世	19991105
田益遺跡	集落跡	岡山市田益地内	電気（電力ケーブル管理設工事）	93㎡	20000117～20000630	工事立会	中国電力株式会社岡山支店 取締役支店長 牧征滋	岡山市内山下一丁目11番1号	弥生	19991105
津島遺跡	生産遺跡	岡山市学南町一丁目237-3	その他建物（共同住宅）	520.1㎡	19991201～20000331	工事立会	野崎学	岡山市築港新町二丁目30番4号	弥生・古墳	19991109
岡山城関連遺	城館跡	岡山市内山下二丁目5-108	その他建物（共同住宅）	88,05㎡	19991124～20000320	工事立会	石原照久	岡山市東畔667-76	近世	19991117
雄町遺跡	集落跡	岡山市雄町376-10	住宅	183.89㎡	20000110～20000320	工事立会	妹尾浩三・朝子	岡山市北長瀬本町21-22ワレールメゾンA-102号	弥生	19991122
鼓山城関連遺	城館跡	岡山市立田字隠里949-56、949-57	電気（鉄塔設置）	324㎡	20000215～20010630	工事立会	中国電力株式会社岡山支店 取締役支店長 牧征滋	岡山市内山下一丁目11番1号	中世	19991209
国府関連遺跡	官衙跡	岡山市国府市場958-3、985-3	その他建物（特別養護老人ホーム）	3,328.77㎡	20000120～20000830	発掘調査（浄化槽・エレベーターピット）	社会福祉法人 幸輝園 理事長 白金史郎	岡山市乙多見148番地	古墳・奈良・平安・中世	19991227
津島遺跡	集落跡・生産遺跡	岡山市学南町三丁目748番-2、同-5	住宅	429,01㎡	20000125～20000506	工事立会	斎藤学、斎藤孝志	岡山市学南町三丁目748番2、748番5	弥生・古墳	20000121
津島遺跡	生産遺跡	岡山市学南町一丁目124-3他	その他建物（共同住宅）	714.56㎡	20000510～20010110	工事立会	寺見秋夫、山川恵美子	岡山市学南町二丁目1-41、同2-33	弥生・古墳	20000124
その他の遺跡	水田跡	岡山市高屋42-5他12筆	その他建物（浄化槽）	669.4㎡	20000320～20000325	発掘調査	岡山電気軌道株式会社 代表取締役 松田堯	岡山市徳吉町二丁目8番22号	弥生	20000301
岡山城跡二の丸遺構	城館跡	岡山市内山下1-8-118	住宅	96.37㎡	20000501～20001031	工事立会	吉川光弘	岡山市西古松二丁目11-14	近世	20000301
高松沼田遺跡	集落跡	岡山市高松原古才前川392、川洋133-2	その他の開発（庭園整備）	1,253.90㎡	20003～2000430	工事立会	岡山県立高松農業高等学校創立100周年記念事業実行委員会 委員長 本行節夫	岡山市高松原古才336-2	弥生・古墳・奈良・平安・中世	20000328

第80条第1項

(13件)

遺跡の名称	遺跡の種類	所在地	目的	面積	工事期間	指導事項	氏名・機関	住所	遺跡の時代	受付年月日
岡山城跡	史跡	岡山市丸之内二丁目3番ノ901ほか	99フルーツマーケット		19990628 ～ 19990813	権限委任の規定により許可	岡山市長 萩原誠司	岡山市大供一丁目1番1号	近世	19990616
岡山城跡	史跡	岡山市丸之内二丁目3番ノ901ほか	岡山大田楽		19990919 ～ 19990928	権限委任の規定により許可	岡山市長 萩原誠司	岡山市大供一丁目1番1号	近世	19990901
岡山城跡	史跡	岡山市丸之内二丁目3番ノ901ほか	鳥城楽市フリーマーケット		19991002 ～ 19991003	権限委任の規定により許可	岡山市長 萩原誠司	岡山市大供一丁目1番1号	近世	19990910
岡山城跡	史跡	岡山市丸之内二丁目3番ノ901ほか	菊花大会		19991011 ～ 19991119	権限委任の規定により許可	岡山市長 安宅敬祐	岡山市大供一丁目1番1号	近世	19990913
アユモドキ (地域を定めず)	天然記念物	岡山市祇園地内	祇園用水路 改修工事		許可の日 ～ 20000331	進達許可	岡山県吉備高原 開発建設事務所 所長 矢吹輝明	岡山市津島 西坂二丁目 3-16		19990929
アユモドキ (地域を定めず)	天然記念物	岡山市賞田302番地先	魚巢ブロック 積護岸工		許可の日 ～ 20000331	権限委任の規定により許可	岡山市長 萩原誠司	岡山市大供一丁目1番1号		19991012
岡山城跡	史跡	岡山市丸之内二丁目3番ノ901ほか	チューリップ の植え付け・ 管理		19991025 ～ 花後すみ やかに	権限委任の規定により許可	岡山市長 萩原誠司	岡山市大供一丁目1番1号	近世	19991015
オオサン ショウウオ	特別天然記念物	地域を定めず	市街地用水で捕獲 され、衰弱が激し く保護・観察が必要		19991009 捕獲	権限委任の規定により許可	岡山大学 教育学部 上島孝久	岡山市津島 中三丁目 1番1号		19991019
岡山城跡	史跡	岡山市丸之内二丁目3番ノ901ほか	保存修理事業 の一環として の発掘調査	800㎡	許可の日 あった日 ～ 20000331	権限委任の規定により許可	岡山市長 萩原誠司	岡山市大供一丁目1番1号	近世	19991020
岡山城跡	史跡	岡山市丸之内二丁目3番ノ901ほか	チューリップ の植え付け・ 管理	625㎡	19991025 ～ 20000630	権限委任の規定により許可	岡山市長 萩原誠司	岡山市大供一丁目1番1号	近世	19991125
岡山城跡	史跡	岡山市丸の内二丁目3	内堀浄化対策に伴 う地質調査を遂行 するための措置		許可の日 あった日 ～ 20000331	権限委任の規定により許可	岡山市長 萩原誠司	岡山市大供一丁目1番1号	近世	19991215
岡山城跡	史跡	岡山市丸の内二丁目3	岡山城上之段 「松の木」2 本移植		19991220 ～ 19991224	権限委任の規定により許可	岡山市長 萩原誠司	岡山市大供一丁目1番1号	近世	19991216
岡山城跡	史跡	岡山市丸之内二丁目3番ノ901ほか	祝おかやま後 楽園300年祭 開催		19991229 ～ 20000106	権限委任の規定により許可	西暦2000年・後楽 園楽庭300年カウ ンtdown実行委員 会委員長森高良樹	岡山市柳町 2-1-23	近世	19991220

Ⅲ．普及・啓発事業と刊行物

岡山市教育委員会は、普及・啓発事業の一環として、文化財保護強調週間にあわせた埋蔵文化財速報展を開催している。また発掘調査の進捗状況に応じて現地説明会を開催しており、今年度は2ヵ所で行うことができた。

報告書・普及書の刊行は、普及・啓発事業の大切な仕事の一つであり、文化的な主要な仕事の一つでもあるが、あいかわらず立ち遅れているのが実状である。

◎埋蔵文化財速報展'99

1999年11月1日～11月5日 岡山市役所1階市民ホール

過去1年間に調査を実施した遺跡と檜皮葺きに関する資料を紹介した。遺跡は岡山城本丸下の段・新道遺跡・ハガ遺跡・備中高松城水攻めの築堤跡で、最近再発見された千足古墳の出土品も展示した。また、これまで発掘された出土品のうち、とくにアクセサリーをピックアップして時代順に並べて展示をした。



妹尾住田遺跡現地説明会

◎発掘調査現地説明会

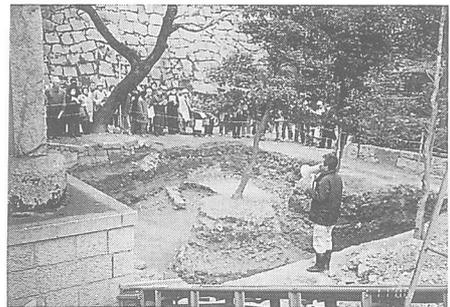
妹尾住田（市営住宅）遺跡 1999年10月2日（約400名）

岡山城本丸下の段 2000年3月11日（約200名）

◎刊行物

『造山2号墳』

1997年に造山古墳の陪塚付近での道路工事に緊急対応した際の報告。長大な埴輪列を検出しており、周溝の一部も確認された。最近再発見された千足古墳出土品も合わせて報告されている。



岡山城本丸下の段現地説明会

『高松城（市道）遺跡』

1997年に市道拡幅に伴い、発掘調査された際の報告。高松城の堀切と、下層からは弥生時代中期前半から後期の遺構がまとまって検出された。

『大供中道遺跡』

1993年に立体駐車場建設に伴い発掘調査された際の報告。弥生時代の水田が検出された。

『旭東園舎遺跡』

旭東園舎修理の概況と、建築様式としての旭東園舎の位置づけが紹介されている。

『岡山市埋蔵文化財調査の概要 1999年（平成11）年度』

IV. 資料紹介と研究ノート

天瀬遺跡の発掘調査

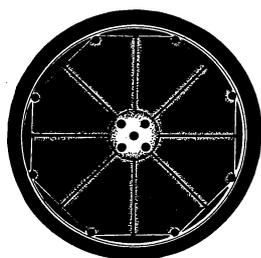
林信夫蒐集の考古資料Ⅰ 瓦・陶磁器
—備中高松城の遺物を中心に—

唐人塚古墳石室の測量調査

岡山市吉野口遺跡出土管玉の科学調査

西村貝塚出土動物遺体について

妹尾住田遺跡の動物遺体について



天瀬（共同溝）遺跡の立会調査

安川 満

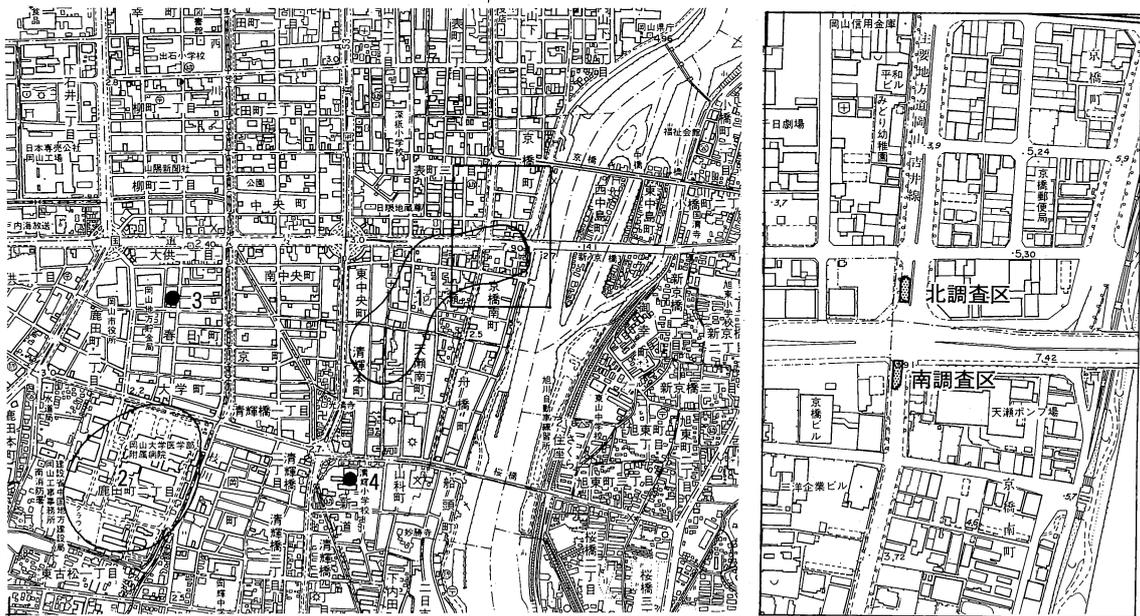
天瀬遺跡は岡山市街地の南部、現旭川の西岸に位置する弥生時代後期を中心とする集落遺跡である。西に隣接する鹿田遺跡とともに、旭川流域の弥生時代遺跡分布の南限をなしている。1977年の岡山市市民病院の建設に伴う発掘調査では、竜紋の描かれた器台片をはじめ、多くの土器が出土しており、その立地も含め港的な性格を持った集落ではないかといわれている。

ここでは平成6年2月に実施した共同溝建設に伴う立会調査の成果を報告する。共同溝は国道2号線とこれと交差する市道に埋没されたもので、国道部分については岡山県古代吉備文化財センターが発掘調査を実施している。

調査の概要

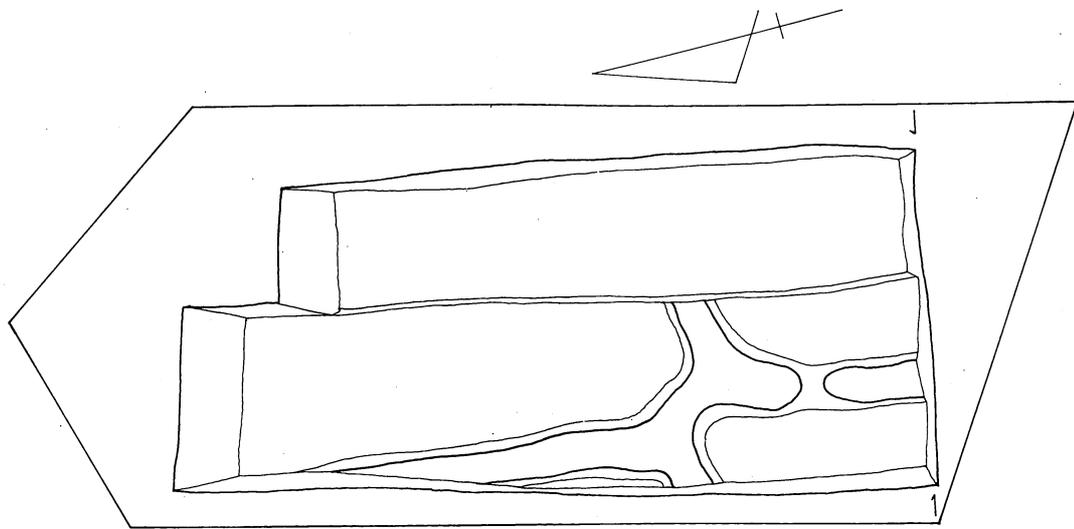
調査は新橋西詰交差点をはさんで南北の2地点で実施した。交通規制等の関係で夜間に行ったため、調査の条件としては決して満足なものではなかったが、北調査区では洪水砂に埋没した水田、南調査区では住居跡をはじめとする遺構群を検出した。

北調査区 南北に長い10 m×4.5 mほどの範囲を調査した。海拔0.6 mほどに微高地基盤に対応すると考えられる黄灰色微砂シルト層があり、低湿地性の堆積物と見られる黒褐色粘土シルト層をはさんで、厚さ20 cm程度の水田耕土層が存在する。水田面は海拔1.1～1.2 m程度であり、厚さ10～20 cm程度の洪水砂に被覆されている。水田面では畦畔が交差する部分、畦畔が水口状にとぎれる部分を検出した。水田1区画の広さなどはわからないが、ほぼ正方位に区画されている。畦畔の交差部分は百間川遺跡群などで検出されている古墳時代初頭水田と同様、それぞれの区画が若干

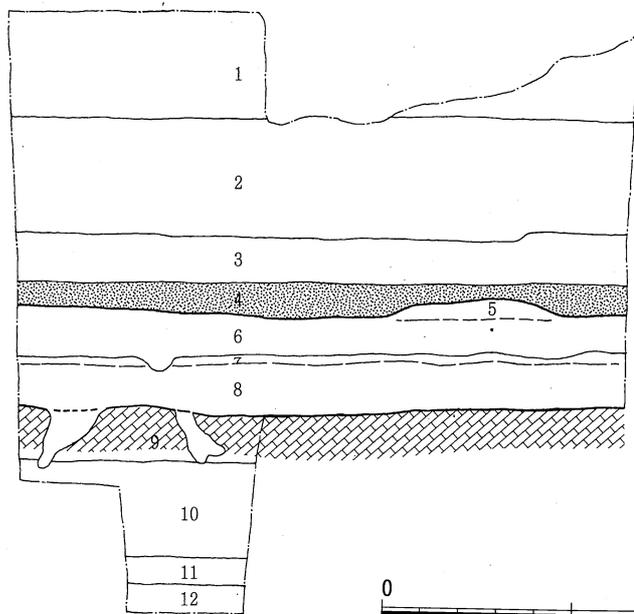


第1図 調査地点の位置と周辺の遺跡

- 1 天瀬遺跡 2 鹿田遺跡 3 大供中道遺跡 4 新道遺跡



第2図 北調査区水田遺構 (1/80)



- 1 (暗) 青灰色微砂シルト
- 2 (明) 青灰色シルト
- 3 淡(青) 灰褐色シルト粘土
- 4 淡灰褐色細砂微砂 (洪水砂)
- 5 淡灰色シルト微砂 (畦畔盛土)
- 6 淡(黄) 灰色シルト微砂 (水田耕土)
- 7 淡灰褐色粘土シルト
- 8 黒褐色粘土シルト
- 9 黄灰色微砂シルト (微高地基盤)
- 10 明青灰色シルト
- 11 淡灰色微砂
- 12 淡灰褐色細砂 (植物遺体含む)

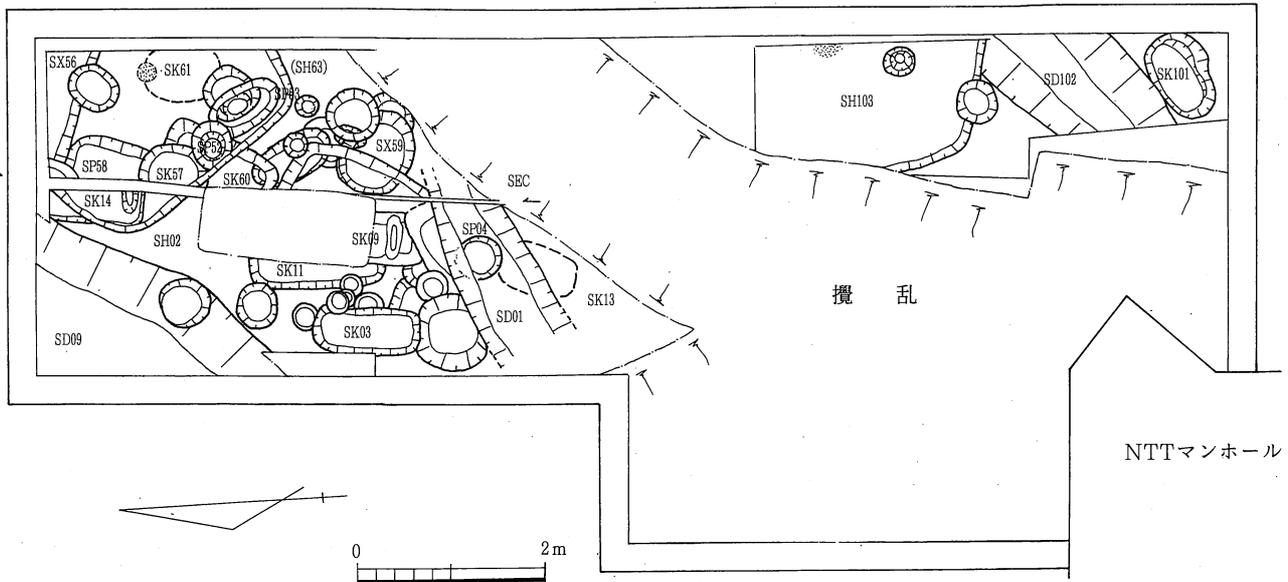
第3図 北調査区南セクション (1/40)

ずれながら画されている。弥生時代～古墳時代初頭の水田遺構とみられる。

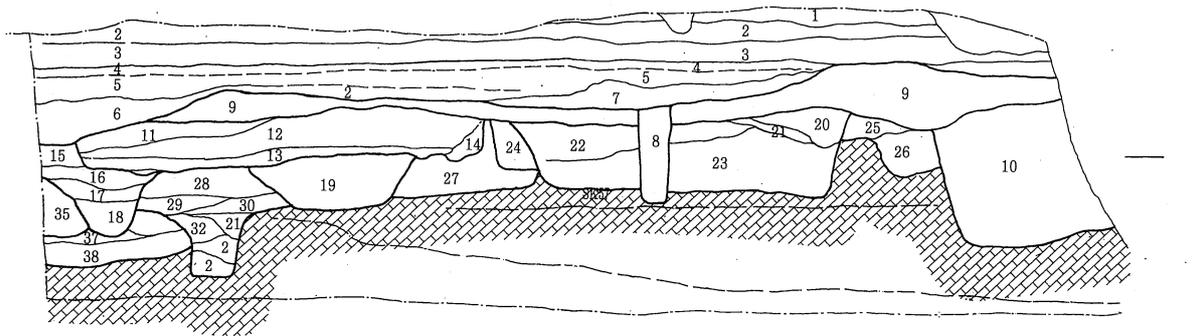
南調査区 南北に長い13m×6mほどの範囲を調査した。調査区のほぼ中央から南西部分をNTTのマンホールなどのために破壊されている。微高地基盤上面は海拔2mほどであり、多数の遺構が密集している。遺構には弥生時代中期末のものから中世のものまでが存在する。なお、遺構の検出面は微高地基盤上面である。

SD01は調査範囲のほぼ中央、東西方向の溝状遺構で、幅90cmほどを測る。遺構群の中ではもっとも上層から掘り込まれており、出土遺物はごく少ないが、中世の溝状遺構と考えられる。

SH02は浅い掘り込み状の遺構で、SH63も一連の遺構と考えられる。平面形は特に北寄りではっきりしない部分が多く、図示したよりも一回り大きくなりそうである。円形～隅丸方形になると思われ、住居跡と考えられる。調査区北東よりにSK61に重複して検出した焼土もこの住居跡に伴うものである可能性が高い。柱穴なども限定しがたいが、SP54などが候補としてあげられる。出土遺物には1、2、52～56がある。出土土器から弥生時代後期末のものと考えられる。



第4図 南調査区検出遺構 (1/80)



- | | | | | | |
|----|--------|------------------|----|----------|---------|
| 1 | 近世水田溝 | 灰黄色砂質土 | 20 | SK 5 5 | 灰黄褐色粗砂 |
| 2 | " | 明淡灰褐色シルト | 21 | " | 灰色細砂 |
| 3 | " | 明黄白色シルト粘土 | 22 | " | 暗灰黄色細砂 |
| 4 | (鋤床層) | 明黄色砂質シルト | 23 | " | 灰黄橙色細砂 |
| 5 | " | 淡灰褐色砂質シルト | 24 | SK 6 2 ? | 暗灰褐色細砂 |
| 6 | " | 明黄灰色微砂 | 25 | SK 0 6 ? | 灰黄色粗砂 |
| 7 | 中世包含層? | 暗灰褐色微砂 (土器片多い) | 26 | " | 淡黄褐色細砂 |
| 8 | 杭痕跡 | 灰黄色細砂 | 27 | SK 6 0 ? | 淡黄灰色細砂 |
| 9 | 中世包含層? | 淡灰褐色微砂細砂 (土器片多い) | 28 | " | 淡黄灰色細砂 |
| 10 | SD 0 1 | にぶい黄褐色粘質細砂 | 29 | SK 1 4 ? | 黄褐色細砂粗砂 |
| 11 | SH 0 2 | 暗黄褐色細砂微砂 | 30 | " | 淡黄灰色細砂 |
| 12 | " | 暗褐色細砂 | 31 | " | 明黄色細砂 |
| 13 | " | 暗褐色細砂 (木炭層含む) | 32 | " | 黄灰色細砂微砂 |
| 14 | " | 淡黄褐色細砂 | 33 | " | 暗黄褐色細砂 |
| 15 | SP 5 8 | 暗褐色砂質シルト | 34 | " | 明黄色細砂微砂 |
| 16 | " | 黄褐色細砂粗砂 | 35 | 遺構埋土 | 暗褐色細砂 |
| 17 | " | 淡灰褐色細砂粗砂 | 36 | SK 1 4 ? | 暗灰褐色細砂 |
| 18 | " | 暗黄褐色細砂粗砂 | 37 | " | 明黄色細砂 |
| 19 | SK 5 7 | 淡黄灰色細砂 | 38 | " | 黄灰褐色細砂 |

第5図 南調査区 (中央区) セクション (1/40)

住居跡と見られる遺構にはほかに、調査区の南東部分で検出したSH103がある。調査区外に続くことと攪乱のために一部を検出したのみだが、円形～隅丸方形の住居跡になるものと思われる。調査区の東端にかかる形で焼土が検出されており、この住居に伴うものと見られる。出土遺跡には64～68があり、やはり弥生時代後期末に位置づけられる。

この住居跡に切られる形で、SK03、SK07、SK11、SK13、SK14、SK60などの遺構群が存在する。いずれも長方形から長楕円形、長軸をほぼ南北方向にとる土坑で、土墳墓と考えられる。特に、SK07、SK14には木棺小口板の痕跡と見られる掘り込みが認められる。出土遺物からおよそ弥生時代後期前半に位置づけられる。

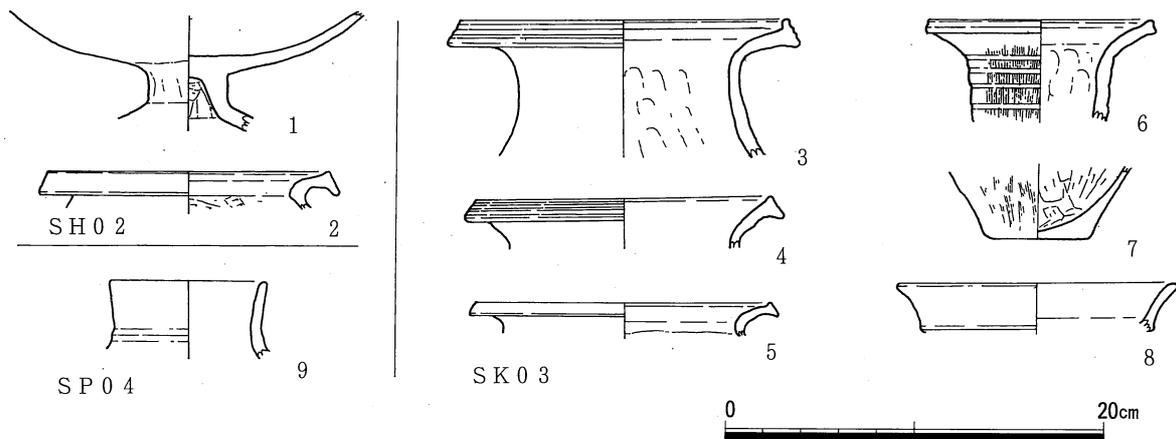
また、調査区の北西端、南東端では溝状遺構SD09、SD102を検出した。

SD09は北東から南西方向の溝状遺構で、幅1.5m以上、検出面からの深さ90cm以上を測る。出土遺物には10～26などがある。遺構の切り合いを見落としているためか、出土土器にはかなりの時期幅があるが、弥生時代後期中頃のものと考えられる。

SD102はやはり北東から南西方向の溝状遺構で、幅約1.2m、検出面からの深さ約30cmを測る。出土遺物には59～63があるが、小破片が多く量も多くない。やはり弥生時代後期中頃に位置づけられるであろうか。

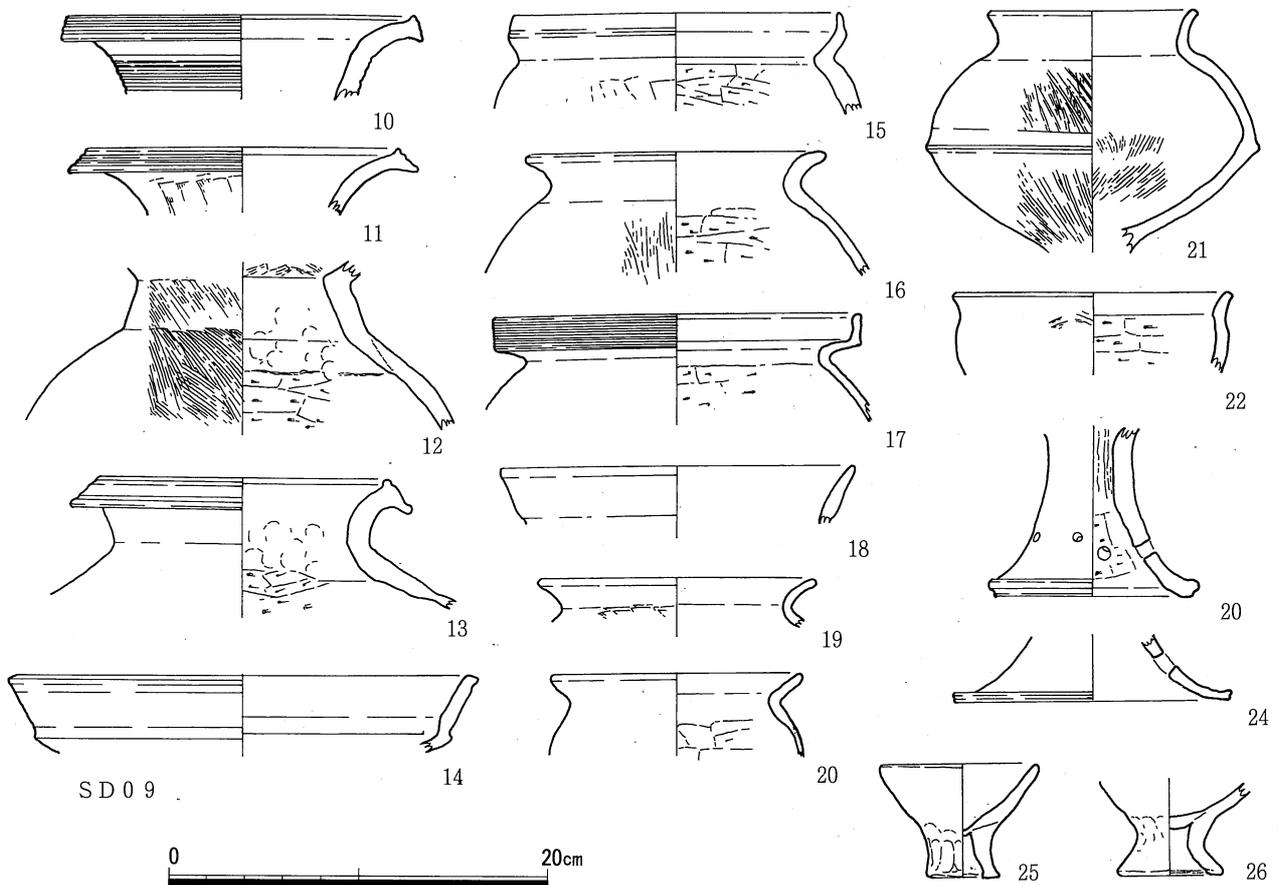
また、SX56は調査範囲の北東端で検出した遺構で、一部がかかるのみであることもあり規模や性格は不明である。SH02(SH63)に切られており、出土遺物から弥生時代中期末にさかのぼる可能性がある。

なお出土遺物は第6図～第10図に遺構毎に図示した。



番号	層位・遺構	器種	部位	法量 (cm)	調整等の特徴	胎土	色調	備考
1	SH02	高坏	坏部～脚部		坏部内面から外面はヘラミガキか?。脚部内面横方向へのヘラケズリ。	精良な胎土。2mm以下の長石粒をまれに含む。	外面: 5YR7/6(橙) 内面: 2.5YR7/6(橙)	坏部1/3周程度、脚柱部は全周残存。
2	SH02	甕	口縁部	口径 15.0	内外面ともヨコナデ。胴部内面は横方向のヘラケズリ。	1mm以下の長石粒を多く含む。	外面: 7.5YR7/4(にぶい橙) 内面: 7.5YR7/4(にぶい橙)	1/8周程度の破片
3	SK03	壺	口縁部～頸部	口径 17.2	外面から口縁部内面にヨコナデ。頸部内面縦方向の強いナデ。	1～3mm大の石英・長石粒を多量に含む。	外面: 5YR7/6(橙) 内面: 5YR7/6(橙)	2/5周程度の破片
4	SK03	壺	口縁部	口径 15.6	内外面ともヨコナデ。	1mm以下の砂粒を多く含む。	外面: 10YR5/2(灰黄橙) 内面: 10YR5/2(灰黄橙)	1/6周程度の破片
5	SK03	甕	口縁部	口径 15.6	内外面ともヨコナデ。	1mm以下の砂粒を多く含む。	外面: 7.5YR7/2(明褐灰) 内面: 7.5YR7/2(明褐灰)	1/4周程度の破片
6	SK03	壺	口縁部～頸部	口径 11.9	外面: 口縁部ヨコナデ、頸部は縦方向のハケメ。 内面: 口縁部ヨコナデ、頸部は強い縦方向のナデ。	2mm以下の石英・長石粒を多量に含む。	外面: 7.5YR8/4(浅黄橙) 内面: 7.5YR8/4(浅黄橙)	1/6周程度の破片
7	SK03	甕	底部	底径 5.5	外面: 縦方向のハケメ? 内面: ヘラケズリ	3mm以下の砂粒を多く含む。	外面: 7.5YR8/4(浅黄橙) 内面: ~10YR4/1(褐灰) 2.5Y3/1(黒褐)	5/6周程度の破片
8	SK03	高坏	坏部	口径 14.8	内外面ともヘラミガキ?	精良な胎土。0.5mm以下の砂粒を含む。	外面: 2.5YR6/8(橙) 内面: 2.5YR6/6(橙)	1/6周程度の破片
9	SP04	直口壺	口縁部	口径 8.2	内外面ともヨコナデ。	精良な胎土。0.5mm以下の砂粒を含む。	外面: 2.5YR6/8(橙) 内面: 2.5YR6/8(橙)	1/4周程度の破片

第6図 出土遺物(1) (1/4)



番号	層位・遺構	器種	部位	法量 (cm)	調整等の特徴	胎土	色調	備考
10	SD09	壺	口縁部	口径 18.3	外面から口縁内面はヨコナデ。頸部内面に強いナデ、下部にヘラケズリ。	3mm以下の砂粒を多く含む。	外面: 5YR5/6(明赤橙) 内面: 5YR4/6(赤橙)	1/8周程度の破片
11	SD09	壺	口縁部	口径 16.4	外面: 口縁部ヨコナデ、頸部は縦方向のハケメ?。 内面: ヨコナデ	2mm以下の砂粒を多く含む。	外面: 7.5YR7/3(にぶい橙) 内面: 7.5YR7/3(にぶい橙)	1/6周程度の破片
12	SD09	壺	頸部 ~胴部上半		外面: 縦~斜め方向のハケメ。 内面: 口縁受部内面は横方向のハケメ、頸部強いナデ、および指頭圧痕、胴部横方向のヘラケズリ。	3mm以下の砂粒を多く含む。	外面: 7.5YR7/4(にぶい橙) 内面: 7.5YR7/4(にぶい橙)	1/4周程度の破片
13	SD09	壺	口縁部 ~胴部上半	口径 15.2	外面: 口縁部ヨコナデ、頸部以下風化のため不明。 内面: 口縁部ヨコナデ、頸部強いナデ。胴部横方向のヘラケズリ。	2mm以下の長石粒多く含む。	外面: 5YR6/6(橙) 内面: 5YR6/6(橙)	口縁部完存
14	SD09	壺	口縁部		内外面ともヨコナデ	2mm以下の長石粒多い。	外面: 5YR7/6(橙) 内面: 5YR7/6(橙)	小破片
15	SD09	甗	口縁部 ~胴部上半	口径 17.2	外面: 口縁部付近ヨコナデ、胴部縦方向のハケメ。 内面: 口縁部付近ヨコナデ、胴部横方向のヘラケズリ。	1mm以下の長石粒を多く含む。	外面: 7.5YR7/4(にぶい橙) 内面: 2.5YR5/1(黄灰)	1/6周程度の破片
16	SD09	甗	口縁部 ~胴部上半	口径 15.5	外面: 口縁部付近ヨコナデ。胴部縦方向のハケメ。 内面: 口縁部付近ヨコナデ、胴部横方向のヘラケズリ。	3mm以下の長石粒、赤褐色粒を多く含む。7mm大の長石粒まれ。	外面: 5YR7/4(にぶい橙) 内面: 10YR6/2(灰黄褐)	1/2周程度の破片
17	SD09	甗	口縁部 ~胴部上半	口径 19.3	外面: 口縁部付近ヨコナデ。胴部は風化のため不明。 内面: 横方向のヘラケズリ。	1mm以下の長石粒多く含む。	外面: 5YR5/6(明赤褐) 内面: 5YR6/6(橙)	1/4周程度の破片
18	SD09	甗	口縁部		内外面ともヨコナデ	3mm以下の長石粒多く含む。	外面: 5YR7/4(にぶい橙) 内面: 5YR7/6(橙)	小破片
19	SD09	甗	口縁部		口縁部付近ヨコナデ。胴部外面は縦方向のハケメ。胴部内面は指頭圧痕残る。	3mm以下の長石粒、赤褐色粒を多く含む。	外面: 5YR5/6(明赤褐) 内面: 5YR6/6(橙)	小破片
20	SD09	甗	口縁部 ~胴部上半	口径 13.1	口縁部付近ヨコナデ。胴部外面は風化のため調整不明。胴部内面、横方向のヘラケズリ。	4mm以下の長石・石英粒を多く含む。	外面: 10R6/6(赤橙) 内面: 2.5YR6/6(橙)	1/4周程度の破片
21	SD09	台付壺	口縁部~体部	口径 10.6 胴体径17.6	外面: 口縁部付近ヨコナデ。胴部ハケメの後ヘラミガキ。 内面: 口縁部付近ヨコナデ。胴部上半縦方向の強いナデ。下半はナデの後ヘラミガキ。	0.5mm以下の長石粒を含む。	外面: 10YR7/4(にぶい黄橙) 内面: 10YR7/4(にぶい黄橙)	脚部欠損
22	SD09	鉢	口縁部 ~胴部上半		外面: 口縁部付近ヨコナデ。胴部はタキ目がわずかに残存。 内面: 横方向のヘラケズリ。	0.5mm以下の長石・石英粒を含む。	外面: 7.5YR7/6(橙) 内面: 7.5YR7/6(橙)	小破片
23	SD09	高坏	脚部	脚部径10.4	外面: 横方向のナデ。 内面: 横方向のヘラケズリ。上部に絞り痕。	2mm以下の長石粒多く含む。	外面: 10YR8/3(浅黄橙) 内面: 7.5YR7/4(にぶい橙)	脚部完存
24	SD09	高坏	脚部	脚部径14.4	外面: ナデ? 内面: 横方向のヘラケズリ。	0.5mm以下の長石粒を多く含む。	外面: 7.5YR8/4(浅黄橙) 内面: 7.5YR8/4(浅黄橙)	1/6周程度の破片
25	SD09	ミニチュア		口径 8.3 脚部径 3.6 器高 6.0	外面: ナデ。脚部ユビオサエ。 内面: 強いナデ。	2mm以下の長石・石英粒、赤褐色粒多く含む。	外面: 5YR7/6(にぶい橙) 内面: 5YR7/6(にぶい橙)	脚部完存
26	SD09	ミニチュア(台付鉢)	脚部	脚部径 5.4	内外面ともヨコナデ。	0.5mm以下の長石粒を多く含む。	外面: 5YR7/4(にぶい橙) 内面: 5YR7/4(にぶい橙)	脚部一部欠損

第7図 出土遺物(2) (1/4)



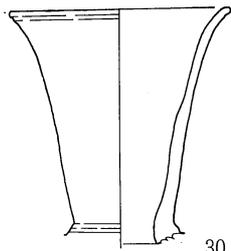
SP12

27



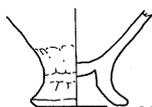
SP52

29



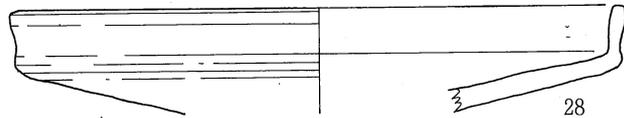
SP53

31



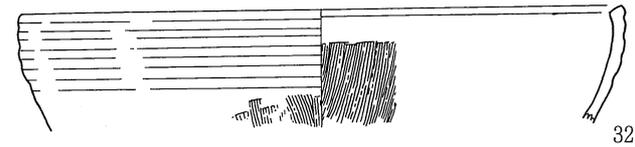
SK58

39



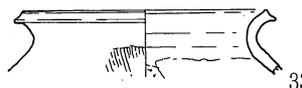
SK13

28



SX56

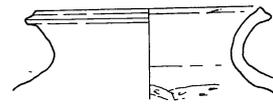
32



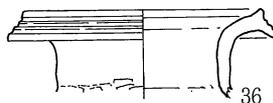
33



34

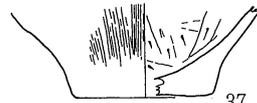


35

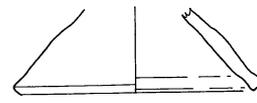


SP57

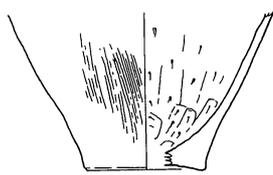
36



37

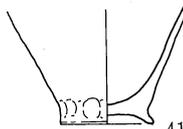


38

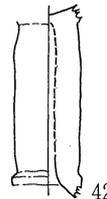


SK59

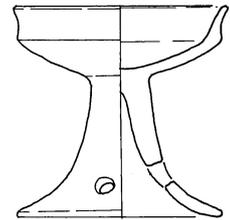
40



41



42

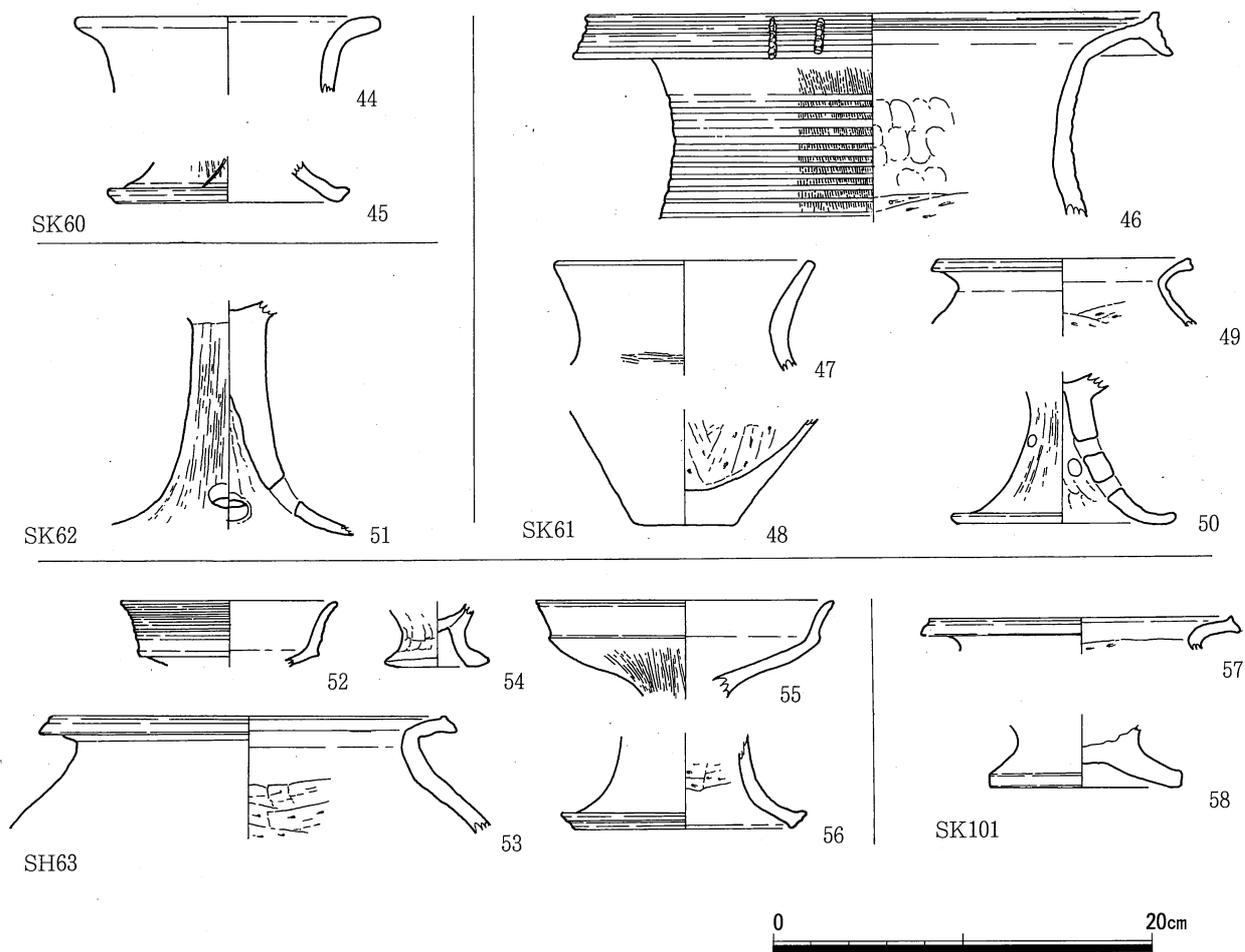


43



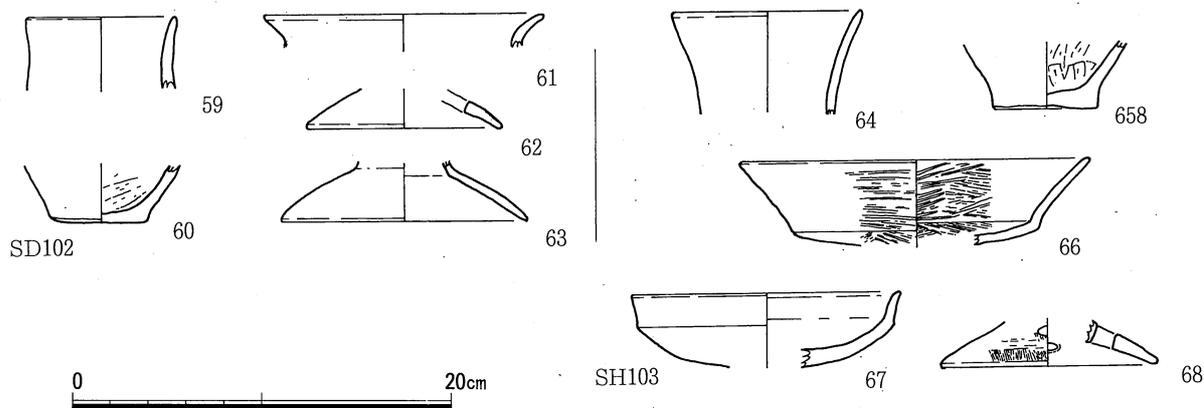
番号	層位・遺構	器種	部位	法量 (cm)	調整等の特徴	胎土	色調	備考
27	SP12	甕	口縁部	口径 15.7	口縁部付近ヨコナデ。胴部内面は横方向のヘラケズリ。	2mm以下の長石粒多く含む。	外面: 2.5YR4/1(赤灰) 内面: 2.5YR6/8(橙)	1/4周程度の破片
28	SK13	高坏	坏部	口径 32.6	風化のため調整不明	2mm以下の砂粒を多く含む。	外面: 5YR6/6(橙) 内面: 2.5YR6/8(橙)	1/4周程度の破片
29	SP52	ミニチュア(台付鉢)	体部~脚部	脚径 2.9	内外面ともナデ。	2mm以下の長石粒を多く含む。	外面: 5YR7/4(にぶい橙) 内面: 5YR7/4(にぶい橙)	脚部ほぼ完成
30	SK53	直口壺	口縁部	口径 11.4	外面: ハケメの後ヘラミガキ。端部付近ヨコナデ。 内面: 強いナデ。	2mm以下の砂粒を多く含む。	外面: N7/0(灰白) 内面: 5Y7/1(灰白)	1/4周程度の破片
31	SK53	甕	口縁部		風化のため調整不明。	1mm以下の砂粒を多く含む。	外面: 10YR7/3(にぶい黄橙) 内面: 10YR4/1(褐灰)	小破片
32	SX56	鉢	口縁部		口縁部付近ヨコナデ。それ以下は内外面とも縦方向のハケメ。	5mm以下の砂粒を多量に含む。	外面: 7.5YR6/3(にぶい褐) 内面: 7.5YR6/3(にぶい褐)	小破片
33	SX56	甕	口縁部		口縁部付近ヨコナデ。胴部外面は縦方向のハケメ、内面はヘラケズリ。	1mm以下の砂粒を多く含む。	外面: 7.5YR7/4(にぶい橙) 内面: 5YR6/8(橙)	小破片
34	SX56	甕	口縁部	口径 16.0	口縁部付近ヨコナデ。胴部外面はハケメ、内面はヘラケズリが認められる。	0.5mm以下の長石粒多く含む。	外面: 5YR7/4(にぶい橙) 内面: 5YR7/6(橙)	1/6周程度の破片
35	SX56	壺	口縁部	口径 11.9	内外面ともヨコナデ。胴部外面はヘラケズリ。	2mm以下の長石粒、赤褐色粒を多く含む。	外面: 5YR7/6(橙) 内面: 5YR7/6(橙)	1/6周程度の破片
36	SP57	壺	口縁部~頸部	口径 12.5	内外面ともヨコナデ。	2mm以下の長石粒を多く含む。	外面: 5YR7/8(橙) 内面: 5YR7/8(橙)	1/3周程度の破片
37	SP57	壺	底部	底径 7.5	外面: 縦方向のハケメ。 内面: ヘラケズリ。	3mm以下の長石粒を多く含む。	外面: 10YR7/3(にぶい黄橙) 内面: 7.5YR7/3(にぶい橙)	1/3周程度の破片
38	SP57	高坏?	脚部?		内外面ともナデ?	4mm以下の砂粒を多く含む。	外面: 10YR8/3(浅黄橙) 内面: 7.5YR7/3(にぶい黄橙)	
39	SK58	ミニチュア(台付鉢)	体部~脚部	脚径 4.6	内外面ともナデ。	1mm以下の砂粒を多く含む。	外面: 7.5YR7/4(にぶい橙) 内面: 7.5YR7/4(にぶい橙)	脚部ほぼ完成
40	SK59	甕	底部	底径 6.2	外面: 縦方向のハケメ 内面: ヘラケズリ	3mm以下の砂粒を多く含む。	外面: 10YR4/1(褐灰) 内面: 10YR4/1(褐灰)	1/3周程度の破片
41	SK59	甕	底部	底径 4.7	外面: 縦方向のハケメ 内面: ヘラケズリ	2mm以下の長石粒を多く含む。	外面: 5YR7/4(にぶい橙) 内面: 5YR7/4(にぶい橙)	
42	SK59	裝飾高坏	脚柱部		縦方向のハケメの後ナデ。赤色顔料残存。	2mm以下の砂粒を多く含む。	外面: 7.5YR8/4(浅黄橙) 内面: 5YR7/3(にぶい橙)	
43	SK59	高坏		口径 11.0 脚径 10.7 器高 11.2	風化のため調整不明。脚部外面は縦方向のヘラミガキか。脚部内面に絞り痕。	0.5~5mm大の石英・長石粒を多く含む。	外面: 7.5YR8/4(浅黄橙) 内面: 7.5YR8/4(浅黄橙)	坏部一部欠損

第8図 出土遺物(3) (1/4)



番号	層位・遺構	器種	部位	法量 (cm)	調整等の特徴	胎土	色調	備考
44	SK60	壺	口縁部～頸部	口径 15.6	内外面ともヨコナデ?	2mm以下の石英・長石粒、黒色粒多量に含む。	外面: 10YR8/3 (浅黄橙) 内面: 10YR8/3 (浅黄橙)	1/4周程度の破片
45	SK60	高坏	脚部		外面: ヨコナデの後細かいヘラミガキ。 内面: ヘラケズリ。	1mm以下の長石粒多い。	外面: 10YR8/2 (灰白) 内面: 10YR6/1 (褐灰)	小破片
46	SK61	壺	口縁部～頸部	脚径 30.0	外面: 口縁部付近ヨコナデ。頸部縦方向のハケメ。 内面: 頸部横方向のハケメの後ナデ。下端部にヘラケズリ。	3mm以下の長石粒多量に含む。	外面: 5YR7/4 (にぶい橙) 内面: 5YR7/4 (にぶい橙)	1/5周程度の破片
47	SK61	壺	口縁部	口径 13.2	内外面ともヨコナデ?	3mm以下の石英・長石粒、赤褐色粒を多く含む。	外面: 7.5YR8/3 (浅黄橙) 内面: 2.5Y8/2 (灰白)	1/6周程度の破片。48と同一個体?
48	SK61	壺	底部	底径 5.0	外面: ヘラミガキ? 内面: 縦方向のヘラケズリ。	3mm以下の石英・長石粒、赤褐色粒を多く含む。	外面: 7.5YR8/1 (灰白) 内面: 7.5YR8/2 (褐灰)	47と同一個体?
49	SK61	壺	口縁部～胴部	口径 13.3	風化のため調整不明。胴部内面はヘラケズリ。	3mm以下の石英・長石粒、赤褐色粒を多く含む。	外面: 10YR8/2 (灰白) 内面: 10YR8/2 (灰白)	1/5周程度の破片
50	SK61	高坏	脚部	脚径 11.2	外面: ハケメの後ナデ。爪跡が各所に認められる。 内面: 強いナデの後、端部付近ヨコナデ。	1mm以下の長石粒多く含む。	外面: 5YR7/4 (にぶい橙) 内面: 5YR7/4 (にぶい橙)	脚部ほぼ完存。
51	SK62	高坏	脚部		外面: 縦方向のヘラミガキ? 内面: ナデ?	2mm以下の砂粒を多く含む。	外面: 10YR8/3 (浅黄橙) 内面: 10YR8/3 (浅黄橙)	脚部端欠損。
52	SH63	甕?	口縁部		風化のため不明。内外面ともヨコナデ?	1mm以下の石英粒、微細な長石粒を多く含む。	外面: 5YR5/1 (褐灰) 内面: 7.5YR6/1 (褐灰)	小破片。山陰系の土器か?
53	SH63	甕	口縁部～胴部	口径 20.8	外面: 口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ? 内面: ヘラケズリ	2mm以下の砂粒をまばらに含む。	外面: 10YR8/4 (浅黄橙) 内面: 10YR8/4 (浅黄橙)	1/4周程度の破片
54	SH63	製塩土器	脚部	脚径 5.5	外面: ヘラケズリ 内面: ナデ	1~5mm大の長石・石英粒を多量に含む。	外面: 7.5YR7/3 (にぶい橙) 内面: 2.5YR6/6 (橙)	脚部のみ完存。
55	SH63	高坏	坏部	口径 15.6	外面: 口縁部付近ヨコナデ。下半は縦方向のヘラミガキ。 内面: 風化のため調整不明。	1mm以下の長石粒多く含む。	外面: 7.5YR7/3 (にぶい橙) 内面: 2.5YR6/6 (橙)	1/4周程度の破片
56	SH63	高坏?	脚部?	脚径 11.4	外面: ヨコナデ? 内面: 端部付近ヨコナデ。上部は横方向のヘラケズリ。	2mm以下の砂粒を含む。	外面: 10YR8/3 (浅黄橙) 内面: 10YR8/3 (浅黄橙)	1/6周程度の破片
57	SK101	甕	口縁部		口縁部付近ヨコナデ。内面頸部以下ヘラケズリ	微細な砂粒を多く含む。	外面: 7.5YR8/4 (O) 内面: 5YR7/3 (にぶい橙)	小破片。
58	SK101	台付壺?	脚部	脚径 10.0	内外面ともヨコナデ。	2mm以下の砂粒を含む。	外面: 10YR6/2 (灰黄褐) 内面: 10YR7/2 (にぶい黄橙)	1/2周程度の破片

第9図 出土遺物(4) (1/4)



番号	層位・遺構	器種	部位	法量 (cm)	調整等の特徴	胎土	色調	備考
59	SD102	直口壺	口縁部	口径 8.0	内外面ともヨコナデ?	1mm以下の長石粒、赤褐色粒を含む。	外面: 10YR7/4(にぶい黄橙) 内面: 7.5YR7/4(にぶい橙)	1/6周程度の破片
60	SD102	壺	底部	底径 5.4	外面風化のため調整不明。内面ナデ? 底面に植物系の圧痕多数。	2mm以下の微砂をわずかに含む。	外面: 5YR6/6(橙) 内面: 10YR6/2(灰黄褐)	
61	SD102	甕?	口縁部	口径 14.6	内外面ともヨコナデ。	0.5mm以下の砂粒、赤褐色粒を含む。	外面: 5YR6/6(橙) 内面: 5YR6/6(橙)	1/2周程度の破片
62	SD102	高坏	脚部		風化のため調整不明。	0.5mm以下の砂粒をわずかに含む。	外面: 7.5YR7/6(橙) 内面: 7.5YR7/6(橙)	小破片
63	SD102	高坏?	脚部		風化のため調整不明。ヘラミガキか。	1mm以下の長石粒を多く含む。	外面: 5YR7/8(橙) 内面: 5YR7/8(橙)	小破片
64	SD103	直口壺	口縁部	口径 10.3	内外面ともヨコナデ?	0.5mm以下の砂粒をわずかに含む。	外面: 5YR6/6(橙) 内面: 5YR6/6(橙)	1/4周程度の破片
65	SD103	甕	底部	底径 5.3	外面風化のため調整不明。内面ヘラケズリ。	1mm以下の長石粒を多く含む。	外面: 10YR6/8~6/4 (赤橙~にぶい黄橙) 内面: 5Y4/1(灰)	
66	SD103	高坏	坏部	口径 18.5	内外面とも横方向のヘラミガキ。内外面に赤色顔料塗布。	3mm以下の石英・長石粒を含む。	外面: 10Y5/6(赤) 内面: 10Y5/6(赤)	1/5周程度の破片
67	SD103	高坏	坏部	口径 14.5	内外面ともヨコナデ?	1mm以下の砂粒をわずかに含む。	外面: 7.5YR7/6(橙) 内面: 7.5YR7/6(橙)	1/6周程度の破片
68	SD103	高坏	脚部	脚径 11.4	外面: 縦方向のハケの後、横方向のヘラミガキ。 内面: ナデ?	0.5mm以下の砂粒をわずかに含む。	外面: 5YR7/6(橙) 内面: 5YR7/6(橙)	小破片

第10図 出土遺物(5) (1/4)

まとめ 今回の調査は夜間の、立会調査という極めて限られた条件で、決して十分な調査ができたとは言いがたいが、市街地化がすすみ実体や範囲に不明な点が多い天瀬遺跡の一端を知ることができた意義は大きい。北調査区では水田遺構を検出したが、当該期の水田遺構は岡山城二の丸（中国銀行）跡などでも検出されており、旭川西岸平野でも百間川遺跡群周辺同様かなり広い範囲に水田が広がっていたものと思われる。また、南調査区では土壌墓群や住居跡を検出。切り合い関係や出土遺物から墓域から居住域に変遷していった様子が見られる。

林信夫氏蒐集の考古資料 I 瓦・陶磁器

— 備中高松城の遺物を中心に —

乗岡 実

はじめに

林信夫氏は大正8(1919)年のお生まれで、岡山市高松の高松城本丸跡の一画に居を構えられ、生業の菓子製造のかたわら地域の歴史研究に長年取り組んでこられた。その主要テーマは、羽柴秀吉による天正10(1582)年の水攻めの舞台として全国的に著名な備中高松城で、地元にある高松城址保興会(会長 坪井博氏)の事務局をうけもち副会長を務められるなど、研究のみならず城跡の保存や顕彰・活用にも日々尽力され、ごく最近も『備中高松城水攻めの検証』⁽¹⁾を編集・著作された。また、同氏は岡山市教育委員会が委嘱する岡山市文化財モニターの高松地区担当として、わが市の文化財行政の推進に大きく寄与されている。

高松城を軸とする地域史研究の過程のなかで、林氏は整理用コンテナ数十箱にのぼる大量の考古資料を蒐集された。これらは、おおむね昭和40年代以降に、もっぱら高松地区とその隣接地で採集されたもので、高松城関連の遺物に留まらず、弥生土器、古墳時代の須恵器・土師器・埴輪、古代の土器・瓦、中世土器、近世・近代の瓦や陶磁器など、実に多岐にわたっている。林氏の尽力により、たいいてい遺物には、採集地・採集者名・採集日などを示した墨書の注記され、もしくは紙札が同包されていることも手伝って、この地域の各時代の各種遺跡の実体を探るうえでかけがえのない資料となっている。



第1図 資料の採集地 (1/100,000)

- | | | | | | | |
|-------|--------------|--------|--------|-------|---------|-----------|
| ①大崎廃寺 | ②津寺遺跡 | ③備中国分寺 | ④総社市黒尾 | ⑤栢寺廃寺 | ⑥岡山市和井元 | ⑦富原遺跡 |
| ⑧福成寺跡 | ⑨備中高松城跡 | ⑩門満寺 | ⑪大崎妙見堂 | ⑫本隆寺 | ⑬吉備津神社 | ⑭岡山市高松字中島 |
| ⑮妙玄寺 | ⑯岡山市高松稲荷大窪越筋 | ⑰岡山市三手 | | | | |

いる。これらの遺物は、林氏自身が田畑や丘陵を歩いて表採されたもの、文化財行政の手が整備される段階以前にあってゴミ穴掘削やビニールハウス建設や用水路整備などの工事に林氏が立ち会われて採集されたものなどが多いが、なかには林氏の蒐集活動に賛同する有志の方々が採集されたもの、林氏らが採集者や保管者に働きかけて譲り受けたものなども含まれる。その意味では、本蒐集に関わる林氏の協力者は、相当数にのぼっている。

林信夫氏は、先年この蒐集資料を岡山市教育委員会に委ねられた。林氏の志を受け継ぎ、国民共有の文化財として位置づけるためには、整理作業と成果の公表は責務と考え、今回は瓦と中世末以降の陶磁器について報告する。陶磁器の時期を限ったのは、中世集落などに帰属する陶磁器は少量で、むしろ中世土器と一括して報告する方が適切と判断したからである。いずれにせよ、今回報告分には林氏の蒐集活動の契機となった備中高松城に関わる遺物が中心的に含まれている。なお、今回報告分は、容積のうえでは全資料の三分の一程度で、遺物点数のうえでは数パーセントに過ぎない。残りの弥生土器・須恵器・埴輪、中世土器などについても、順次整理作業を進め、次年度以降に報告していく予定である。

1. 瓦

a) 古代の瓦

第2図1～5は、第1図地図番号①(以下同じ)の大崎廃寺(岡山市大崎)の採集品である。遺物には「奈良見」の墨書注記があるものが多いが、これは字名ではなく、この遺跡地の美称である。大崎廃寺では、これまでに白鳳、奈良、平安前期、鎌倉の各期の瓦が採集されているが、とりわけ白鳳期の「水切り」をもつ軒丸瓦がある⁽²⁾ことで古くから著名である。その瓦当片は林氏の蒐集品中にも含まれて現在は史跡高松城跡の傍にある資料館に展示されているが、既に岡本寛久氏によって詳細に報告されている⁽³⁾ので、本報告では割愛した。したがって、1～5は総て瓦当を持たない平瓦である。1～4の凸面は縄目、5の凸面は格子目である。

6・7は、②津寺遺跡(岡山市津寺)の採集品である。一帯では、古代の瓦の散布が知られ、山陽自動車道建設に伴う発掘調査でも、二子御堂奥窯跡(倉敷市二子)の製品とみられる奈良時代などの瓦が出土している⁽⁴⁾。

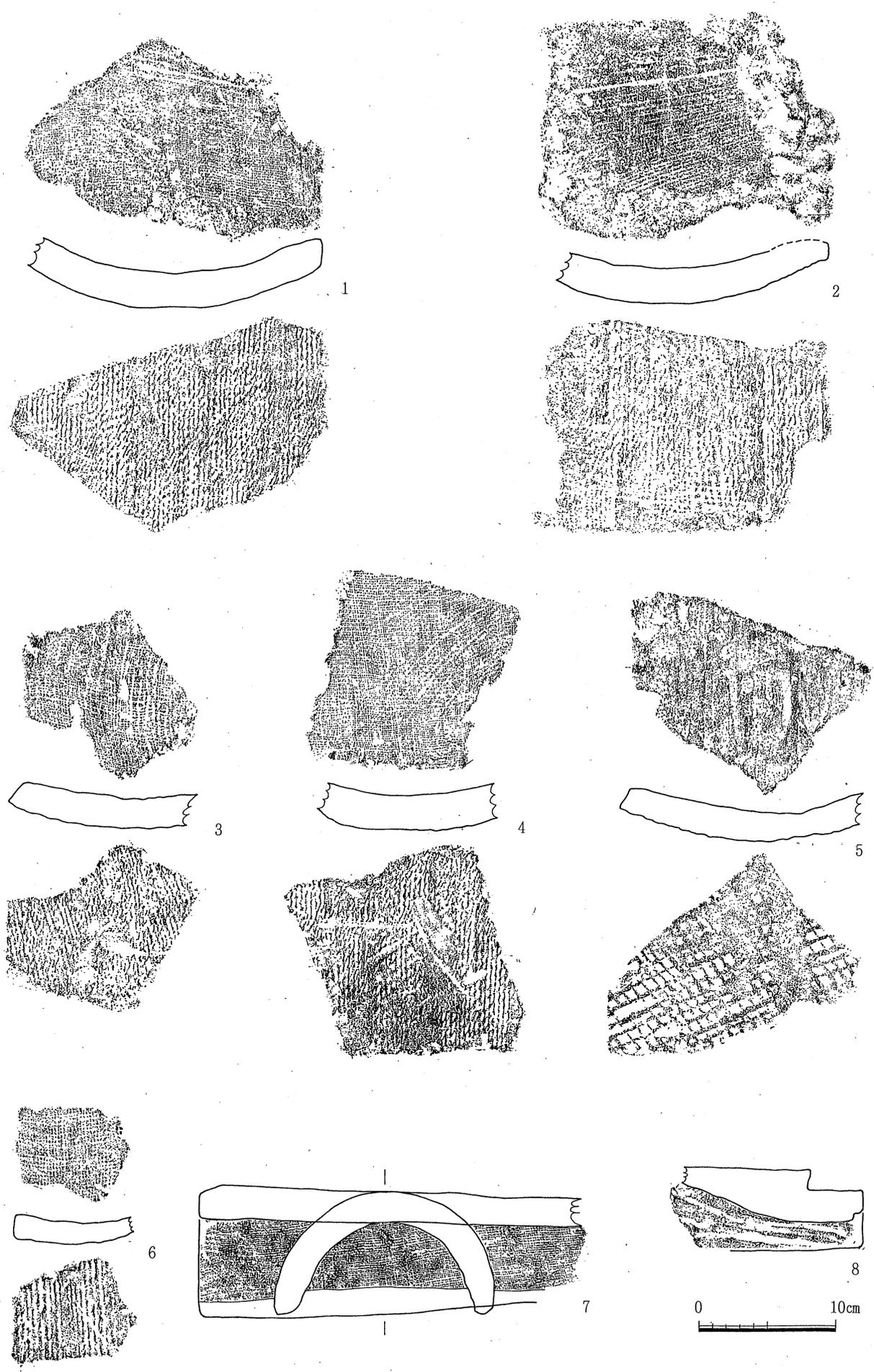
第2図8・第3図9は、③備中国分寺の瓦である。8は玉縁付近の破片、9の平瓦は凸面の器面が剥離するなど、詳細は不明である。

10は、完形に近い丸瓦で、古代のうちでも平安時代には下らない資料である。墨書の注記によれば「総社市黒尾 大井川西出土」とあるが、大井川は一般に足守川を指し、その西とすれば総社市東阿曾付近となって「黒尾」の地名と一致しない。しかし「大井川」は天井川となっている砂川を示した可能性が強そうで、とすれば「黒尾」は整合性をもち、採集地は④大字黒尾字黒尾付近に比定できようか。いずれにせよ、これまで古代寺院が知られていない地域であり、また古代山城である鬼ノ城の麓地域にあたる意味でも重大で、今後の追跡調査が必要な遺物である。

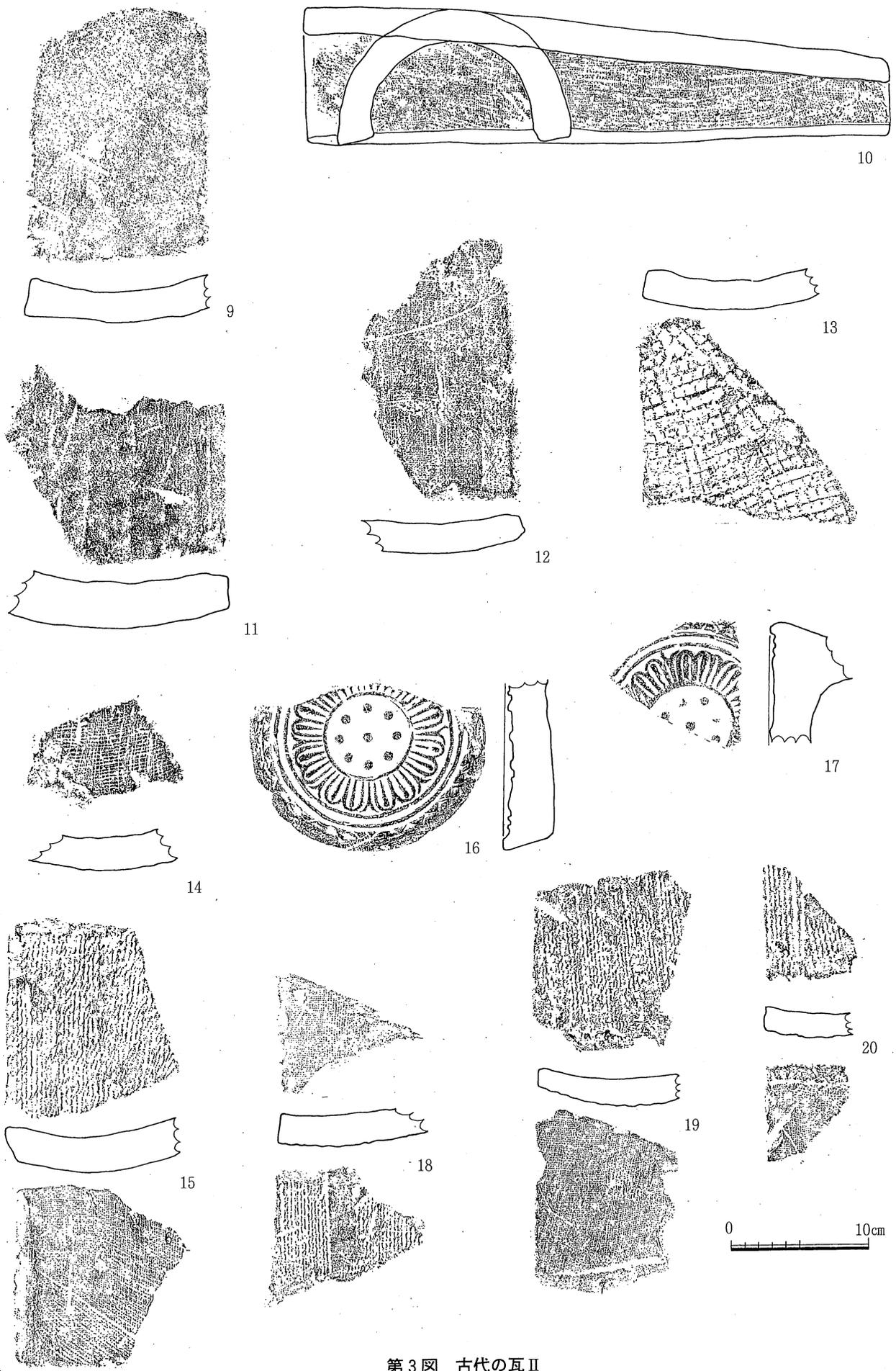
11～14は、「加夜寺」の墨書注記があって、⑤栢寺廃寺(総社市南溝手)の採取品である。この寺跡では、白鳳期以降、奈良、平安の瓦が確認されている⁽⁵⁾。

15は、採集者の姓を示す「面家」の墨書があり、その住所から⑥岡山市和井元での採集品である可能性が考えられるが、この大字内には古代寺院は知られておらず、例えば隣の大字である大崎に属する大崎廃寺あたりの採集品であった可能性もある。遺物の特徴も、後者の可能性と矛盾しない。

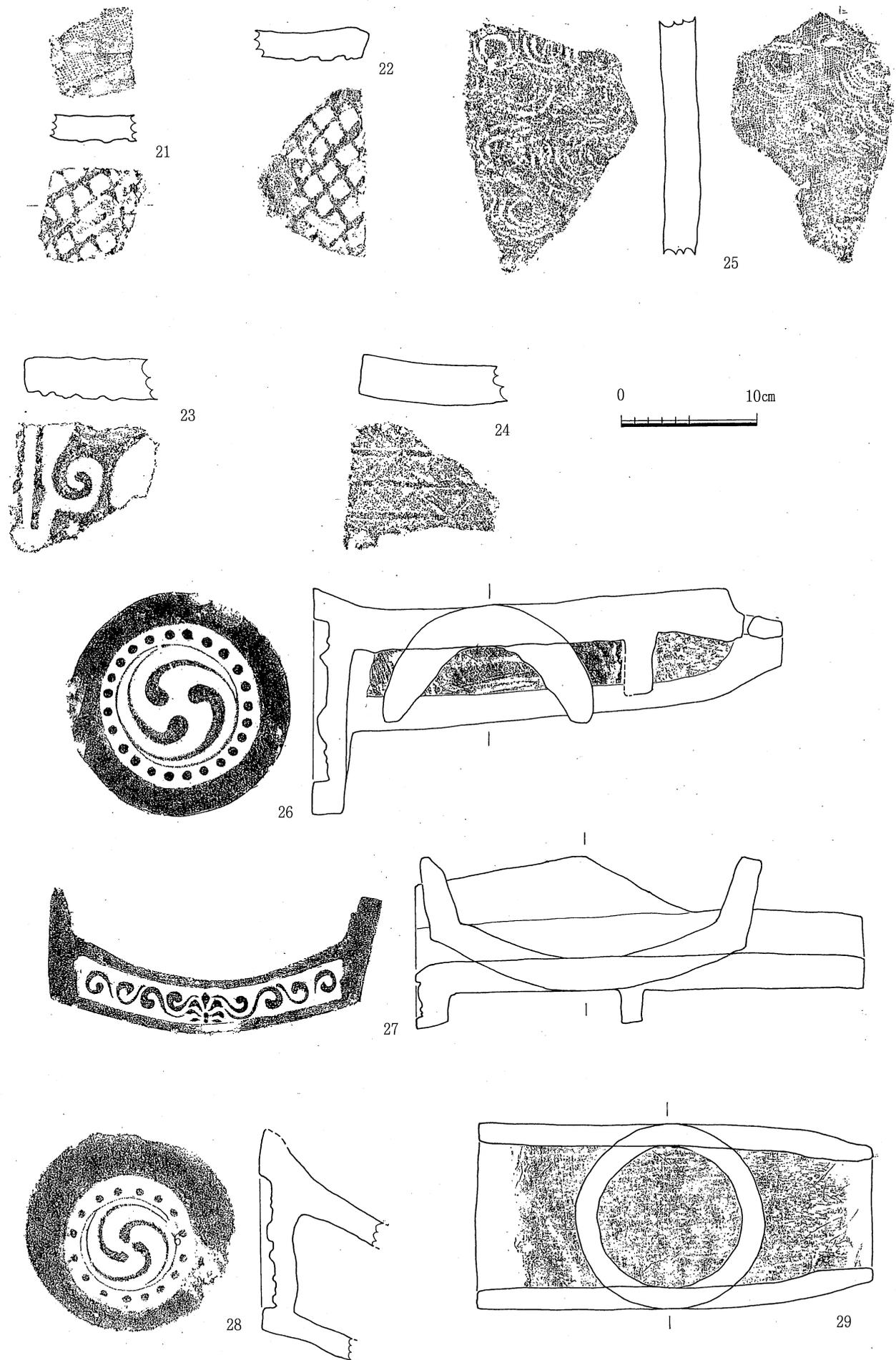
第2図16～第3図22は、⑦富原遺跡(岡山市富原)の採集品である。この遺跡は奈良時代の瓦が出土することで古くから知られ、津高南廃寺とも呼ばれるが、古代山陽道に面する立地と、北500mに白鳳期から平安時代に至る瓦を伴う津高北廃寺が別にあることから、寺ではなく山陽道の津高駅に比定する見解が有力である⁽⁶⁾。本資料中には、軒丸瓦の瓦当が2点ある。16と17は同範の可能性が強く、文様は複弁の蓮華文の外に二重圏線、さらに鋸歯文帯を配置するもので、奈良時代前半に比定できる。同じモチーフの瓦は、この遺跡で既に知れているが、本例の方が複弁の弁が整って長く、先行的で



第2図 古代の瓦 I



第3図 古代の瓦II



第4図 古代の瓦Ⅲ・中世の瓦・近代初頭の瓦Ⅰ

ある。

23は、高松城三の丸域にある⑬「妙玄寺」(岡山市高松)の墨書注記があるが、古代の鬼瓦の破片とみられる。一帯では他の古代の瓦の散布は確認されておらず、採集地にやや疑問が残る。

b) 中世の瓦

24は奈良の東大寺の平瓦で、大形三角が連続する特徴的なタタキ痕を凸面にもち、鎌倉時代初め頃のものともみられる。岡山市近郊は、東大寺の再興に活躍した重源に縁の深い土地柄で、市外東方の瀬戸町万富では東大寺向けの瓦の窯が知られ、同文・同型式の瓦は高松地区に程近い吉備中山にももたらされている。それらの瓦はよく重源瓦と呼ばれるが、この種のタタキがみられる。重源瓦への思いこそ、遠い奈良の地でわざわざこの細片を採集してこられた理由であろう。

26・27は、注記がなく、林氏自身も思い出せないとのことで、採集地は不明である。いずれも全くの完形で、出土品ではなく伝世品である。恐らく、高松近隣の寺社建築に現役で葺かれていたものを屋根修理工事などの際に人伝に譲られたものであろう。26の軒丸瓦は製作時に粘土板を糸で取った際に付くナナメ方向の条線であるコビキA痕⁽⁷⁾を内面に残し、文様は三巴の外に圏線をもって珠文数は24個もの多さで、瓦当裏のくびれの深さなどに示される頑丈な造りとあわせ、室町時代後期で天正期以前のもと考えられる。玉縁には江戸後半期以降の新しい要素として針金穴があるが、これは二次穿孔で、本資料が最近まで現役であったことを裏付ける。27の軒丸瓦も唐草四転で脇区の狭い瓦当をもち、26と同じ年代と考えてよい。また、丸瓦部内面の横棧と平瓦部両端の滑り止めの縦棧は、構造や法量が一致する。胎土・焼成の共通性なども含めて、この二点は同時に作られ、同じ建物にセットで葺かれて、一緒に本蒐集に加えられたものと考えられる。

c) 近世初頭の瓦

ここでは、おおむね天正年間(1573～)以降から、17世紀第1四半期の元和年間頃までの瓦類を対象とするが、ほとんどが高松城関連の遺物である。

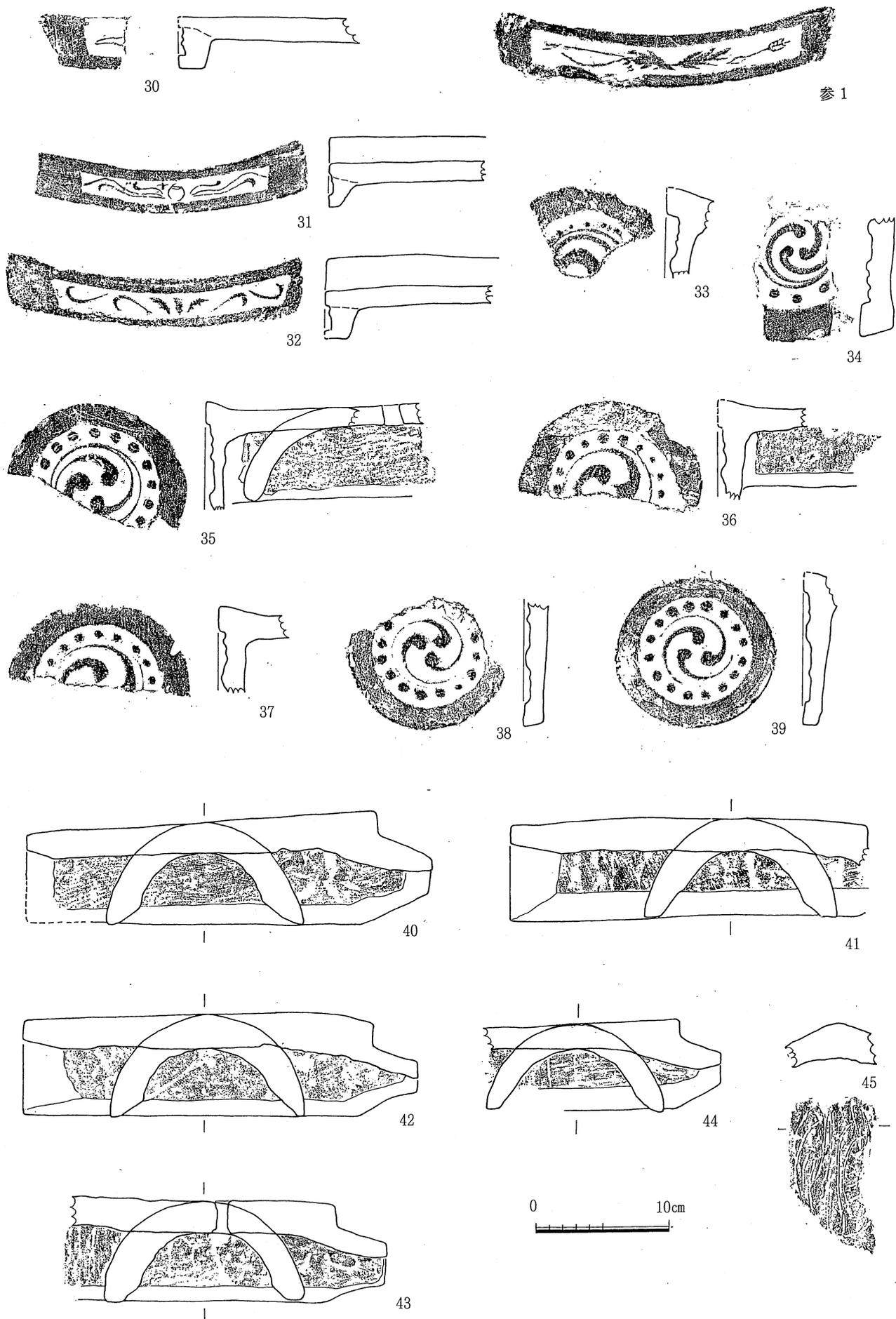
28は⑧福成寺跡(岡山市平山)で採集された鳥衾の瓦当部である。内面のコビキ痕は、その後のナデ調整で不明である。三巴の外に圏線をもつ特徴は巴頭部の細長さとともに古い要素であるが、同じ高松地区内にある吉備津宮内の瓦師は、慶長後半まで圏線をもつ製品を作っており⁽⁸⁾、本資料も1600年以前との保証はない。

29は、瓦ではないが、明らかに瓦とともに作られた瓦質の土管である。この形態は、丸瓦の製作工程で生まれる半裁前の丸瓦に近似し、その副産物的製品であるに違いないが、尾部は玉縁ではなく、行基式とするにも違いがあり、口端や外面のナデで調整なども含めて、土管としてアレンジされている。内面には、枠に張られた鉄線による均質スライスの結果とされる横方向の条線であるコビキB痕⁽⁹⁾が残っている。コビキBはコビキAに対して新しい技法で、岡山城下の瓦師によるとみられる製品では慶長5(1600)年頃を境に変換することが判っている⁽¹⁰⁾。それを援用すると、本資料も17世紀初頭のもと考えられる。コビキB痕をもつ類似の土管は岡山城下でも確認できるが、一般的な農村集落にまで普及していたとは考えにくく、採集地とされる総社市黒尾に、いかなる事情でもたらされたのか、気がかりなところである。

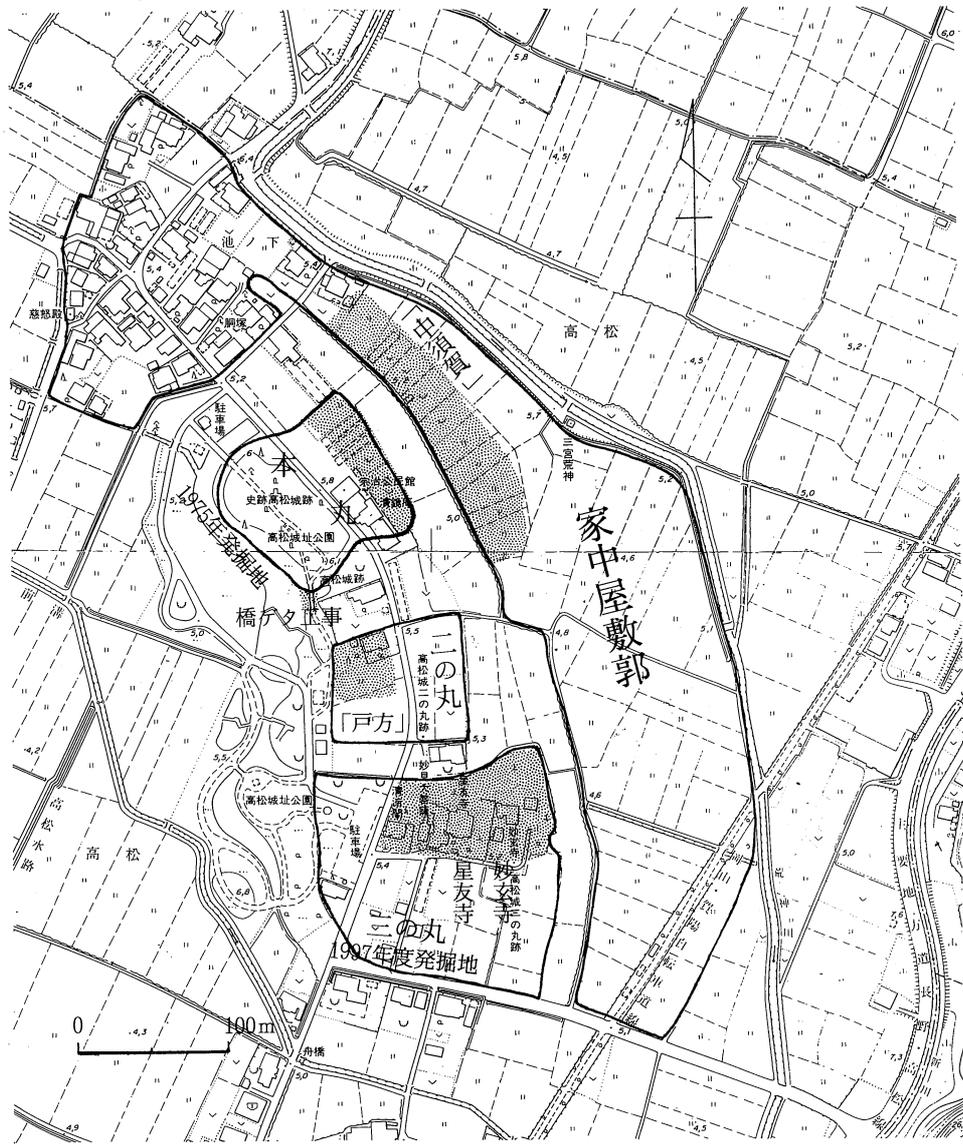
第5図30以降は総て⑨高松城関連の瓦で、このうち45までが本丸での採集品である。

30の軒平瓦は、瓦当左端付近の破片であるが、その文様の全貌は、発掘調査で出土した同範品⁽¹¹⁾である参考1のように中心に冥加、左に弓、右に矢を配したものである。中世末から近世初頭の軒平瓦の文様は、中心飾が多様としても唐草系統が支配的であるのに対し、この瓦は極めて特殊である。いまのところ備中高松城でしか知られておらず、備中高松城を最も特徴づける遺物として古くから注目されてきた⁽¹²⁾。

31は中心飾に凸線表現の宝珠を据えて左右の唐草は3本が併行して伸びる文様の軒平瓦で、後の57・58と同範である。32は中心飾に三葉を配して唐草が二転する文様の軒平瓦で、後の59と同範である。



第 5 図 近世初頭の瓦Ⅱ（高松城跡）



第6図 水田層下遺構 (1/100)

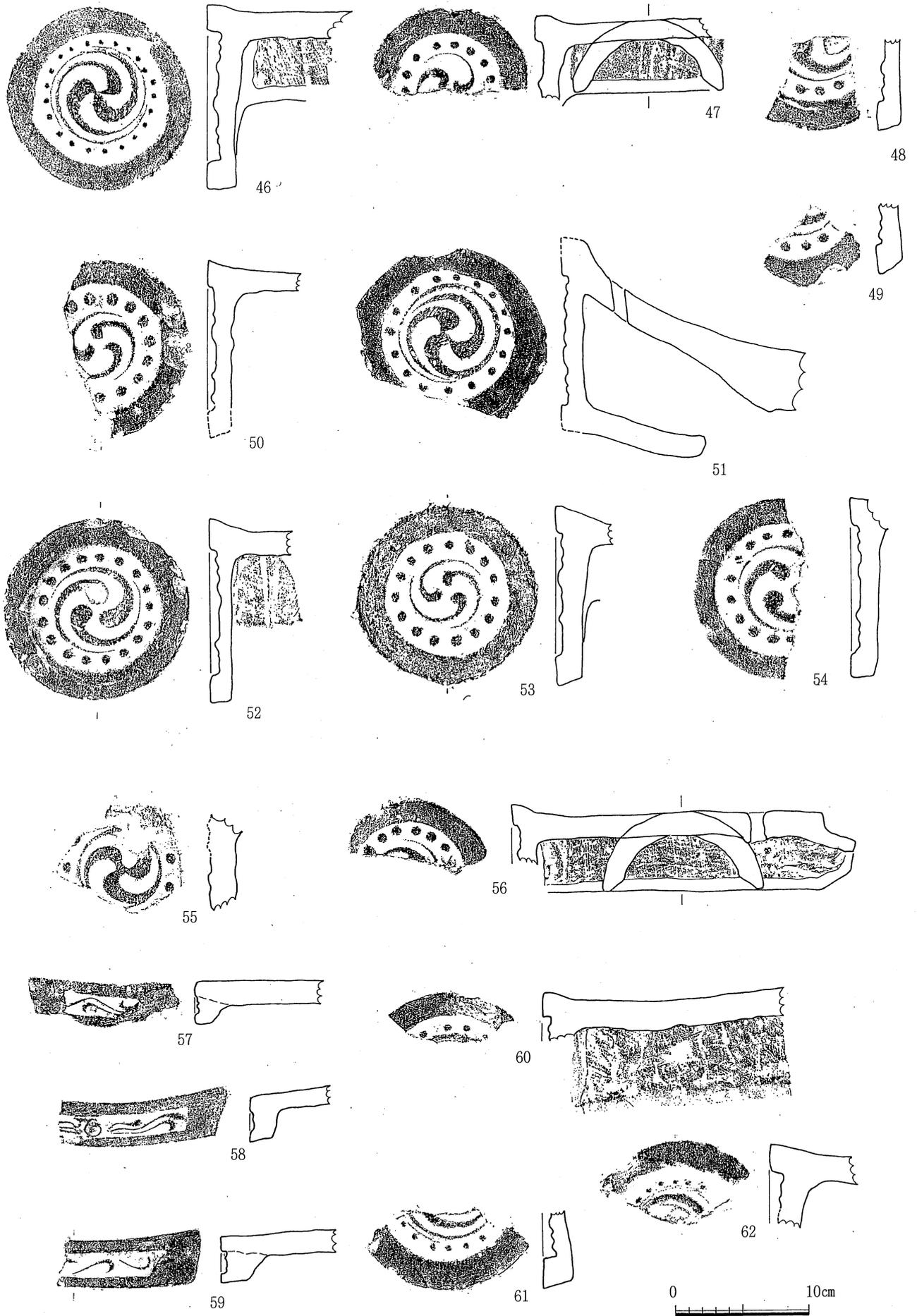
33～35の軒丸瓦は、巴の外に圈線をもちいっけん古相であるが、35はコビキB痕を残している。36・37は後の54・64と同范で、36・64にはやはりコビキB痕がある。38・39も後の64・69と同范で、64にはコビキB痕がある。

31・57・58の軒平瓦、32・59の軒平瓦、36・37・54・64の軒丸瓦、38・39・64・69の軒丸瓦の各同范品は、本丸の発掘調査でも多数出土しており、高松城跡でもっともよく見かける類で、本来セットで作られたと考えられる。本丸発掘例でも、コビキはすべてBである。

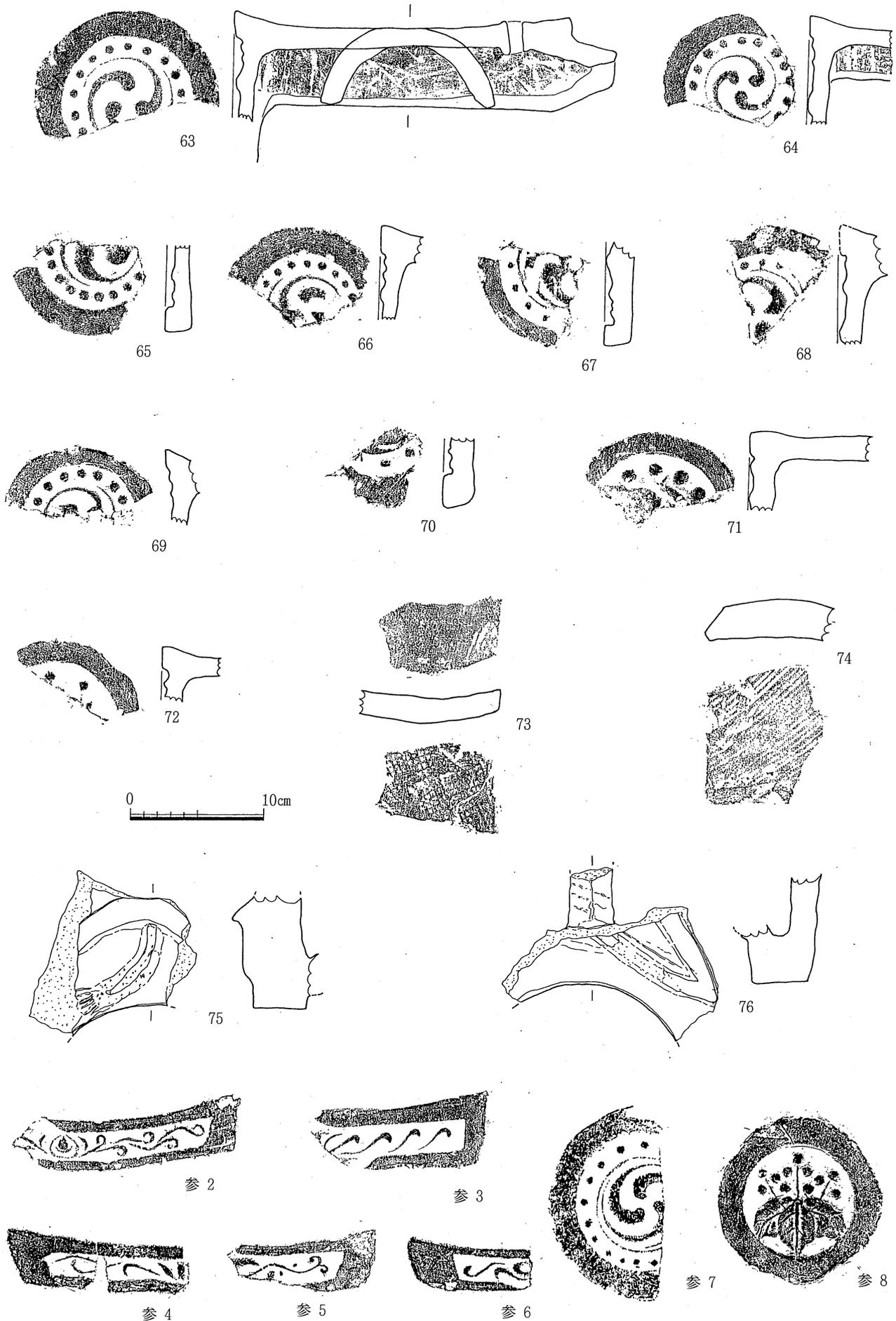
40～42はコビキAの丸瓦、43～44はそれより新しいコビキBの丸瓦である。45は棟に被せる雁振の稜線付近とみられる破片で、裏面に文様ともみられる線刻がある。

第6図46～56は、三の丸にあたる妙玄寺・星友寺近辺での採集品である。ただし妙玄寺は、江戸初期の高松城廃城に引き続き成立した寺で、付近で採集される瓦は高松城期ののものであっても、もともと三の丸に伴うものか、本丸辺りの建物に葺かれていたものが廃城後に寺に流用された結果であるのかは、特定できない。46はコビキがAで、文様も巴頭部が細く、珠文が22個と多くて小さく、確かに古い。50は53と同范で、文様ともあわせて、コビキB期のものとみられる。51の鳥衾はコビキ痕が不詳であるが、後の67と同范で、後述する吉備津神社お釜殿の瓦との同范関係からコビキB期の慶長半ばから後半のものである。52・56もコビキBである。

57～76は、高松城跡の採集品である事は明らかであるが、採集地点の特定ができないものである。



第7図 近世初頭の瓦Ⅲ（高松城跡）



第8図 近世初頭の瓦IV (高松城跡)

しかし、林氏のご教示と内容から、実際はほとんどが本丸での採集品とみられる。60～62はコビキA痕があるかコビキA期の可能性があるが、63～72はコビキB期のものとみられる。とくに71は、珠文が粗大で、17世紀前半のものではあるが、高松城廃城の以前以後は微妙で、ことによると妙玄寺など三の丸跡に建てられた寺院に本来的に供給されたものかも知れない。72は、参考8に掲げた五三の桐文と同範もしくは同文の破片である。この種の文様も、岡山城本丸中の段での類品の出土状況⁽¹³⁾から、コビキB期に入る慶長5(1600)年以降のものと考えて差し支えない。73は凸面に格子タタキをもつ平瓦で、14世紀前後の亀山焼とみられる。城に伴うとすれば流用古材であるが、高松城以前にあった中世集落への搬入品の可能性もある。74は裏面にコビキA痕を残す雁振瓦である。75・76は鬼瓦で、粘土板を裏からくり込む製作技法などからしても、高松城期のものである。粘土紐貼り付けによる文様の意匠は不詳であるが、三角の形から沢瀉の可能性はある。

d) 近世の瓦

78～102は、ほとんどが完形品で、出土品ではなく、高松地区近隣の寺社建築あるいは一部の民家に現役で葺かれていたものが、屋根修理で降ろされた際などに、本蒐集に加えられたものである。しかし、残念なことに僅かな例外を除いて採集地を直接示す注記がない。

90までの軒丸瓦のうち、77は「門」の瓦当文をもち、林氏の記憶から⑩門満寺(総社市南溝手)の瓦である。この寺は古代の⑤栢寺廃寺の地に重複してある。丸瓦部の内面はコビキB痕をもつが、まだ吊紐痕を残して瓦当裏の括れも深く、コビキB期でも初期の17世紀初頭のものともみられる。胎土や焼成が甘めの特徴からすれば、吉備津宮内⁽¹⁴⁾の瓦師の製品の可能性が考えられる。

78は三巴文の瓦当である。これは破片であるため出土品の可能性もある。三巴の外には12個の珠文と13個めの珠文の代わりに「大」字を配す特徴的なものである。珠文体に「大」字配する軒丸瓦は、周辺では足守地域で作られた可能性が指摘されている⁽¹⁵⁾。この資料は17世紀、遅くとも18世紀初頭までのものであろう。

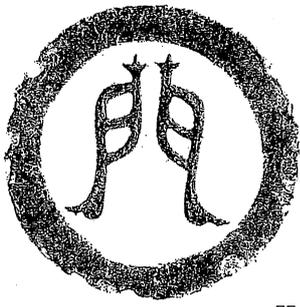
79は、瓦当の周縁が狭く、12個の珠文が小さくて珠文間の余白が広く、江戸後半期の特徴である瓦範と瓦当の分離補助材であるキラコ(ウンモ粉)や、丸瓦部内面に細板状の密なタタキを伴わないことなどから、17世紀末～18世紀初頭のものと思われる。

80は、「見」の瓦当文をもち、林氏の記憶から⑪妙見堂(岡山市大崎)の瓦である。瓦当面にキラコ、丸瓦内面に細板タタキ、玉縁には針金穴を伴って、18世紀後葉から19世紀にかけてのものである。

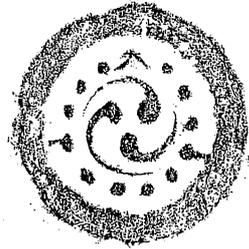
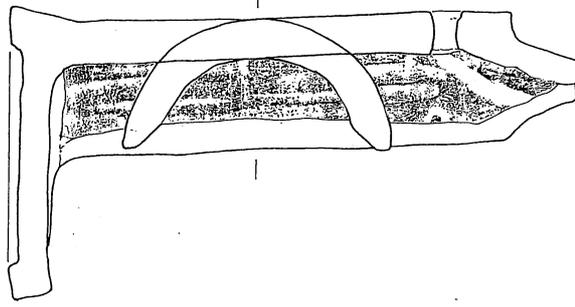
81は、宝輪状(退化した八弁蓮華)の瓦当文をもち、林氏の記憶などから⑬備中国分寺の採集品である。瓦当面にはキラコを伴わず、丸瓦内面にも細板タタキ痕を伴わないことから18世紀中葉以前のものであるが、丸瓦内面のコビキがBで瓦当裏の括れがほとんど無いこと、外周の狭さなどからして、17世紀末から18世紀初めのものである可能性が強い。この文様の瓦は、備中国分寺で古くから知られ、玉井伊三郎氏が江戸時代のものとして紹介されている⁽¹⁶⁾。なお、本資料の玉縁には18世紀末以降の特徴である針金穴が二次穿孔され、近年まで現役であったことを物語る。

82～90は、すべて瓦当面にキラコを伴い、丸瓦部を残すものはすべて細板状タタキを伴って、一次穿孔の針金穴をもつことから、18世紀末から19世紀のものである。82・83は同範で卍、84は16弁菊、85は三ツ雁?、86は花文を瓦当文とする。85は林氏の記憶から本隆寺(岡山市新庄上)の採集品であるが、三ツ雁とすれば江戸時代に一帯を知行した旗本の花房(榊原)氏一族の家紋瓦かもしれない。87～90は五七桐文で、16世紀末の宇喜多秀家の岡山城に伴った五七桐文に比べてずいぶん形式化が進んでおり、文様自身も新しいものであることを示している。このうち89には「高松城跡」の墨書注記があるが、先述したようにキラコも瓦当面に伴って、高松城が機能していた時期のものではなく、確実に江戸後期のものである。88には「吉備津神社」の注記があり、そこでの採集品であることが判る。吉備津神社ではお釜殿・回廊を含めた多くの建物に五七桐文の軒丸瓦が知られており、あるいは88以外の桐文瓦も吉備津神社に関わる採集品の可能性も考えられる。

91～99は軒平瓦で、すべてが瓦当面にキラコを伴う18世紀後葉以降のものである。とくに95以降は



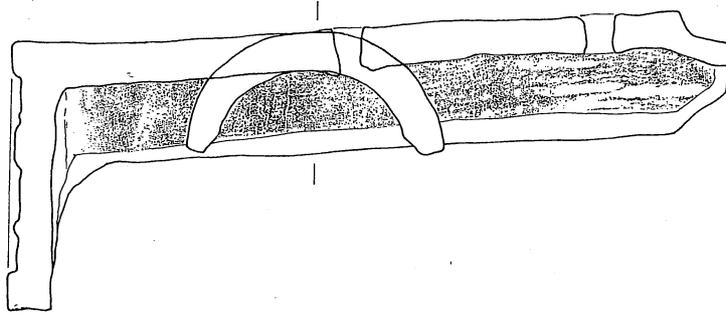
77



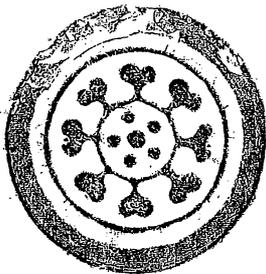
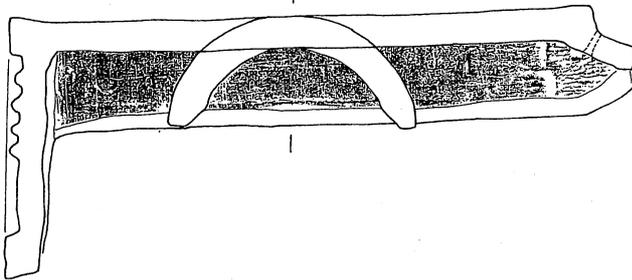
78



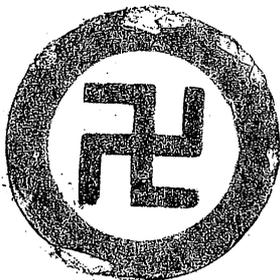
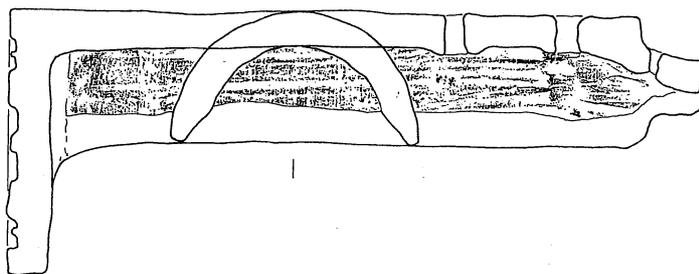
79



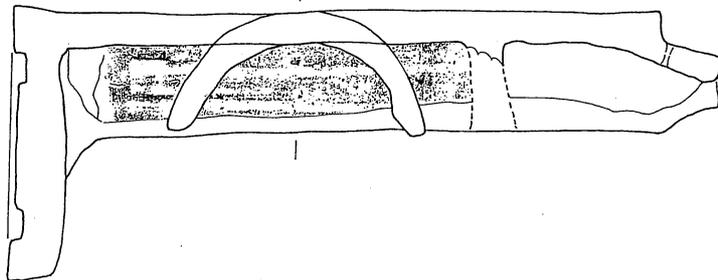
80



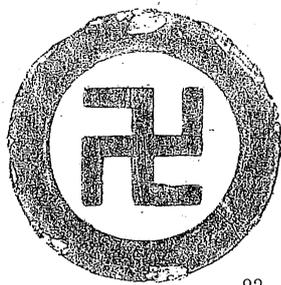
81



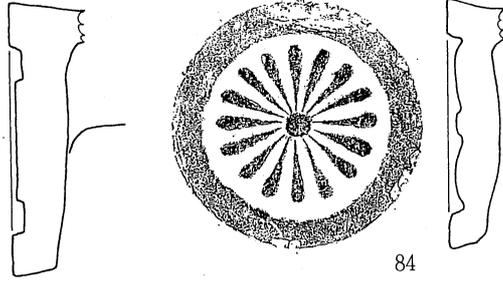
82



第9図 近世の瓦 I



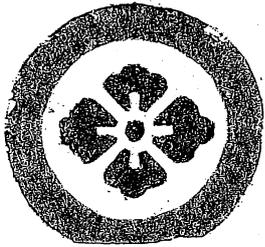
83



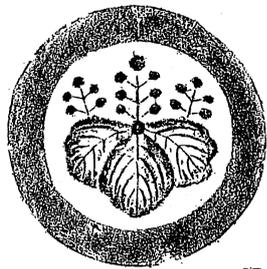
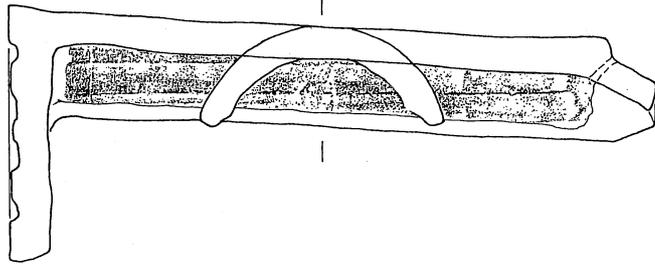
84



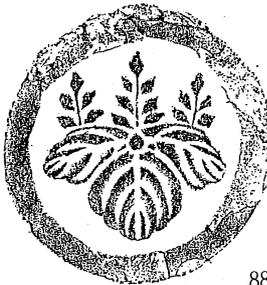
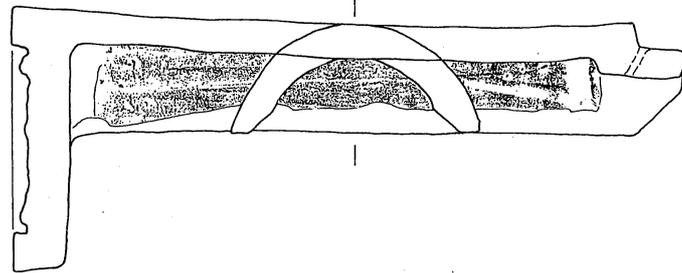
85



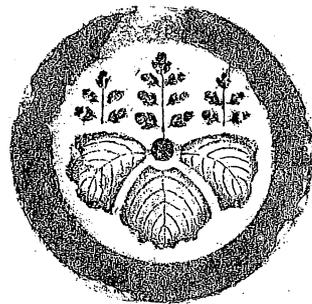
86



87



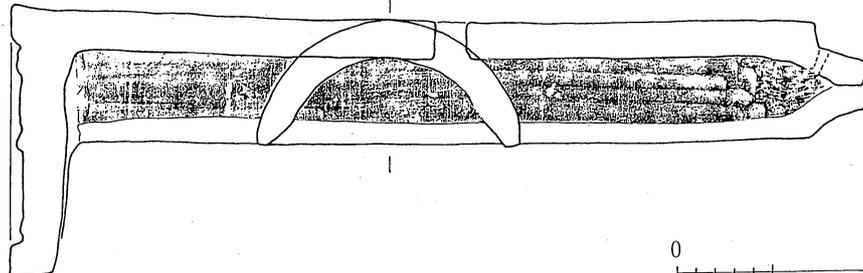
88



89



90

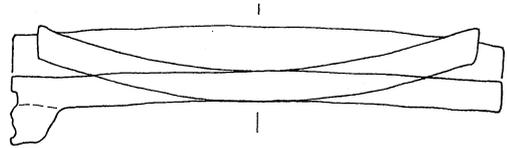


0 10cm

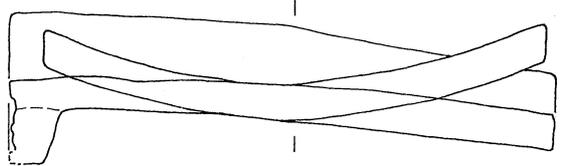
第10図 近世の瓦 II



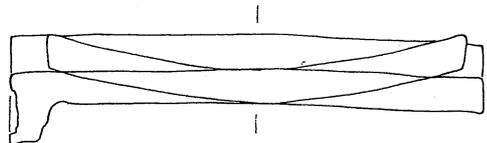
91.



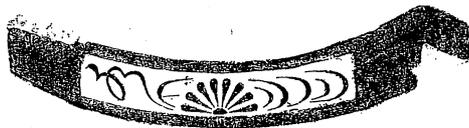
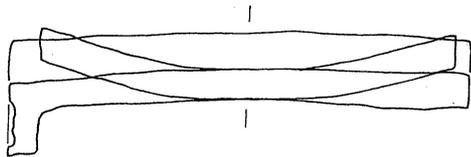
92.



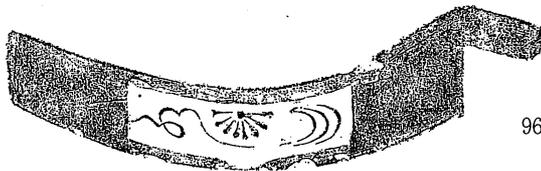
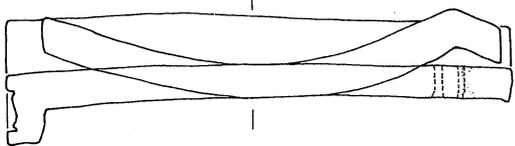
93.



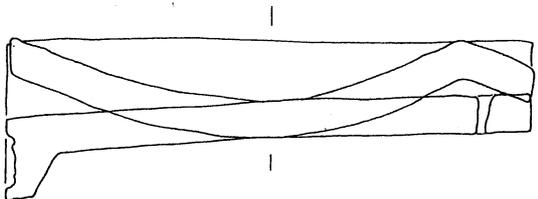
94.



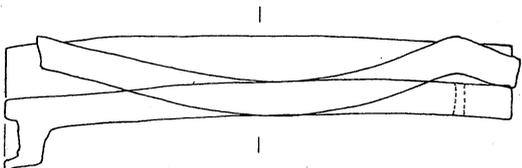
95.



96.

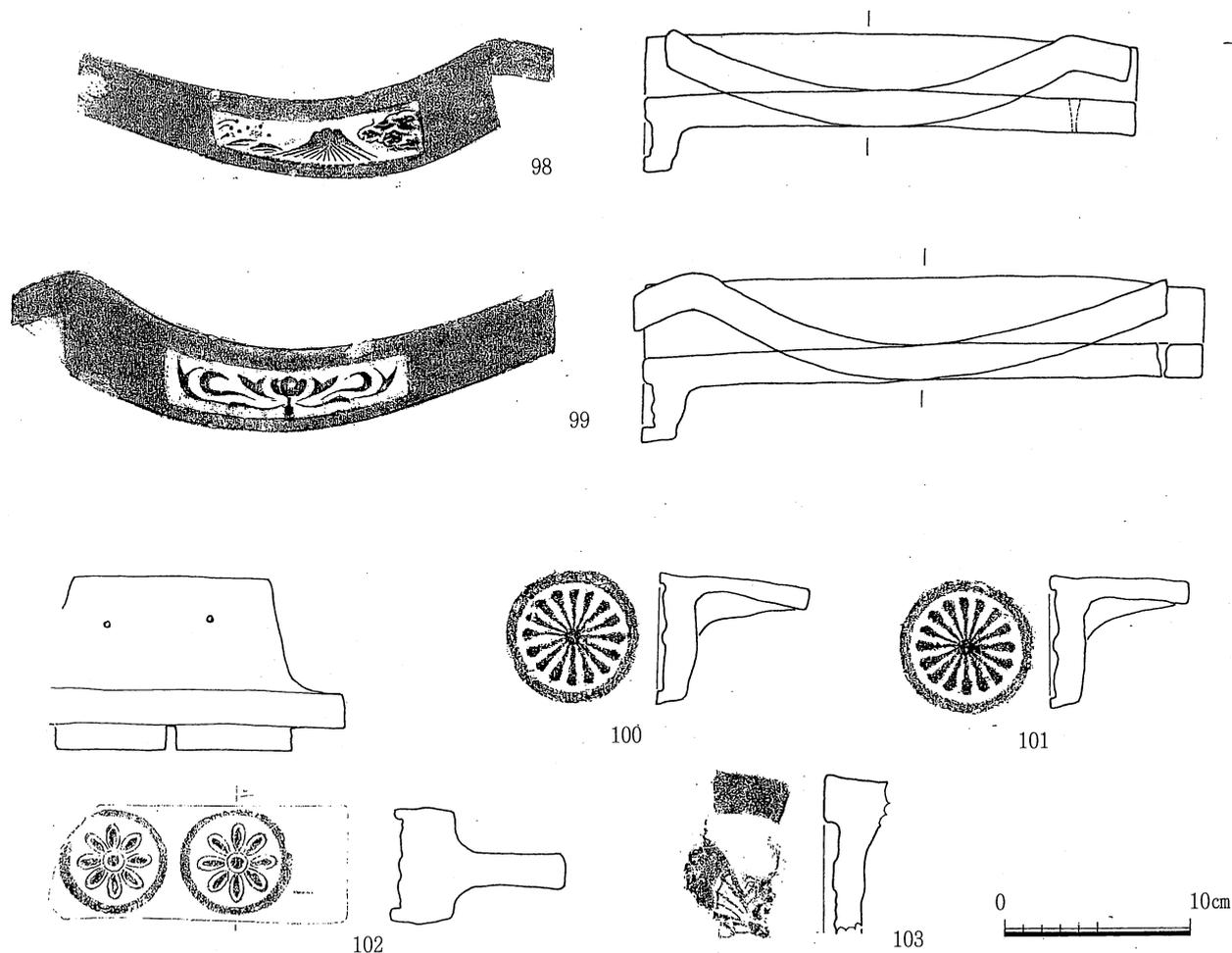


97.



第11図 近世の瓦Ⅲ

0 10cm

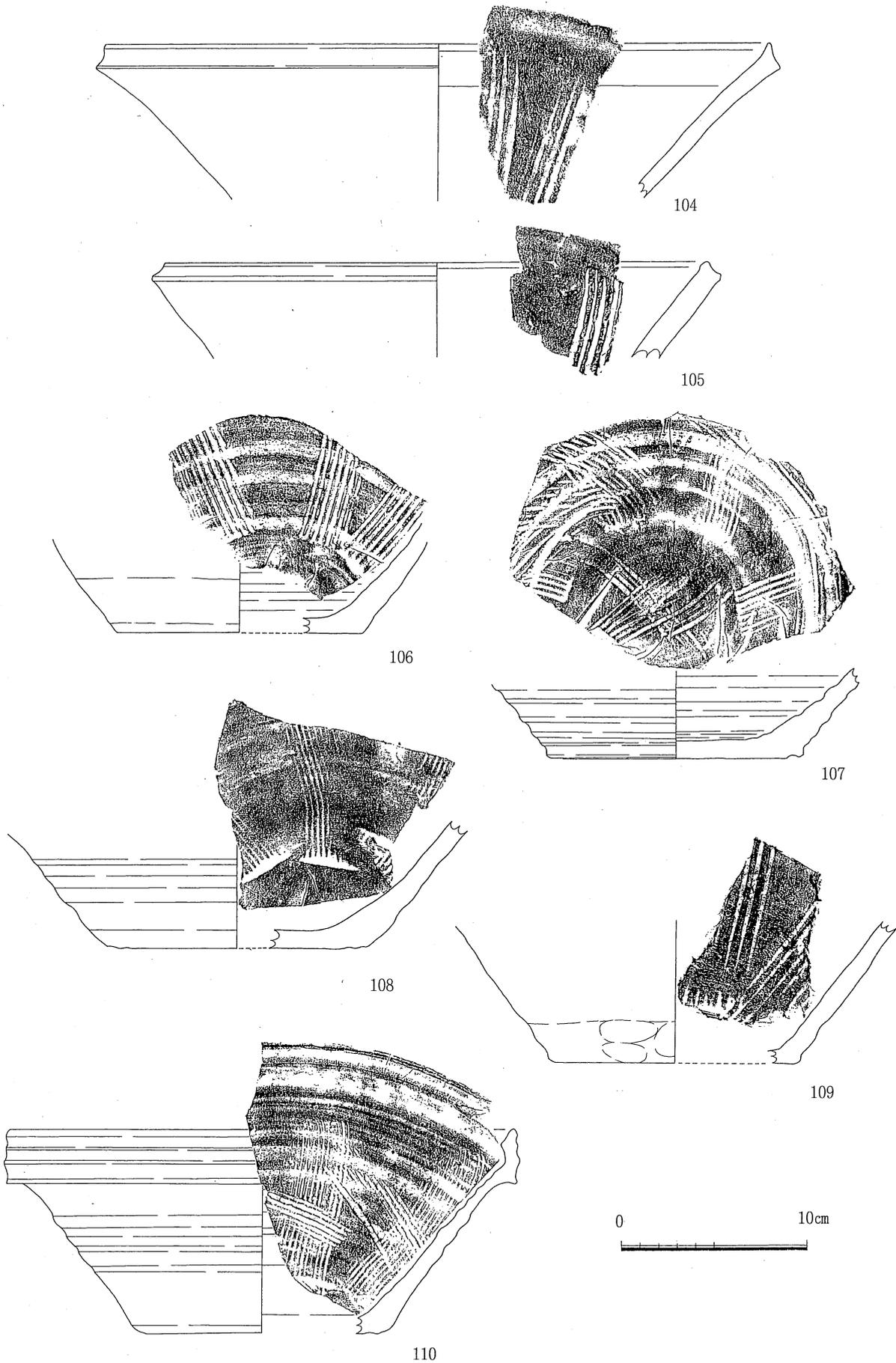


第12図 近世の瓦IV

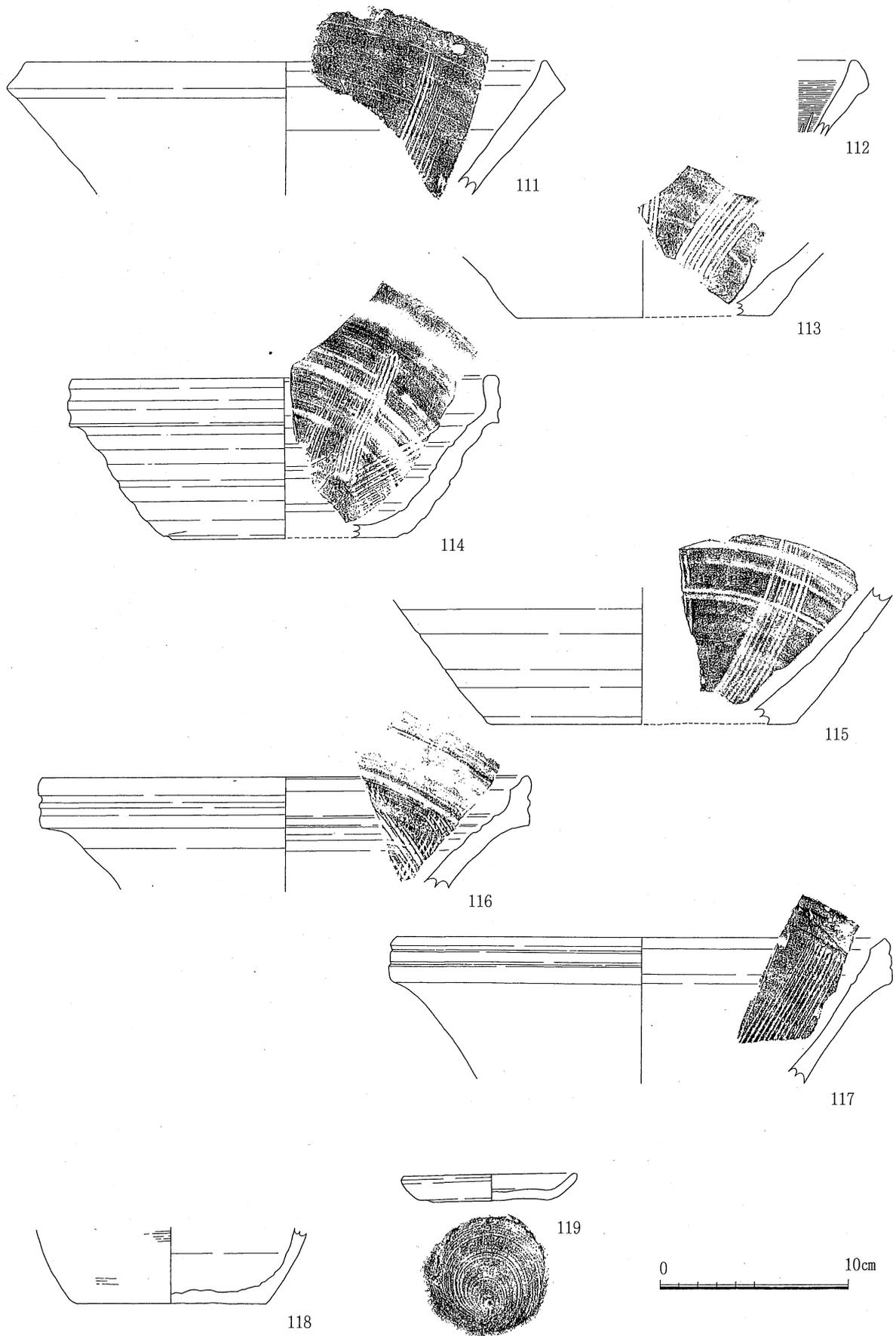
棧瓦で、尾部にたいてい針金穴をもつ。棧瓦は岡山市域では幕末から明治になってはじめて普及する。このうち、91は中心飾に肉厚の宝珠、92は中心飾に8弁の全形菊花、93は中心飾に半裁の菊花を据えるもので、文様構成が相対的に古相で、18世紀後葉に遡る可能性をもつ。他の寺社建築での製品の分布状況や瓦師名を刻んだ鬼瓦との共存状況⁽¹⁷⁾から、92は高松に程近い宮内(岡山市吉備津)か加茂村(岡山市加茂)、93・94は加茂村の瓦師による可能性が考えられる。95・96は半裁菊花の横に「水」の崩し字や波紋を配す菊水文である。幕末・明治のこの文様の瓦は、岡山市域では高松・足守・津高地区を中心に広範に分布し、足守ほか複数の瓦師が生産していた可能性が考えられるが、西日本規模の流行文様でもあって今のところ限定は難しい。97は中心飾に三巴を据える「岡山系三巴文」瓦で、近隣では宮内、加茂村、一宮、岡山二日市・瀧本町のいずれかの瓦師が作った可能性が考えられる。98は富士山を瓦当文にもつものであるが、器面の強い光沢に示される焼成の特徴や棧部分の接合状況が他の幕末の瓦に比べてやや異質で、石膏瓦范を用いた近代の製品である可能性が強い。99は関西などでは江戸中期後半から普遍的ないわゆる「橘」文であるが、岡山近隣の瓦産地でのこの文様の採用は遅れ、明治に入ってから製品の可能性が強い。

100・101は棟込みの菊丸瓦で、瓦当面にやはりキラコを伴って18世紀後葉もしくはそれ以降のものである。102は組合せの棟込み瓦で、やはり18世紀後葉から19世紀のものである。

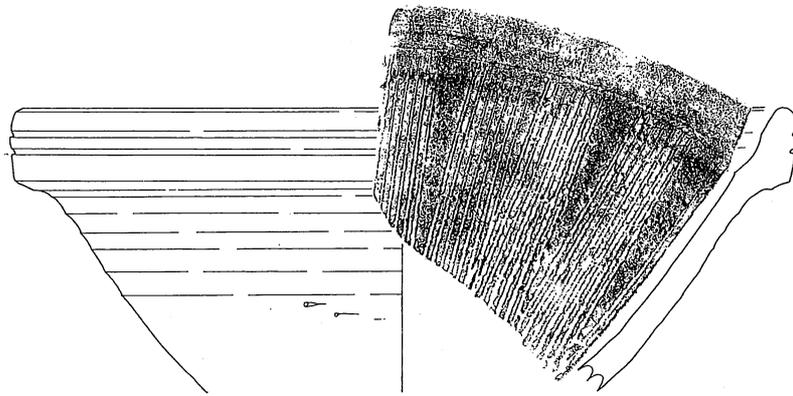
103は、鳥取城(鳥取市)の採集品で、藩主池田家の家紋である揚羽蝶の文様がある。細片で、器面の荒れも激しいため未詳であるが、およそ17世紀中葉から18世紀のものともみられる。



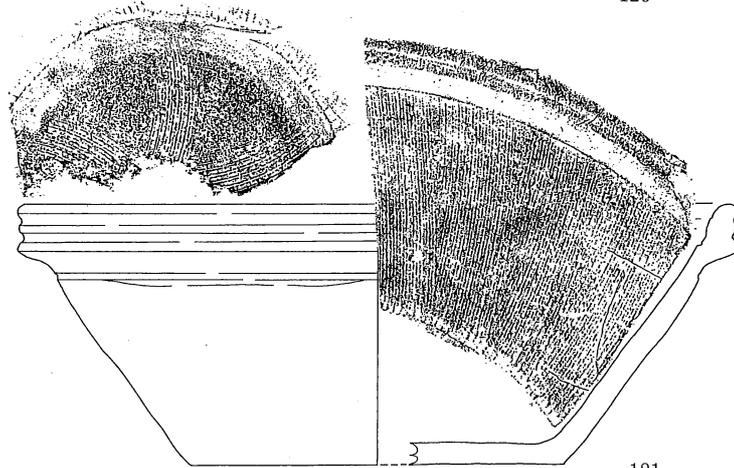
第13图 陶磁器 I



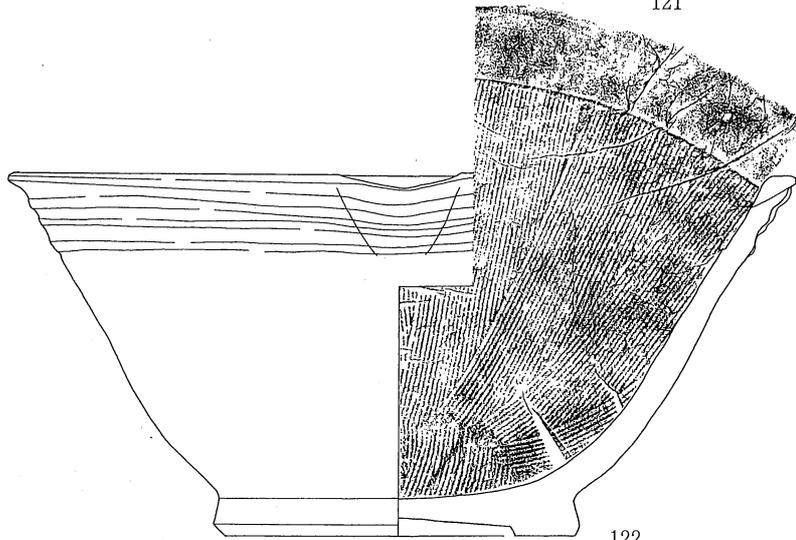
第14图 陶磁器 II



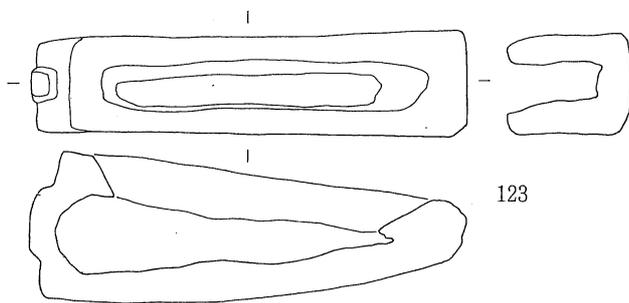
120



121



122



123

0 10cm

第15图 陶磁器 III

2. 陶磁器

今回報告する陶磁器のうちの大半を占める119までが⑨備中高松城関連の採取品である。このうち104～107が本丸採集で、104は土師質、105は亀山焼(倉敷市玉島付近産)系の播鉢である。106・107は備前焼播鉢で、106は見込が空白で体部内面は放射線状スリメだけで16世紀第3四半期もしくはそれ以前であるのに、107は見込みに×形、体部には放射+ナナメ方向のスリメがあって16世紀第4四半期から17世紀初頭と新しい。

108は二の丸採集で、16世紀第3四半期以前の特徴をもつ備前焼播鉢である。

109・110は三の丸採集で、109は亀山焼系とみられる播鉢、110は備前焼の播鉢である。110の内面は放射+ナナメのスリメで、口縁は薄くて上方に大きく立ち上がり、その内面はナデによって段をなし先尖りとなる。こうした特徴は天正年間の中葉から後葉にかけて顕著なもので、天正10(1582)年の水攻めに限りなく近い資料といえよう。

111～119は、家中屋敷郭からの採集品である。111は14世紀後葉の備前焼播鉢で、高松城というより先行する中世集落に伴う遺物の可能性がある。112は土師質の播鉢、113～115は放射状スリメだけの16世紀第3四半期以前の備前焼播鉢である。このうち114は、口縁部を含む破片で、その端部は先尖りにナデ潰されずに、丸みをもって単純に終わる。こうした特徴は、16世紀前半に遡るものと思われる。116の備前焼播鉢は、内面に放射+ナナメ方向のスリメをもち、口縁は先尖りにナデ潰されているが、スリメの密度が高めで、口縁帯が頑丈で口縁帯高が再び詰まりつつある過程にあるものとみられることから、どちらかといえば天正10年直前というより、直後から慶長5年頃までの製品かもしれない。117も備前焼播鉢であるが、口縁帯は再び詰まりだし、かつ放射スリメが再びみられなくなる代り、放射スリメの密度が極端に高まる段階のもので、17世紀中葉～後葉の高松城廃絶以後のものである。

118は備前焼の徳利の底部、119は底部にイトキリ痕を残す土師質土器で、共に16世紀末から17世紀の高松城に伴う遺物と考えられる。

120は高松城三の丸の南方に広がる⑭岡山市高松字中島の集落内で採集されたとみられる備前焼の播鉢である。内面のスリメはかなり詰まり、体部下半はヘラケズリが施されて火襷が認められ、底部には低い高台が付いていた可能性もある。17世紀後葉から18世紀前葉のものである。

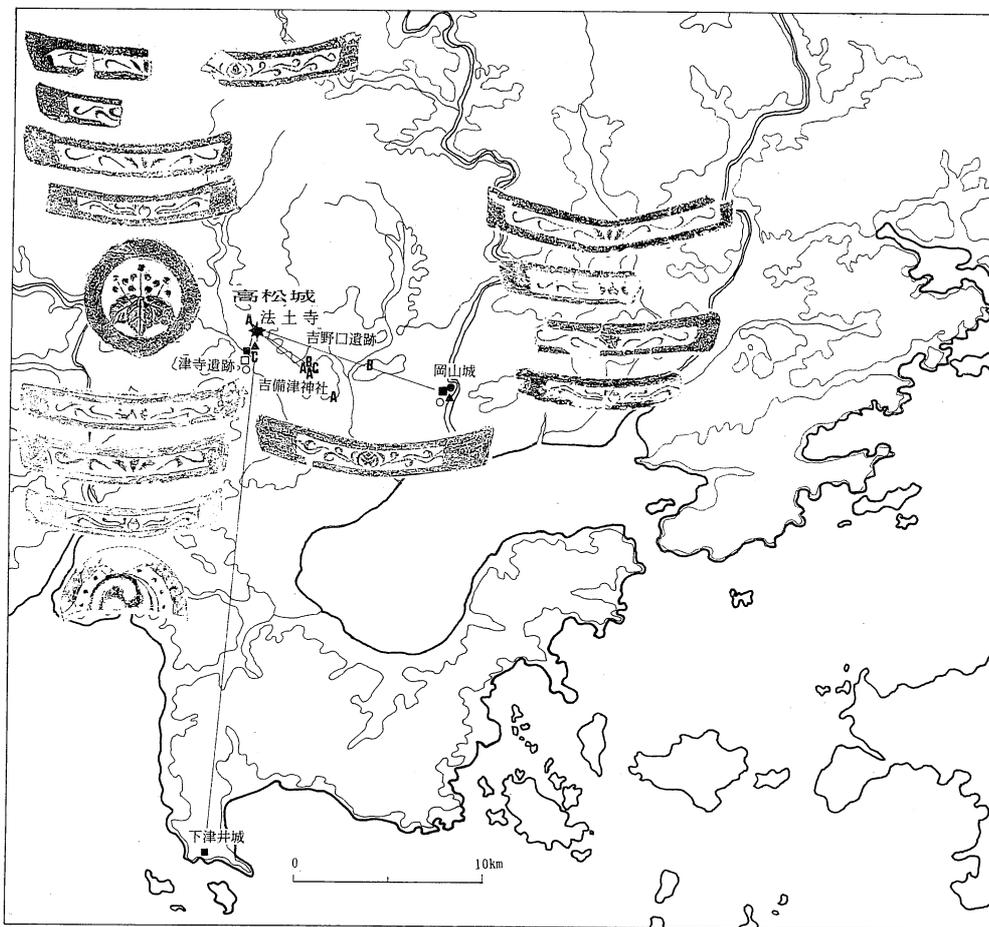
121は高松城三の丸域にある⑮妙玄寺墓地で採集された明石焼播鉢である。スリメの上端は口縁ナデ時に消し揃えられ、見込みは平坦で放射渦巻き文スリメのみが施され、底面には焼成時の砂が付着し、備前焼に対して砂粒が多くて焼成温度も低そうという、明石焼の特徴⁽¹⁸⁾をよく示している。

122は、透明度の低い明赤灰色の釉薬をかけた高台付きの播鉢で、⑯岡山市高松稲荷の大窪越えの道筋に臨む民家から林氏が譲り受けられたものである。産地は不詳であるが、胎土や釉薬の特徴などから、東日本系のもものとみられる。形態なども含めて幕末から近代のものである。

123は、土師質の粘土板組合せ造りの土製品で、完形品であることから伝世物とみられる。⑰岡山市三手もしくはその他の地で採集されたもので、大雑把な形からは薬研の可能性が考えられるが、土師質であることと、断面形や使用時の安定性の問題からして、薬研とするには疑問が残る。むろん、そうした使用痕もない。

3. 高松城の瓦をめぐる

瓦のうち、もっとも古相を示すもののひとつに30と参考1の弓矢に冥加文の軒平瓦がある。この文様の瓦はいまのところ高松城でしか確認されておらず、玉井伊三郎氏は天正3～天正10(1575～1582)年の清水宗治期に属する瓦として「高松城の瓦としては洵に相應しく、清水宗治の尽忠を偲ばせる。」⁽¹⁹⁾と記述された。瓦当側区の広さ狭さや作りの粗雑さ丁寧さは、確かに室町後期まで遡らせうものではないし、宇喜多秀家の岡山城の瓦が盛んに作られた文禄年間(1592～1596)まで下るものでもない。したがって天正頃のものと考えてよさそうであるが、天正10年より古いと言い切れるかどうかは、清水宗治に結びつけたくなる文様の特殊性を抜きにすれば、微妙である。



第16図 高松城の瓦の同范関係

A軒平参考2 B軒丸参考7 C鳥袞51・軒丸67
 ●軒平参考4 ▲軒平31 ■軒平32 ○軒平参考6
 □軒丸参考8

ところで、弓矢冥加文軒平瓦の平瓦凹部には布目痕が残っており、その下地にコビキA痕が微かに観察できる個体がある。これまた高松城の瓦のなかでの古い要素と言えるのであるが、この技法を含めて胎土・焼成の特徴が弓矢冥加文軒瓦と共通する高松城の軒平瓦に参考2がある。この中心飾宝珠の軒平瓦については、瓦范の左右を切り詰め宝珠に少し手を加えた新しい段階の同范瓦が、慶長14(1609)年の吉野口遺跡や慶長17(1612)年の吉備津神社御釜殿、それに二次的流用品であるが法土寺(岡山市平山)や岡山市東花尻の天満宮などで知られている。それらは、もはや平瓦部凹面に布目を残さず、コビキBの軒丸瓦と組み合わせることが判っているのに対し、高松城の参考2は平瓦凹面には布目とともにコビキA痕が観察でき、瓦范の改変から判る製作時期の新古と技法の変化が対応している。その点では、参考2は確実に慶長14年より古いといえるのであるが、参考2を含めたこうした同じ瓦范による一連の軒平瓦は、吉備津神社御釜殿での共存鬼瓦銘や分布から、吉備津神社に庇護されて門前の宮内にあった瓦師の藤原五郎左衛門の製品である事が判っている⁽²⁰⁾。

したがって、技法・胎土・焼成の特徴が共通する弓矢冥加文軒平瓦も、吉備津宮内の製品である可能性が高い。確かに清水宗治と吉備津神社の関係は深く、太刀を奉納したり、毛利方の武将として舞台の建設や社領の検地を行ったことを示す文書も残されている。そうした吉備津神社との関係に基づいて、社家の内である宮内の瓦師に特殊な製品を焼かせて高松城本丸の一画の特別な建物に葺いたと考えるもおかしくはない。しかし、宗治に続く城主の花房正成にしても、近隣の吉備津神社との関わりは当然あったはずで、主君の宇喜多秀家が毛利氏に代わる当地の領主として社殿の寄進を行った事実もある。弓矢冥加文軒平瓦は、吉備津宮内と結びつくと展望が開けたとしても、対応城主は清水宗治・花房正成の振幅のなかでけっきょく限定できないのが現状であるが、弓矢に冥加という特殊な文様は、城主の強い自己主張の表れとしても、それは吉備津神社への信仰や祭事との関わりでなされ

た可能性が見えてくる。

参考2の軒平瓦のほうは、清水宗治というより続く花房正成の時期の可能性のほうが高そうである。というのは、天正14年(1586)の神護寺(笠岡甲弩)の資料など、天正半ば頃の宮内の瓦師の一般的な軒平瓦は、やはり平瓦部凹面に布目を残すものであるが、参考2に系譜的に先行する文様をもつ別の瓦範の製品であり、参考2の瓦範は天正14年以降に作られた可能性が浮かび上がるのである。

1573年 清水宗治	吉備津宮内・宮内? 瓦師製	岡山城下の瓦師製
1582年 花房正成	軒平30・参考1 軒平参考2 軒丸参考7	軒平参考4・参考5 軒丸46・60 丸41・42
1600年 花房職之	鳥衾51・軒丸67	軒平参考6 軒平31・57・58 軒平32・59 軒丸36・37・54・63 軒丸38・39・64・69 軒丸35、36、47、50、52、56 軒丸72・参考8 丸43・44

高松城採集瓦の製作時期想定表

高松城の瓦で、吉備津宮内の製品とみられる軒平瓦は、以上の二種のほかにはないが、軒丸瓦では参考7、51・67があり、いずれも吉備津神社御釜殿などに同範品が知られる。参考7は内面のコビキ痕がAで参考2の軒平瓦と組み合わせる可能性が強い。また、51は同範品の範の縦割れ傷の進行度から、吉野口遺跡の慶長14より新しく御釜殿の慶長17より古いことが判る。慶長14年にはすでに参考2を作った瓦範は左右を切り詰められているから、51と組み合わせる軒平瓦は参考2そのものではない。

それでは高松城の瓦の大多数を占める残りの瓦の産地と時期はどうであろうか。軒平瓦31・57・58(以下31ほかとする)の同範品は岡山城本丸中の段⁽²¹⁾(報告書掲載の遺物番号85、以下同じ)や津寺遺跡⁽²²⁾で、軒平瓦の32・59(以下32ほか)の同範品は岡山城本丸中の段(27)や同じく津寺遺跡、それに下津井城⁽²³⁾で、軒平瓦参考6の同範品が岡山城本丸中の段(64)や津寺遺跡で、軒平瓦参考4の同範品が岡山城本丸中の段(8b)で、軒丸瓦38・39・64・69(以下38ほか)の同範品は津寺遺跡で、軒丸瓦36・37・54・63(以下36ほか)の同範品とも思えるものが岡山城本丸中の段(590)で出土している。また、参考8の同範品とみられる桐文軒丸瓦は津寺遺跡出土しているし、類品は岡山城本丸中の段に複数知られている。これらの瓦は、高松城から南約2kmの津寺遺跡との関連が深い、総合的にみれば類品の分布や同範関係の重心が岡山城にあり、宇喜多秀家による岡山城建設に伴って文禄年間頃に編成されて江戸時代に引き継がれる岡山城下に付随する瓦師達を作ったと考えられるものである⁽²⁴⁾。いまのところ他遺跡との直接の同範関係が掲げられない他の高松城の瓦も、宮内産の可能性のある少数を除いたほとんどは、胎土・焼成の特徴の共通性も含めると、岡山城下の瓦師による可能性が高いものである。

さてその軒丸瓦では、36ほかや38ほかを初め、47・52・56などコビキ痕が判るものは多くがコビキBである。また高松城の31ほかと32ほかの軒平瓦は、数や法量から38ほかや36ほかの軒丸瓦との組み合わせるとみられ、コビキB期の製品と判断できる。このことは31ほかと32ほかの各同範品が津寺遺跡や岡山城本丸でもコビキBの軒丸瓦に伴うことにも合ってくる。またコビキ痕が判らない高松城参考8の桐文軒丸瓦についても、その類品は岡山城本丸中の段ではコビキB期の層位に伴っている。

岡山城下にいたとみられる瓦師達のコビキB技法への転換年代は、岡山城主が宇喜多秀家から小早川秀秋に替わった慶長5年が目安となることが判っている。したがって、高松城跡で採集されている瓦の大多数は、慶長5年以後のものとなる。とはいえ、これらの瓦の同範瓦は、岡山城では慶長年間半ばの層位に伴ったり、津寺遺跡では慶長後半～元和頃の唐津焼などに伴ったり、慶長7(1602)年を軸に考えられる下津井城に伴うことから、慶長年間のうち(1615以前)にある可能性は高い。すなわち、高松城で採集されている瓦の大多数は、関ヶ原合戦直後の花房職之による初期の高松陣屋期のものである。

それに先行する、少数派のコビキA期の瓦であってはじめて、清水宗治期、それに宇喜多秀家家中

の花房正成期に属する可能性をもつわけである。宮内産の可能性がある弓矢冥加文や参考2の軒平瓦、参考7の軒丸瓦などについては先に述べたとおりであるが、46・60の軒丸瓦、41・42の丸瓦、コビキ痕を残さないが文様から判断して33・61などは、花房正成期の可能性が高いといえよう。また、軒平瓦参考4・参考6の同範品は、岡山城本丸中の段ではコビキA期（宇喜多秀家期）から知られていて、高松城では花房正成期の可能性が考えられるが、参考6は津寺遺跡ではコビキB期に伴う気配で流動的である。同範品の知られない参考5は、花房正成・職之の振幅のなかで、どちらかといえば正成の方に部がありそうである。また、参考3は胎土と器面の炭素吸着が、他の瓦に対して特異で、宮内でも岡山城下でもない第三の産地の可能性が考えられ、脇区の狭さから清水宗治期の可能性もある。

さいごに、発掘調査⁽²⁵⁾での出土品や瓦の採集位置も含めてまとめておくと、清水宗治期の高松城に葺かれていたといえる確実な瓦はなく、弓矢冥加文軒平瓦などその可能性をもつものがあるが、それは本丸の南側の一画に限られ、しかも極めて少量である。仮に清水宗治期の高松城に瓦葺き建物があつたとしても、かなり限定的なものであつたに違いない⁽²⁶⁾。

天正10年を経て続く花房正成期の瓦もそう多くはないが指摘できる。弓矢冥加文が宗治期のものではないとすれば、この期の早い時期のものとなるが、むしろ主体的な瓦は、先に記した宮内産とみられる参考2と参考7の年代への見通し、もうひとつの瓦の供給先とみられる岡山城下の瓦師の成立年代の見通しからして、文禄年間が中心で、正成期の高松城の瓦葺き化はこの期に達成を遂げたといえよう。それは宇喜多秀家の岡山城が織豊系城郭への改造を果した段階にあたり、岡山城の西11kmの衛星的支城として高松城を位置づけた結果⁽²⁷⁾であろう。ぎゃくに言えば、宇喜多氏は天正10年の毛利氏からの高松城奪取後、西側前衛として高松城の軍事的先鋭化をはかったに違いないが、そのことが即、瓦葺き建物の大量投入には結びついていないということである。正成期の瓦はやはり本丸を中心に採集されている。少量は三の丸にも及んでいるが、後に妙玄寺・星友寺などの寺に関わつて古瓦として搬入された結果かもしれない。

高松城域で建物の瓦葺化が飛躍的に進んだのは、関ヶ原の合戦を経た花房職之期で、瓦の圧倒的多数がこの期に属す。当初この地に置かれたとみられる高松陣屋(居館・政治施設ほか)は、ほどなく岡山市高松原古才に移ることになるが、短期間に飛躍的に瓦葺き建物群が出現したことは疑いない。初期の高松陣屋は仮設的なものと思ひこみがちだが、この関ヶ原合戦直後の短期間こそ、家康によって領地を安堵された各大名が競つて城を作り、あるいは既存の城を大改造し、軍備を高めて、そこに一定の格式に基づく瓦葺き建物を林立させて、政治支配の拠点となした時期である。むろん花房職之は大名ではないが、そうした全国動向のなかで、この地がひとたびは陣屋と決まった以上、彼はその体を一気に作り上げるのに奔走したとしても不思議はない。その「陣屋」の実体は限りなく「城」に近かったに違はなく、職之は旗本とはいっても自立性を持った公認領主としての側面が強かつたともいえようし、逆にその制度的な意味での不相応が陣屋移転の断行に繋がるのかも知れない。その移転はすなわち高松城の城割りであり、その点本丸の発掘調査で職之期の瓦が堀底で捨石と混在していたのは象徴的である。また花房職之が、岡山城下の瓦師の製品を主体的に用いたのは、際近隣にあるが元来は社寺への供給を専らとして小規模な宮内の瓦師だけでは、同時多発的な瓦需要に対応できず、といって自前で瓦師を編成できる状況にもなく、自身にとつてもゆかりのある岡山という大規模産地に頼らざるを得なかつたためであろう。なお、職之の陣屋に関連して瓦葺き建物の整備がはかられた範囲は、本丸域については疑いないが、二の丸域と家中屋敷郭域は、採集遺物中に瓦がみあたらず、可能性が低そうである。ただ、家中屋敷郭は採集陶磁器でみるかぎり人が住んだ可能性がある。三の丸域にも瓦が多いが、妙玄寺・星友寺の創建や拡充年代とも関わつて、本丸から二次流入された瓦も相当あつたに違はなく、職之期での瓦葺き建物の有無や実体の究明は招来の発掘調査に委ねられる。

本稿は、林信夫氏の積年の蒐集活動の賜物であり、その全面協力があつてはじめてなしたものである。あらためて深く感謝申し上げます。また、備中高松城の発掘調査について出宮徳尚・根木修・高橋伸二の各氏の教示を、掲載遺物の実測・拓本には谷口光子・八木留利子の両名の助力を得た。

注

- 1) 林信夫編著1999 『備中高松城水攻の検証』
- 2) 玉井伊三郎1931 『吉備古瓦図譜』
- 3) 岡本寛久1992 「「水切り瓦」の起源と伝播の意義」『吉備の考古学的研究』(下) 近藤義郎編 山陽新聞社
- 4) 岡山県古代吉備文化財センター1997 『津寺遺跡4』日本道路公団中国支社岡山工事事務所・岡山県教育委員会
- 5) 葛原克人1987 「栢寺廃寺」『総社市史』考古資料編 総社市
- 6) 伊藤晃1986 富原北廃寺・富原遺跡『岡山県史』考古資料 岡山県
- 7) 森田克行1984 「IV 屋瓦」『撰津高槻城』高槻市教育委員会
- 8) 乗岡実1998 「吉備津神社御釜殿の瓦と宮内の瓦師」『岡山市埋蔵文化財調査の概要』1996年度岡山市教育委員会
- 9) 前掲7と同じ。
- 10) 乗岡実1997 「瓦について」『史跡岡山城跡本丸中の段発掘調査報告』岡山市教育委員会
- 11) 出宮徳尚・根木修1976 『備中高松城跡公園発掘調査概報』岡山市教育委員会。拓本は前掲1に掲載。
- 12) 前掲2と同じ。
- 13) 岡山市教育委員会1997 『史跡岡山城跡本丸中の段発掘調査報告』
- 14) 前掲8と同じ。
- 15) 岡山市教育委員会1995 『足守藩武家屋敷跡』岡山市教育委員会
- 16) 前掲2と同じ。
- 17) 乗岡実1996 「岡山市近郊における近世瓦の生産と流通」『岡山市の近世寺社建築』岡山市教育委員会
- 18) 稲原昭嘉1997 『明石播鉢の編年について』関西近世考古学研究会例会レジメ
乗岡実2000 「近世の備前焼播鉢とその類似品」『岡山市埋蔵文化財調査の概要』平成10年度 岡山市教育委員会
- 19) 前掲2と同じ。
- 20) 前掲8と同じ。
- 21) 前掲13と同じ。
- 22) 前掲4と同じ。
- 23) 倉敷市埋蔵文化財センター保管の山本慶一氏採集品や同センターの発掘出土品。
- 24) 前掲10と同じ。
- 25) 前掲11および岡山市教育委員会2000 『備中高松城三の丸跡発掘調査概報』
- 26) 林氏は前掲1で、弓矢冥加文軒平瓦について「あるいは城内に祀っていた宗治公外、尊敬する守護神の祠に使用した軒瓦」の可能性を提示されている。
- 27) 乗岡実2000 「中世山城の瓦三題」『吉備 されど吉備』古代吉備国を語る会

瓦観察表

番号	採集地	器種	部位・法量 (cm)	調整など	胎土	色調『新版標準土色帳』参照	焼成	時期・備考
1	大崎廃寺 (岡山市大崎)	平瓦	側端 厚さ2.5	凸面：縄目 凹面：布目 (7本/cm)	3mm以下の石英・長石 粒含む	器面：2.5Y7/2 断面芯：N5/	ふっう	古代 注記「奈良見」
2	大崎廃寺 (岡山市大崎)	平瓦	側端 厚さ2.3	凸面：縄目 凹面：布目、コビキ痕	3mm以下の石英・長石 粒含む	7.5YR6/6	不良 焼戻り?	古代 注記「奈良見」
3	大崎廃寺 (岡山市大崎)	平瓦	側端 厚さ2.6	凸面：縄目 凹面：布目 (6~7本/cm)	2mm以下の石英・長石 粒含む	10YR8/4	ふっう	古代 注記「大崎」
4	大崎廃寺 (岡山市大崎)	平瓦	側端 厚さ2.4	凸面：縄目 凹面：布目 (8本/cm)	3mm以下の砂粒多く含 む	2.5Y6/2	良好	古代 注記「奈良見」
5	大崎廃寺 (岡山市大崎)	平瓦	側端 厚さ2.5	凸面：格子 (辺0.3~0.6) 凹面：布目 (8本/cm)	1mm以下の砂粒含む	2.5Y7/3	ふっう	古代 注記「大崎」
6	津寺遺跡 (岡山市津寺)	平瓦	側端 厚さ1.7	凸面：縄目 凹面：布目 (5本/cm)	1mm以下の砂粒・鉄分 粒含む	7.5YR6/6	不良	古代、注記「津寺廃 寺 44.5.28日」
7	津寺遺跡 (岡山市津寺)	丸瓦	前端 幅17.8、高9.4、厚さ2.0	凸面：縦ナデ 凹面：布目 (7本/cm)	0.5mm以下の砂粒・鉄 分粒含む	2.5Y7/2	良好	古代、注記「津寺 加茂小学校 南西」
8	備中国分寺 (総社市上林)	丸瓦	尾部 丸瓦部厚さ1.9	凸面：縦ナデ 凹面：布目 (9本/cm)	3mm以下の石英粒含む	器面：N2/ 断面：2.5Y7/3	良好	古代 注記「備中国分寺」

9	備中国分寺 (総社市上林)	平瓦	前端・側端	凸面：不詳 凹面：布目 (11本/cm)	2.5mm以下の石英粒含む	2.5Y8/3	良好	古代 注記「備中国分寺」
10	総社市黒尾～ 東阿曾	丸瓦	ほぼ完形、全長43.0、 前端幅約13、同高10.8	凸面：縦ナデ 凹面：布目 (8本/cm)	2mm以下の砂粒含む	2.5YR4/1	良好	古代、注記「45.3.26 総社市黒尾 大井川 西出土 三手 渡辺 義夫先生」
11	栢寺廃寺 (総社市南溝手)	平瓦	側端 厚さ3.4	凸面：不詳 凹面：細布目	3mm以下の砂粒含む	器面：2.5Y7/ 断面芯：N4/	良好	古代 注記「加夜寺」
12	栢寺廃寺 (総社市南溝手)	平瓦	側端 厚さ2.4	凸面：格子 凹面：布目 (10本/cm)	1mm以下の砂粒僅かに 含む	2.5Y7/2	良好	古代、注記「加夜 寺 46.11.10」
13	栢寺廃寺 (総社市南溝手)	平瓦	側端 厚さ2.0～2.5	凸面：格子 (辺0.6～0.8) 凹面：布目 (10本/cm)	1mm以下の砂粒僅かに 含む	7.5YR6/6	やや不良	古代、注記「加夜 寺 46.11.10」
14	栢寺廃寺 (総社市南溝手)	平瓦	側端 厚さ2.8	凸面：粗格子？ 凹面：布目 (2～5本/cm)	1mm以下の砂粒僅かに 含む	7.5YR7/6	やや不良	古代 注記「加夜寺」
15	岡山市和井元？	平瓦	前端側端 厚さ2.5	凸面：縄目 凹面：布目 (8本/cm)、 コビキ	1mm以下の砂粒僅かに 含む	2.5YR6/1	良好	古代 注記「面家」
16	富原遺跡(駅？) (岡山市富原)	軒丸瓦	瓦当、瓦当径17.2、 瓦当厚3.7		1mm以下の砂粒僅かに 含む	N4/～N7/	良好	奈良前半、注記「南 津高廃寺 44.5.28日」
17	富原遺跡(駅？) (岡山市富原)	軒丸瓦	瓦当、瓦当径17.2、 瓦当厚3.7		1mm以下の砂粒僅かに 含む	N4/～N6/	良好	奈良前半、注記「南 津高廃寺 44.5.28日」
18	富原遺跡(駅？) (岡山市富原)	平瓦	前端側端 厚さ1.8	凸面：縄目 凹面：布目 (6～10本/cm)	1mm以下の砂粒僅かに 含む	N7/～N5/	良好	古代 注記「南津高」
19	富原遺跡(駅？) (岡山市富原)	平瓦	前端側端 厚さ1.8	凸面：縄目 凹面：布目 (9本/cm)	1mm以下の砂粒僅かに 含む	2.5GYR7/1	良好	古代、注記「南津高 43.8.26日」
20	富原遺跡(駅？) (岡山市富原)	平瓦	前端側端 厚さ1.5	凸面：縄目 凹面：布目 (8本/cm)	砂粒ほとんど含まない	N5/～N4/	良好	古代 注記「南津高」
21	富原遺跡(駅？) (岡山市富原)	平瓦	破片 厚さ2.0	凸面：格子 (辺1.2) 凹面：布目 (7本/cm)	砂粒ほとんど含まない	N4/～N6/	良好	古代 注記「南津高廃寺」
22	富原遺跡(駅？) (岡山市富原)	平瓦	側端 厚さ1.7	凸面：格子(辺1.0～1.12) 凹面：不詳	生地は細かいが7mm大 礫含む	10YR7/3～7/1	良好	古代 注記「南津高」
23	不詳	鬼瓦	側縁	表面：陽刻文様 裏面：ナデ	生地細かく0.5mm以下 の砂粒を僅かに含む	2.5Y7/3	やや不良	古代？、注記「妙玄 寺」
24	奈良東大寺 (奈良市)	平瓦	破片	凸面：三角格子 (辺3.6～2.5) 凹面：不詳	生地細かく0.5mm以下 の砂粒を僅かに含む	2.5Y7/4	良好	鎌倉、注記「奈良 東大寺 53.6.2」
25	不明	板状物	破片、厚さ2.5	両面とも同心円叩きの後 布目 (7本/cm)	生地細かく0.5mm以下 の砂粒を僅かに含む	2.5Y7/4	やや不良	古代？、注記なし
26	不明(岡山市 高松近隣の寺 社建築か)	軒丸瓦	完形	外面：縦ナデ、内面：コ ビキAの後布目 (13本/ cm)、横棧あり。尾部には 二次的に針金穴を穿孔。	生地細かく0.5mm以下 の砂粒を僅かに含む	器面：N4/～N2/ 断面：10YR6/1	良好	16C第3四半期～以 前 注記なし 27の軒平瓦とセット か
27	不明(岡山市 高松近隣の寺 社建築か)	軒平瓦	完形、全長33.1 瓦当幅24.2、瓦当高 4.8、平瓦部厚2.2	凸面：縦方向のケズリの ナデ 凹面：細布目を横方向ナ デ消し 瓦当上角 面取り。滑止め棧・ 突起	生地細かく0.5mm以下 の砂粒を僅かに含む	器面：N3/～N6/ 断面：N6/	良好	16C第3四半期～以 前 注記なし
28	福成寺跡 (岡山市平山)	鳥倉	瓦当部、瓦当径15.0	外面：縦ナデ 内面：コビキA痕	0.3mm以下の砂粒含む	器面：2.5Y6/2 ～N5/? N6 断面：N4/	やや不良	16C末～17C初め 注記「福成寺」
29	総社市黒尾	瓦質 土管	完形、全長29.2、前 部径13.6、後部径9.6	外面：縦ナデ 内面：コビキB痕、 細布目	1.5mm以下の鉄分粒含 む	器面：2Y7/2～ 5/1	良好	17C
30	高松城本丸 (岡山市高松)	軒平瓦	瓦当 瓦当高4.0	凸面：縦ナデ 凹面：細布目 (13本/cm) を一部向ナデ消し	生地細かく0.5mm以下 の砂粒を僅かに含む	器面：5Y7/2～ N3/ 断面：N6/	良好	天正頃、注記「55.11. 17日 歴史公園 横 ゲタ工事」[弓矢瓦]
31	高松城本丸 (岡山市高松)	軒平瓦	瓦当、瓦当幅19.8、 瓦当高4.0、平瓦厚1.2	凸面：縦ナデ 凹面：横ナデ	生地細かく0.5mm以下 の砂粒を僅かに含む	器面：5Y7/2～ N3/ 断面：5Y7/2	良好	17C初、 本丸出土を示す紙札 同包
32	高松城本丸 (岡山市高松)	軒平瓦	瓦当、瓦当幅22.0、 瓦当高3.5、平瓦厚1.2	凸面：縦ナデ 凹面：横ナデ	生地細かく0.5mm以下 の砂粒を僅かに含む	器面：5Y7/2～ 6/1 断面：5Y6/1	良好	17C初、 本丸出土を示す紙札 同包

33	高松城本丸 (岡山市高松)	軒丸瓦	瓦当		生地細かく、1mm以下の砂粒を僅かに含む	器面：7.5Y7/1 断面：7.5Y7/1	良好	16C末～17C初、 注記「本丸 49 3月 横田武司」
34	高松城本丸 (岡山市高松)	軒丸瓦	瓦当		生地細かく、1mm以下の砂粒を僅かに含む	器面：N7/ 断面：N7/	良好	16C末 注記「本丸」
35	高松城本丸 (岡山市高松)	軒丸瓦	瓦当	外面：縦ナデ 内面：コビキB痕	生地細かく、1mm以下の砂粒を僅かに含む	器面：5Y7/2～ N3/ 断面芯：N5/	良好	17C初 本丸出土を示す紙札 同包
36	高松城本丸 (岡山市高松)	軒丸瓦	瓦当 瓦当径13.6	外面：縦ナデ 内面：コビキB痕、細布目	生地細かく、0.5mm以下の砂粒を僅かに含む	器面：N5/～ N3/ 断面芯：N5/	良好	17C初 本丸出土を示す紙札 同包
37	高松城本丸 (岡山市高松)	軒丸瓦	瓦当 瓦当径13.6	外面：縦ナデ 内面：不詳	生地細かく、0.5mm以下の砂粒を僅かに含む	器面：5Y7/2 断面芯：N6/	良好	17C初、37と同範 注記「本丸北」
38	高松城本丸 (岡山市高松)	軒丸瓦	瓦当 瓦当径12.1		生地細かく、3mm以下の砂粒を僅かに含む	器面：2.5Y6/2 断面芯：N4/	良好	17C初、本丸出土を示す紙札同包
39	高松城本丸 (岡山市高松)	軒丸瓦	瓦当 瓦当径13.6	外面：縦ナデ 内面：コビキB痕、細布目	生地細かく、0.5mm以下の砂粒を僅かに含む	器面：2.5Y6/2 ～N5/ 断面芯：N5/	良好	17C初、本丸出土を示す紙札同包、38と同範
40	高松城本丸 (岡山市高松)	丸瓦	全長30.4、 前端幅14.6	外面：縦ナデ 内面：コビキA痕、細布目、 吊紐	生地やや粗く、2mm以下の砂粒を含む	器面：7.5Y7/2 ～N4/ 断面：7.5Y6/2	良好	16C後葉 注記「本丸出土」
41	高松城本丸 (岡山市高松)	丸瓦	前端幅14.8	外面：縄目を縦ナデで消す 内面：コビキA痕、細布目	生地やや粗く、1mm以下の砂粒を含む	器面：7.5Y7/1 ～5/1 断面：7.5Y6/1	良好	16C後葉 注記「本丸出土」
42	高松城本丸 (岡山市高松)	丸瓦	ほぼ完形、全長29.7	外面：縦ナデ 内面：コビキA痕、細布目、 吊紐	生地やや粗く、0.5mm以下の砂粒を含む	器面：7.5Y7/1 ～5/1 断面：7.5Y6/1	良好	16C後葉 注記「本丸出土」
43	高松城本丸 (岡山市高松)	丸瓦	下半部	外面：縦ナデ 内面：細布目、吊紐	生地やや粗く、0.5mm以下の砂粒を含む	器面：2.5Y7/2 ～5/1 断面：7.5Y7/3	良好	16C後葉 本丸出土を示す紙札 同包
44	高松城本丸 (岡山市高松)	丸瓦	下半部	外面：縦ナデ 内面：コビキB痕、粗布目	生地細かく、1mm以下の鉄分粒・砂粒を含む	器面：01YR6/4 ～6/1 断面芯：N5/	不良気味	16C後葉 本丸出土を示す紙札 同包
45	高松城本丸 (岡山市高松)	雁振?	稜線付近片	外面：縦ナデ 内面：ナデのち線刻	生地やや粗く、0.5mm以下の砂粒を含む	器面：5Y7/2 断面：5Y7/2	良好	16C末～17C初か 注記「本丸南」
46	高松城三の丸 (岡山市高松)	軒丸瓦	瓦当	外面：縦ナデ 内面：コビキA痕	生地細かく、0.5mm以下の砂粒を僅かに含む	器面：2.5Y7/3 断面：N5/	良好	16C後葉 注記「星友寺裏」
47	高松城三の丸 (岡山市高松)	軒丸瓦	瓦当	外面：縦ナデ 内面：コビキB痕	生地細かく、0.5mm以下の砂粒を僅かに含む	器面：7.5Y4/1 断面芯：7.5Y3/1	良好	17C初 注記「星友寺裏」
48	高松城三の丸 (岡山市高松)	軒丸瓦	瓦当		生地細かく、1mm以下の砂粒を僅かに含む	器面：5Y6/2 断面：5Y6/2	良好	16C末～17C初、 注記「妙玄寺」
49	高松城三の丸 (岡山市高松)	軒丸瓦	瓦当		生地細かく、1mm以下の砂粒・鉄分粒を僅かに含む	器面：10YR5/2 断面：10YR4/1	良好	16C末～17C初、 注記「妙玄寺」
50	高松城三の丸 (岡山市高松)	軒丸瓦	瓦当	外面：縦ナデ 内面：コビキB痕?	生地細かく、1mm以下の砂粒を僅かに含む	器面：2.5Y6/2 断面：2.5Y6/1	良好	17C初、 注記「星友寺裏」
51	高松城三の丸 (岡山市高松)	鳥衾瓦	瓦当	外面：縦ナデ 内面：コビキB痕不詳 (Bカ)	生地細かく、1mm以下の砂粒を含む	器面：2.5Y6/2 断面：N6/	良好	17C初、 注記「妙玄寺東側 43.8.25」
52	高松城三の丸 (岡山市高松)	軒丸瓦	瓦当	外面：縦ナデ 内面：コビキB痕	生地細かく、1mm以下の砂粒を僅かに含む	器面：5Y6/2 ～5/1 断面芯：5Y5/1	良好	17C初、 注記「妙玄寺 55. 3月」
53	高松城三の丸 (岡山市高松)	軒丸瓦	瓦当	外面：縦ナデ 内面：コビキ痕不詳	生地細かく、1mm以下の砂粒を僅かに含む	器面：2.5Y7/3 断面：2.5Y4/3	良好	17C初、 注記「妙玄寺」50と同範
54	高松城三の丸 (岡山市高松)	軒平瓦	瓦当		生地細かく、1mm以下の砂粒を僅かに含む	器面：2.5Y6/2 断面：2.5Y6/2	良好	17C初、 注記「妙玄寺」36・ 37と同範
55	高松城三の丸 (岡山市高松)	軒平瓦	瓦当		生地細かく、1mm以下の砂粒を僅かに含む	器面：2.5Y6/2 断面芯：2.5Y5/1	良好	17C初、 注記「妙玄寺」
56	高松城三の丸 (岡山市高松)	軒平瓦	瓦当	外面：縦ナデ 内面：コビキB痕	生地細かく、1mm以下の砂粒を僅かに含む	器面：7.5Y6/1 断面：7.5Y6/1	良好	17C初、 注記「三の丸妙玄寺」
57	高松城 (岡山市高松)	軒平瓦	瓦当	瓦当上角面取りなし	生地細かく、1mm以下の砂粒を僅かに含む	器面：2.5Y6/2 断面：N5/	良好	17C初、高松城を示す紙札同包、31と同範
58	高松城 (岡山市高松)	軒平瓦	瓦当	瓦当上角面取りなし	生地細かく、1mm以下の砂粒を僅かに含む	器面：N4/ 断面：7.5Y6/1	良好	17C初、高松城を示す紙札同包、31・57と同範

59	高松城 (岡山市高松)	軒丸瓦	瓦当	瓦当上角面取りなし59	生地細かく、1mm以下の砂粒を僅かに含む	器面：N4/～7.5Y6/1 断面芯：N4/	良好	17C初、高松城を示す紙札同包、32と同范
60	高松城 (岡山市高松)	軒丸瓦	瓦当	外面：縦ナデ 内面：コビキA痕、細目布	生地細かく、1mm以下の砂粒を僅かに含む	器面：N6/～N3/ 断面芯：N4/	良好	16C末、高松城を示す紙札同包
61	高松城 (岡山市高松)	軒丸瓦	瓦当		生地細かく、1mm以下の砂粒を僅かに含む	器面：7.5Y6/1～N4/ 断面芯：N7/	良好	16C末、高松城を示す紙札同包
62	高松城 (岡山市高松)	軒丸瓦	瓦当	外面：縦ナデ 内面：コビキA痕	生地細かく、1mm以下の砂粒を僅かに含む	器面：N6/～N5/ 断面芯：N5/	良好	16C末、高松城を示す紙札同包
63	高松城 (岡山市高松)	軒丸瓦	瓦当	外面：縦ナデ 内面：コビキB痕	生地細かく、1mm以下の砂粒を僅かに含む	器面：5Y7/2 断面：5Y7/2	良好	17C初、高松城を示す紙札同包、36・37・54と同范
64	高松城 (岡山市高松)	軒丸瓦	瓦当	外面：縦ナデ 内面：コビキB痕	生地細かく、1mm以下の砂粒を僅かに含む	器面：N5/～N4/ 断面：N7/	良好	17C初、高松城を示す紙札同包、38・39と同范
65	高松城 (岡山市高松)	軒丸瓦	瓦当		生地細かく、1mm以下の砂粒を僅かに含む	器面：N5/ 断面：N4/	良好	16C末～17C初、高松城を示す紙札同包
66	高松城 (岡山市高松)	軒丸瓦	瓦当		生地細かく、1mm以下の砂粒を僅かに含む	器面：N5/ 断面：N7/	良好	17C初、高松城を示す紙札同包
67	高松城 (岡山市高松)	軒丸瓦	瓦当		生地細かく、1mm以下の砂粒を僅かに含む	器面：5Y5/1 断面芯：5Y4/1	良好	17C初、高松城を示す紙札同包、51と同范
68	高松城 (岡山市高松)	軒丸瓦	瓦当		生地細かく、1mm以下の砂粒を僅かに含む	器面：N5/ 断面芯：N4/	良好	17C初、高松城を示す紙札同包
69	高松城 (岡山市高松)	軒丸瓦	瓦当		生地細かく、1mm以下の砂粒を僅かに含む	器面：N4/ 断面芯：N5/	良好	17C初、高松城を示す紙札同包、38・39・64と同范
70	高松城 (岡山市高松)	軒丸瓦	瓦当		生地細かく、1mm以下の砂粒を僅かに含む	器面：N6/ 断面芯：N6/	良好	16C末～17C初、高松城を示す紙札同包
71	高松城 (岡山市高松)	軒丸瓦	瓦当	外面：縦ナデ 内面：コビキ痕不詳(Bカ)	生地細かく、1mm以下の砂粒を僅かに含む	器面：7.5Y5/1 断面：7.5Y7/1	良好	16C末～17C初、高松城を示す紙札同包
72	高松城 (岡山市高松)	軒丸瓦 (桐文)	瓦当	外面：縦ナデ 内面：コビキ痕不詳(Bカ)	生地細かく、1mm以下の砂粒を僅かに含む	器面：7.5Y5/1 断面：7.5Y4/1	良好	16C末～17C初、高松城を示す紙札同包
73	高松城 (岡山市高松)	平瓦	側端 厚さ1.8	凸面：格子(辺0.2～0.4) 凹面：布目(12本/cm)	生地細かく、1mm以下の砂粒を僅かに含む	器面：N3/ 断面：7.5Y6/1	良好	14～15C?高松城を示す紙札同包
74	高松城 (岡山市高松)	雁振瓦	前側端 厚さ2.6	凸面：縦ナデ 凹面：コビキA痕、 細布目(11本/cm)	生地細かく、1mm以下の砂粒を含む	器面：7.5Y6/2 ～N5/ 断面：N5/	良好	16C末、高松城を示す紙札同包
75	高松城 (岡山市高松)	鬼瓦 (沢瀉?)	中央下縁 (棟受部)	板状・裏面くり込み	生地細かく、1mm以下の砂粒を僅かに含む	器面：N5/ 断面：N5/	良好	16C末～17C初、高松城を示す紙札同包
76	高松城 (岡山市高松)	鬼瓦 (沢瀉?)	中央下縁 (棟受部)	板状・裏面くり込み	生地細かく、1mm以下の砂粒を僅かに含む	器面：N5/ 断面：N5/	良好	16C末～17C初、高松城を示す紙札同包
77	門満寺 (総社市南溝手)	軒丸瓦 (「門」字)	完形。全長30.3、 瓦当径15.6	外面：縦ナデ 内面：コビキB痕、細布目・ 吊紐痕	生地細かく、1mm以下の砂粒を僅かに含む	器面：7.5Y6/2 断面：7.5Y8/1	ややあまい	17世紀初、注記なし(採集地は林氏の覚え)
78	岡山市 高松近隣	軒丸瓦 (珠文部 大字字)	瓦当。瓦当径12.5、 瓦当厚1.6		生地やや粗く、2mm以下の砂粒を含む	器面：7.5Y3/1 断面：7.5Y3/1	良好	17世紀、注記なし
79	大岡山市高松 近隣の寺社建築	軒丸瓦	完形。全長38.3、 瓦当径13.8、 瓦当厚2.3	外面：縦ナデ 内面：コビキB痕、細布目	生地やや粗く、2mm以下の砂粒を含む	器面：N5/～N3/ 断面：N6/	良好	17世紀末～18世紀前葉、注記なし
80	大崎妙見堂 (岡山市大崎)	軒平瓦 (「見」字)	完形。全長33.3、 瓦当径14.0、 瓦当厚2.1	外面：縦ナデ。瓦当・体部に キラコ 内面：コビキB痕、細板タ タキ玉縁部2穴針金 穴	生地細かく、1mm以下の砂粒を含む	器面：N3/ 断面：N5/	良好	18世紀後葉～19世紀、注記なし(採集地は林氏の覚え)
81	備中国分寺 (総社市上林)	軒丸瓦 (宝輪カ)	完形。全長36.8、 瓦当径14.0、 瓦当厚2.0	外面：縦ナデ。瓦当・体部に キラコなし。 内面：コビキB痕、細布目。 玉縁部に二次穿孔1 穴針金穴	生地細かく、0.5mm以下の砂粒を僅かに含む	器面：N2/～7.5Y6/1 断面：7.5Y6/1	良好	17世紀終葉～18世紀前葉、注記なし(採集地は林氏の覚え)
82	岡山市高松近 隣の寺社建築	軒丸瓦 (「卍」字)	完形。全長37.5、 瓦当径14.8、 瓦当厚2.4	外面：縦ナデ。瓦当・体部に キラコ 内面：コビキB痕、細板タ タキ玉縁部2穴針金 穴	生地細かく、0.5mm以下の砂粒を僅かに含む	器面：N3/ 断面芯：N3/	良好	18世紀後葉～19世紀、注記なし
83	岡山市高松近 隣の寺社建築	軒丸瓦 (「卍」字)	瓦当。瓦当14.6、 瓦当厚2.5	外面：瓦当キラコ	生地細かく、0.5mm以下の砂粒を僅かに含む	器面：N3/ 断面芯：N6/	良好	18世紀後葉～19世紀、注記なし。82と同范

84	岡山市高松近隣の寺社建築	軒丸瓦 (菊紋)	瓦当。瓦当径13.1、 瓦当厚1.8	外面：瓦当キラコ	生地細かく、0.5mm以下の砂粒を僅かに含む	器面：N3/ 断面芯：2.5GY 6/2	良好	18世紀後葉～19世紀、 注記なし
85	本隆寺 (岡山市新庄上)	軒丸瓦 (三ツ雁)	瓦当 瓦当径12.8、 瓦当厚2.1	外面：瓦当キラコ	生地細かく、0.5mm以下の砂粒を僅かに含む	器面：N3/ 断面：N7/	良好	18世紀後葉～19世紀、 注記不詳(採集地は 林氏の覚え)
86	岡山市高松近隣の寺社建築	軒丸瓦	完形。全長33.5、 瓦当径13.8、 瓦当厚2.0	外面：縦ナデ。瓦当・体部 キラコ 内面：コビキB痕、細板タ タキ、玉縁部2穴針金穴	生地細かく、0.5mm以下の砂粒を僅かに含む	器面：N3/ 断面：2.5GY6/2	良好	18世紀後葉～19世紀、 注記なし
87	岡山市高松近隣の寺社建築	軒丸瓦 (五七桐)	完形。全長35.7、 瓦当径14.0、 瓦当厚2.7	外面：縦ナデ。瓦当・体部 キラコ 内面：コビキ痕不詳、 玉縁部2穴針金穴	生地細かく、0.5mm以下の砂粒を僅かに含む	器面：N2/ 断面：10GY/1	良好	19世紀～近代、 注記なし
88	吉備津神社 (岡山市吉備津)	軒丸瓦 (五七桐)	瓦当 瓦当径14.3 瓦当厚1.8	瓦当キラコ、 瓦当裏面「右五」線刻	生地細かく、0.5mm以下の砂粒を僅かに含む	器面：N2/ 断面：N3/	良好	18世紀後葉～19世紀、 注記「吉備津神社」
89	高松城域 (岡山市高松)	軒丸瓦 (五七桐)	瓦当 瓦当径16.3 瓦当厚3.0	瓦当キラコ	生地やや砂質で、0.5mm以下の砂粒を含む	器面：N3/ 断面：N6/	良好	18世紀後葉～19世紀、 注記「高松城跡 横 田英治」
90	岡山市高松近隣の寺社建築	軒丸瓦 (五七桐)	完形。全長45.1、 瓦当径14.5、 瓦当厚2.2	外面：縦ナデ。瓦当・体部 キラコ 内面：コビキB痕、細板タ タキ、玉縁部2穴針金穴	生地細かく、0.5mm以下の砂粒を僅かに含む	器面：N3/～4/ 断面：2.5GY7/2	良好	19世紀～近代、 注記なし
91	岡山市高松近隣の寺社建築	軒平瓦	完形。全長25.8、 瓦当幅24.1、 瓦当高3.6	凹面：横ナデ 凸面：縦ナデ、 瓦当面キラコ	生地細かく、0.5mm以下の砂粒を僅かに含む	器面：2.5Y6/3 ～N4/ 断面：N6/	良好	18世紀後半、 注記なし
92	岡山市高松近隣の寺社建築	軒平瓦	完形。全長28.5、 瓦当幅27.2、 瓦当高4.4	凹面：横ナデ 凸面：縦ナデ、 瓦当面キラコ	生地細かく、0.5mm以下の砂粒を僅かに含む	器面：7.5Y7/1 ～4/1 断面：N6/	良好	18世紀後半、 注記なし
93	岡山市高松近隣の寺社建築	軒平瓦	完形。全長24.9、 瓦当幅23.2、 瓦当高3.7	凹面：横ナデ 凸面：縦ナデ、 瓦当面キラコなし?	生地細かく、0.5mm以下の砂粒を僅かに含む	器面：N3/ ～N/6 断面：7.5Y7/1	良好	18世紀後半、 注記なし
94	岡山市高松近隣の寺社建築	軒平瓦	ほぼ完形。 全長24.5、 瓦当幅22.1、 瓦当高3.9	凹面：横ナデ 凸面：縦ナデ、 瓦当面キラコ	生地細かく、1mm以下の砂粒を含む	器面：7.5Y4/1 断面芯：5Y7/2	良好	18世紀後葉～19世紀、 注記なし
95	岡山市高松近隣の寺社建築	軒棧瓦	完形。全長26.5、 瓦当幅24.3、 瓦当高4.1	凹面：横ナデ 凸面：縦ナデ、 瓦当面・平瓦部上面 キラコ。尾部針金穴 2穴二次穿孔	生地細かく、0.5mm以下の砂粒を僅かに含む	器面：N5/～10 Y6/1 断面：N6/	良好	18世紀後葉～19世紀、 注記なし
96	岡山市高松近隣の寺社建築	軒棧瓦	完形。全長28.0、 瓦当幅28.1、 瓦当高5.1	凹面：横ナデ 凸面：縦ナデ、瓦当面・平 瓦部上面キラコ。尾 部針金穴1穴穿孔	生地細かく、0.5mm以下の砂粒を僅かに含む	器面：N3/～10 Y6/1 断面：N6/	良好	18世紀後葉～19世紀、 注記なし
97	岡山市高松近隣の寺社建築	軒棧瓦	完形。全長26.6、 瓦当幅25.6、 瓦当高4.4	凹面：横ナデ 凸面：縦ナデ、瓦当面・平 瓦部上面キラコ。尾 部針金穴1穴穿孔		器面：N3/	良好	18世紀後葉～19世紀、 注記なし
98	岡山市高松近隣の寺社建築	軒棧瓦	完形。全長26.4、 瓦当幅25.1、 瓦当高4.5	凹面：横ナデ 凸面：縦ナデ、瓦当面・平 瓦部上面キラコ。尾 部針金穴2穴穿孔	生地細かく、0.5mm以下の砂粒を僅かに含む	器面：N2/～3/ 断面：N6/	良好	18世紀後葉～19世紀、 注記なし
99	岡山市高松近隣の寺社建築	軒棧瓦	完形。全長30.1、 瓦当幅28.8、 瓦当高5.2	凹面：横ナデ 凸面：縦ナデ、瓦当面・平 瓦部上面キラコ。尾 部針金穴2穴穿孔	生地細かく、0.5mm以下の砂粒を僅かに含む	器面：N3/ 断面：N6/	良好	18世紀後葉～19世紀、 注記なし
100	岡山市高松近隣の寺社建築	棟込瓦 (菊丸)	完形。全長8.1、 瓦当径7.3、 瓦当厚1.7、	外面：縦ナデ	生地細かく、0.5mm以下の砂粒を僅かに含む	器面：N3/ 断面：N6/	良好	18世紀後葉～19世紀、 注記なし
101	岡山市高松近隣の寺社建築	棟込瓦 (菊丸)	完形。全長7.4、 瓦当径7.2、 瓦当厚1.4	外面：縦ナデ	生地細かく、0.5mm以下の砂粒を僅かに含む	器面：N3/ 断面：N6/	良好	18世紀後葉～19世紀、 注記なし
102	岡山市高松近隣の寺社建築	棟込瓦 (組合せ 菊丸)	完形。全高6.3、 奥行長9.2	外面：縦ナデ、瓦当面・体 部キラコ	生地細かく、0.5mm以下の砂粒を僅かに含む	器面：2.5GY7/2 ～N4/ 断面：2.5GY7/2	良好	18世紀後葉～19世紀、 注記なし
103	鳥取城 (鳥取市)	軒丸瓦 (揚羽)	瓦当		生地細かく、0.5mm以下の砂粒を僅かに含む	器面：N5/ 断面：N6/	良好	17C中葉～18C、 注記「鳥取城 44. 1月」

陶磁器観察表

番号	採集地	器種	部位・法量 (cm)	調整など	胎土	色調『新版標準土色帳』参照	焼成	時期・備考
104	高松城本丸 (岡山市高松)	土師質土器 播鉢	口縁部～体部。 復元口径36	内面：横ナデ。クシスリ メ 外面：横ナデ。	生地が細かく、0.5mm 以下の白色砂粒を僅か に含む	器面：10YR6/6 断面芯：N3/	良好	注記「本丸東 44.3」
105	高松城本丸 (岡山市高松)	亀山焼系？ 播鉢	口縁。 復元口径29	内面：横ナデ。クシスリ メ 外面：横ナデ。	生地が細かく、3mm以 下の礫粒を僅かに含む	器面：10YR7/4 断面芯：N3/	良好	注記「稔 40.2月」
106	高松城本丸 (岡山市高松)	備前焼 播鉢	底部	内面：ろくろナデ。クシ スリメ8条 外面：ろくろナデ。	生地が非常に細かく (田土)、礫粒を含まな い	器面：2.5YR3/1 ～2.5Y4/1 断面表皮：10BG 5/1 断面芯：5 YR3/3	良好	15c～16c中葉、 注記「三十六、三、 二日 本丸東南 横田 宗夫」「佳仁」
107	高松城本丸 (岡山市高松)	備前焼 播鉢	底部	内面：ろくろナデ。クシ スリメ8条=放射 +ナナメ・見込× 形 外面：ろくろナデ。	生地は細かいが、3mm 以下の礫粒を含む	器面：2.5YR3/4 断面：2.5YR4/1	良好	16c末～17c初、 注記「48.11.20. 芝 付ノ際 横田信夫」
108	高松城二の丸 (岡山市高松)	備前焼 播鉢	底部	内面：ろくろナデ。クシ スリメ9条。 外面：ろくろナデ。	生地は細かいが、3mm 以下の礫粒・砂粒を含 む	器面：10YR5/3 ～5Y5/1 断面：2.5YR5/3	良好	15c～16c後半、 注記「和暉 40.2」
109	高松城三の丸 (岡山市高松)	亀山焼？ 播鉢	体部下半	内面：ろくろナデ。クシ スリメ 外面：ナデ	生地は細かいが、2mm 以下の砂粒を含む	器面：10YR8/2 断面：7.5Y2/1	良好	注記「戸方」
110	高松城三の丸 (岡山市高松)	備前焼 播鉢	口縁～底部。 復元口径27、器 高11.0	内面：ろくろナデ。クシ スリメ12条=放射 +ナナメ・見込も、 外面：ろくろナデ。	生地は細かく、1mm以 下の白色砂粒を僅かに 含む	器面：5YR2/2 ～10Y3/1 断面：2.5YR3/3	良好	16c後葉(天正中葉)、 注記「戸方」
111	高松城家中屋 敷郭(岡山市 高松)	備前焼 播鉢	口縁。 復元口径27	内面：ろくろナデ。クシ スリメ9条。 外面：ろくろナデ。	生地が細かく、0.5mm 以下の白色砂粒を僅か に含む	器面：10R4/3 ～5YR4/1 断面：N6/	良好	14c後葉、「中須賀 和氣微雄」の紙札
112	高松城家中屋 敷郭(岡山市 高松)	土師質土器 播鉢	口縁。	内面：横ハケメ後クシス リメ 外面：ナデ	生地が細かく、0.5mm 以下の白色砂粒を僅か に含む	器面：7.5YR7/2 断面：5Y2/2	良好	「中須賀 和氣微雄」 の紙札
113	高松城家中屋 敷郭(岡山市 高松)	備前焼 播鉢	底部～体部。	内面：ろくろナデ。クシ スリメ8条	生地が細かく、0.5mm 以下の白色砂粒を僅か に含む	器面：5YR4/1 断面：2.5YR3/3	良好	15～16c、「中須賀 和氣微雄」の紙札
114	高松城家中屋 敷郭(岡山市 高松)	備前焼 播鉢	口縁～体部。 復元口径22.5、 器高8.6	内面：ろくろナデ。クシ スリメ12条	生地が非常に細かく (田土)、0.5mm以下の 白色砂粒を僅かに含む	器面：N5/ 断面：2.5YR3/3	良好	16c前半、「中須賀 和氣微雄」の紙札
115	高松城家中屋 敷郭(岡山市 高松)	備前焼 播鉢	体部。	内面：ろくろナデ。クシ スリメ8条	生地が細かく、0.5mm 以下の白色砂粒を僅か に含む	器面：10R4/2 断面表皮：N6/ 断面芯：10R4/2	良好	15～16c、「中須賀 和氣微雄」の紙札
116	高松城家中屋 敷郭(岡山市 高松)	備前焼 播鉢	口縁。 復元口径26	内面：ろくろナデ。クシ スリメ=放射+ナ ナメ	生地が細かく、1mm以 下の白色砂粒を僅かに 含む	器面：5B4/1～ 5R6/1 断面：2.5YR3/3	良好	16c末、「中須賀 和氣微雄」の紙札
117	高松城家中屋 敷郭(岡山市 高松)	備前焼 播鉢	口縁。 復元口径27	内面：ろくろナデ。クシ スリメ12条	生地が細かく、1mm以 下の白色砂粒を僅かに 含む	器面：10R4/2 断面：10R5/1	良好	17C中葉～後葉、「中 須賀 和氣微雄」の 紙札
118	高松城家中屋 敷郭(岡山市 高松)	備前焼 德利	胴下部	内面：ろくろナデ。	生地が細かく、0.5mm 以下の白色砂粒を僅か に含む	器面：5PB5/1 断面：5R5/1	良好	「中須賀 和氣微雄」 の紙札
119	高松城家中屋 敷郭(岡山市 高松)	土師質土器 小皿	ほぼ完形。 口径9.4、 器高1.5	内面：ろくろナデ。 底部：イトキリ	生地がやや砂質である が、砂粒は含まない	器面：7.5Y8/1 断面：7.5Y8/1	良好	16C末～17C初、「中 須賀 和氣微雄」の 紙札
120	岡山市高松 字中島	備前焼 播鉢	口縁～体部。 復元口径31	内面：ろくろナデ。クシ スリメ7条 外面：体部下半ヘラケズ リ。火罨。	生地はやや砂質で、 0.5mm以下の白色砂粒 を含む	器面：2.5YR4/3 ～3/2 断面：2.5YR/R 5/4	良好	17世紀後葉～18世紀 前葉 注記「関野 47.4」
121	妙玄寺墓地 (岡山市高松)	明石焼 播鉢	口縁～体部。 復元口径29 器高10.5	内面：ろくろナデ。クシ スリメ13条、見込 渦巻スリメ 外面：ろくろナデ。底面 砂付着	生地は砂質で、2mm以 下の白色砂粒を含む	器面：10RY4/4 ～2.5YR6/6 断面：10R5/6	良好	18世紀後葉～19世紀、 注記「戸方」
122	岡山市高松稲 荷大窪越 (民家伝世品)	施釉陶器 播鉢	完形。 口径31.5、 器高15.1	内面：ろくろナデ。クシ スリメ27条。 外面：ろくろナデ。高台ケ ズリだし。	生地細かく、0.5mm以 下の白色砂粒を僅か に含む	器面生地：10Y R7/3、 断面：10R6/1、 釉薬：2.5YR7/1	良好	19世紀～近代、注記 「大窪越 大久保」
123	岡山市三手？	土師質土製 品	完形。 全長17.0、器高 6.2、幅4.2	粘土板組合せ造り	生地は砂質で、0.5mm 以下の白色砂粒を含む	器面：2.5Y5/2	良好	注記「三手 渡辺義 夫」

唐人塚古墳石室の測量調査

草原 孝典

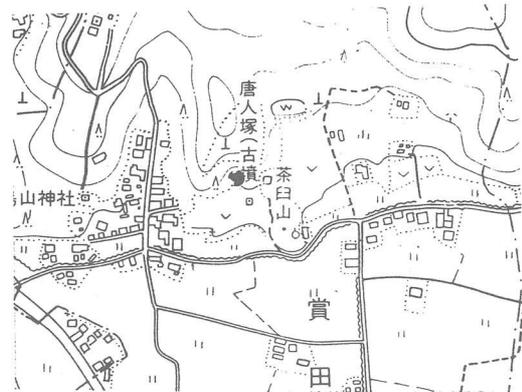
1. はじめに

唐人塚古墳は、岡山市賞田に所在する。ここは、岡山市街地を南北に貫流する旭川の形成した旭東平野の北端であり、背後には最高所の標高が257.1mの竜ノ口山が存在する。旭東平野部では、百間川遺跡群、雄町遺跡、乙多見遺跡などの大規模な集落遺跡が、弥生時代以来、多数形成されている。また、竜ノ口を含めた平野周囲の山塊には、多数の舶載鏡を出土した備前車塚古墳や、全長165mの大形前方後円墳である金蔵山古墳をはじめとした古墳が多数認められ、竜ノ口山の山頂付近には後期の群集墳も存在する。さらに、古代寺院も3箇所あり、なかでも唐人塚古墳の東側にある賞田廃寺は、創建が飛鳥期までさかのぼり、さらに畿内中央の宮都や寺院に用いられる凝灰岩製の基壇が備わっていることが確認されている⁽¹⁾。また、備前国府もこの平野に存在していたと考えられている。つまり、旭東平野は弥生時代以来の遺跡の集中地であり、吉備地域の中核地の1つであったことは疑いなく、しかも畿内中央との関係が極めて親密であったことがうかがわれるのである。唐人塚古墳も巨石を用いた巨石墳であるとともに、その内部には畿内を中心に分布する播磨産竜山石製の刳抜式石棺があり⁽²⁾、畿内との関係が想起される。さらに、隣接する賞田廃寺との関係も指摘されており⁽³⁾、古墳被葬者と寺院建立者との関係を示す事例とも考えられる。具体的な氏としては、郡名とも重なる上道氏が考えられる。上道氏は、奈良時代中頃に上道朝臣斐太都が中央官人として活躍しており、中央とこの地が密接な関係であったことがうかがわれる。

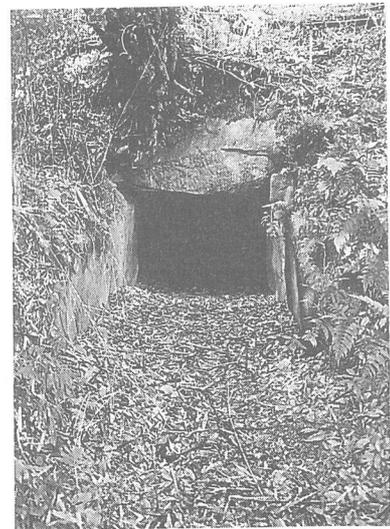
以上のように、唐人塚古墳は規模的・歴史的にも重要な遺跡であり、石室の測量を実施して資料化を図ることとした次第である。以下、その調査成果を報告する。なお、測量調査は、2000年5月1日と2日におこなった。

2. 周辺地形

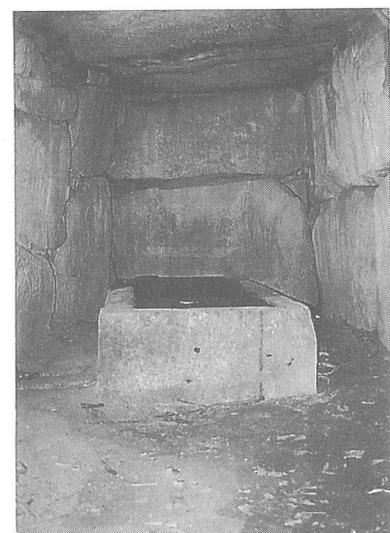
本古墳は、竜ノ口山の山裾で、幅が30~50mほどの小支尾根に挟まれた小さな谷状地形の最奥部のやや東寄りに位置している。現状では古墳の墳丘は明確でなく、段状に整形された果樹園や竹林の一角に横穴式石室が口を開いているという景観である。かつて公表された墳丘測量図⁽⁴⁾では、石室上に墳丘らしきコンタを読み取ることができるが、現況は平坦で天井石の一部も地表に露出している。おそらく



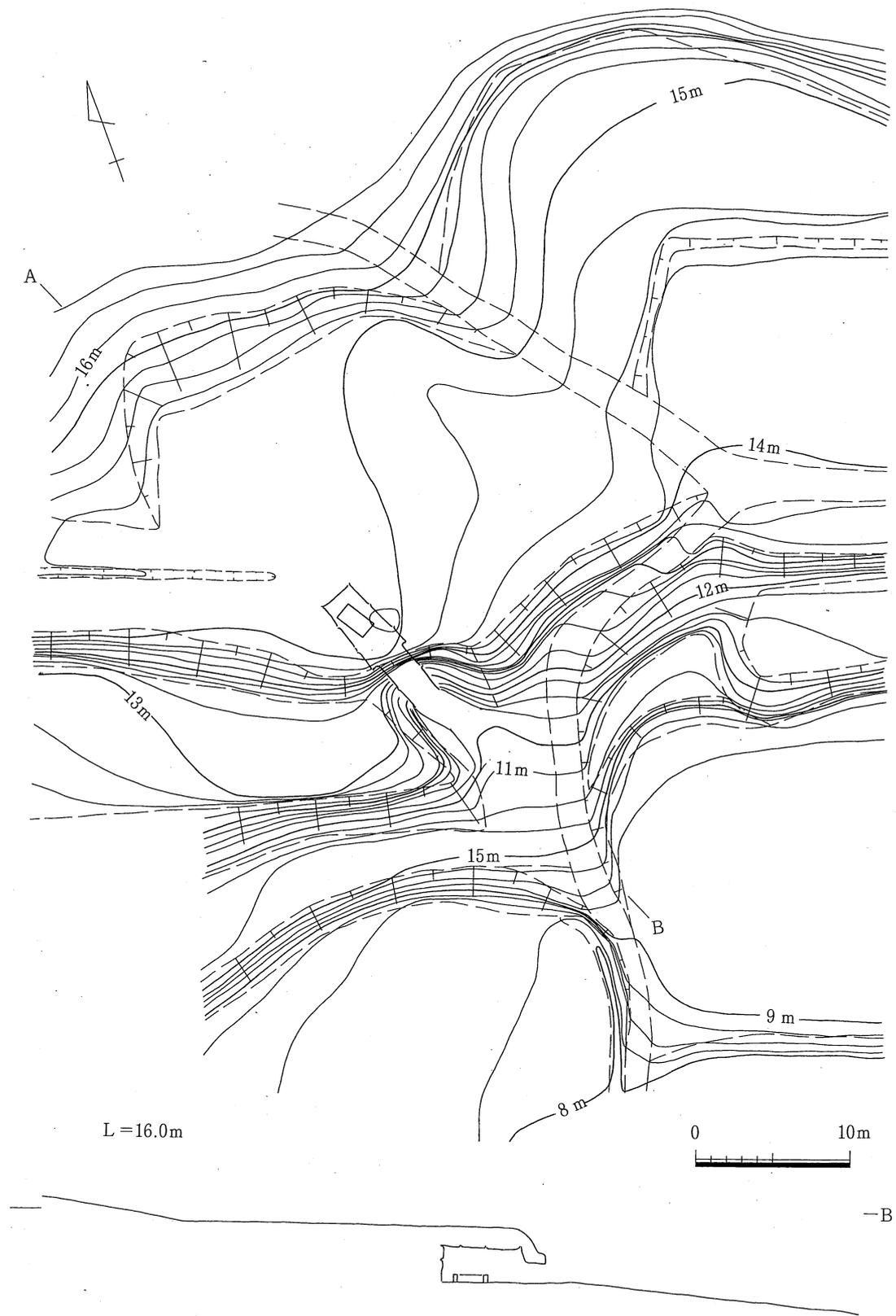
第1図 位置図



第2図 開口部



第3図 石室内部



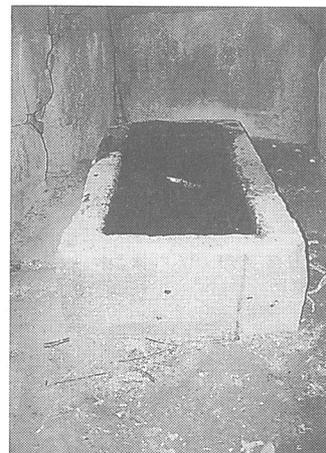
第4图 周边地形图

土地利用の関係で、測量時の旧地形が部分的に削平されているものと思われる。さらに、付近の古老の話によると、石室の上面は、かつては山裾部に沿って東西方向にのびるこの辺りの中心的な生活道であったとのことで、現在でも古墳東側には幅約8mの道が明確に識別できる。古墳の南側は幅4～6mの段々畑となっており、墳丘の形跡等は全くうかがわれない。したがって現状の地形からは本古墳の墳丘の形状・規模は全く不明といえる。ただ、古墳の背後である北側をみると、標高15～20mの範囲で、長さ約20mにわたって「コ」字形にえぐられている地形が看取される。この部分は、樹木の成長具合からみて、それ程新しい削平とは思われない。また、この部分と石室の奥壁とは比較的平行近い関係のようにもみえる。

山寄せの占地をおこなう後期古墳の場合、背後に周溝をめぐる場合が多いが、終末期になると独立墳の占地をおこなう古墳は背後の丘陵地形を大幅に掘削し、平坦面をつくってその上に古墳を築く場合が多い。本墳も独立墳であり、時期的にも終末期に比定する指摘もされている⁽⁵⁾ことから、同様の整形をおこなっている可能性があると思われる。しかし、いずれにせよ現状の地形からは、本墳の墳丘の識別は困難であるといわざるを得ない。

3. 石室

石室は、全長が右側壁で8.9m、左側壁で8.8mで、主軸（開口）方向はN-22°-Wである。玄室には、奥壁から0.7mの位置に石棺の身が置かれているが、石室の主軸よりも10°ほどずれている。このずれは不自然であり、後に動かされた結果と考えるのが妥当である。石棺の蓋は、江戸時代に岡山藩主により持ち去られたとの伝承が伝わっており、そのこととこのずれは関係するのかもしれない。玄室部、羨道部とも長さ2m前後の巨石を用いている。石材は表面を磨いた痕跡等は認められないが、比較的整っており、表面的には平滑さを意識している。玄室は長さが右側壁で5.1m、左側壁で5.0mで、幅は奥壁部で2.2m、羨道部側で2.9mと、羨道部側に向かって平面形は開いている。両袖式で袖部は右側壁部で0.6m、左側壁部で0.4m突出している。両側壁とも巨石の二段積みであり、両側壁とも中央の2段目には小さな石材を用いている。石材は整然と積まれており、持ち送りはほとんどない。床面は石棺との関係から0.1～0.2mほどは埋没していると考えられるが、部分的に掘削されたところには、径5～10cmほどの河原石が露出しており、床面には同様の石が敷かれていると思われる。現状の高さは奥壁部で2.35mで、天井石は3枚で構成されている。玄室部と羨道部は0.8mの段差がある。羨道部の天井石は現況で1枚であるが、側壁部との関係から少なくとももう1枚は存在していたと思われる。羨道部は巨石一段で構成されており、本墳が後期古墳のうちでも後出することを示している。

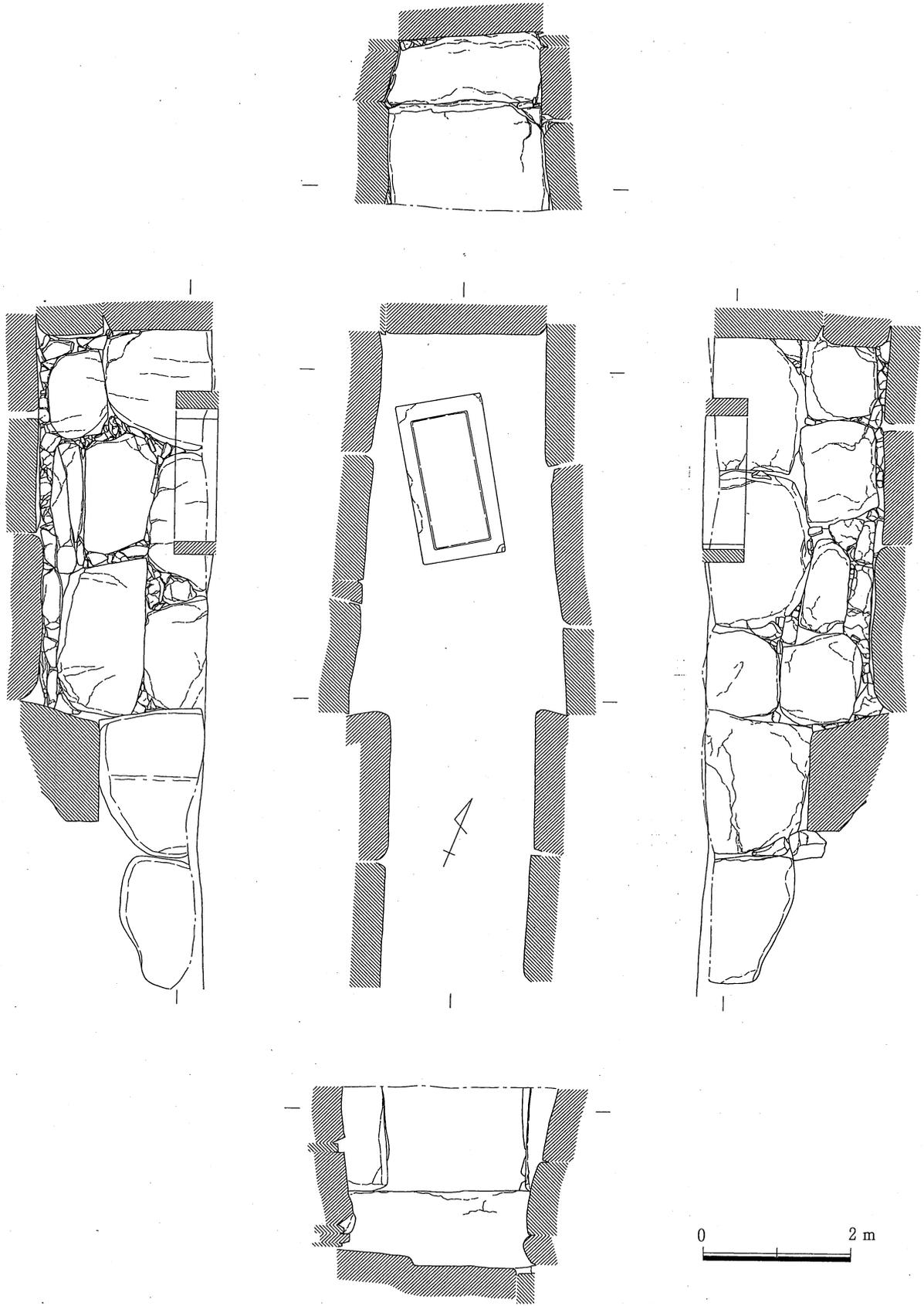


第5図 石棺

石棺は刳抜式家形石棺の身と考えられ、石材は播磨産の竜山石とされる⁽⁶⁾。長さ225cm、幅120cm、内法の長さ185cm、幅80cm、深さ56cmである。県下では同種の石棺が12例ほど確認されており、そのなかでは最も大型の部類に属する⁽⁷⁾。

4. おわりに

本古墳は、石室全長が8.8～8.9mと、県下の横穴式石室のなかでは突出した規模を有するというわけではないが、巨石を用いている点、巨石を用いた古墳のなかでは最も後出と思われる点、隣接する賞田廃寺と密接な関係が想定されるなどの点などから注目されてきた後期古墳の1つである。県下に於いて巨石を用いた古墳は数も少なく、備中地域では、こうもり塚古墳（総社市）・箭田大塚古墳（真備町）・小迫大塚古墳（矢掛町）で、備前地域では牟佐大塚古墳（岡山市）と本墳である。それらは、奥壁部が完全な一枚石へと変化することや、玄室の石材の積み方が、3段積みから2段ないし1段へと変化することなどの特徴から、こうもり塚古墳→箭田大塚古墳→小迫大塚古墳、牟佐大塚



第6图 石室实测图

古墳→唐人塚古墳の変遷が考えられる。備中地域に属するこうもり塚古墳・箭田大塚古墳・小迫大塚古墳の変化は比較的スムーズであるが、備前地域の牟佐大塚古墳・唐人塚古墳の変化は、奥壁が唐人塚古墳では2段になることや、唐人塚古墳の玄室の平面形が羨道部に向かってかなり広がるなど、両墳の相違も比較的顕著である。牟佐大塚古墳には、県内井原産の貝殻凝灰岩製の石棺が用いられており、唐人塚古墳には畿内産の竜山石製の石棺が用いられていることから、唐人塚古墳にはかなり畿内の要素が付加されたことが推測される。例えば、奥壁2段積みは、畿内の岩屋山古墳をタイプサイトとする岩屋式⁽⁸⁾の影響も推測されるし、玄室の平面形が外広きになるのは、文殊院東古墳（奈良県桜井市）とも共通しているようでもある。詳細な検討は今後に委ねたいが、賞田廃寺の建立者と唐人塚古墳の被葬者との関係は明確でないものの、中央との密接なつながりなしには賞田廃寺の凝灰岩製の基壇は説明できないが、唐人塚古墳もまた同様の可能性が指摘されそうである。

本墳の時期は、古墳時代の後期でも後半の時期と考えられ、実年代としては7世紀中葉もしくは7世紀初頭頃とされる。前者の年代観は畿内の後期古墳の年代観⁽⁹⁾からきており、後者については見瀬丸山古墳の年代と石室形態の比較などから修正された年代観⁽¹⁰⁾によっている。いずれにせよ、まず本墳に確実の伴う須恵器などの年代決定の基準となるような遺物が得られ、それを検討していくことが本墳の実年代を決めるためには必要である。

- (1) 出宮徳尚ほか『賞田廃寺発掘調査報告』岡山市教育委員会 1971
- (2) 間壁忠彦・間壁葎子「研究ノート（一）石棺石材の同定と岡山県の石棺をめぐる問題」『倉敷考古館研究集報』第九号 1974
- (3) 出宮徳尚「古代寺院址」『岡山県の考古学』吉川弘文館 1987
- (4) 春成秀爾「備前の大形古墳の再検討」『古代を考える』31 1982
- (5) 伊藤 晃「唐人塚古墳」『岡山県史 考古資料』1986
- (6) 注2
- (7) 村上幸雄「古墳時代後期」『岡山県の考古学』吉川弘文館 1987
- (8) 白石太一郎「岩屋山式の横穴式石室について」『論集終末期古墳』塙書房 1973
- (9) 白石太一郎「畿内における古墳の終末」『国立歴史民俗博物館研究報告』第1集 1982
- (10) 新納泉「巨石墳と終末型古墳の編年」『展望考古学』考古学研究会 1995

ただ、欽明陵と推定されている見瀬丸山古墳と、石舞台古墳を同じ範疇に位置づけることは、難しいように思われる。見瀬丸山古墳の羨道部と石舞台古墳の羨道部とは、石材の用い方が異なっており、さらに見瀬丸山古墳の奥壁については、石棺の埋没状況からして、三段積みになる可能性もあると思われるからである。

岡山市吉野口遺跡出土管玉の科学調査

綾野早苗・草原孝典

1. はじめに

岡山市吉備津の吉野口遺跡は、中小河川である足守川が南北に流れる沖積平野に位置する。現在の足守川は、平野の中央部に一本化されているが、江戸時代の絵図や、現在の微地形からも幾つもの流路が読み取れ、そのうちの一つは、吉野口遺跡の西側から南側へカーヴしながら流れ、河口部に存在する川入遺跡の東側から古代の内海である、いわゆる“吉備の穴海”へ注いでいた。この平野部には多数の集落遺跡が存在し、周囲には大小無数の古墳が築かれており、吉備地域の中核地であったことがうかがわれる。爆発的な遺跡の増加は弥生時代以降であるが、縄文時代後期の遺跡も発掘調査により確認されてきており、それらと稲作との関連を示す粃痕のある土器やプラントオパールも検出されている。

吉野口遺跡は、岡山市教育委員会により1991年8月から1992年1月に発掘調査が行われた。遺跡は近世から縄文時代晩期までの複合遺跡で、遺構の分布密度は高く、中心的な集落遺跡であったことがうかがわれた。ここで報告する管玉は、晩期中葉の遺構面で出土したもので、同遺構面からは、径4～5mの円形の窪みで中央付近に柱穴状の小ピットをもつ遺構や大小の土壌、炉状遺構などが検出され、晩期の集落の一角であると考えられる。管玉は炉状遺構の周囲から黒曜石や土器片とともに出土した。この黒曜石の産地については、蛍光X線分析により九州産の可能性が示唆された。このほか特筆される遺物としては、凝灰岩製の砥石がある。巾4mmの溝が2条認められ、玉砥石の可能性も推測させられる⁽¹⁾。

本稿は、吉野口遺跡から出土した管玉について、非破壊手法による自然科学調査を行い、管玉の石材や製作技法、流通等について考察したものである。

今回の調査にあたっては、大賀克彦、亀山行雄、河本清、肥塚隆保、小林祥一、坂口圭太郎、白石純、妹尾讓、武智泰史、東和幸、平井泰男、松本鑑夫の各氏から多くのご指導ご教示を頂きました。記して厚く感謝の意を表します。

2. 調査資料

名称	長さ (mm)	径 (mm)	孔径 (mm)	重量 (g)	比重	色調
吉野口遺跡出土管玉	10.7	4.6~5.2	2.3~2.5	0.395	2.845	濃鮮緑色

3. X線透過撮影

管玉の加工方法等の調査のためX線透過撮影を行った(図1-B)。管玉は、細身小型のエンタシス形で両側から穿孔されている。加工痕によると錐状の道具で一方から一段階に、他方から二段階に穿孔しており、中心部で少し孔がずれている。石材は軟質である反面、薄く剥がれやすく、加工には注意を要したと思われる。丁寧な加工仕上げがされており、美しい光沢がある(図1-A)。

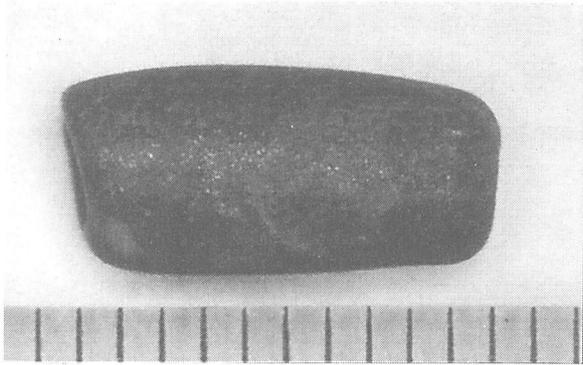


図1-A 外観撮影

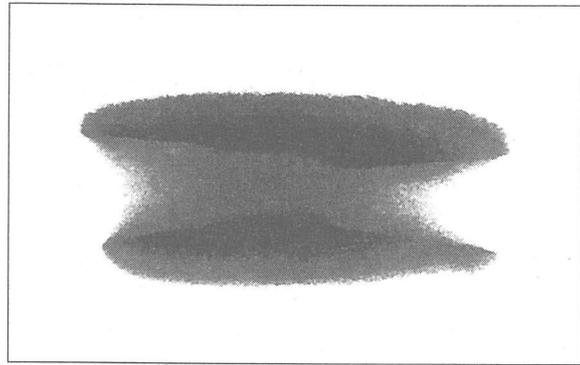


図1-B X線透過撮影

4. 肉眼観察

色は全体にほぼ均一な濃い鮮緑色で、強い光のもとでは半透明である。ごく一部分に割れ目に沿った褐色の風化部が存在している。石質は緻密で、非常に細かい雲母状の劈開によると思われるチカチカとした光沢が全体にわたって見られる。また、一方向に鉱物粒子の配列によると思われる弱い片理状の組織がかすかに見られる。

5. X線回折およびX線マイクロアナライザーによる検討

① X線回折

管玉を構成する鉱物について調査するため、X線回折法による測定を行った。測定は非破壊で行う必要があったため、管玉の測定箇所を変えて、同様の条件で5回にわたり管玉の表面に直接X線を照射した。5回の測定結果は相対強度 (I/I_1) は変化したものの、格子面間隔 (d) はほとんど変わらなかった。

X線回折およびX線マイクロアナライザーによる測定は、倉敷芸術科学大学地学教室の小林祥一氏にお願いし、石材同定について懇切なご指導ご教示を頂きました。記して厚く感謝の意を表します。

〔測定条件〕 X線：CuK α_1 / 管電圧40kV / 管電流240mA
モノクロメーター / 走査範囲 $3 \sim 60^\circ$

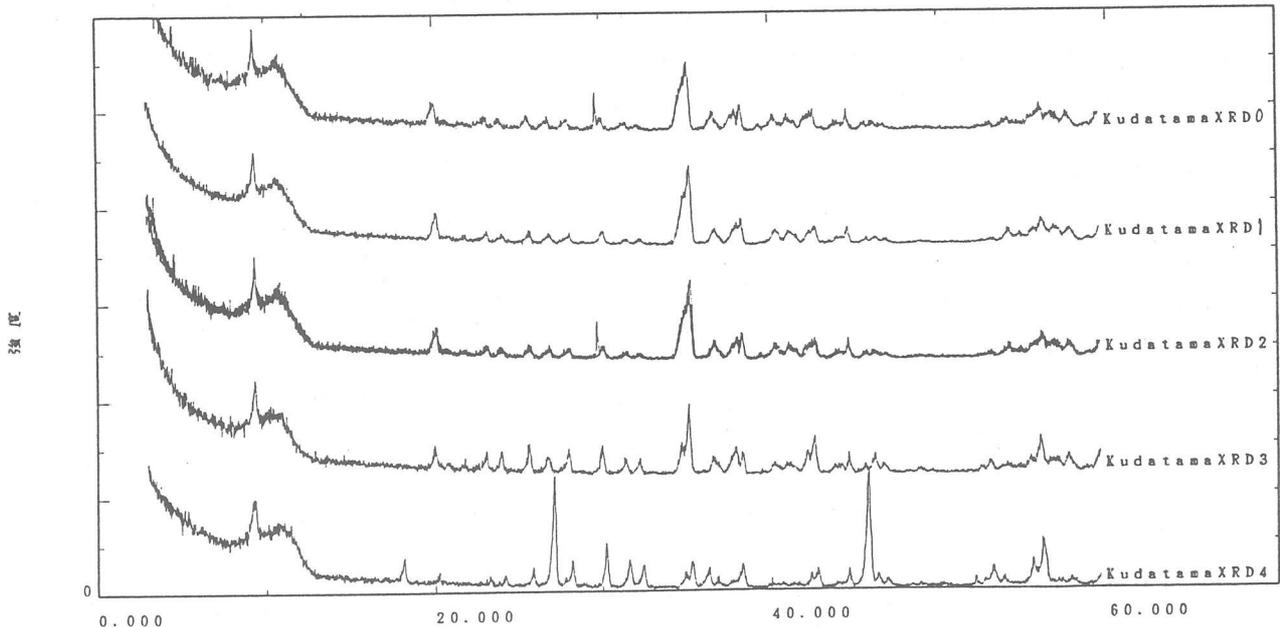


図2 X線回折多重記録

表1 X線回折値

(測定: 小林祥一)

吉野口遺跡出土管玉		白雲母 ASTM (6-263)		
d (Å)	I / I ₁	d (Å)	I / I ₁	hkl
9.52	36	9.95	95	0 0 2
8.14	24			
7.74	22			
5.22	4			
4.91	16	4.97	30	0 0 4
4.41	6	4.47	20	1 1 0
		4.30	4	1 1 1
		4.11	4	0 2 2
		3.95	6	1 1 2
3.82	6	3.88	14	1 1 $\bar{3}$
3.68	8	3.73	18	0 2 $\bar{3}$
3.45	12	3.48	20	1 1 $\bar{4}$
		3.34	25	0 2 $\bar{4}$
3.29	84	3.32	100	0 0 6
3.17	20	3.19	30	1 1 $\bar{4}$
		3.12	2	1 1 $\bar{5}$
2.961	34	2.987	35	0 2 5
2.834	24	2.859	25	1 1 $\bar{5}$
2.766	20	2.789	20	1 1 $\bar{6}$
		2.596	16	1 3 $\bar{1}$
2.542	24	2.566	55	2 0 2
		2.505	8	0 0 8
2.479	12	2.491	14	1 3 $\bar{2}$
		2.465	8	1 3 $\bar{3}$
		2.450	8	2 0 2
		2.398	10	2 0 4
2.353	18	2.384	25	1 3 3
		2.254	10	1 3 4
		2.236	4	1 3 $\bar{5}$
2.216	4	2.208	8	2 2 1, 2 0 4
		2.189	4	2 2 $\bar{3}$
		2.149	16	2 0 6
		2.132	20	1 3 5
		2.070	4	2 2 3
2.032	14	2.053	6	0 4 4
1.984	100	1.993	45	0.0.10
		1.972	10	2 2 4, 0 4 5
		1.951	6	2 0 $\bar{6}$
1.936	6	1.941	4	2 2 $\bar{6}$
1.881	4	1.894	2	2 0 8
1.860	2	1.871	4	0 4 6
1.817	4	1.822	4	
1.754	8			
		1.746	4	2 2 $\bar{8}$
1.723	14	1.731	8	1 3 $\bar{9}$
		1.710	6	2 4 $\bar{1}$
		1.704	6	1 5 $\bar{1}$, 1 5 0
		1.699	4	2 4 0
		1.662	12	0.0.12, 2.0.10
1.639	44	1.646	25	3 1 $\bar{2}$
		1.631	6	1 5 $\bar{4}$
		1.620	6	1.3. $\bar{10}$
1.594	6	1.603	6	3 1 3
		1.573	4	2 4 4
1.553	8	1.559	8	3 1 4
		1.541	4	1 5 5

X線回折結果

この管玉のX線回折データは、おおむね白雲母(muscovite)(ASTM 6-263) に一致し、その他の鉱物に相当するピークはあまり見られない(表1)。したがって、この管玉の主要な構成鉱物は白雲母であると考えられる。管玉を構成している白雲母とASTM(6-263) とのd値の若干のずれは、管玉の